明治三十三年十二月廿五日
第三種郵便物認可
明治四十二年三月一日發行
（每月一回一日發行）

女學世界

第九巻
第四號



博文館發行



雛祭と

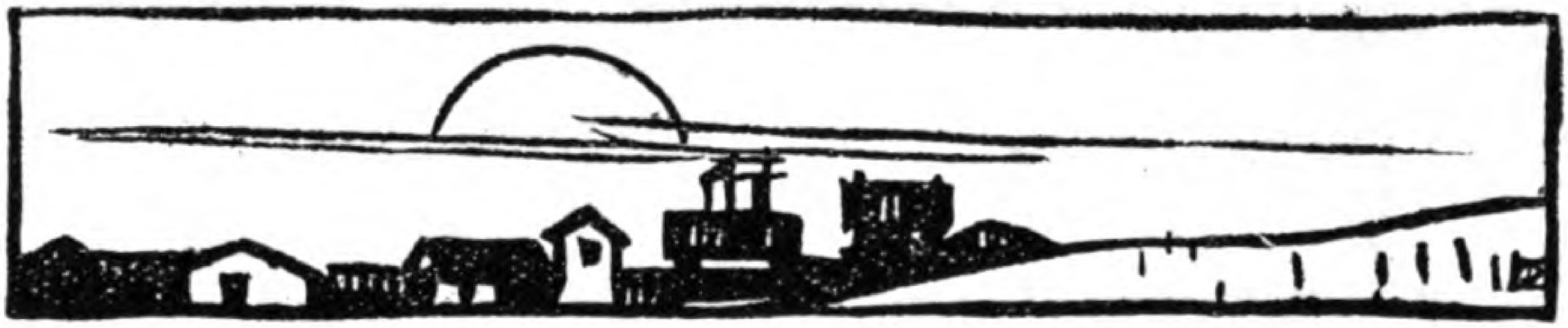
高等化粧用美顔水

花の如き顔、玉の如き姿の令嬢が、雛祭りに餘念なき風采の、如何に氣品高く、如何に優美なるかを想へよ。而かもその愛らしき雛人形は、容易に購ひ得べきも、令嬢方の顔と肌とは、必ず高等化粧用美顔水を用ひざれば、花の如く、玉の如く、艶あり、光あらしむること能はず。

【特効】色を白くしきめを細かにしつやを美しくす又化粧下に用ふれば巧妙なるはたらきにて白粉心のまゝにのび殊にあれ性の方には最もよろし

●本品御購求の節は化粧用美顔水と御指名なきこ

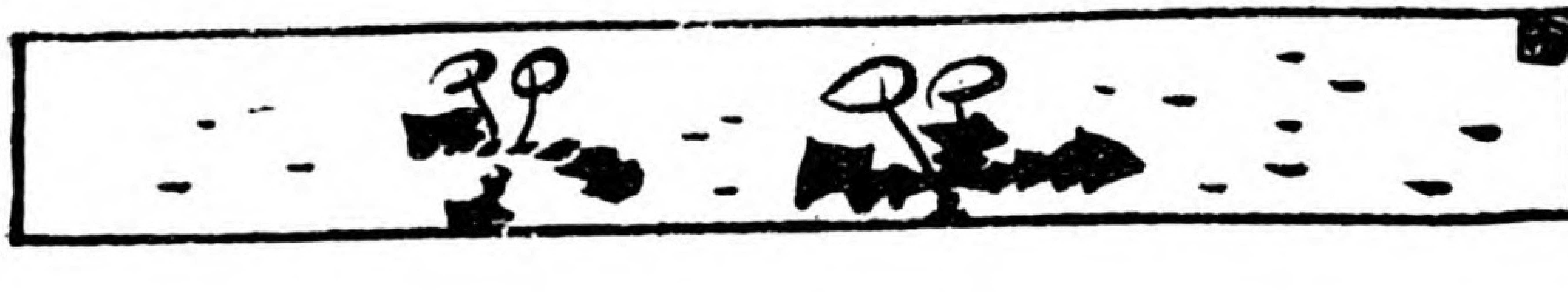
▲東京市内は勿論日本全國各地到る所の有名なる小間物店にて販賣す



女學世界第九卷



第四號目次



新製

御料たつた

純無鉛白粉

◉此白粉出でゝことしの春こそ



◉お顔の艶の一際見違ふべく候

女子手藝品募集

募集の品類　第一部 造花 第二部 刺繡 第三部 編物 第四部 嚢物 第五部 押繪、綿細工、紙工品

出品期限　三月二十日までとす 此外出品に關する規定並に出品目錄用紙等は御申越次第速時送呈す

出品の販路　出品は非賣品を除き總て即賣す猶出品中社會の嗜好に適する物は引續き弊店にて販賣致候

紀念賞牌　出品中技藝優等の出品者へ 名譽金賞牌壹個壹貳參各等金賞牌拾五個銀賞牌五十個を呈す

展覽會期日　四月一日より五月二十日まで弊店三階にて開催

東京京橋南傳馬町
小間物小賣大商店

大西白牡丹

金子薰園先生著

●總洋布製 ●定價六拾錢 郵送料六錢

和歌新辭典

▲幾萬の歌語を集めて精細周到なる註解を施したれば初學者は自在に之を選びて和歌を作ることを得可し

▲更に現代諸大家の作中の粋を拔きて懇切無比の評釋を施したれば本書は實に和歌の一大模範と稱すべし

▲大家の作例を參考し幾萬の歌語中より適當の辭句を選びて一首となす斯くて作歌は極めて容易となれり

▲本書は斯道一流の大家金子薰園先生が初學者の爲め一歲有餘の苦心の餘に漸く成れる斯界空前の寶卷也

發行所 東京麹町區飯田町三丁目 ▲電話(番町)二貳二三番 新潮社

肌の荒れやすき此時季に唯一の化粧料として專ら賞用せらるゝは◎◎◎◎◎フラワー水



《定價》小瓶十錢 大瓶十五錢

東京日本橋區横山町二

本舖 桑原花生堂

●販賣は重なる小間物化粧品藥舖にあり

女(いの三)


THE GEM
ゼ
ム
衛生家必携
懐中良薬
無益に過すな此の時を
徒に暮すな今日の日を
此の時此の日歸り來ず
たゞ時の間の日影だに
惜しむ人も有るものを。
學びの庭につどふ子よ
平常ゼムを口にして
心神を輕く爽快に
身の健康を心掛け
撓まず摘めよ教へ草。
主効
◎消化を能くし○食傷○宿酔○頭痛
◎氣分を爽にし○眩暈○水傷○喉渇
◎音聲を美くす○舟車酔○時候傷
ゼム定價
七十五粒入十錢
百六十粒入二十錢
四百粒入五十錢
九百粒入一圓
ゼム容器入廿錢
日本一手發賣 東京馬喰町二丁目 愛國堂 山崎榮三郎
支舗 大阪高麗橋二丁目 山崎兄弟商會
其他賣捌は全國各地賣藥化粧品店にあり

女(いの四)

雛嫁



●婦人の涙（其原因は男子の罪なり）

近來何處の婦人科醫院にも常に澤山の病婦を見るが其最も多き病狀を聞くに下腹痛み鼻汁の如き白帶下あり腰筋張り顏色蒼白にて白澤なく從前の病歷を問へば始め必ず「せうかち」に罹りたりと云ふ凡そ是迄に局部の煩ひに經驗ある婦人は迚も一筋縄の治療で全治せぬ事と心得べきなり其病名か子宮病血の道などに云ふ程でも皆な病毒の爲めなれば現に永引きて治らぬが第一の證據である故に本病毒及梅毒•痳病•僂麻質斯等を根治するには必ず唯一丸に限るなり尚其病理、原因、病狀等を精密に調査し最も親切に調劑したる唯一丸の如きは世上未だ其類例なし而も其主藥は現世唯一の驅毒藥なれば實に面白き程効力あり

●根治完能唯一丸藥價三日分四十錢●七日分八十錢
●十四日分一圓五十錢●三十日分三圓（内地遞送無料）
●本病患者の爲に其病理養生及治療法親切に詳述せる冊子無代施本送料三錢要す

發行所 東京市本郷區湯島天神表門中坂上 藥劑師 **中西莊吉** （振替貯金口座千五百番）

於内外博覧會名譽大賞及金銀牌受領

元和二年創業

ヒゲタ印醤油

HICETA SHOYU

THE CELEBRATED JAPANESE SAUCE

TRADE MARK

Patronised by the Imperial Household Awarded First Class and Gold Medals and Grand Prize at the various International Exhibitions held at home and abroad

The Oldest Establishment of its kind in Japan. Founded in 1616 by the ancestors of the present proprietor G. TANAKA Choshi, Chiba-ken, JAPAN

ヒゲタ印醤油

宮内省御用達

千葉縣 銚子港 田中玄蕃釀造

女（ろの一）

釀造元 千葉縣野田町 茂木佐平治

天下一品
最上醬油

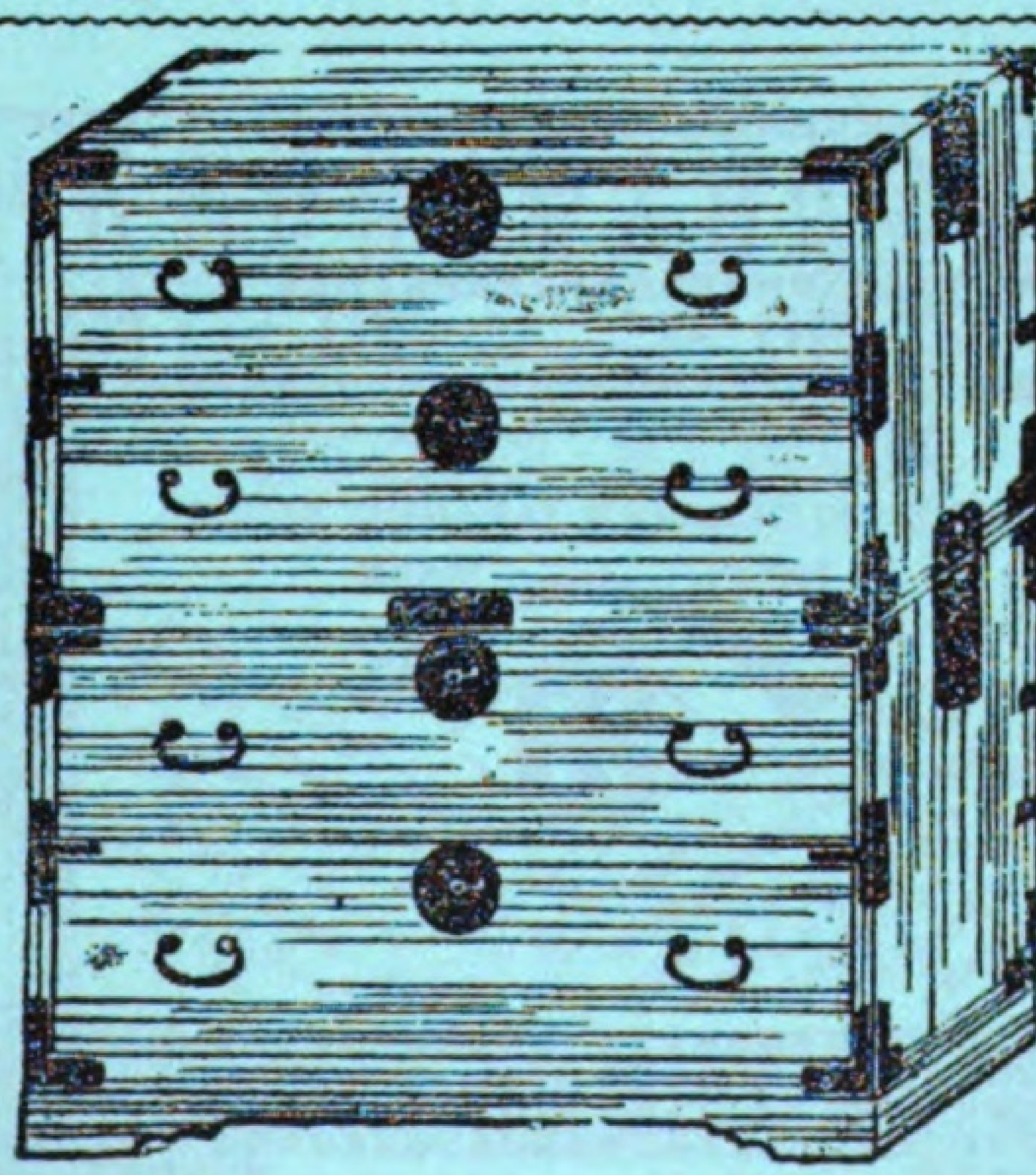
賣捌所は各地とも有名なる酒醬油店に有之候

簞笥長持類數代老舗

御婚禮用道具一式調製

御婚禮用御急ぎの節は一切取揃へ御間に合せ可申上候

送荷方は遠近共一層注意仕候



簞笥目錄御入用の方に御申越次第送呈但し郵券貳錢御送附の事

●正札附確實販賣●

長谷川高等簞笥店

東京市日本橋區小傳馬町壹丁目

電話浪花四千三百十五番

女(ろの二)

新流行指環



（1）K18 中天ルビー 兩端ダイヤ入 金三十圓

（2）K18 クラブ形 眞珠入 金拾貳圓半

（3）K18 横爪 眞珠入 金拾貳圓半

（4）K18 眞珠入 金拾圓半

（5）K22 菊花透明 金廿三圓

（6）K22 梅花彫白金入 金拾五圓

（7）K22 月ニ梅白金入 金拾參圓

（8）K20 竹彫白金入 金拾圓

商品目錄出來仕候（送料四錢）

東京市神田區鍛冶町

白牡丹中西

今川橋 松屋呉服店前

電話本局二〇四〇番振替口座一五二一四番

美術

造花材料

卸小賣

半製品、鏝、打拔類一式

室内高等装飾品

光線モール

御一報次第 定價表進呈



三國屋

東京淺草駒形町十四番地

振替貯金口座一一六四二

電話下谷二八三五番

女（ろの三）

桃さく里

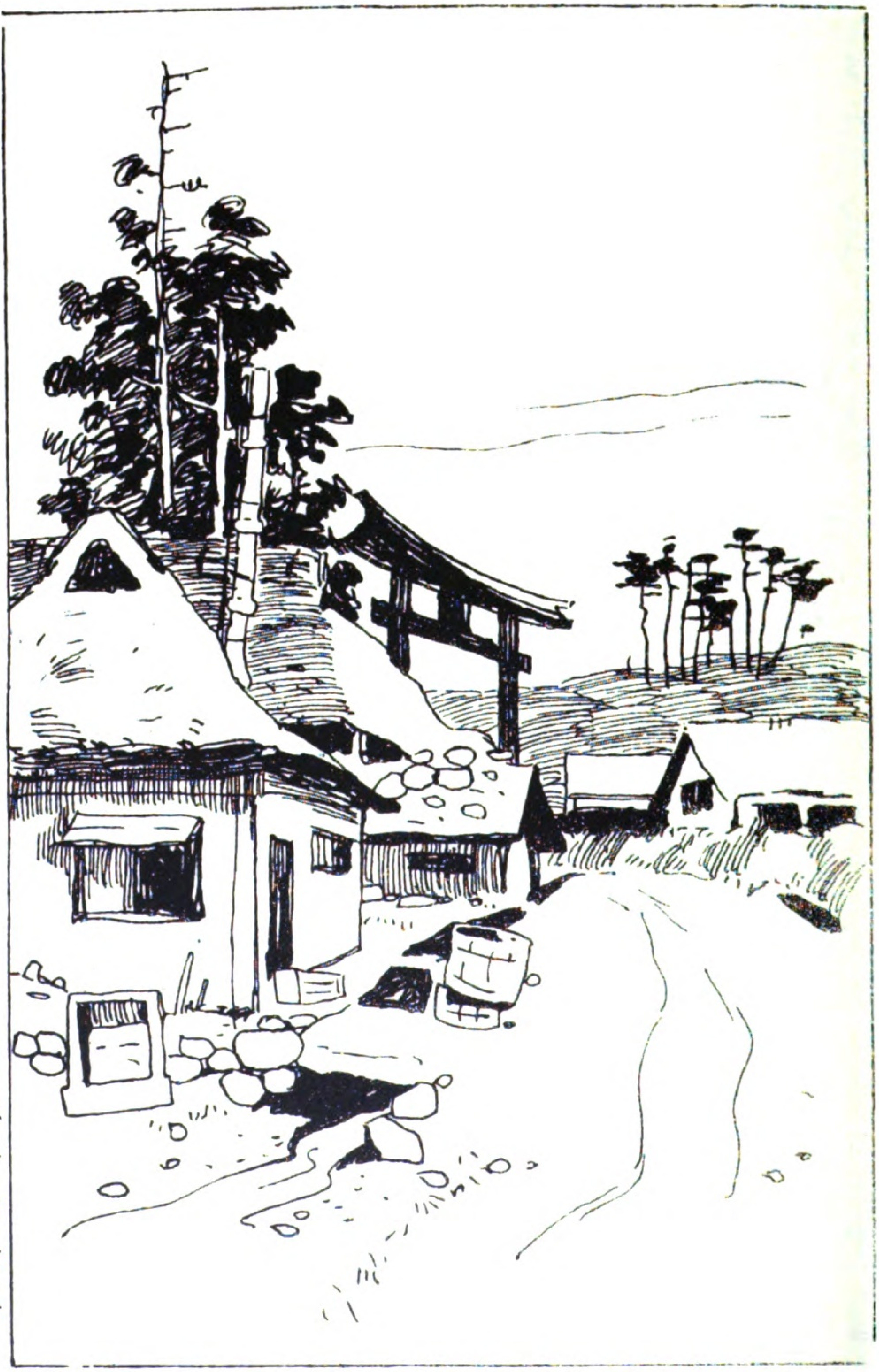


竹久夢二画

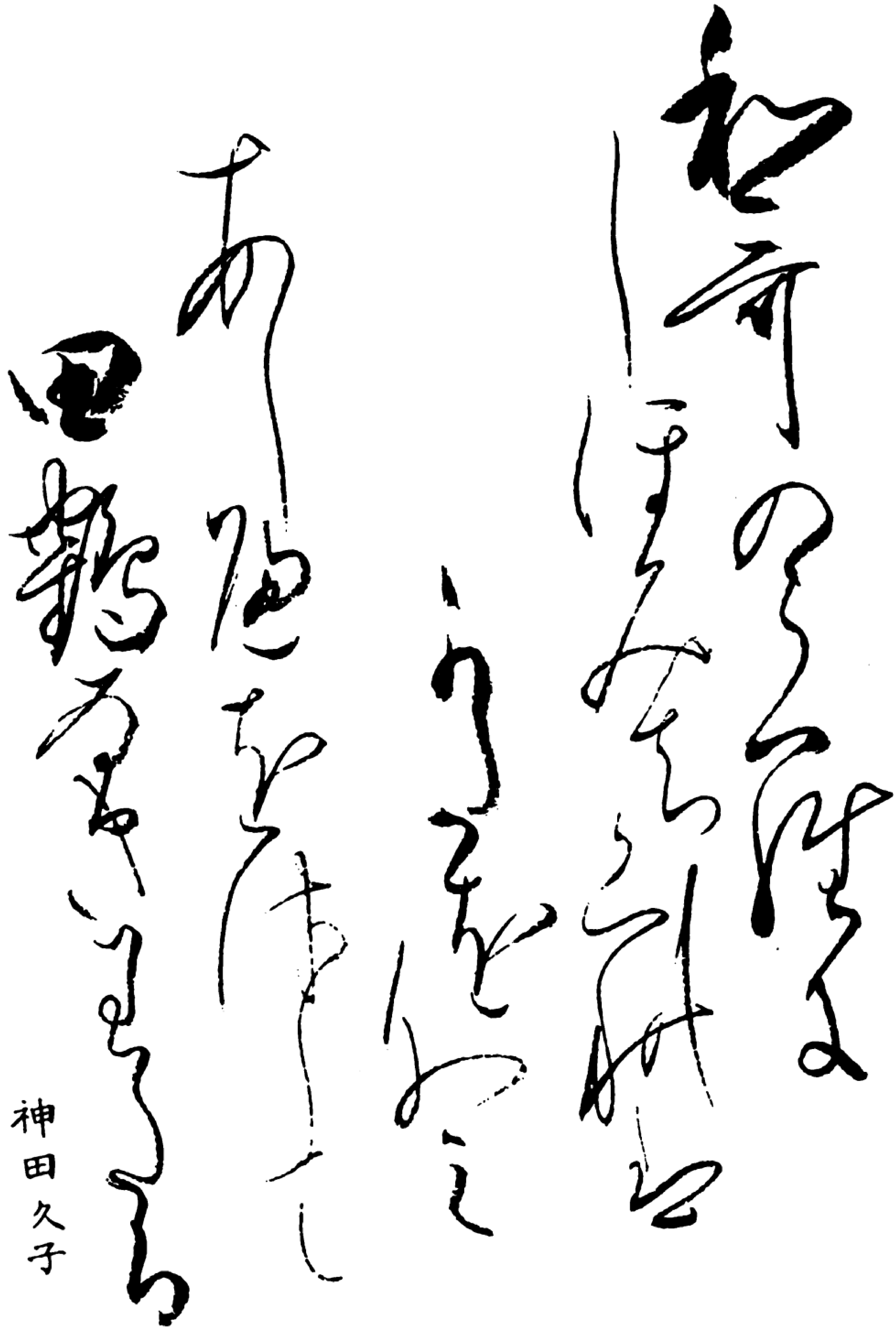
女（はの二）

（はの四）

鎮守



木村朝雲筆



神田久子

英國

ボヅソン、エンドシンプソン會社 特製品

實用浮石鹼

會社の自慢本品特點

千九百〇八年八月最新輸入品

香氣の高きは
本品特點なり
價格の低きは
本品の特點なり
實用に適するは
本品の特點なり
上流界に好評を博すは
會社の自慢とする所也

レツクス



論より證據實地御使用を乞ふ

東洋輸入元 東京 エスシー

賣捌所は全國到る處の信用アル
舶來小間物店及ビ化粧品店ニ有

▶ハンカチーフ用◀▶フランス製◀

本品は全世界を通じて流行品

定價 小瓶廿五錢 大瓶壹圓



輸入元 日本橋橘町 竹間商店
電話浪花一六一四番

本品は現今貴婦人方の愛用品

●フランス上流社會は「ケーバー香水」の高尚なる匂を愛せらる●

女(にの 一)


三月一日より十日まで
花見衣裳賣出し
よせきれ見切反物種々
普通景品の外に特別餘與として最も面白き仕組にて
五圓以上御買上げの御客樣に對し五十圓以下五拾錢
迄の商品切手を呈上可仕候
大
大丸呉服店
日本橋通旅籠町

女(にの二)

子女の品格を高めたい父兄は本誌を讀ませよ、家庭と文學を調和せる無類の最好雜誌

女子文壇

三月一日發行（每月一回）五巻第四號 一冊拾五錢 郵税壹錢五厘 半年（八冊）壹圓參拾四錢

口繪 原色版湖畔の歌。石版彩色の彼岸櫻 肖像◎閨秀三作家◎文士三夫人◎異彩ある三女流◎二新粧◎女學校紀念撮影◎挿花と造花◎誌友寫彰の十葉挿入鮮麗……

○學校に通ひつゝ家事を學ぶ工夫……羽仁元子女史

○言葉遣ひと態度の注意……山脇高等女學校長 山脇房子女史

○女の心持……田山花袋

○芝居好きの婦人に……文學士 小山内薫

○若き女の嬌態……福光東衣

○文學に據りて救はれたる一處女の身の上話……わか草

○男女交際は冒險なり……文學士 下田次郎

○富士の裾野……小島烏水

○ヴェルレーヌの詩……永井荷風

○丘の上の花……川路柳虹

○和歌は女性に適す……與謝野寛

○美文の作法（二）……西村醉夢

○花言葉（二）……水野葉舟

○夕の祈（英文）……女子英學塾講師 河井道子

▲懸賞○小説○美文○散文詩○お伽噺○和歌○俳句○新體詩○書簡文 百餘頁充實

▲作物○短文○家庭日記○教庭○歌謡○論文○餘興○笑話○スケッチ……

投稿自由懸賞確實

衛生問答 醫學士北島孝夫先生擔任

東京京橋區大鋸町 女子文壇社 發行（振替口座壹七貳九番〇 電話本局六〇七番） 賣捌所全國到處にあり

（にの三）


◉花の粧!!
女學生諸孃が登校の
朝な朝な大學白粉の
お化粧を凝せ給ふ花
の粧は床しさの限り
であります
伸の良い芳香の高尚な鉛氣のない大
學白粉は婦人方の御容色の友なり

女(にの四)

諾威王の御家庭



國王ハーコン第七世陛下并妃モード陛下、王子オラフ殿下

名家の令孃



島津公爵(忠濟公)令姫蕭子



前田伯爵(利同氏)令孃直子

毛髮を黑く長くふさくする

椿油にて精製したる

女學世界愛讀者に限り本店は一割引

ランラン香油

毛髮の營養には椿油ほど好い者はありませぬこれは衛生大家及び御婦人方の實驗證明せらるにせらるゝ御婦人方の實驗證明せらる處でありますが此普通の椿油は厭らしき臭氣がありますから之を除去せねばなりませんランラン香油は最も純良なる椿油に毛髮の營養に必要なる藥劑を加へローズバイオレットの高貴なる香料を以て彼の惡臭を防ぎ毛髮の助育を專一としたる香油也

發賣元 大阪西區新町通三丁目 福田源次郎商店 電話西千六百壹番 振替口座六〇八六番



色を白く肌を艶麗ならしむる

レモン牛乳にて製せる

兩種共一瓶定價各廿五錢送料八錢づゝ

ランラン化粧水

皮膚の營養には牛乳に勝るものなきことは皆樣の御承知のことでありますが近頃亦レモン液の肌を純白ならしめ殺菌の効あること發見せられましたランラン化粧水は牛乳とレモン液とを調配したる最新最良の美顏劑を加へて色を白くし小皺を伸し吹き出ものを除き夏季の日焼け冬季のあれを防ぐ特効ある化粧水なり

東京販賣所

日本橋區通鹽町 佐野大和屋

日本橋區檜山町 脇田盛眞堂

日本橋區檜山町 森本支店

神田區橋本町 松井號支店

女學校の教師は生徒に婦人世界の購讀を勸める

婦人世界

三月一日發行 四巻第三號 一冊拾五錢 郵稅一錢五厘 半年分郵稅共一圓五錢 一年分二圓五

▲妻君曰く良人が、弦齋先生の夫婦情愛論を讀んでから私に對する擧動が一變しました。情愛論は女が見ても男が見てもためになることが澤山あります

▲女學生曰く前號の歷史講談は大層可哀さうで私は泣かずにをられませんでした。私はあいふお話が大好きです。毎號引續き出して下さい。記者曰く本號には妙沖尼が父の行衛を尋ねる面白いお話が出てをります

▷

△名流婦人十八歲當時

△髮を美しくする法 岡村博士

△名流婦人の頭相判斷

△賃仕事して弟と共に苦學す 川上きん子

△女學校の教師が一番困る生徒の癖 宮田修

△米國の令孃は如何に若き男子と交際し良人を選ぶか 森盛一郎

△納豆を賣り孤兒が良家に嫁せし話 一記者

△日本に歸化せる感心すべき米國婦人

△西洋婦人が始めて日本料理を食べる時の話

△美人畫を描く時の苦心…清方

△內職して通學せる女學生

◁

▽

▼田中宮相の結婚は婦人社會の大問題です本號には増田社長のこれに對する意見が出てゐます。その外弦齋夫人の料理談伊庭學士の子宮外姙娠の話など爲になる話澤山あります

▲記者曰く本號には記者が或る貴婦人から聞いて來た白粉の塗方が出てをります。顏を美しく見せようと思ふ方は是非一讀しなければなりません。奧樣にも女學生にも切におすゝめします

東京京橋南紺屋町十二 實業之日本社 （郵便振替貯金口座參貳六番）（電話新橋八七四番） 賣捌全國書店

女（ほの三）

愛兒の試驗祝ひに何を褒賞に出さんか？

各學校學年末試驗は近かづきたり、家庭にては愛兒をして及第の榮譽を得さしむべく「及第したら何を褒美に出しませうか」と懸賞を以て兒童を奮起せしむるは、確かに効驗ある一策と信じます、此時に當りて父兄母姉諸君は、實用的にして動作に便なる洋服を買つて遣りませうと、盟はれんとを希望いたします、而して及落は月末咄嗟の間に判明するものにして、愛兒は必ずや新學年の初め迄に履約を迫るならん、此場合に處して當店には新柄にして體裁よろしく堅牢にして格安なる、男女小供洋服の出來合品を澤山揃へてありますから、急速の間に合ひます、何卒御來店一覽の上、お子供衆に恰好の品御擇み下されお買上けの程願上げます又東京市内御注文のお方は、電話本局二九〇一番端書ならば、神田鍛冶町廿七番地へ御申越し下さらば書形と切れ地見本とを持參早速御伺ひ御容姿に恰好いたすやう調進いたします。



女（ほの四）

注意

地方の御方は御年齡と豫算とを御知らせ下さいますれば最も流行なる形で作つて御送り致します

中野屋洋服店

（本　店）…横濱市辨天通り四丁目八十番地（電話三四四番）
（東京出張所）…神田鍛冶町廿七番地（電話本局二九〇一番）
（韓國出張所）…韓國京城……………

清國皇族の妃殿下



先年視察の爲に來朝したる清國皇族鎭國將軍毓朗君の妃なり

榮華の夢



これはマリーアントチツトと其二王女の肖像なり、この人豪華一世を蓋ひし佛王ルイ十六世の妃として當時の交際社會に絶大の勢力を揮ひしも其行動常規を逸し輿論の反抗に遭ひ延いて佛蘭西革命の動機を作り爲めに悲慘の末路を遂げしは史上に有名なり

石　油
經濟輕便之炊具!!

久能木式石油厨爐

◉專賣特許第一〇三三二號

二號形厨爐にて僅二十分間に二勺の石油で一升の飯が炊け如何なる者を煮焼するも決して臭くなく石油は通常の品を使用して無烟無臭を保證す、且つ火力強大なるは實に弊店二十餘年此の業に從事研究の結果なり、

定價

第一號形	金二圓廿錢より
第二號形	金三圓廿錢より
第三號形	金三圓八十錢より

注意　目錄は御申込次第發送仕候



◉胴を取外さず點火し得るは本器の外無し

▲販賣所は全國主なる都會にあり



●久能木商標に御注意を乞ふ●

使用之樣々!!

◎飯炊き及肉類の煮焼其他一般の料理特に西洋料理には應用尤も廣し

◎各學校理化學實驗の熱用硝子管等は忽ち熔解し酒精代用として費用十分の一なり

◎藥局にて一般の熱用殊に浸剤に用ひて尤も迅速に辨じ又強度の熱を得らる

◎和洋服の火熨用大小鏝及革細工用鏝印刷用平鏝等を焼き自由の熱度を得らる

◎室内煖爐に代用し美麗にして温度均一なる事木炭、石炭の比にあらず且つ養蠶室煖爐に尤も適當す

各地方よりの御注文は

●●●振替口座又は代金引換にて御申込みあらば即日發送いたします、振替口座御申込は尤も運賃が廉價です

製造發賣元　久能木商店

東京日本橋室町三丁目

長電話本局二八九番　振替口座一四五七番

厨　炉

(一〇三)

婦人くらぶ

毎月一回一日發行 三月一日

第貳卷第參號

定價十五錢郵稅一錢半六冊稅共九十錢十二冊一圓七十四錢

▲我家の小供の躾け方 棚橋絢子
▲女子に讀せたき書物 山路愛山
▲教師として見たる女子の文章 鹽井雨江
▲婦人の職業としての技藝 谷紀二郎
▲人手を待たぬ家事と心ひ練り方 伊澤修二夫人

本文全部船來紙

●新たに就學せんとする女子に……安井哲子
●女子の教育方針は一變せざるべからず……清藤秋子
●現金と通帳……三輪田元道
●結婚前の少女の覺悟……三宅花圃

▲改良したき洗濯の仕方 宮川壽美子
▲家庭になくてならぬ土臺石 海老名宮子
▲家庭に於ける兒童の衛生 緒方醫學博士
▲夫婦喧嘩……ドクトル荒川重秀
▲小説 伯父と親……村山鳥逕

▲眼つきを態す新手術 畑晴次郎
▲手提げの溫室……前田曙山
▲春の化粧法……遠藤波津
▲新案涎掛の縫ひ方 秦仁賀子
▲三月の一週間献立……齋藤稻子
▲眼に着ひた最近の流行……紅女
▲處女時代の自白 野川夏子

▲兩國行……兒玉花外
▲處女として外人と交際話……某夫人
▲平民料理……齋藤稻子
▲最近試みた強健術 白井準繩子
▲春の水……彩色版……其外寫眞版
▲の豐富なるは人の認むる所なり
▲新懸賞募集あり試に一讀あれ

東京日本橋區本銀町四丁目十七番地 紫明社發行 (振替貯金口座東京一七五五四番) 賣捌店全國到る處

女(への二)


畏き邊りの
御料に召させ給ふ
高貴御化粧料
御園白粉
東京 芝
伊東胡蝶園
製造本舗
東京日本橋區橘町四丁目
發賣元
丸見屋商店
御園白粉
洋風化粧料
御園クレーム
御園の蕾
高等化粧水
御園の露
御園なでしこ
濃厚化粧水
御園四季の花
御園香油
御園香水
御園齒磨

女(への四)

全權公使大山綱介氏令孃



辨理公使宮岡恒次郎氏令孃玉惠子



醫學博士岡田和一郎氏令孃和子




享和元年創業
日本ニ於ケル時計商之元祖
宮内省
御用達
D.K.
東京市京橋區八官町九番地
小林時計店
電話新橋一〇〇三
電信略語コ(又ハ)コ八
振替口座七八〇七
卸小賣
營業品
概目
時計附屬品、指環、簪、
帶留、ブローチ、手釦、
紀念品一式
最新の流行品目錄郵券
六錢封入御申越次第進呈す
紀念品
賞牌メタル
迅速廉價

女(その一)

新輸入 肉體美容料 色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女の間に最新流行の發明藥にして如何程色黑き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艶美の容貌となる確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は兆製金壹圓貳拾錢特別製金壹圓八拾錢

飲んで色白くなる特効新藥 サーサパリラ

英國ロンドン「パーゴイン」製の「サーサパリラ」は峻烈なる**淸血劑**にして頑强なる皮膚病猛惡ス等の病毒及慢性梅毒、痳毒リウマチび男女體内の**惡血毒血**惡液を體外に排泄し血液を淸淨にし且つ精神を爽快にし根本的に肉色を**純白艶美**ならしむる奇効顯著の内服水劑なり(注意)從來種々の外用塗布的化粧水及誇大廣告の洗粉白粉等を用ひ其無効に歎じつゝある各位は速に此「サーサパリラ」を試みよ奏効頗る迅速確實なり(今回英國より輸入し當館にて一手專賣致候)色白新劑と「サーサパリラ」と内外双方併用せば奏効頗る迅速確實なり

價壹劑貳圓七拾錢叁劑七圓五拾錢五劑拾貳圓廿錢也

◉らい病根治新劑

癩病患者の新福音――最新發見藥――(レプロイス)

癩病は不治の病にあらず又血統病にあらず一種の癩病桿狀菌の媒介による傳染症たることを發見せり、本劑は此確乎不拔の最新發見學理を基礎とし幾多研究を重ね數千患者の實驗に徵し苦辛經營の末今回始めて完成發明したる最新藥にして其効力の峻烈顯著百發百中悉く全治すること到底他類似藥の比にあらず、患者よ彼の十九世紀的遺物たる推量的不合理に調合せし粗雜極まる無効舊式賣藥に誤らるゝことなく又古來より傳へられたる血統病或は不治症等の愚說に迷ふことなく速に本劑を試み其病菌を撲滅して病根を斷絶し生涯永久の榮華を完ふせよ、輕症は壹貳劑重症は特別製分以上にて治癒の目的を達す。

藥價送料共壹劑五圓拾錢特別製拾圓拾錢着金即刻小包密封送る

血塊流下 通經劑

血塊下する特効あり本劑叁劑分を用ゆれば二三ケ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止及び血塊にても必ず立處ろに通經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃するとを確證す但し本劑は其奏効極めて**確實顯著**なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢叁劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓叁拾錢(注意)**大盛**を羨み本劑及び以上各藥の近時續々模擬怪しき**類似僞藥**出はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんとを乞ふ無効なる

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流**



わきが 腋臭 根治確證新發見藥

從來醫療賣藥其他百方手を盡し到底不治の難症と斷念せる腋臭患者に速に當館新發見の根治藥を施し「生きながら地獄」の苦惱を永遠に脫せよ、いか程重き慢性わきがにても本劑を用ゆれば**誓って根治**することを確證す殊に本劑にて一旦全治せば決して再發或は他病に變ずる患ひ無く生涯再び用藥を要せず是れ他にありふれたる一類藥と異なる處の本劑一種獨特の靈効なり患者よ速に此根治的新藥を一試して世人の嫌忌せる病根を斷絶せよ實に不思議の新發見奇劑なり▲根治的謝狀山の如し來り見よ示す▲(藥價)輕症根治分價送料共六拾錢▲重症根治分同上壹圓貳拾錢▲頑固慢性症根治分貳圓參拾錢▲切手代用は必ず二割增しの事▲着金即刻送藥す

以上五藥 **專賣元** 東京市神田五軒町十九番地 **日新館藥房**

(その二)

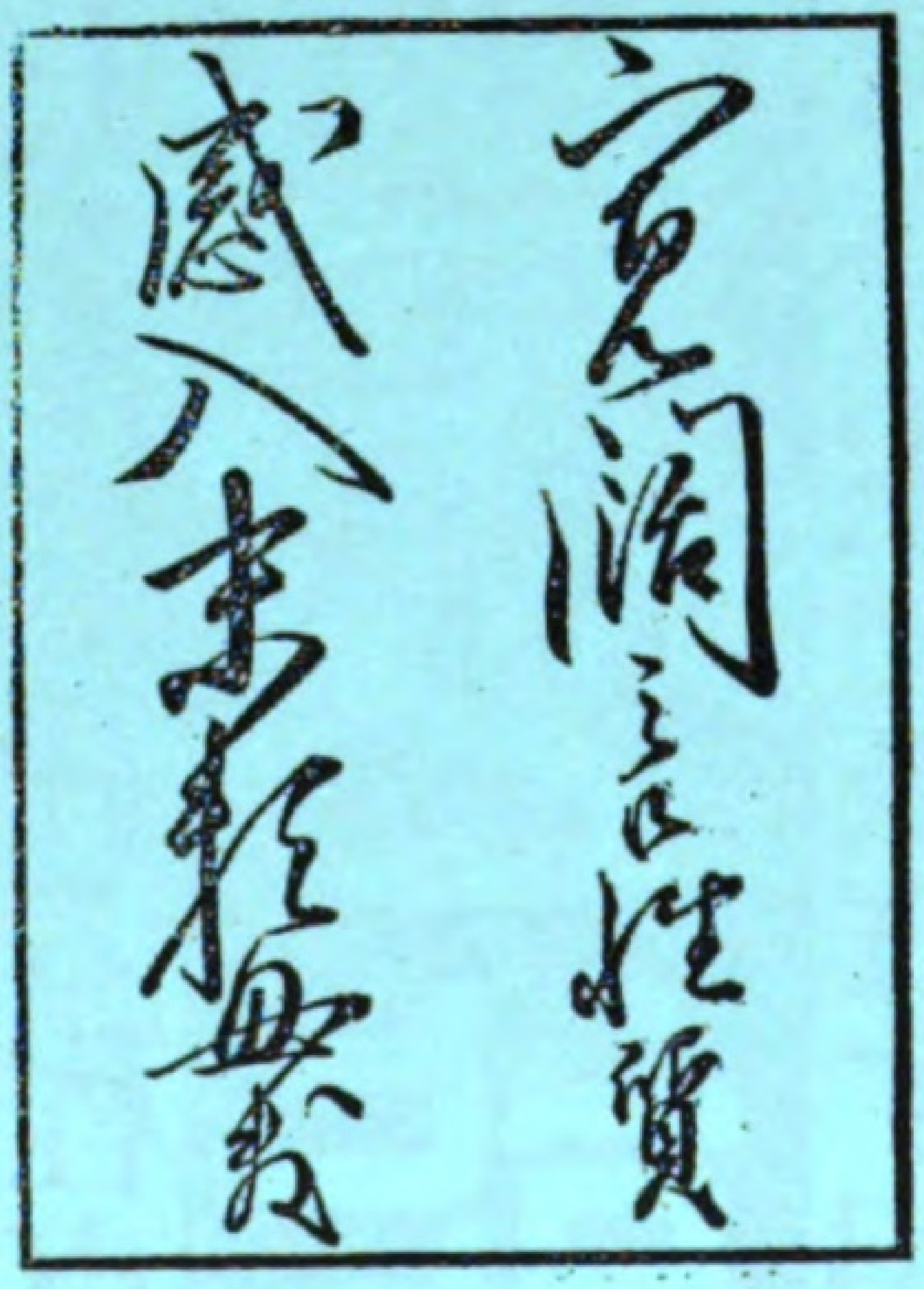
新刊

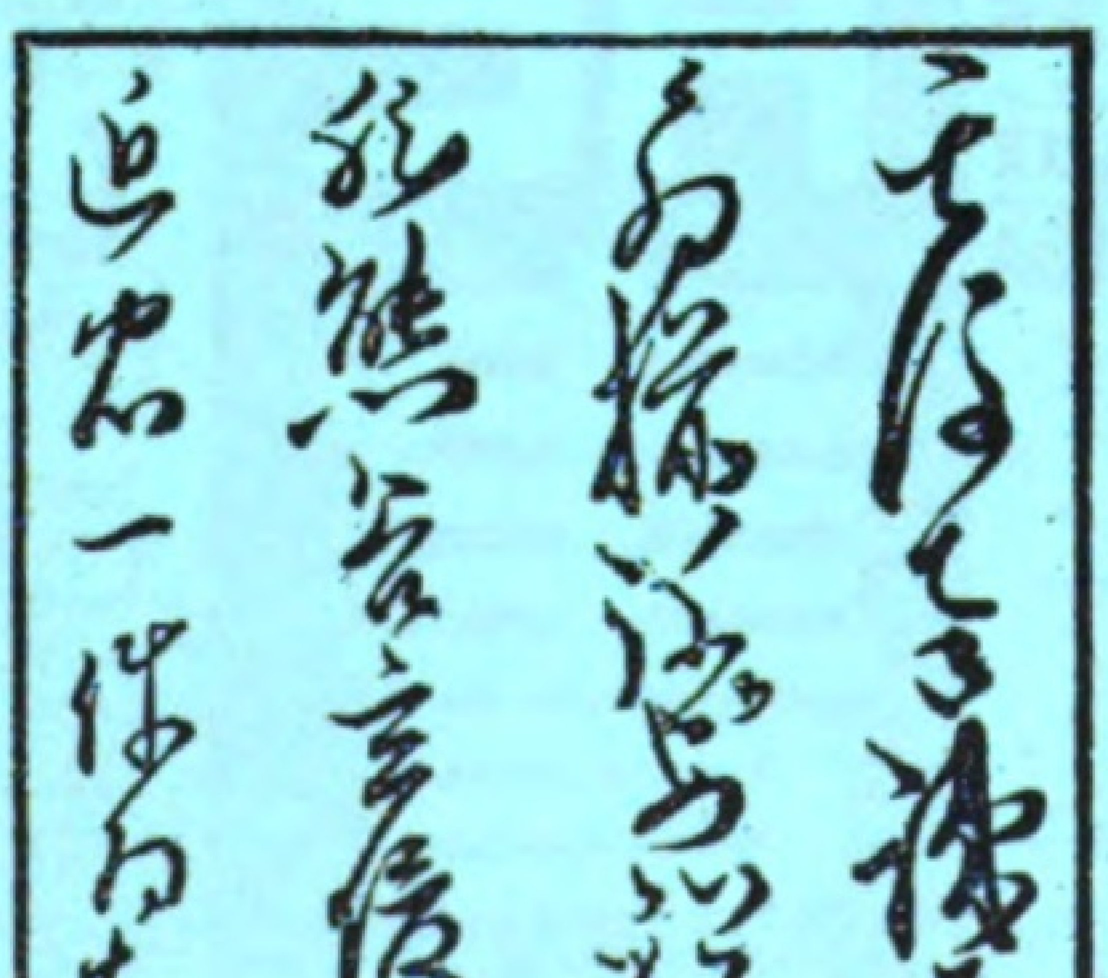
早稻田大學講師

杉山令吉編

菱湖書簡選

(雛形)





書簡文の好惡は讀者をして先づ發信者の人品如何を想像せしむるものたり。故に書簡の認め方に注意せざるべからざるは固より男女の別なしと雖も女子に在りては特に之を重んせざるべからず。然るに近時の女學生は概して其素養を缺けるを以て文筆ともに拙劣にして殆んと讀むに堪へざるを常とす。是れ豈嘆くべきの極ならずや。本書は近代の能筆菱湖翁の書簡に就き文筆ともに佳麗にして日用文の模範たるべきもの大小數篇を纂め良工を選びて剞劂に附し卷末に其讀方と文法上の注意とを加へたるもの、以て書簡文熟習の臨本となすべきなり。

上等半紙木版刷
和本全一冊
正價金八拾錢
郵税金四錢

女(との三)

（その四）

文字が上手に書ける程喜しいことはありますまい

悪筆と能書の人

とは其身一生に及ぼす損徳はどんなに大きでしよ

本會獨特の特許速成通信教授の方法に依れば如何なる悪筆の方にても短日の練習にて頗る上達すること全く機械的であります、

顧問 伯爵東久世通禧閣下 ―草行假名共六ケ月卒業

女子部書者 小野鵞堂先生 外講師大家數名

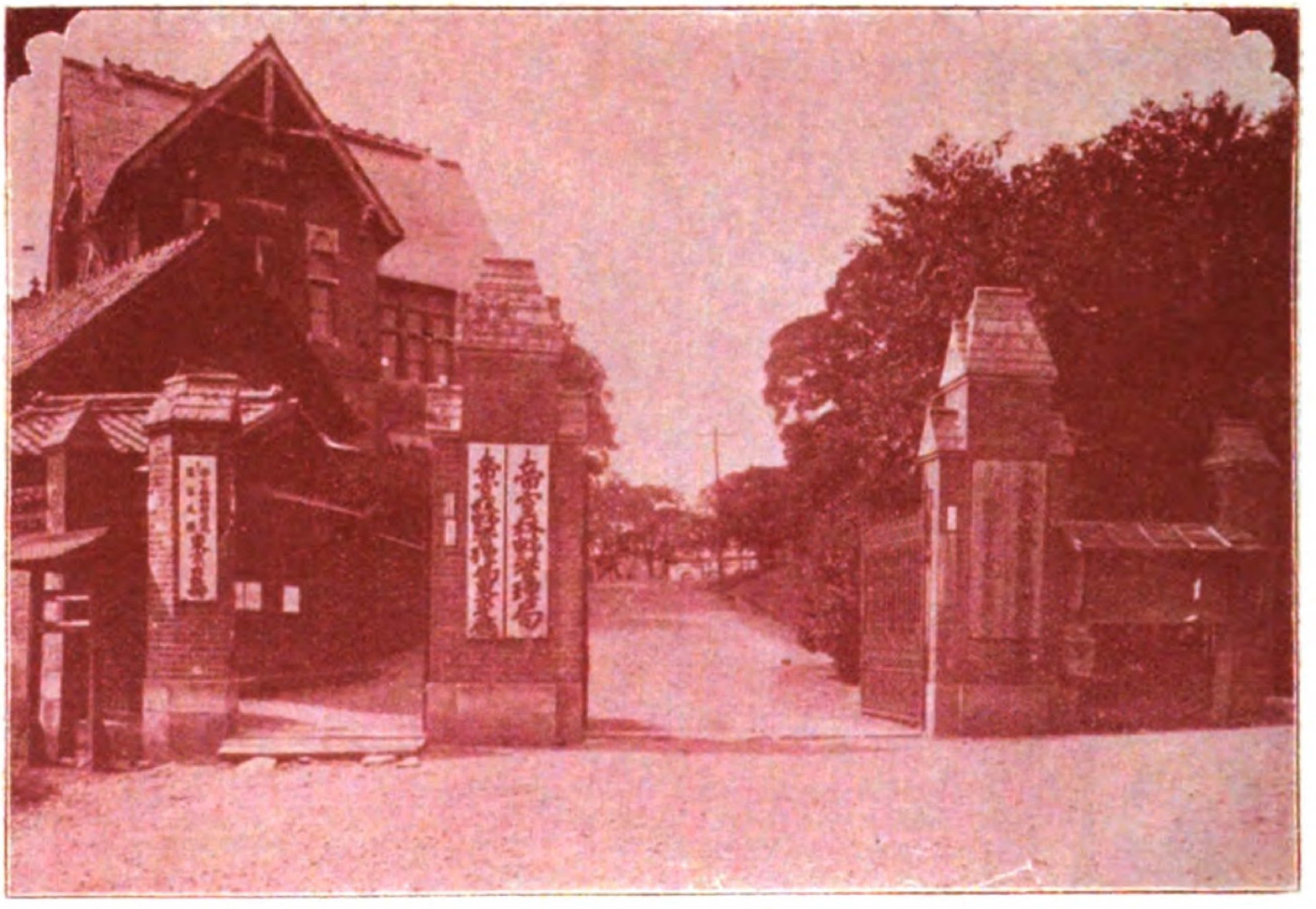
男子部書者 文部省習字検定試驗委員 稻川雲谿先生 ―楷行草三體六ケ月卒業

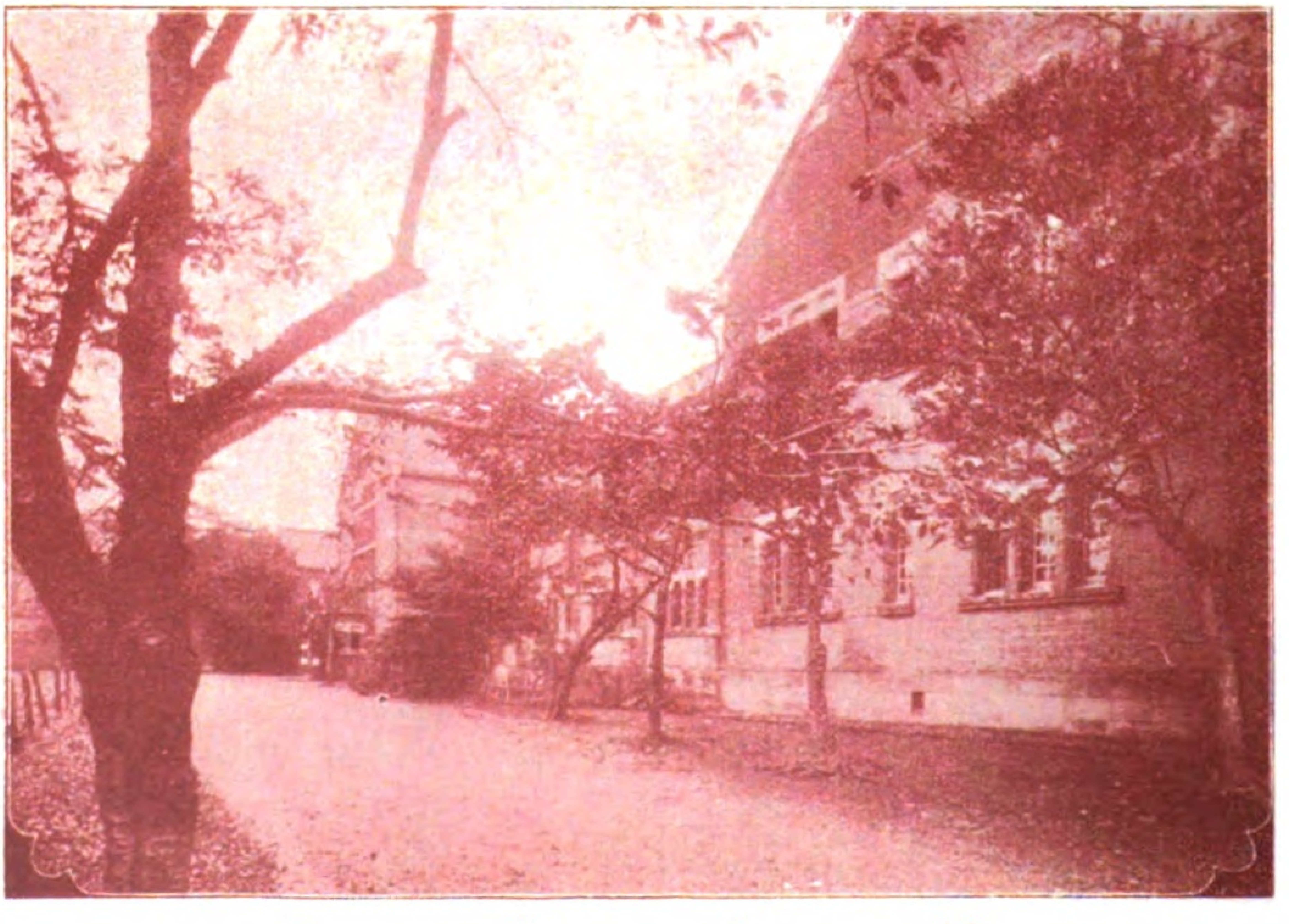
見本 詳細會則無代進呈 ―

東京本郷森川町壹 電話下谷三〇一一

帝國習字速成學會

東京女學館





同上校舍

肺病新藥

私儀明治廿一年の十一月以來慢性肺病に罹り各地の醫藥は勿論妙藥なりと聞く毎に諸種の賣藥を服し東京市內有名大家諸先生の診斷服藥し猶ほ橫濱獨逸病院長(ドクトル)の藥劑も其効なし豆州熱海相州箱根上州草津溫泉何れも兩三年入浴するも異狀なく其外鍼灸限なく[illegible]食したるも効驗更になく漸次重症となり廿八年四月頃には時々咯血して皮膚靑白く身體非常に衰弱し日々發熱し咳痰甚しく骸骨同樣に成最早此の上は致方無之只死を待の外なし然るに私は病中臥蓐の內と雖ども常に書見するの癖あり一日家藏の古書を點見する中文政の頃大阪の名醫長崎に遊學し蘭人より授りたる肺病必治の奇法聞書と云ふを發見し試みに數包を調劑して服せしに不思議に爽快を覺え尙續く服するに益々快方に趣き四週間餘りにて全く根治したり既に死期に臨みたる大患を斯くも容易く根治し實に蘇生したる思ひにて此の嬉さの餘り爾來肺病患者と聞く毎に其實を告け試藥せしもの五十四人皆共に全治せざるものなし眞に驚く可き世界唯一の肺病奇藥なるを以て寧ろ之を世に公にして數萬の肺病患者を救護せよとの勸めを受るに至り遂に肺治散と名づけ內務省の御檢査を蒙り弘く世の肺患者に發賣する事となれり然る處本劑の効驗非凡なるを以て發賣以來日尙ほ淺きにも不拘內地は勿論既に**米國紐育市タイヤーガ商會及び印度バタビアヒイアエーテス社**等へ續々輸出す專ら高評を博し服用諸君よりは全治の禮狀實に四千六百餘に達せり然らに此奇藥を知らず種々に迷ひ損害に惱める人士なきにもあらじ天壽を完ふせんと欲せば速に本劑を服して難病根治の一大幸福を得よ

藥價……七日分貳圓●十四日分四圓●廿一日分五圓●廿五日分七圓五十錢●七十日分十四圓遞送料十錢●爲替局名は大森局宛取組の事

主治効能●肺結核●肺炎●氣管支加答兒●肋膜炎●肺炎加答兒●たん咳等肺病一切より起る諸病を根治する偉功あり

用法及び詳細は本能書にあり但し本舖へ直接御注文の時は病狀の模樣を詳細に記入申込を乞ふ

東京府下荏原郡入新井村字不入斗二百十四番地

調劑本舖　川名助次郎

東京神田區花房町二番地　山崎帝國堂	東京淺草並木　遠山藥店
橫濱吉田町二丁目都橋際　永井永進堂	東京銀座一丁目　佐々木玄兵衛
東京神田區橋本町二丁目　福井甚發	靜岡市七間町　市川商店
北海道函館辨天町　國領平七	埼玉縣熊ヶ谷町　柳田金造

肺治散特約店

東京銀座二丁目　岸田吟香	東京銀座三丁目　松澤八右衛門	東京神田區鍛冶町　大木合名會社	東京日本橋通　中田淸兵衛
東京日本橋區本石町　守谷萬次郎	東京日本橋區瀨戶物町　玉置金八	東京日本橋區本町　大橋博愛堂	東京日本橋通　大野傳兵衛支店
東京兩國米澤町角　吉田安五郎	東京日本橋區上槇町　安川晃榮堂	東京兩國米澤町　大木口哲本店	大阪堺筋伏見町　谷回春堂
大阪西橫堀舟町橋西詰　賣藥卸賣株式會社	越後國長岡町　藤井卯吉	長野市大門町　小林傳兵衛	
馬關西南部町　賣藥會社	相模橫須賀汐入町　茱本商店		

(全國到る所の有名なる藥舖にて販賣せり萬一無之地は本舖へ申越次第特約す)

世界無比 …………

最新發明藥

あざ

入墨は廿日 ほくろ そばかす、なまず いぼは拾日

目に必ず美麗に除去す 痕跡を殘さず

とるこ **保険附** 新發明藥にして患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顏面たりとも毫も無痛にて除去し得らるゝこと確證す故に之を用ゆべき患ひある人は速に用ひて **美質** を完うせよ來館者へは山の如き全治者の **感謝狀** 及び除去したるあざ、ほくろ、そばかす、天然のいぼ等の實物を示すべし實に **世界唯一** の新藥也但し本劑は其製劑を二種に區別し一はあざ、入墨、ほくろを除去し又一はそばかす、なます、いぼを除去するものとす故に注文者は各自除去せんと望む所の病名及患部の模樣を詳細明記して申込あれ左すれば其症に適應する藥を送附すべし價は各一劑分壹圓拾錢參劑半分參圓拾錢六劑分五圓拾錢拾貳劑分拾圓拾錢づゝにて郵券代用貳割増し(患部の面積大なる人は大劑を求むるを徳用とす)着金即刻小包郵送す

色白 特効 ペーアス石鹸

壹個代價送料共八拾五錢▲三個函入同上貳圓參拾錢

此石鹸は **世界第一等** の良品にして化粧品の大王たることは苟も泰西の事情に通ずる者の熟知する所なれば今更喋々贅辯を要せず啻だ單に其主眼たる特効の一二を掲げん **皮膚を潤澤軟密にし色を白く** し、**粗糙質** を治するは此石鹸獨特の靈効なり且つ此石鹸は香氣頗る佳良にして使用後五時間は芳香馥郁として身體に附着し薫るは館主の實驗保證する所なり、乞ふ昨今世上に續々顯出し誇大の廣告を以て世人を瞞着する内國製の粗惡品と玉石混同視すること勿れ(昨年輸入の五萬個は夙に賣切れ品切中の處今回拾萬個着荷せり)

毛の必ず生る確證藥

藥價特別製大瓶貳圓卅錢▲中瓶壹圓廿錢

本劑は米國醫學博士の發明に依り學理實驗に徵したる世界無比の毛髮速生藥なり、即ち男女共腫物の痕、はつぼうけげの痕、やけどの痕、頭髮及はゑぎわの薄き人、其他に毛なき人、まゆげ口ひげの薄き人、其他總て毛のあるべき所に毛のなき人等本劑大瓶二個を用ゆれば忽ち毛髮蒼蒼と發生する特効あること確證す本劑は從來ありふれたる種々雜多の毛はゑ藥とは其効勿論同日に語るべきものにあらず眞に天地月鼈の大差あるに付幸に玉石混同視すること勿れ

奏効確證 美容新劑 やせる藥

壹劑分價送料共參圓廿錢 貳劑分六圓廿錢特別製分九圓拾錢着金即刻送藥す

本劑(藥名ヨードチリン錠)は學理實驗に徵したる現世紀唯一の發明劑にて血ぶとり。酒ぶとり。あぶらぶとり。顏赤くほてり。のぼせ症。卒中症等總て肥滿質多血質脂肪過多質の人用ゆれば無害にして著しく體量を減じ脂肪を適度に脱し美容健康を保ち程よくやせる特効藥なり故に彼の見苦しくふとりたるを苦にする諸君は速に本劑を用ひ其驚くべき偉大なる奇効を知られよ

聲惡しき人又は聲出ぬ方の新福音

美(うつく)き聲(こゑ)の出(で)る新藥(しんやく)

▲藥名……ウエーヌス

價送料共壹劑分壹圓拾五錢特別製參圓廿五錢

▲聲美くしくして…淑女は窈窕たり▲聲麗しくして…男子に威嚴あり▲聲は人格を高尚ならしむる要素なり…謠曲家、演説家、音樂家、藝人は聲音即ち其人の生命なり。發聲藥は古來世に甚だ多し然れども其確効あるものは恐らくは疑はし。獨り此「ウエーヌス」の發明者は十有餘年間發聲生理の原理を研究し初めて確實に美聲を發する方法を自得せり。「ウエーヌス」は實に無上の發聲藥として千古未曾有世界唯一の靈劑なり。特別製分を望すれば直に充分なる美聲を發すること確證す。」

(ウエーヌス有効感謝狀)……(近着の分)

一筆示し上候先達て私事貴地に於て興行中聲をいため候節あなた樣より結構なる御藥申受け候間其御藥前夜に用ひましたら其翌夜八分通り直り尚又三日目の夜はすみやかに元の通りに全快致し誠に不思議におもひ其まゝ大阪へ歸りました折柄他の太夫竹本廣鶴竹本房七樣兩人共聲ないため候に付直に其御藥二回分づゝあげましたら私同樣に直りました故此御藥は世にまれな御藥にて太夫一同不思議におもひ右兩人より貴所樣へよろしく御禮を申のべくれと私方へ依賴を受ておりますす此御藥に付て私共迄誠に功名致しました誠に〳〵喜び居り候故に今回愚筆を以て上候

明治八十年七月十日 大阪女義太夫竹本隅照㊞

其他如斯感謝狀は積んで如山も皆大同小異に付略して爰に掲載せず

以上五種 專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

女(ちの二)

花見料理



大阪女子割烹學校生徒が西の宮附近に於て割烹實習を兼ねて運動會を催したる時の光景

寫生造花術

特許允請二件

ボーレート型

臼田式堪水

通信教授

●臼田式寫生造花術は從來の造花術の道具の高い事道具の數多い事手間の係る事寫生の出來ぬ事其造花の洗滌ひ出來ぬ事此等缺點を補はん爲め廿有餘年の研究を積今日初て其發明を成効し直に特許允諾をなしたる最も嶄新なる則ち廿世紀の造花術なり▲ボーレート型は一種の練物型にして其材料は最も廉價にて最も取扱ひ安き藥料を以てし之れを實物の葉又は花瓣に添はしめ後は人爲を加へず一の化學作用に依賴して僅か六時間の間に造らるゝ所の寫生型である故に從來の五圓の費用を使ふ所が僅二三錢のボーレート型にて事足るなり▲外に又堪水法の發明ありて其造花に塵の積りたる時水霧を吹懸け之を流し去る事を得る故に其美觀を永久に保つ事が出來る▲當所は此等の秘訣をも最も平易に且出來得る限仕事の雜大を退け娛樂を旨として製作し得る樣敎授▲束修金參圓月謝毎期前金壹圓五拾錢▲修了三ヶ月▲但學生諸氏は其學校の證明書に依り各金額の二割を低減す▲右講習期間を三期に分ち毎期に講習書壹部を交附す不明の點は郵券參錢添え問合せあれば即時叮嚀に回答す▲郵券六錢を送らるれば『ボーレート型』と絹布紙葉と寫生堪水造花との寫眞三枚及趣意書明細書等を送呈す▲大阪市北區西野田龜甲南町九十三番地臼田式寫生造花術講習所

●別に當所に通學御企望の方は御來所の上諸規則御熟覽の後に入門御申込の事●

造花原料

東京九段坂

電話番町二〇五六番
振替口座六六七九番

吉住商店

●營業目錄●=御入用ノ方ハ二錢切手封入東京九段坂=吉住商店宛申込マルベシ直ニ進呈可仕候

女(りの一)

東京醫科大學小兒科主任教授醫學博士　弘田　長閲
大阪高等醫學校長兼病院長醫學博士　佐多愛彦序
元大阪高等醫學校病院小兒科醫長心得　長濱宗佶著

増訂五版

小兒養育の心得　全

正價金壹圓
郵税金八錢
郵劵代用一割増

本書は益々好評にして既に五版を發行す本書は小兒の榮養保護、教育等に關し日常保育者の心得べき事項は細大漏さず一々懇篤なる説明を加へ殊に哺乳兒の榮養法、小兒の發育及健康狀態、皮膚の强壯法、海水浴の心得、夏及冬に於ける保育者心得、恐るべき哺乳兒の疾病、小兒の傳染病、小兒の學校病、病兒の看護、小兒急病時の取扱法等を通俗的に説明したる者なれば何れの家庭にも缺くべからざる良書なり

●本書は結婚又は出産の祝物として最も適當なる者なり

大賣捌所

丸善株式會社　東京市日本橋區通三丁目
丸善株式會社大阪支店　大阪市東區博勞町四丁目
丸善株式會社京都支店　京都市三條通麩屋町西入

女子大學講義

父母の膝下にて高等教育を授くる好機關は本講義唯一

講師 東京帝國大學 早稲田大學 日本女子大學校教授講師 諸氏 及日本女子大學各研究科

▲每月二回講義錄發行

▲日本女子大學校家政科標準

▲講義簡明平易實質的

▲講義修了僅二年猶內容豐富

▲教育的にして實際的

▲會費低廉は天下無比頁數多

●天下唯一之高等女學講義現れたり

會員募集

入會の好機は數句にして盡きんとす

●當分に限り入會金免除の特典あり

▲修了後其證書を送呈

▲會員質問は懇切解答を與ふ

▲試驗の上卒業證與ふ

▲婦人雜誌「家庭」會員に無代進呈す

▲女子大學校特典提供

▲修了後會友として特權夥多

編輯 日本女子大學校 通信教育會

・詳細見本付規則書郵券二錢即日發送す

(りの三)

發行所 精美堂

東京市小石川區久堅町百八番地

電話番町九三二
振替口座東京二八三八

女りへの四



都の花石鹸

素顔

生地を自慢の素顔に氣勢ばかりの口紅
艶やかなる膚の色! 雪を欺く白妙の肌!
見るからにゆかしけだかき花見の美人
これぞ「都の花石鹸」を召さるゝ故にこそ、その麗しの容貌と
幽しの肌とを望み給はゞ「都の花石鹸」を化粧料として四時も
放し給ふな、

▲販賣店は至る所にあり

都の花石鹸 金ツル洗粉 本舗 野村外吉

大阪市東區南久寶寺町二丁目

日本女子美術學校教員會議



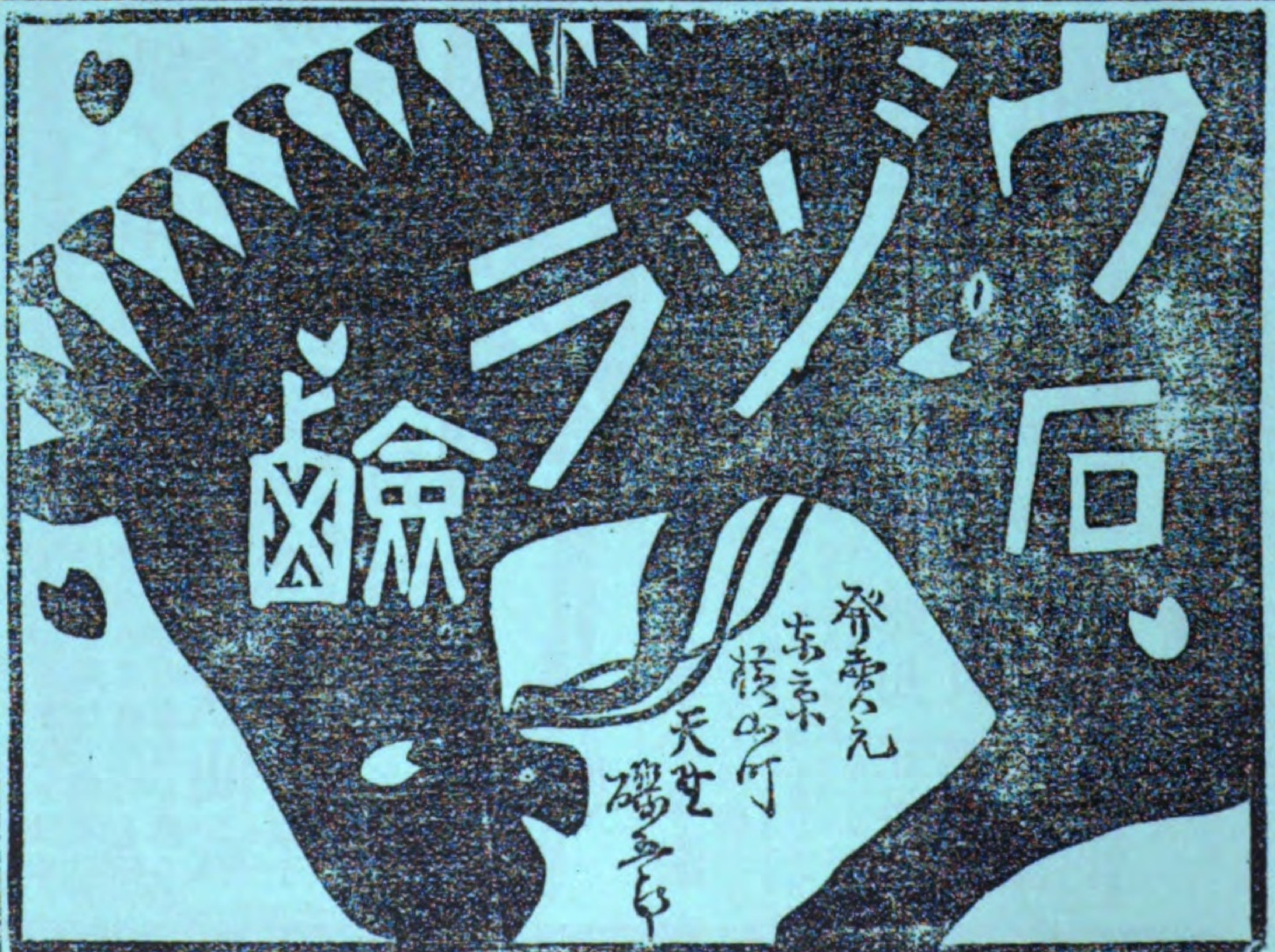
この會議は本校が質素勤勉なる女子を造らんとの主意を以て開催せるものなり



同校裁縫科の實習



千代田白粉
香油
千代田白粉と香油とは廿世紀式の新香料を配合して調製したるものなれば夙に淑女令嬢に愛用せられ高評嘖々たり
白粉 大瓶卅五錢 小瓶二十錢 水製 廿五錢
香油 大瓶卅五錢 中瓶廿五錢 小瓶十七錢 特製 七十錢
東京馬喰町
山岸三之助
電話浪花三七九三



ウヂラ
石鹸
發賣元

女(めの一)

女（ぬの二）

實用女學講義錄

新學期開講

▲本會は中學講義錄の發行に從ふこと既に五ケ年通信教授に於ける甚深の經驗を基礎となし今回更に女學部を新設して『實用女學講義錄』を發行せり。

▲講習期一ケ年半、此間に於いて高等女學校程度の學課は勿論、本邦家庭の事情に照らし女子必須の諸科目を講說し圓滿なる主婦を作る事を目的とす

▲講義錄は每月二回發行とし講師は教育に經驗深き斯道專門の名家のみ也講述極めて平易、總ふり假名の談話體なれば何人も解し難き憂なかる可し。

▲每月機關雜誌『新國民』を發行して會員に限り每號無料進呈す『新國民』は現代知名の專門教育家及び斯道大家の訓話學說創作及び會員の投稿を掲ぐ

▲會長尾崎行雄親しく本部を監せらる。組織整頓し取扱最も懇切也。且つ會費極めて低廉都會一ケ月の遊學費を以て優に全學科を修了する事を得べし

◉新學期開講　三月三十日迄入會金を全免すべし◉

見本つき規則　無料進呈

大日本國民中學會女學部

東京駿河臺

電話本局三千〇四番
振替口座四千二百番

女（ぬの四）

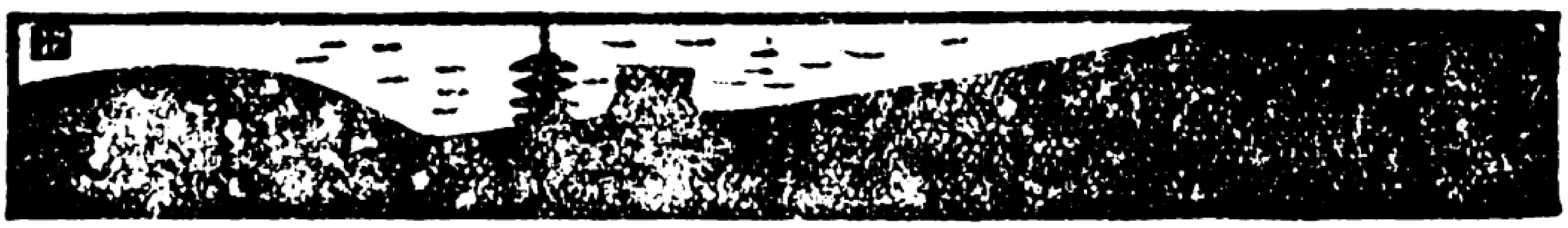


花ならば

南窓の梅がわらへば北面の雪がすれる世の中に、すつきり粋と咲きし水仙、殊に格別驕りの色も見せれど、さりとて犯されぬ清香の品は気節三尺の秋水にも比し申す可き。

物こそいはれ、花のかうべのうつむけばとて、只かりそめのすさびには何となうながめんも己が心はづかしき心地、さわらばこぼれむ秋萩の露ばかりも曲りたる姿せぬが、やがて見ん人の心刺すにてや候らむ。

人の世の女とうまれて、通ふ心の花はと問はせたまふならば、桜もよし、柳もよし、梨花の塵に染まぬもうれしけれど、われは水仙の気節をと勧め参らすに憚からぬものに候。



偉人の母に就て學ぶべき尊き經驗

鳩山春子

△スペンサーの言葉

哲人ハーバアトスペンサーは申しました、「若しも商人が算術と帳簿をつける知識なくして商業を始めたならば、吾々は必ず其愚を叫び、其不結果を豫期するであらう、醫者が解剖學を學ばずして施術せしならば、吾々は其大膽に驚き、其患者を憫むであらう、然るに親が子供を導くに必要なる體育、德育、知育の道理を辨へずして子供の敎育てふこの難かしき仕事を始むるとも、吾々は其母の無謀を驚く事も無ければ、又其犧牲たる子供を憫むとも無い」と。家畜を飼養する人は常に家畜の改良を計り、其配偶を撰び、其食物の取り扱ひに苦心する事は私共の知る所であります。又植物を培養する人が如何にして常より優りたる花を咲かしめんか、如何なる方法を施せば其果實を美味に、立派に作り得るやを講究してゐる事も私共の知る所であります。而して家畜又は植物の共進會に於て、一等賞を得るならば其人の得意は實に譬へ樣が無いので御座います。然るに其人が其子供の敎育に於て曾て善良に導くの方法を研究しない、無頓着であると云ふのは、實に不思議ではありませんか。

△偉人の子供は偉くなる筈

多くの人は子供の身體の強弱、其性質の善惡、其頭腦の賢愚を總て天より授かりしものとして敢て

人爲の改良進歩を講じようとは致しません。秀才を見ては彼は天才なりと言つて居ります。のみならず、或は豪い人、賢い人の子供はすべて凡庸な者と云ふ樣な間違つた思想が行はれて居ります。けれ共立派な動物を得んと欲せば、其親を選ぶではありませんか。良き果實や、よき花を得んと欲せば其種子を選ぶではありませんか。人間ばかりが立派な人の子よりも下層の人の子に天授の才があるなどと云ふ理屈は何うしても無いので御座います。それにも拘らず其樣云ふ傾向があると云ふのは、豪い人や、賢い人の妻は、自分の怠惰若しくは虚榮、又は他に何か心配する事などある爲に子供の教育をゆるかせにするからで、決して子供が先天的に其んな性格を有つて生れるのではありません。豪い人賢い人の子と雖も、若し其教育方法が當を得るならば必ずや尋常人の子供より優さるべき筈であると思ひます。左れば若し斯る人の妻たる貴婦人にして、己れの目前の利害を犧牲にして、貧しき人の妻以上の周到なる注意を以て其子女の教育に腐心し、其子に對して寛嚴宜しきを得、十分に體、德、知、の發展を計らるゝならば、數十年の後には必ず目醒ましい結果を見られやうと信じます。貧しき人の子供は、これを植物に例ふれば大概不充分な種子より生じたもので、之を養成するに就ても充分なる食物と、知識を開發すべき適當なる設備もなく、萬事不充分がちなるにも拘らず、尙其母親の熱心一つに依つて屢〻豪い人、善い人を作り出すので御座います。之を思へば貴婦人たる人達は、大に奮勵して其身分其地位に適する樣な立派な子供を養成しなくてはならない事と存じます。尤も之れは婦人のみを責むる譯には參りません。其夫たる人も成るべく共に力を協すべきは云ふ迄もありませんが、萬一夫が業務又は交際、其他に心を奪はれて妻と協力する事の能きぬ場合でも、母が其身を犧牲にして子供の教育に盡瘁するならば、其子供は必ず立派になるに違ひありません。そして立派になればな

る程子供は母親の其の特種の勞苦を感謝する事が深いだらうと存じます。

△お母さん孝行の實例

或る書物に「お母さん孝行は偉人の特徴なり」と云ふ事が記してあります。如何にも豪い人は其豪い所を母の特別なる盡力に依て得たものと云ふ事を尋常の人よりも一層深く感じますから、己れの成功を、母の山よりも高く海よりも深き恩に歸して、どうか之に報いたいと思ふ心から、自然尋常よりも一層母を大切にするので御座います。

彼のリウクトルの凱旋者エパミノンドスや、希臘の大王アレキサンドルや、或は賢明なる羅馬皇帝マアカス、オレリユス、佛蘭西のシャレマン帝、有名の詩人ミルヴオア、音樂の大家メンデルソンなどは何れも稀なるお母さん孝行であつたさうで御座います。其他例は澤山あります。

彼のメソヂスト宗派の高祖ジヨン、ウエスレーの母は、毎夜或る時間に子供とのみ話するを規則とし、其際子供らしき懺悔と小さき心配の相談相手となり、然うして子供の忍耐強き教師となり、又子供の愉快なる友人となりました。餘り忍耐が強いので或人が貴女は如何云ふ御積りで同じ事を二十回もお教へなさいますかと尋ねますと、ミセス、ウエスレーは、「若し私が十九回で止めましたならば折角十九回教へた骨折を悉皆失つて仕舞ひます」と答へたとか申します。此の母に育てられたジヨン、ウエスレーは矢張り稀れなる親孝行でした。彼れが如何に母に執着の心深かりしかは、彼が若き頃自分は母より生き延び度くは無いと言つたのに對して、母は優しく其不心得を説き聴かしたといふ事でも能く分ります。彼の有名なるウヲター、スカツトは、其文學上の趣味を持つ傾向を得たのは其幼時母又は祖母が古今の明文を誦讀して聴かせたのに基くと申します。

彼の獨逸のシエクスピアと云はるゝゲーテなども自ら、其意志と性格を母より得たとか、其母の豐富にし

て貴き經驗より人生の學問を敎はつたとか、或は自分の今日あるのは母が若き者の活潑な心を刺激する術を充分有して居られた御蔭だとかと申して居ります。

△世界を撼かせし名士の母親

又誰れでもよく知る話ですが、羅馬のコルチリヤは、或る虛榮に誇る婦人より自分の寶物を問はれし時に、私の寶は我が二子なりと申した人ですが、此コルチリヤは早く夫に死に別れたから、埃及王プトレメオは之に金冠を献げて皇后の位に上げようとしましたけれども、コルチリヤは固く之を辭退しました。コルチリヤが王様に配するよりも未亡人として節を全くして行かうと決心したのは、自分の身が皇后となるよりも、子供を立派に育てゝ亡き父の遺志を繼がしめ、コルチリヤ家の名を揚げる方が遙に自分の名譽であると云ふ志を抱いて居つたからだと申します。

オーガスチンの母モニカの如きも、オーガスチンをしてセント、オーガスチンと云はるゝ迄にするには、實に言語に絶する程の苦心をしたものです。

ナポレオン、ボナパアトも、子供の將來の行爲の善惡は全く母親に依ると申しました。諺に搖籃を動かす婦女は世界を支配すると言ひますが、皆如何に子供の敎育が大切であるかを說いたもので御座います。

或る書物に「一人の良き母は百の保姆又は敎師に優る、然るに母親が或る必要上より、又は怠惰より、若しくは交際好きよりして母たるの注意、敎育、感化を施す能はざる時は、其損失實に計る可からず」とあります。尤も母が必ずしも豪くなくして子が豪くなつた例もあるけれ共、去る場合は、母に代りたる婦人、即ち時としては祖母、時としては伯母、又は姉妹などが豪い者であつたからで御座います。

△子供は小さき宣敎師

去らば何時より子供の敎育を始むべきかと申しますに、之れに就て面白い例があります。四歲の幼兒を持てる或る母親が、何歲より子供の敎育を始むべきかを

或る高僧に尋ねしに、其人は「若し御身が未だ敎育を始めざりしならば、既に其四年を失ひたり、生れて始めて笑む時より既に敎育は必要なり」と申したさうで御座います。然るに之を聞きし或る人は「ソハ既に遲し、體内に子供の宿りし始めより敎育の必要あり」と申したとの事で御座います。併し之を敎育するには色色注意が必要です。

如何に子供が可愛いからとて玩弄物にしてはなりません。之を厄介物にするなどは更に惡しい事で御座います。之を神より授けられし神聖なるものとして受領し、之を適當に敎育してこそ始めて子供を持ちし甲斐があるのです。即ち之を敎育するには適當の方法と充分の覺悟を以て臨み、其才能を充分に發揮せしめてこそ子供を持ちし甲斐あるものと存じます。

殊に眞に子供を愛するならば、子供の爲めに自分も自から規則正しくなし、子供の模範とならむが爲めに其行爲をも自然に善良にしなければなりませぬ。即ち子供を敎育せんが爲めには先づ自らを敎育すべきであります。自分の爲めには忍ばれざる事も、子供の爲めを思へば忍耐しなければならぬと思ひます。この故に或人は「子供は吾人を罪惡より善道に導く爲めに神より送られたる小さき宣敎師なり」と申しました。

又詩人ウオルズウァースは恁う云ふ事を申しました。

"O dearest, dearest boy! My heart
For better lore would seldom yearn,
Could I but teach the hundredth part
Of what from thee I learn." Wordworth.

「オ、愛らしき子供よ、余は更に之れよりも善き敎訓を得ん事を願はじ、汝より受くる此の敎訓の百分の一程にても汝に與ふるを得ば嗚呼如何に」

△御身は虛僞を敎へつゝあり

私共は子供を正直にする爲めには、自ら正直になる事を要します。或る若き母親が、其幼兒を寢に就かしむる爲めに、自分も寢る時の帽を被り、子供の眠る迄

其側に横臥する事にして居りますと、彼のバプチスト宗派の神學者たるローバアト、ホールは、其婦人に向ひ、御身は自ら虚僞を働き虚僞を子供に敎へつゝあると責めました。其時婦人は斯くせざれば子供が眠らずと辯じましたが、ホールは更に聽き入れず「恐かなり、適宜に育つれば眠る筈なり、子供をして御身の求むる處を知らしめよ、從順は子供に取りて必要にして、一つの虚僞をも爲さしめざるは御身に取りて必要なり」と申されました。

△子供に對する母の權威

又よく子供が食物とか其他の物を欲しがる時に、これは苦いとか恐いとか申して之を止める事がありますが之れは知らず識らずの間に子供に虚僞を敎ふるもので御座いますから、愼しむべきで御座います。又如何に我身を犧牲に供すると言つても、子供に何物でも其欲するまゝに與へるのは宜しくありません。犧牲の意味を取り違へて子供を我儘にする事は最も注意すべき事であります。

時も、金も、力も、樂も、子供に滿足を與ふる爲めに悉皆之を擲つ時は、子供は之れに慣れて了つて、遂には當然之れを待つ樣になります。或は更に歩を進めて子供は自分の慾望を滿さん爲めに之を請求致す樣になります。例へば、母が子供に立派な着物を着せんが爲めに、自分は古着のみを着、子供を遊ばせんが爲めに自分は常に働く時は、子供は自然傲慢な我儘な、取るに足らぬ人物となつて仕舞ひます。

故に母は常に家庭の主婦たる地位を固守し、決して子供の奴隷となつてはなりませぬ。子供をして母を尊敬仰慕せしめ、之をして母を輕蔑せしめぬ樣にしなければなりません。又母親は常に時を見出して自分の修養に勉め、駸々と進んで行く子供に遲れぬ樣にしなければなりません。そして常に子供の知友たり得る樣に勉むべきであります。母が子供の監督もなし得ざるほど子供に取つても母自身に取つても大なる不幸はないと或る書物に見えました。

之れに就て思ひ當る事が御座います。彼の朝鮮又は琉球等へ行くと、其婦人が立派な身體を以て如何にもよく働くのを見るでせう。然るに朝鮮人又は琉球人は國民として更に優等なる處を見出す事の能きぬのは如何なる譯でせう。思ふにこれは其母親が折角働いても、其精神教育に於て缺けたる點がある故かと存じます。

即ち其母親が善き教師よき知友たる資格なく、從つて精神上の感化を子供に與ふる事が能きず、徒らに男子を遊ばし、男子を怠惰にする爲めに、或は男子の奴隷たらん爲めに勞働するからかと考へられます。人の母たるもの〻鑑む可き所ではありますまいか。



實地に働く人々に接して受くる學問

東洋婦人會幹事　清藤秋子

▲男と女の智能の相違

廣く世界を見渡して、これは男子の世界か女子の世界かと考へて見ると、何うしても世界は男子の舞臺といふ樣な感じが致します。固より近頃は婦人の地位もずつと認められて來て居ますから、私共も決して自から卑下しようとは思ひませんが、依怙贔負なしに考へて見ると、何うも其の樣に思はれます。殊に日本が然うだと思ひます。何と云つても女は男に及ばないのが今の實際です、とても話相手にもなりません、能力の程度が情けない程違ひます。

けれど考へて見ればこれは當然の事で御座いませう何しろ女と云へば高等女學校を卒業すれば、最うそれで可いといふのが普通になつて居ます。處が男の方はと言ふと中學校だけて濟まさうなどゝは當人も親も決して思ひません。高等學校から大學までやるのが普通になつて居ます。して見れば世間の婦人の多數は高等女學校ぎりで、世間の男子の多數は大學以上に進んだ者といふ譯ですから、婦人が男子の話對手にもなれないのは當然の事、又其の活動する能力が遙かに違ふのも當り前の事で御座いませう。どうしても能力の本は矢張智識學問にあるのですから。

恁う考へて見れば、男女の頭腦が、大變違ふのは當り前の事ですが、茲に注意すべきは同じ中等程度の、即ち高等女學校の上級生と中學校の上級生とを並べて見ての比較です。處が此の敎育程度が略同じだのに、やつぱり女生徒は男學生に遠く及びません、さあ此處が考へどころ、問題の究所だらうと思ひます。

▲世間を觀る眼

同じ水平線の男女學生を比較して見ると、固より成

點では女の方が男より優つてゐる事も少なくありませんが、さて廣く世間一般の事に對する、着眼とも申しませうか、觀察とも申しませうか、さういふ點になると女は最う全然だめです。男學生の足下へも寄り付けません。社會百般の現象に就ての理解力、觀察力、眼の着け方などは女子は殆ど盲目も同然と言つてい丶位です。

實際、女學校の生徒は、最う學科も漸やうで、その他の事は極く卑近な衣服とか、身の裝飾とか、音樂、生花のお稽古とか位なもの、實に頭腦の中の狹いもので御座います。處が男學生の方は全然調子が違ひます。それは男子の方にも詰らない人間が尠く無いでせうが一般に申せばずつと世間を廣く知つてゐます。智識の範圍が廣いのです。新聞の記事だつて頭腦へ響き方が違ひ、世間の出來事にも自から注意の向き方が違ひ、又お互眞暗な室內生活の間の話題も違つて居ます。例へばアメリカの艦隊が來たと言へば――これは女だつて知つては居りますが――男學生の方はドン／＼横濱まで見に行くとか、その艦種や航路や乘組將校の事までもよく知つて噂するとかいふ風です。中學生でも上級になれば最う南米の移民が何うとか、北米の移民が何うとか位の智識はあります。ヘジン博士が來朝したと言へば、探檢熱が盛んになり過ぎはしまいかと心配される程の有樣です。總て最う智識や注意の傾向が中學時代から世界的になつてゐるのです。

けれど女の方は何うで御座いませう。アメリカの女學生が來朝したからと言つて、何の興味も起さなかつたでせう。コッポ夫人が何んな人でも、西太后が何んな豪傑でも、一向我々に關係はないと言つた風です。成程直接には何の利害もないでせう。然し廣く窓の外の天氣や風景を見て居ての室內生活と、窓を總て閉ぢての眞暗な室內生活とでは大變な違ひではありませんか。それ處ではない。日本に甚麼慈善とか育兒とか衞生、敎育とかの會や團體があるか、それすらも碌々に御存じない方が多くはありますまいか。

どうしても女學校と中學校との生徒では、世間を廣

く知ると知らないの點に雲泥の差があると申さねばなりません。

▲思へば無理もなし

それと言ふのは女の境遇に關係があるので、今日は未だ何うしても女は内へ閉籠められて居て、自由といふものが無いからです。女子は、男學生のやうに、學校以外何處でも好きな處へ驅け廻るといふ事が出來ません。即ち世間が大きくありません。大きい世間へ大膽に打當つて見るといふ事が女には出來ないのです。

男ならばずん／＼敎師の處へ遊びに行つて智識を廣める事も出來ます。遠足でも旅行でも思ひのまゝ、演說會を聽きに行く位は當り前で御座います。何處から何處までも押し歩きます。

處が女學生は演說聽きにさへ制限が付きがちです。又總べて然うされてゐる故か、妙に敎師の處などへも尋ねて行きません。ですから學校へ行く、歸つてくる、學科の復習でも少しする、それで一日の仕事はお終ひになります。かういふ事を繰返してそして卒業して了へば直ぐお嫁に行つて今度は唯忙がしがるといふのですから、女子が社會を知らず、社會を觀る眼のないのも、思へば無理はありません。つまり女は頭腦へ蓋を被されてゐるので、廣く大きくなれないのも一概に女の罪ばかりでもありません。

▲男女は互に一の秘密

私はまあ我々女子の斯う世間に暗くて、智識能力のいかにも甲斐のないのを、何うして救つたらよいものかと、前から考へて居りました。そして何うしても男女交際が必要かとも思つて見ました。

元來世の先輩の男子方が婦人論をなさるのを見るにどうも婦人の眞相がお分りになつて居ないと思はれます。どうしても婦人の眞相は婦人で無けりや分りません。男子方に向つては婦人は矢張一の秘密に違ひありません。

ですから男子方が婦人を解釋なさるのは兎角偏して

ゐます。極端に傾きがちです。何時ぞやも何雜誌かに「今の婦人は二種類で、虞美人草の富士尾でなけりや三勝半七のお園だ」といふやうな論が載つてゐましたが、私は其麼ものぢやなからうと思ひます。然ういふ單純な極端なものぢやなくて、もつと却々に複雜したのが眞相だと思ひます。

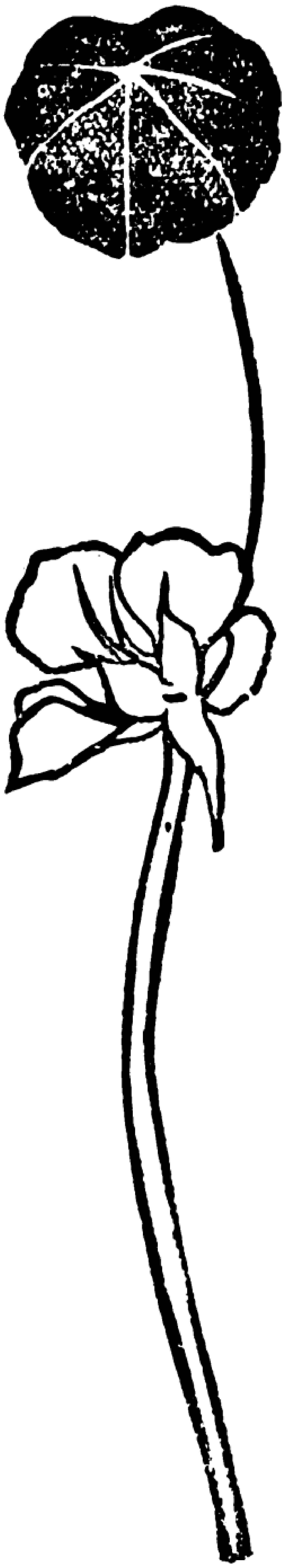
兎に角、實際男子方は婦人の眞相を御存じありませんが、それと同じやうに女は又男子の如何なる者かを知りません。成程結婚さへすれば男子が分るとも言へませうが、それはお互に唯夫といふ男子、妻といふ女子を見たばかりで、やつぱり男女その物はよく分りません。

ですから、男女互に知るといふ上からも男女交際が何うしても必要と思ひます。のみならず、最一つ私には別な理由があります。それは女は身體からも境遇からも、何うしたつて男の様に何處へでも押出す事は出來ませんから、廣く大きい世間を知つてる男子を透して知るの外はないといふ事です。ですから、男女を最つと交際させ、話もさせて、男子との接觸から女もそれに連立つて行かれる様にする外はないと思ひます。

▲人に觸れよ世に觸れよ

處が男女交際といふ事は又空如やると取返しの付かない間違ひを起しますから、私は右のやうに考へながらも遂々今日まで舊式を守つてをります。他人の大切な娘さんをお預り申して……と思ひますから、塾生の許へ訪問客があつても、必ず監督者の前で話させるといふ位に今でもやつて居ります。ですから無暗な自由交際は私は飽く迄不賛成ですが、然し女子の頭腦を廣くし智能を廣くしてゆくには、何うかして女子が最つと人に觸れ世に觸れてゆかねばならないと思ひます。

或は家族的の小交際會も可いでせう。これは少數でなくちや不可ません。大勢過ぎると最う顔を見合ふばかりの會になつて了ひますから、或は若い御夫婦同士三組か四組位の小會合もよいでせう。斯うすれば男女打交つての雜談だけでも餘程裨益があります。



ミス、ヒユースが日本に居られた時に懸う話された事が御座います。『私は大學を卒業して、可成偉い積りでゐましたところが、さて社會へ出て見たら全然自分は赤ん坊同様、零の人間だといふ事が初めて分つた。そして漸々世の中の偉い人々に逢つて見て、そのお蔭で次第々々に眞正の修業が出來たのです』と。

私なども此の會に關係はるやうになつて、責任ある地位に立つたものですから、必要上先輩方や其の他いろ〳〵の人に逢つて見て、いろ〳〵の良い意見を伺つたり、見聞を廣くしたりして、それから後ポツ〳〵と少しは世間の事も分るやうになつて參りました。その以前は最う何にも分らなかつたのです。ですから手許に被在しやる若い婦人たちへも、せめては會へ被在しやる方々のお話だけでも耳に挾んで、何でも活きた人から受ける活きた學問智識を取り逃がさない様にと注意してをります。

世界が男の世界でも關はない、又それで可いのぢやないかと仰有る方もありませう。それも然うでせうが餘りに女の方が能力が低いぢやありませんか。少なくとも、新時代の要求は、智識能力ある活きた婦人であらうと思ひます。それに應ずるには何うしても婦人の頭腦を最つと開拓して行かなければならないと思ひますが、それには女子が最つと實際の人に觸れ世間に觸れて、そこから活きた眼を開いてゆく事が最も肝要かと思ひます。



一學校の盛大なるを望まず數多の學校の興らんことを望む

法學博士　浮田和民

△世人の女子に對する觀念

女子敎育の方針に就いて先づ何よりも必要なことは、一般社會の人が女子に對する觀念を根本的に成立せしむることである。それが成立しない限りは女子敎育の方法が如何に完備し、學校の課目や器械類が如何に整備しても肝心の効果を奏せぬことになりはせぬか、私は甚だそれを恐るゝ次第である。

云ふまでもなく十九世紀はあらゆる事物が非常に進步發達した時代である。あらゆる方面が隆盛に赴いたこと殆ど前古無比と言つても宜い。學校は多く設けられ、課程は完全に赴き、敎授法は整備した。實に此の十九世紀一百年間の進步發達は其以前の一千年間に爲したよりも、その量に於てその內容に於て確に優つて居る。それで敎育も前古未曾有の普及發達を遂げたのであるから敎育の効果、成績も亦同じ度合に上つたかといふに、遺憾ながら然う云ふことが出來ない。完備した學校や器械や知識で造り上げられた人物が果して完備して居るかといふに甚だ疑なきを得ぬ。却て其以前の不完全な敎育の方が健全な偉大な人物を造り上げたやうに思はれる點も少からぬ。

△今日の敎育方針は十九世紀の工業制度に同じ

思ふに今日の敎育方針では迚も先人に優るやうな人物を造り、將來有益なる男女を育成することは出來ない。今日の敎育方針は宛然十九世紀の工業制度に則つて居る。大きな建築を造つて、機關を据ゑ付けて、數千の職工を使役して、物品を澤山製造して廉價に賣り捌く、是が十九世紀工業制度の根本主義である。要するに平凡な一樣な廉い品を澤山拵へるといふまでゞ、各人の趣味に應じ各家族の趣向に應ずる物品を拵へることは出來ない。今日の敎育制度は正しく是である。全く經濟的に出來上つたものである。多數の生徒を一室に集めて一樣に敎へる。佛蘭西でも獨逸でも皆同樣、多數の生徒を皆平等なものとして敎へて居る。一人々々の特質とか、履歷とか、家庭とか、健康とか、希望とかいふものに毫末も注意して居ない。それでは迚も將來有益な人物を育成し得る筈がない。犯罪の傾向ある生徒とか、健康を有して居ない生徒とかに對してはそれ相當の注意をしないから品性をも身體をも害して益〻不健全なものにするばかりである。故に多數の生徒を一同に敎授する方針では、如何に學校が完備し、器械が整頓し敎師が多數に居ても効が無い。

△個人的關係

効があらせるやうにするには矢張り孔子や釋尊やクリストやソクラテスが敎へた通り個人的にならねば可けない。以上の先哲は皆學生一人々々の性質を辨へて、其敎授方も亦人に依て異つたのである。此の如くして是等の人は皆天下の大敎育家、千載までも人の師となり、模範となつたのである。それと同じく世の敎育家たるものは一人の敎師が一人の生徒に對する關係でなければ可けない。昔時は師弟の關係がそれに近かつたから不完全な割には却々人物が出來たが、今日はそれと反對に完全した割

に優れた人物が出來ぬやうになつた。

△人數の少きが理想

維新前の學校は不完全ではあつたが教師がすべて生徒を識り、師弟は個人的關係になつて居たけれど、今日では教師は共同で多數で受持つことゝなり、生徒は又一個の團體となつて居るので、各人の氣質は毫末も教師に解らない。それで只一時間に一回の講義を聞くといふだけだから宛然毎日演説會に出席して居るやうなものである。實際成績の擧らぬのも無理はないと云はねばならぬ。殊に女子の教育となると尚更男子と違ひ、其の家系履歴、現在の家庭の狀態、將來の希望等一々突きとめて教育せねば甚だ危險であると思ふ。それで私の理想としては盛大な女學校は望まない、寧ろ人數の少い方が私の理想に近い譯である。人數が少くては經濟が立たないから、色々と廣告をして生徒の增加を圖るのも已むを得ぬことではあらうが、理想としては大きな學校を望まない。小さなのが澤山出來れば宜いと思ふ。生徒の少ない間が眞正の成績の擧がる時である。何れの學校も大抵設立當初の方が成績が宜い。漸々長くなり盛んになるに從つて平凡になつて行く。是は餘り盛大に赴き整備すると、學課の多い割合に能力や品性の鍛錬が出來なくなるからであらう。だから教育が完備し普及したからとて品格も亦同樣に進むとは云ひ得ない。

△墮落し衰弱したるにてはなし

日本が此の四十年間に非常に進んだといふのは事實である。日清、日露の兩役にも勝利を得て世界の强國となつたのだから、大國民たる抱負を有して居るのに何も差支はないが、然し翻つて四十年前、五十年前舊幕時代と比較して國民的人格が果して今日の方が優つて居るか、といふに却々優つて居るとは云へない。勿論劣つて居るとは云はない。墮落したとか衰弱したとか言ふ人があるが、私は決して然うは思はぬ。但決して進んでは居ない、變つては居ないと思ふ。當時は

時勢が時勢だけに色々な人物が出た、女にも豪い人が出たが、今日然ういふ人物が出ないからとて、今日は敢て昔時に劣るとは思はない。然し時勢が時勢で進取の氣象が進んで居る樣であるけれども國民の品性又能力は今日にしても餘り昔日と變りはないと思ふ、故に吾人は大に奮發興起して行かねばなるまいと思ふ。

△世界的婦人

それで先人に優るほどにならうとするなら從來の通り男子ばかり敎育しては駄目である、女子も大に修養し發展せねばならぬ。舊幕時代は男子だけ――男子も士族だけで、平民や女子の一般は敎育は疎かになつて居た。その敎育の無い女が偉大な人物を産んだから女子は抛つて置いて宜い、子供を産み子供を育てさへすれば宜い、敎育する必要はないと言ふ人があるかも知れぬが、然し今後は昔と變つて、國民全體が個人としても國民としても世界に發展せねばならぬ時代となつたから、決して婦人とて敎育を忽せにすべきではない今迄は關東とか關西とか、四國とか九州とか日本內を標準として居たが是からは世界を標準とせねばならぬ。婦人とても世界の婦人たることを自覺して居らねばならぬ。

△學生時代の五十年間

日本は進んだ〱、僅に五十年の間に非常な進步發達をしたとよく云ふけれど、五大洲の文明の標準に比較して見ると餘り進んだとも云へない。成る程速力は早かつた、歐洲四百年の文明を五十年にして成したのであるから速力から云ふと早かつたに相違ない、然し程度は高いとは云へぬ、非常に低いものである。それもその筈、對岸に先生が居て即ち歐米に模範があつて、學術でも敎育の制度でも又は改良の狀態でも只それを眞似寫したと云ふだけのことである。丁度學生時代と同じやうなもの、小學校又は中學校の四年間又は五年間に於ける學生の進步は實に驚く可きものである。高等學校や大學とてもその在校中の進步は實に目覺まし

い、年一年差が目に見えて來る。然し一旦卒業すると一向進まない、是は在校中の速力は先生の力であつて自分の力ばかりではないからである。要するに學校時代の進歩は他力である、他人のお蔭で進歩したのであつて眞に身に付いて居るか否かは卒業して見ねば分らない。眞の進歩は卒業後のことである。所が卒業すると進歩の跡が却々見えない。日本の過去五十年間は丁度此の學校時代である。歐米に先生が居て、その手本に就いて學び、無識より智識に、小智識より大智識にと進んだのだから、如何にも進歩が急速で甚だ得意の時代であつたが實は程度も低く素養も淺く未だ自分のものになりきらないで、甚だ恥づべき次第なのである、もし一朝地震でもあつて模範たる歐米が失くなるやうなことでもあつたら、日本は又五十年前の昔に後戻りしはせぬか、德川時代の昔に返りはせぬか、學問も獨立して進み得るか如何か受合は出來兼ねる次第である

△前に歐米後ろに女子

それ故今後國民をして一歩を進めしむるには敎育が男子ばかりに偏しては可けない、その男子の敎育ですらも充分に行かない始末であるから女子は尙更の事、今後は益々女子敎育の方法を考究して女子が男子に劣らぬ時代とならしめねばならぬ。今後の結果如何に依つて五十年百年の昔に優り、歐米の文明が眞に日本の文明となり、模範なくとも自ら手本を拵へて、新發明も出來、大發見もあつて、日本が萬事に獨立して東亞に光を放つことゝなるのである。今後は國民的發達を遂げねばならぬのであるから敎育が獨り男子に偏するやうでは駄目である。女子の知識品格が發達して男子にも優るといふ位になれば勢ひ男子も女子に負けてなるものかと發奮することゝなる。前には歐米が控へて居り、後からは女子が押し掛けて進み來ると男子は一刻も油斷することが出來なくなる。然うならなければ男子の眞の發達は出來ない。今後の女子は知識も實力も男子に匹敵する程にならなければならぬ。

△千古定まれる天命

とは云へ女の天職は家庭に在ること千古定まれる天命であるから、女が何でも男子のする事をするやうになれと言ふのではない。女子としての理想は女子の天性を發揮し、其の天性に應じたことを善く爲すことである。今日の世界は男女とも各種の事業に從事するの止むを得ざる時代であるが女子の天性を破壞せぬ樣にせねばならぬ、女子の理想としては何處までも家庭の人となつて、妻となり母となり、第二の社會を建設する基礎を造るの人となるべきことである。教育ある所謂良妻賢母たるものがあつて第二の社會を建設するでなければ偉大なる人物や大天才は生れ難い。教育ある女子の基礎の上に立つた社會は大なる男子女子を生じ國民性が一般に發達すべきは當然のことである。女子教育に從事する人は勿論、又教を受くる生徒の方でも充分に是を認め信ずるといふことが目下の急務であらうと思ふ。

△根本は人格なり

生活が困難になるに伴うて色々な實用主義の技藝學校も出來るやうであるが是とても根本は人格である。何も男子の眞似を爲る必要はない、それが目的ではない。要は獨立し得るだけの實力と品格とを有して男子と殆ど同等の關係になるといふことである。如何なる事業に從事し如何に危險なる境遇に處しても決して侮辱を受けない、恥辱を受けるやうな隙をも與へぬ品性堅固な婦人とならねばならぬ。今は世界的に競爭する時代であるから昔の樣に地方々々の一區域で生活することは出來ぬ、生れた所は分明つて居ても死ぬ所は何處か分明らない。內地であるか、滿洲であるか、それとも歐米の地であるか、何しろ是からは世界の婦人として活動すべきであるから、知識も道德も男子に劣らぬ意志と、品性の堅固な婦人たらんことを、力めねばならぬ。

人の感化力の著しき實例

勝田孫彌

日露戰爭が濟んで間も無い頃の事でした。私が大山大將を訪問して、本多庸一氏と一緒になつて色々話して歸へる途すがら、同君は、今度の戰爭に就て如何な事を深く感じたかと訊かれるから、自分は敎育の感化力の偉大なる事を最も深く感じたと答へると、同君も成程其れに違ひ無い、敎育の力、感化の力と云ふものは實に恐しい程强いものだと言はれて、それから互に戰爭に勳功を立てた人々の事を話し合つて居た事がありますが、私は平常色々の機會に於て、此の事を最も痛切に感じます。

△僻陬の一小土地から幾多の人物を出す

先般の戰爭に於て無類の勳功を立てられた東鄕大將は、何地から出られた人かと云ふと、薩摩の片田舍の加治木と云ふ町の出身です。大山大將は何地からかと云ふと、矢張り同じく加治木からです。其他黒木大將も此處からである。野津大將も、伊集院中將も、皆な此處から出て居られる。此の加治木と云ふは、小さな川に沿ふて、恰度此の通り（淀橋）の樣な細い通りが二本ばかりすうッと通つてゐる位の極く小ッポケな町ですが、其の小さい町から如何して恁う偉い人物が揃ひも揃つて出たものか、實に不思議ではありませんか。然し之れには原因があるのです。此の町からは、先きに大久保甲東、西鄕南洲などの、人傑が出て居る。人は或は既に恁う云ふ人々が出て要路に立つてゐたから、前の人達も所謂藩閥の力に依つて這度の働らきが出來たのだと云ふかも知れぬが、如何に藩閥の後援があつたとて、いざとなれば大事を背負つて立つと云ふ技倆、人格と云ふものは容易に出來るものではありません。原因は必ず他に無ければならないのです。

△彼等を薫陶感化したる人物

私も薩摩ですから、能く彼の邊の事情を知つて居ますが、昔は彼地に郷中と云ふものがありました。之れは其地の青年が、十日に一回或は月に一回と日を定めて集まつて、互に色々研究する機關で、十五歳以下の者の部と、其れ以上の者の部との二部に分れて居りました。私なども子供の頃には矢張り其れへ出た方ですが、そこでは、國に對する義務如何とか、義とは何ぞやとか云ふ樣な却々難かしい問題が出る。一人が義とは犧牲獻身なりと答へると、一方には去らば犧牲獻身とは何ぞやと問ひ詰める者がある。更に如何にして犧牲獻身の精神を養ふかと提議する者があると、漸々にして自ら省るにありと苦しさうな答をする者がある。覇氣の滿ちた却々面白い會でした。日露戰爭に大功を立てた前に擧げた人達も、若い頃は、皆此處で頭を鍛へたのです。そして、此の會を指導し、此等の人人を敎へたのは誰れかと云ふと、彼の大久保、西鄕等の諸傑です。此の人々が當時青年を薫陶感化した事は實に非常なものでした。だから私は常に思つて居ます此の微々たる加治木の町から、斯う揃ひも揃つて人物が出て、日露の役に大なる働らきをしたと云ふものは其の青年時代に於て先輩から受けた感化の力が今日光を放つたものであらうと。敎育感化の力は實に偉大なものではありませんか。

△鼻で人をあしらふ女生徒

私は自分の經營してゐる學校の事に就ても矢張り同樣の感を持ちます。御承知の通り、數年前に、文部省では、其の認定の高等女學校を卒業した者でなければ中等敎員の檢定試驗を受ける事が能きない。高等師範にも入る事が能きぬ、或は其の高等女學校を卒業した者でなければ當然小學校の敎員となる事は能きぬ、又は某々校にも入る事が能きぬと云ふ樣な規則を出しました。從つて又認定の女學校を出た者でなければ入學を許さぬと云ふ樣な規則を設けた私立の專門學校もあ

ります。然うなつて見ると、女子も一定の學校を出て居なければ甚だ融通が利かぬ事になる。そこで近頃、――他の女學校へも其樣でせうが、私の學校へ諸方から轉校する人がある。或は旣に女學校を卒業して居ながら其の資格を得る爲に更に入學する人もあります。だから新入學生に依つて諸方の校風を見る事が能きるのですが、概して言へば、我校在來の生徒に較べるとずッと奢侈に流れて居ます。髮飾と言ひ、服裝と言ひ迚も本校生徒には見られぬ風をしてゐるのです。勿論入學を許す際には人品、素行等を十分吟味するのですが、夫れでも入れて見てから之れでは困ると云ふ樣なのが隨分少くはありません。又其の人格なども實に甚しい低いのがあります。或る時も驚いた事がありました。一人の若い女學生が學校へ遣つて來て入學したいと言ふから、家内が出て應接すると、かう傲然と構へ込んで、ハア、これが先生達の居らつしやる室ですか月謝を出したらいゝでせう、入學て下さい、フン、と鼻で人をあしらつてゐると云ふ風。實に呆れるぢやありませんか。成る程世間には金儲け主義の學校も無いでもない樣だから、それで然んな量見違ひの者が出來たのでせうが、其の心根は下劣と言はうか、何と言はうか。然んな量見でいくら書物を讀んだとて、何になるものかと、つく〴〵氣の毒に思ひました。無論之れは謝絕しましたが、兎も角も然う云ふ風に色々の生徒が私の學校へ這入つて來るので、之を我校風に感化するに就て却々骨を折りますが、それでも從來の經驗に依ると、まづ三ケ月間辛抱して敎育すれば大抵直す事が能きます。

△鞭聲肅々を謠ひ出す

之れに就ての實例は外にまだ幾らもあります。矢張り他校から轉じて來た或る一生徒の如きも、入學した當座は、其の身扮へのだらし無い事と言つたら、實に眼を背ける程でした。這入つて寄宿舍に居たのですが細紐一筋締めたまゝで人に逢ふ事を何とも思はない。そして言葉遣ひなども隨分野鄙で、往々聞くに堪えぬ

事がありました。而も本人は一向平氣で、いゝとも惡るいとも思はない。寧ろ當然だと思つてゐる。實は氣の毒な話なのです。此の生徒の居た前の學校はと云ふと、生徒が細帶のまゝで寄宿舍の窓をのぞいてゐると半纏に麻裏草履の職人共が、常に「何んだ！彼の樣は」とのゝしり乍ら下を通つて行くと云ふ風なさうだから此の生徒の樣になるのも、言はゞ無理は無いのです。此の生徒も一月や二月では却々直り難かつたけれ共、三ケ月も經つたら、すつかり直つて仕舞ひました。

又恁う云ふ生徒もありました。學校へ入れはしたけれ共、どうも亂暴で仕方が無い、一寸休暇時間になると、教室の窓に腰を掛けて、大聲立てゝ「鞭聲肅々」を謠ひ出すと云ふ風。其の爲す事が總て全く男の樣でした。家内などもこれでは困る、外の生徒の爲にもならぬから最う斷つて仕舞ひませうかと言ふ。然し、私は、今暫く辛抱して見たら善からう、乾度直るに違ひない、さう云ふのを矯正するのは樂みなものだと言つて敎へてゐると、案の定、遠からぬ間に大變溫順しい女になり、一體が怜悧な子供でしたから、學校も好い成績で卒業しました。其の後近所の學校の教師となつたので、今でも時々逢ひますが、以前の事を思ひ出すと實に顏向きがならぬと言つて居ります。

△卒業證書を十幾本持つ婦人

此等は感化力の善く働いた例ですが、此の力は惡い方面にも亦恐しい勢ひで働く、そして惡い感化を受けて拙た固りに固つたら。最う仕樣のない人間になる。だから、若い人達が學校へ入るとか、教師に就くとかと云ふ時には、其の選擇には餘程の注意が要ります。そしてそれと共に一度學校なり教師なりを選んで或る學科を遣らうと思つたならば、そこへ十分身を入れてしんみり學ぶと云ふ心掛が無ければなりません。世間は妙なもので、學問を賣らうと云ふ人があれば、それを買はうと云ふ人がある。何時ぞやも恁う云ふ婦人がありました。最ううか／＼して少しも氣が落着かないそして何傳習所、何々講習會と云ふ風のものを彼ち此

ち駈けずり廻はつて、其の卒業證書ばかり十幾本も有つて居る。證書さへ買へば、それで偉くなれるものと思つてゐるのかと思つて實に可哀相になりました。此の婦人が私の學校へ這入つて來ましたから、私は、それでは困る、學問は恁う云ふ風にしなければならぬ、平生恁う云ふ心掛で居なければならぬ、左も無ければ到底修業は能きるものでないと懇々言ひ聞かせて、暫く敎へて居ましたが、其の婦人もそろ／＼判つて來たと見えて、成程恁う云ふ風にするものですか、初めて分りました、ようこそお敎へ下さいましたと言つて大變に喜んで、それから仕事に身を入れる樣になり、とうとう仕上げた事があります。此の婦人の嘗てゐつた樣にふら／＼して、虻蜂取らずの勉强をしてゐる人が恐らく世間に少なく無からうと思はれる。

△棟梁の材には手入を要す

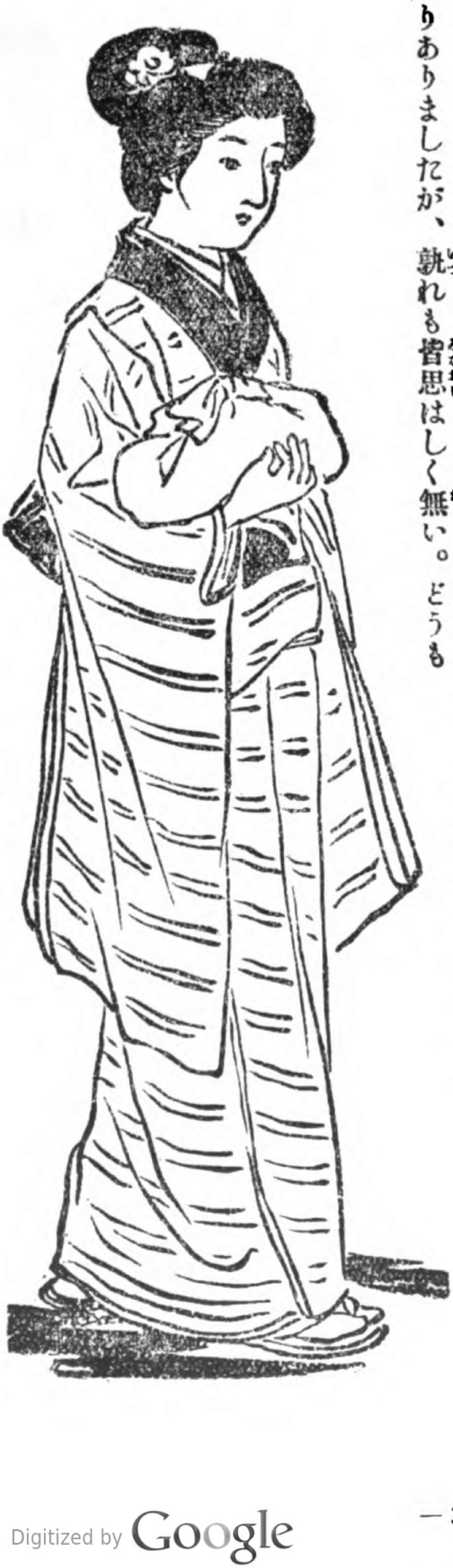
感化は大切である、修養は大切であると云ふ事は何も珍らしい事では無いが、而も善き感化を受け、善き修養を爲すと云ふ事は却々六ケしい事です。人間は恰度彼の杉の木の樣なもので、善く手入れをなし、善き感化を受けると棟梁の材にもなるが、之を籔の中に手入れもしないで放棄つて置くと、燃料にもならない樣なものになるのですから、これは繰り返して申して置きたい。

感化を人に與へると云ふ上から言つてもこれは矢張り同じ事です。人は能く家の下女は使へないで困る困ると申しますが、之れも少しく手入れをすれば必ず使へる樣になるのです。下女と云ふものは、最初は柔順でも、少しく樣子が分つてくると、兎角づるくなり勝ちのものですが、さうしたら之れに手入れをするがいい、善き感化を與へ、よく物を敎へて、そして之を使ふがいゝ、私は此の方針を實行してゐて、是れ迄未だ下女に就て不足を訴へた事がありません。

△甘やかされたる子供

母が子供に對するに就ても、其の感化―家庭敎育

の方針が、當を得てゐると居ないとに依つて子供の育方に大變な相違があります。私の知つて居る或る家は初めは資産も豊かで、女中を三四人も使つて居ましたが、其の頃子供の育て方は何うであつたかと云ふと、少しく子供の機嫌が惡いとでもなる。と大勢の女中が寄つてたかつて大騷ぎをしてゐると、子供は益々圖に乘つて、いよ〳〵以て手におへなくなる。何處か其の邊へふん反りかへつて、ピン〳〵はねて　暴れると云ふ風。それで育て上げた子供は何うかと云ふと、二人ばかりありましたが、孰れも皆思はしく無い。どうも普通の子供とは言へない。然るに其の家が或る事情の爲に沒落して、女中などは一切使はなくなつてから、又二人ばかり子供が生れましたが、それは暴れゝば暴れるに任せて、一切構はずに放任つて置いた。すると子供は構ひ手が無いから段々暴れぬ樣になる。そして生長して見ると、二人共揃ひも揃つて立派な子供になりました。敎育、感化の力は實に恐しいではありませんか。だからこゝで何うかして眞實の敎育をして見たいと云ふのが私の希望です。



絕えず餓ゆる若き妻の境遇

椿窓

起きるなり水桶ひつさげて外に出た。まあ、今朝は初雪。井戸端を面白くふりかくしたあんばい、詩的だとでもいはうか。朝顔に釣瓶とられた千代女なら、だまつては置くまいに、私には目にそれと映つたばかり、心弦の糸には響きさうにもしない、繁忙はかうも人を俗化するものかしら。

掻込む樣に御飯をいたゞき、遲れまいと急いで家を出樣とすれば、何時になくまつはる雪子、お土産を約束して飛び出た。あゝまだ泣き聲が……可哀想に毎日置きざりにされて。育英とか献身的事業とかいつて、名は美である、聲は清い、而し詮ずるところ自己生存の要求にすぎない、規則の枷に縛られ、時間の車輪に追はれ、すがつて泣く愛兒をふりきつてまで出かけ、終日校務の犧牲にならなければならぬなんてこんなつらいことは無い、吾に餘財あらば、何でこんな罪をつくらう。全體自分の子を投げて置いて人の子を育てるなんてまるで矛盾した話だ、奮鬪的生活も斯う考へては一向價値のないものになつてしまふ。

校門へ來ると、無邪氣な兒童等は、圓い眼を見張つてお辭儀する、職員室ではモー皆さんお顏ぞろひで、活氣滿々、何だか急に別世界にでも來た程に心がすがすがしくなつた。「唯現在に働け」てふ聲が、かすかに冥々裡に響くのであつた。

歸りには萩原さんと御一緒した。それは快活な面白い方、何時もそれ理想の、それ趣味のッて氣焔萬丈。此春高等女學校をお出なすッたといふが、私は本當にえらいと思ふ。一寸したお話の中にも、カーチンとかチヤーチとかッて、それはハイカラな事ばかり。今日は教授論、ヤレ着眼點がどうの、出發點がどうのと、しきりに御論の末、お話がいつかまた、高木先生に移

ッた。

本當に彼の方は教授法がお上手ね、アノ落着いた態度、アノ底――から湧き出る樣な重みのある聲、滿場をひきつける魔力があると言ひませうか。實に模範的だわね。それにアノ人格。本當に學校の花ね……。

何と形容詞の上手な、お賞め方だらう。



師範に居らしッた時は、學業は次席だつたが人物が一等だつたつて……。

私も常々眞から敬服してゐる方だから、心から合槌をうつたが、それとなく、心の秘事の耳語が聞える樣だ。

私此間夢見たら、それがすつかり當つてよ、アノ先生がね、宅へ入らしつたのよ、アノソレ、何時ものオリーブの服を着てね、私お取次に出たら、ソリヤー

眞面目なお顏でね、私の母に是非逢ひたいッて、おつしやるの、生憎留守だッて申上げたら、ツンとしてお歸りになつたのよ、夢なんて可笑しなものだと思ッてゐたら、本當に昨日用があつて宅へいらしつたぢやありませんか、マア獨で笑つてゐたわ。

何もかも、パシイーヴになつて聞いてゐると、やゝしばらくあつて、

青春の血が湧きかへるだの、恍惚として迷路にまやふ若き煩悶なんて、私の樣な冷靜な頭腦には、爲樣つて出來ない。

と、獨言の樣に、似つかぬ贅言をお附けなさる、私にはそれが如何にも、言譯の樣に響いた。

ひそかに人がわるいと氣がつく。

こんなお話も興にのつて、面白をかしく語りもし聞きもする中が人生の春だ。モー子供が出來、世帶の苦勞でもする樣になると、思想界は枯野となつて、想像の翼が重り、のんびりとして甘き夢路にさまよふ靈の樣な趣味はぬけて、只々現在現在と目前の俗務と首引きの姿、實社會の舞臺に登つたとか、家庭のクインになつた、とかいへば名は善いが、吾ながらうらぶれたる餘香をはかなみ、かつては憧がれた花野の夢見る胡蝶であつた乙女時代の境涯を追想し戀ひずには居られない。

お休だから、今日のお菜を少しでも安く買はうと思つて、遠いところを市場に行く、片手には鱈一尾、片手には玉菜三つ。モー腕が拔けさう、その樣子たらない。こんな事までする樣になつたのかと、情けなくもなる。知人の誰にも逢ひたくないものと思ふにつけ、踏む足覺束なく、顏はいよゝほてる、まるで人の物でも偸んで來たかの樣に心が臆する。考へてこれが何もそんなに恥づべきことではないものを、これも修養の足らない爲だと、強ひて氣をはげました。

敎會へ行つたかへり、此頃東京からお歸りになつた、あや子さんをお訪ねし樣と思つて、山手に行つた。かつては同窓のお友達だが、今は厳めしい官舍に奥樣と

よばれて、丸髷に薄化粧のあでやかさ、小さつぱりとした大がらの銘仙の羽織を着流していらつしやる御容子の若いこと、私より年の多い方とは誰しも思ふまい。何から何まで御不自由がなさゝう。お羨ましいことゝ思ふ。私を御覽になると、マアあなたもこんな赤ちやんなんて負する樣になつたのね。とおつしやる。私はこれがどうも慰の御言とは聞かれないで、身がちぢむ樣にはづかしかつた。色々東京の珍らしいお話なんかなさつたあと、私此度お嫁の世話を頼まれて來たのよ。それは私の從兄で、去年大學を出た工學士なの。來春は○○支店長になることになつてゐるので、收入は百圓からあるし、家もよほど財産家なのよ。……あなただから折り入つて賴むつてね……。標致は大したことも要らないが、學問のあるもの、それで若しも何かの事情で學問しなかつたのなら、頭腦の明晰したもので、そして又明日にも交際場裡に、立たなければならないのだから、その交際上ひけをとらぬ樣な手腕のあるものがほしいつて、いふの。



――誰かないでせうか。あなた心あたりがなくつて。

とのお話。聞いてゐる私は、何となくふさぎこまれた。

ア、さういふ立派なお方の、奥様とよばるゝ方は、どんな好運の方だらう。假りに此身をそれに擬へて、かの御所望に對して、如何ばかりの不足がある、吾はさしもけおさるべき價値なき婦人か、など思ふにつけ、今の運命がうらめしく、無暗につまらない氣になつて、お返事にも氣がのらなかつたが、ハアッさもしい心よと氣がついて、常々やさしくして下さる夫に對して實にすまないと思ふ。本當に斯樣な心の狀態がすぐあからさまに人前に現はれでもするものなら、どうして、かうして居られた話でないと、吾心の如何にも淺墓なことを、人知れず、深くはぢた。花の都のお土産である御馳走を、たんと戴き、いろ〳〵面白いお話もうかがつたが、嬉しかるべき友の好意も、僻める心鏡のくもつてゐた爲めであらう、些の慰藉の影もうつらないで、お暇をした。

夜雪子をねさせつけてほつと一息。安息日だから刺かけの足袋つぎもやめて、何か心を養ふ本でも見樣としたが、ふと今日借りて來た「女學世界」に氣がついた。先づ一等の後三年記、二等、三等と、續いて讀んだが、いづれすぐれたる筆の香、其見上げたる眼識、只々ほとほと感に入つて、讀み去り讀み來つた。誠に聖代の御光にてりそふ春の花園、吾女文學界の前途を祝はずるを得ない。さてその、何れをいづれと見わけがたい中にも一等の撰に登つた後三年記には、溫順玉の樣な人格のほのめきが、あり〳〵と見える、優しきこと花の如く、冒しがたき貞操をたゝへた若き美婦が、いそいそとして夫と子供とを慰むる愛の俤、はた更け行く夜半に、希望の光ほゝゑましげに、獨燈下に衣縫ふ可憐の姿など、髣髴として見ゆる樣だ。人は萬事に於て己れを語るものだと、誰やらが言はれたが、高尚なる品性、圓滿なる性情より流れ出づるでなければ、どうしてたとへ筆がうまくても、言がたくみでも、かういふけだかい、うるはしい文の章をなすものではない。撰者の御心も、大方茲にあるだらうと、すゞろに推想せられる。其他のもそれ〴〵すぐれた獨特の色が溢れて、殆んど人を醉はしむる味を覺えた。それにつけて

も、同じ惠の學庭に育ち、同じ流の思潮を泳ぎつゝある私など、どうしてこんなにも腑甲斐ないものだかと、つく〴〵なさけなく覺えた。

今日は火曜日で、學校は例の批評會の日である。丁度私が番に當つて教授の批評をうけることになつた、十幾人の光るお眼で、鋭い視線を吾一身にあつめ、手のおきどころ目のつかひ方、聲の出し方などまで、注視してゐられるのだから、たまらない、もー身はすくみ、胸は早鐘をうつて、顔はかつ〳〵とのぼせかへり、目がくらんで何を見てゐるのかわからない。生徒等も、同じくこの不意な多數の來臨者に、臆したものと見え、別者の樣におとなしかつた。おかげでよほど手加減がとりやすく、さりげなくやつてのけたが、まるで人形でも操つるかの樣、精神はお留守で、まづどうしても自分の技倆を現さうと、つとむるのであつた。批評はたくさんあつて、マアお賞めの方で首尾よく難關を通つたが、あとで考へて見ると、私はまるで、俳優のそれの樣であつたと思ふと、今日の教授は、一文の價値もないと感じた。かうして學校教授は、益々精神教授がすたれて、外形技術の枝葉ばかりうるはしく、「未來の大人たる兒童」は、あはれ大天地をはなれて、箱づめの厄に遇ふのである。誠にこの道のために慨嘆の至りといはなければならぬ。

放課後、一寸旅なる夫への手紙をかき、一昨日から歩きはじめた雪子の事をも申上げる。

今朝より吹きはじめた風は、やう〳〵狂ひ出して、吹雪は礫の樣に顔をうつ、ショルをかたくまきしめて、やつとのことで家に歸つて見ると、なつかしい東京の親友からの御手紙が來て、淋め顔に待つてゐた。見ると例の通り、御自分の主義を行ひかねて、煩悶してゐらつしやる樣、「母校の爲に一身を献げ、獨身の素志を貫ぬいた身も、今や何等なすこともなく、空しき時日をおくるに於て、殆んど意義なき生活、吾使命の何處にあるやをまよふて半夜夢圓なる能はず」といふあはれな調子のものであつた、あゝ吾友の苦衷は誠に同情に

たへぬ、しかし正義の煩悶は勝を制し、道の愁は光を得る。やがて吾友は必ず勝つの日が來るであらう。しりぞいて吾生を顧るに、終日俗事にあくせくして、糧のために煩悶し、慾のために愁ふ、吾友の清き貴き生に比して、霄壤の差といふもまだつくさない、誠に吾は友といふにも足りないのである。その至誠こもれる精神、眞理あふるゝお言は、懦夫をもたゝしむるといはうか。孟子の所謂「一日あたゝめて十日之を冷す」の類かも知れぬが、とにかく私は、吾友の御手紙に接する毎に、驚いて自分の賤しき身を内觀し、沈み行かんとする深淵より首をもたげるのである。あゝ十數年かはりなきこの愛の友、吾がためには一生の寶である。

さるにても、かくばかりせわしき俗界の巷に、責任とかいふ重いくびきを擔つて立つてゐる身は、常に閑日月ある偉人とはわけがちがふ、到底向上といふも空理にすぎない、超脱なんどいふも妄想にすぎない。「空の空なるかな」とソロモンと共にうたはうか。

小夜ふけて、風はます／＼あれにあれ、心の煩悶を煽る樣、寂寥と戰慄さへうちそへながら、獨り燈下にひもとく本の中に、左の句を見つけた。

おまへあの石塀に纏ひ着いてる蔦を御覽。石や棒につかまつて、それを支へに、上へ上へと登つて行くぢやないか。おまへも其通りに日々の雜務を利用して行かねばならんよ。雜用に妨げられるではなく、それを力に上達するのが眞理であらうよ。

あゝ慰藉ある言よ。

この蔦の心をもつて世を渡らう。



乙　女　椿

◎幼時、年中行事の中で最も樂みにしたのは、お正月に次では雛祭りである。

◎上段に飾られた雛は、お顔が圓く割合にお鼻も低く。體格も大柄だが、新らしいのになるにつけ、細面の瓜核顔で柄も少さく、御冠や御衣裳の小細工なこと――雅びやかである。何でも現實を尚ぶ當世はこんな玩具の類までも眞を寫したやうになつて器用には出來て居るが、趣味をもち俗になるのが歎はしい。あの間の抜けてる面の雛の方が何處か超然たる趣がある。

◎雛段の下で寢ると、その晩夢にお雛様のお話が聞かれると云ふことである。どんなお話を遊ばすだらう。重い瓔珞を頂いて十二一重を召し給ふ御方のことだから、吃度日の永い悠長のお話を、大和言で宣給ふのであらうと思ふ――百敷の大宮人は暇あれや――

◎御灯に灯ともし參らせて、夕餉の供物を捧げ終り、暫時人氣の絶えた雛の間に、コト／＼と地震にしては餘りに少さな音、襖細目にあけて見れば雛段の小屛風の影に小鼠の忍び姿――こんな時にはお正月でなくとも嫁が君と名づけて歌にして見たいと思ふ。鼠の顔は鳥渡愛嬌のある相だと雛様も見そなはしたらうか。

◎柾目の通つた桐の箱から毎春出しては飾り、飾りては藏める雛は、いつも同じ一の紙に包まれる、中には文字の書いた反古の包紙もあつてクシヤ／＼した皺を延して見ると――尋常二年生の自分の名を記した清書など見出す事がある。澤山朱筆で直されてるのを見ると失笑せずには居られない。

◎或る年某女學校の寄宿舎を參觀した時、とある自修室の白壁に紙雛を畫いた――毛筆畫のお清書らしいのが貼り付けてあつた。案内された教師が「お節句に自宅へ歸れないものですからあんな事をして慰めて居ります」と云はれたが、成程と察せられた。

◎春未だ淺い如月の寒い空――場末の古道具屋を見ると、前桐の粗末な箪笥や鼠の齒の跡のある茶棚や鍋や釜や不具の茶道具や、外にも火箸や皿やゴチヤ／＼と、規律もなく丁度火事場の跡のやうに、雜然と抛げ出したやうな店先に、四邊を拂ふばかりの内裏雛一對が飾られてあつた。新らしいものではないと見えて、袞龍の御袖の錦が錆びて居る。緋の御袴は朱土色して居る。只お頭の瓔珞の黄金色のみが永久に變らないで、星のやうに暗い店先に燦いて居る。――その古色を帶びた神々しさ――掃溜に鶴といふより以上に勿體ないやうな氣がして、私は等閑に見過すことが出來なかつた。昔は如何なる御殿の大奥にやんごとなき姫が模型と仰がれて、祭日毎には蒔繪の御調度一として足らざるはなく、矢の字に帶を締めた侍女に恭々しく供物を捧げられたのであらうに、有爲轉變の浮世とて今はかうして露店の店先に晒されて、塵を浴び埃を吸ふてゐるのを見て一種の感慨にみたされた。

◎乙女椿とは何とふさはしい名であらう、胡粉と臙脂とを解き混ぜた薄桃色の花の色は如何しても乙女の恥ぢらひの色である。色元結で結へた前髪、鹿の子を掛けた桃割、あの京都あたりの小娘の姿を思ひ合せて見る。

◎絞り白、紅は造花の様、一片づゝ寄り重なつた乙女椿は貝細工の様だ。（翠子）

青春の血の一滴



柳田富美子

朝を仕舞ふと平常の例で私は裁縫に取掛る。南明りの小窓の下に針箱裁板型の如く縫ひ返しの糸織の身巾をあたる。

「ほんとに好い柄だねえ、お前のは何でもみんな質實だから、丁度これから着るのに持つて來いだよ」と、お姑樣がおつしやつた。

「眞とにさうだわ、質實な間に散々着て仕舞つたから持つて來いの今に至つて針穴だらけ、でも私はかう云ふのを丹精するのが大好き。

夫が在宅る時分だと『止せよ、そんな古物をいぢくり廻して其暇に勉強しろ、語學の修業が出來ると一緒に獨逸へ連れてつてやるがなあ』つてお笑ひなさる。今日此頃のお留守の中に、不好ないものは精々と直して見違へるやうにして上げるわ、古いつたつて此衣なんぞまだ始めての手入れだもの。

錆納戸の替り縞、見切で買つた羽二重更紗を廻下着に、褐色ぶきを細く揃へて重ねて見たら？　引立つかしら、いつもの癖の仕上を急ぐばつかりに、かうやつて逸早くも坐つてしまふ。

まあする丈の事はして仕舞つたんだから、好いつて云へば好いやうなもの丶、あんまり身勝手ぢやないかしら、お姑樣が裏の畑でお作を相手に、小松菜をうろぬいてゐらつしやるのを知つてる癖に。

「私も致しませう」つて出掛けて行くのがお嫁さんの

役「まあお寒いのに。お姑様は彼方へ」つて云はなければどうしても濟まないんだけれど、夫が私には空々しくつて頓と出來ない、何故？　つて考へて見たつて分つてるわ、第一あれつぱかしの小松菜に三人も掛つて手をよごすがものはないし、皆が皆畑へ行つてしまつては、お客様があつたつて、商人が來たつて應對も出來やしないし、お舅様の御用をする人もないんだ者、夫にお姑様は斯うと極つて御用のない方、お作は又あれが本職、そこへ何も私まで出しや張つてオッチヨコチヨイにお菜を引ばるには當らないわ、それよりも自分の受持の方面を、かうしてさつさと片付た方が所謂なんだ、決して横着して居るんぢやないんだからと思つて見ても、何だか氣が咎める、早く上つていらつしやれば好いのに。

　花咲き匂ふ芳野の高根、紅葉は赤き瀧田川
　床きは心匂ふは姿、大和島根は麗はしや

　不意に起る唱歌の聲、凛々として鈴を振る樣な、靜な空氣を通して細く淸く、春子は全く天性の美音だ、しかも音律の整然として亂れない事、否こそ廻らね、詰らない子守歌にも折々聞きとれる節まはしの巧妙さは、强ち親の慾目計ではないらしい、成長くなつて、もし長唄でも稽古させたらどんなだらう。

「矢張琴の方が上品で好いよ、親が夫なんだから」つてお姑様はおつしやるけれど、同じ骨折るんなら、聞いて面白いものにした方が好いわ、琴だつて自分丈は相當に興味をもつけれど、三筋の糸の撥捌き、鮮かな美音の大薩摩なんと來たら、もう〳〵髮の根が締る樣なんだもの、到底琴なんぞの比ではない、只唱ふ文句の如何しい丈が考へもの、もしや〳〵其歌一ッ唱つた爲に、大事の春子の身を誤らせたら？　恐い事、君子は危きに近寄らず乎。

　さう云へば昨日は眞とに危なかつた、氣の弱い私に能くあれ丈の態度が持し得られた事、能く私は情に馳せなかつた、海外萬里異域の夫を恥かしめなかつた事を感謝する、例令いつが世いつの時突然御歸りになつたとて、私は必らず昔に替らぬ貞操の妻である事を皆

ひまする。

それなら何故私は涙を滯すのでせう、疑もなく今の涙は田代大尉、私の爲には永久に人知れぬ初戀人であつた、秀さんの上に注ぐ同情の涙である事を白狀する恐らくは今同じ時、横須賀碇泊の某艦上に、人知れぬ悲痛の胸を抱く偉丈夫、あの男らしい眼を擧げて、口を結んで、沖を遙かに望み立つ、昨日の海岸の姿を其まゝ……映し出しては居ないだらうか。

夫をもつ身、子のある身、殊には三年の孤閨を堅く玆に舅姑の蔭に寄る身の、思ふとて許されまじき思ながらに、思はじとすれど倘思はるゝ。

秀さんは實父の鄕黨田代氏の遺孤、食客として引取られたのは十七の秋でしたらう、其時分から體は大きく、極正直で無邪氣な、と云ふので誰よりも祖母が一番目を掛けました、夫は全く親切なので海軍豫備校へ通つて居ながら、風の吹く日や道惡などには、大廻りをして私共の學校歸りを介抱して吳れたものです。其賑やかな笑聲、はき〳〵とした物云ひ動作は尠からず子供連をチャームして、私共大勢の姉妹弟は誰も彼も秀さんが大好でした、別けても私には優しい？と云ふよりも可愛がつて吳れる態度が猛烈だつたので十三の子供心に秀さんの燃ゆるやうな眼光を氣がついて恐いと思つたこともある。

日の長い夏の夕暮、女中部屋の櫺子の下で弟の乳母が慰半分汗を流して唐人髷を結ふて吳れました時、影のさす桐の葉越に打水して居た秀さんは出拔に來て

「ランプを點けて上げませうか」つて云ふ。

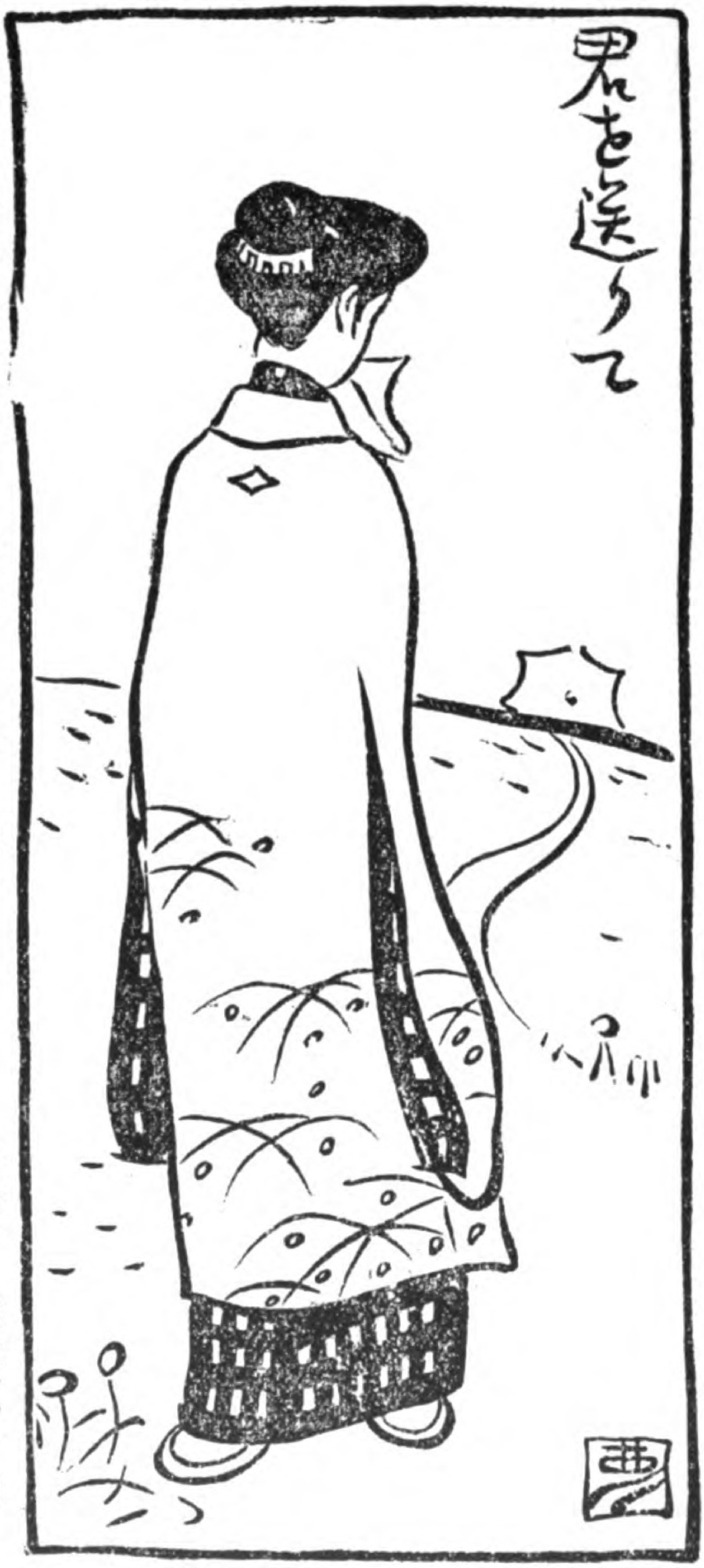
「まだ見えますよ、能く氣が附きましたねえ」乳母は無理から笑を噛みつぶして居る。

「エ、僕お文さんの髮がよく出來ないと心配ですから」而て例の眼をして穴の穿く程私の顏を見て居るのです今に手を出して摑みはしないだらうか、私はもう恐くつて泣きたくなつて來る。

「自分のでもない癖にハヽヽ」不意に書生の川崎さんが笑ひ出したので喫驚して顧り向いた時、秀さんは其肩先へ止まるが早いか、頭越しに數間向ふへ飛び下

りながらラッパの節をやつて居ました。

夫以來私は何がなし秀さんが恐ろしくつて成丈傍へ寄らないやうに、早く江田島へ行つて仕舞へば好いのに、と夫計思つて居ました、する中に時期は來て確私が十五の年、愈々家内一同に別れを惜しまれ鞄一ッを合乘に今日計は特別とあつて抱の久太が一肌ぬいだ車の上に肩肱張つた血氣の姿、滿身只是勇氣の塊、と云ひたい風情、往つて參ります、と勢よく言葉を殘して跡も見なかつた、何



て深い淡泊した人だらう、のみならず親切な人、私の爲に惡い事なんか一度もしやしなかつたのに、何故私はあんなに嫌がつたのでせう、傍へ來ると恐がつたり逃げたりして……今度逢つたらもうあんな事止しませう、つて思ひましたけれど其時分の私達は繪葉書かいて出さうと云ふ程の考もなかつたので、遂其儘に音信不通、忘れるともなしに夫つ切り、翌る年は、夏休で秀さんが來ると云つて祖母はもう大喜び、遠來の孫をみるやうに、お汁粉

だのアイスクリームだのと、好なものを數へ立てる。

子供の方では從兄の誠さんが總大將で、朝がトランプそれから鬼ごつこ、隱れんぼ、午後から操練、夕方が唱歌だなんて日課を作つて待ち構へて居る、と愈々やつて來ました、白の制服制帽に短かい劍をカタ〳〵させて、もうすつかり軍人に成り濟して居る。

『ヤ、お文さん背が高くなりましたねえ』私を見るなりから云ひましたが、別に抱かうともせず例の目付もしませんでした。

矢張何でもなかつたんだわ、恐い處か、何て屈託のない面白い人だから？、其時の面白さを忘れ兼ねて、次の年は倘早くから待つて居る、と秀さんは前年よりは、より立派になつてやつて來ました。

服飾の故計でなく、どこか犯し難い威嚴も付いて、段々親父に似て來る、と父も笑顔を向けました。

相かはらずの活達ながら、昔の浮いた動作は止んで例の猛烈な眼光も頓と見えなくなつて來る。

矢張何でもなかつたんだわ、何でもないんだわ、勇しい人、雄々しい人、何て立派な軍人でせう、恐いと思つた昔が戀しく、煩さいと思つた夫が懷かしい、何故其時分のやうに、お文さん〳〵て優しくして呉れないんでせう、さうして呉れたら私はどんなにか嬉しいのに。

其中に兵學校も卒業しました、愈々遠洋航海に乘り出すと云ふ、前途の希望に輝いた顏、生々とした眼、あゝもし、こんな人に思はれたなら？　フツと思つた自分の心を淺ましく、もしや私は戀をして居るのではあるまいか、まあ大外れた、娘の身として親の許さぬ男の人を思ふなんて。

たとへば假に私が秀さんを戀して居るとして？　夫は到底片思ひの行末遂ぐべき望はない。あの淡泊な豪氣な人が、なんで女々しい小說のやうな戀をしようぞ

これはそも、永久に我胸の底深く秘めて疊んで、色にも穗にも現はすまじの用心固く、翌くる三月良媒あつて當家に嫁ぐ身となつた。

もとより當家を死所、比翼連理の契も堅く、相思ふ

情の濃やかなるにつれ、胸に秘めたる初戀の、よしや薬末の露計なる果敢ない思であつたにもせよ、清い乙女の心に付いた染一點には相違ないもの、湧き出づる愛の泉の渾々として汲めども盡きぬ水底深く流してやつて素知らぬ風に口をぬぐつてしまはうなんて、氣の小さい私にはとても出來ない、元より耻かしき片戀ながら、斯くもありしと、一度は聞いて頂いた時、優しい夫は只だまつて笑つて居ました、自分乍らに餘り稚い戀ものがたり、無頓着な夫が何で氣に止めませう、人知れず胸に結んだ思ひの露は、我手に拂つて消してしまへば晴天白日、昔に勝る樂しい月日を笑つて暮した三年目西の都は青葉に暮れて鴨の河原の夕涼、風のもて來る風鈴のチリンチリンの優しい響を號外！と早合點のあはてもの、敵艦全滅！我軍の大勝利！と活氣に滿ちた日露戰爭の眞最中。私の爲には兄とも弟とも、心底からの仲好だつた從兄の誠さんが、久振で角帽かぶつて、エキスカーションとやらで大阪まで、大急行の



途中ですつて力んで居るのを、無理から止めて「今夜は一ッ腕を振るひませう、喰べて見て驚かないやうになさいよ」つて云ふと。

「エ、氣付藥を持つてるから大丈夫、今度は長い旅だによつてお祖母さんが心配しちやつて、こんなに藥を吳れたんです、僕なんぞまだ此位で助かつたけれど田代と來たら、鐵砲除のおまじないだの金比羅様のお札だのつて、しこたま背負はされちまつてりや、早や散々の體たらく八、、、」

田代？　秀さんだわ、懷かしい人の名。

「田代はとう〳〵出征ましたよ、明日宇品で乘艦るんだつて、僕そこまで一緒に來たもんだから、暇がなくつてお文さんに逢はれないのが殘念だつて、幾度も幾度もさういつたつけ」

「あ、さう、ちつとも知らなかつた」是をしも一生の生別死別と云へば云はるゝ、戀は捨てゝも私の爲には幼馴染、さこそは立派な武者振を切めて一目……「私も逢つて置きたかつた」と口へ出して云つたからつて些とも不思議はありやしない、私は何も秀さんを憚かる道理が無んだもの、公然と名殘を惜しんで泣いて上げたつて好いんだわ、と思つても、どうしても氣が退けて云はれない。

それを冷淡？　と見て取つたのかムッとしたらしい誠さん「お文さんは何にも知らないからそんなに平氣で居られるけれど、些と田代の身になつて考へて御覽なさい、之から戰爭にいつて、死ぬか生きるか分らない、謂はゞ一生の訣別なんぢやありませんか」

「えゝ」烟に卷かれて私は只眼を見はる。

「そ、それだのに」誠さんは後を云はうとして急に言葉が出ないと見えて徒らに口をモダ〳〵、いつもの癖の拳を膝に突立てる、まあ何をそんなに急付くのだらう、相變らず氣が短かいわ、可笑しくなつて突掛ると

「笑ひごつちやない」叱るやうな聲。

「こ、これを見てあなたは何と思ふんです」隱袋を探つて唐突摑み出した一品、私の膝へ押し付けるやうに載せながら「田代の筐だ、戀の筐です」

ハッとして私は思はず身がすくむ。
「明けて御覧なさい」さ乍ら命令の句調。
膝の上には小さいビロード張の箱一寸にも足らぬ此小箱の中に或恐ろしい秘密が伏在して居るのではあるまいか、人妻の今の身でこんなものに手を觸れて好いものだらうか。
沈吟する私の顔を誠さんは屹と瞰んで、
「お開けなさい」
更に命令、意久地なくも震ふ手先にパチンと明けると金光燦たる襟止、忘勿草を只一輪蓋の裏には三年前の月日を小さく、呈文子様、秀夫
「是を買つてからもう三年になる、其時分の僕の資力のベストを盡くして買つたお土產、お文さんに上げたいばつかりに、此品を上げたら悦んでくれるか、と夫ばつかりを樂しみに遠洋航海を漸と終つて歸つて見れば、もうお文さんは柳田家の新夫人！驚いたの何のつて、船室へ歸つて此襟止を胸に當てゝ、君、女々しいが僕は泣いたよつて、先刻田代の咄した時は僕も泣いた」



秀さんと誠さんとは無二の親友、いかなる秘密も二人の前には心の鍵の明け放し、底の底まで知りぬいた筈の、それが初耳
あゝそれならば矢張秀さんは私を思つて居て呉れたのか、吾にもあらずホロ〳〵と涙がこぼれる。

誠さんは急に優しく『あなたは知らないんだから罪はない、田代が戀をしようなんて誰にも思はれる事ぢやないもの、がそれならばだ、君程の男が命をかけて思つたものを、何故もつと前お文さんなり叔父さんなりに打明けないんだ、否何故僕にまで云はないんだつて云ふと、僕の境遇が許さない、どうせ望んで得られるものとは思はれなかつたし、斯う云ふ運命に立至らうとは既に／＼覺悟しながら、どうしても忘れられない、もう堪らなく戀しんだ、戀しい時には此品が友さ、慰にかつぎ出して人を苦しめるより、我一人で悲しい記憶を切めてもの慰藉に、かうして生涯暮さうと思つたけれど……もう今度は死所だ、云ふまいと思つたとを咄した序だ、屆けてくれ給へ。

幸に生きて再び還つて來ればまた新らしく思ひ出す須らくお文さんが天下に二人居ないのを恨とする、なんて考へて見れば馬鹿な事さ、つて後では笑つて居たつけが……』

『もう解つてよ』其先を聞くに忍びぬ。

『體は好いし頭は好いし、出世の途はドン／＼明いてる、衆人羨望の的にあたつて得意なるべき筈の男に、案外な秘密があつたもんだ、而も其原因奈邊にありやと來ては、お文さんたるもの以て如何となす、と云ひたくなるね、手紙を出しておやりなさい』

『そんな事出來ないわ』

『何故？　出來ない事はない、あなたは十分田代を慰問する丈の義務があると思ふ』

『だつて私は人の妻ですもの、さうと聞いて手紙なんぞ尚書けないぢやありませんか』

『ぢやあなたは眞から田代を氣の毒だとは思はないんですか、もしお文さんに夫もなく子も無かつたら？　其時はどうします？』

『そりやあ……』もう飛んでも行きますとも、と口まで出るのを端足ないと呑込んで、

『そんな事答へられないわ』

『冷淡だ』つてとう／＼誠さんは怒つて歸つてしまつたつけ。

それからまた三年も經つ。夫は醫學研究の爲凡三年の海外生活、留守に體を養へと、殊更に此湘南の地をトし細小ながら新築をもして下すつた、其御親切を無にせまいとて一日一度は必らず海岸の清い空氣を吸ひに行く。

昨日の午後の暖かい日を受けて、蒼い海、白い砂、岸打つ浪の靜かな音を聞くともなしに新聞を讀出した春子は？　と見ると遙かの向ふにいつものをぢ殿、白鬚のまばらに生えた、笑じわの深い豫備の海軍少將とか云ふ優しいお年寄にからまつて、何か指しながらお話して居る。



眞とにあの方も子供がお好な、いつも同じ時間に來ては飽かずに春子を遊ばせてゐらつしやる。

『さあ、か母殿の所へ來ました、をぢさんは今日は御客がありますで、又明日遊びませう』春子を抱いて來て下すつたをぢ殿は何度も何度も頭を撫でゝいつもより早くお歸りになる。

『春さんはそこへお山を拵らへて御覽、後に母樣が貝を拾つて上げますよ』オヤまた伊太利で地震があつた後に獨逸へも廻りはしないかしら、いくら體が丈夫だつて天災に逢つちや叶はないわ、もう一年だからつて待ち

暮して居たつて、いつどんな禍が起つて來るか知れやしない、早く歸つてゐらつしやれば好いのに。

「ア、母樣、兵隊さん、兵隊さん」春子は立つて手をたゝきます。

ふと目を上げると黒い服の大きい人が此方へ向つて馳けて來る、振り向いても私の外に人はない。

坐りながらに屹と身を構へる、途端に、

「お文さん」太い聲、はづんだ息。

「あ、秀さん」どうしたら好いでせう、カッとして私は顔の赤らんだのを覺えました。

待て、騒ぐまい、苟にも私は柳田千里の妻ではないか、はしたない振を見せてはすみませぬ、居住ひ直して「しばらく」ともかくも落付いて口を切つたが、やつとこれ丈。

「ヤ、暫らく」殆どおうむ返しに、秀さんは無意識に膝を突く。

嫁入つて以來の初對面、其頃とはまた肉付豐かに、廣い肩、大きい手、生死の境をくゞつた顔の、どんなに雄々しく、と思つても、エヽ意久地のない、首が上らぬ、目があがりませぬ、只例のあの強い眼のヒタとばかり吾が横顔に止まつて居るのを意識する。

「お文さん」絞るやうな聲「お目に掛りたかつた」

「わたくしも」思つたより聲は震へませんでした。

「隨分暫らくでしたわねえ」もう落付いてものが云はれる「いついらつしやいました」

「エ、今來ました」先方も段々落付いて來る。

「あんまり思ひ掛けなかつたんで、僕涙がこぼれました」潤んだ眼元に笑を含んで、濃い眉、高い鼻、なんて凛々しい人でせう。

「橘少將は僕の恩人ですから、久振で横須賀へ來たのを幸お尋ねしたんです、這入るなりお孃さんの噂を聞いたので、確かにあなたに相違ないと思つて、夢中で玆まで馳け出したんです、ちつともお替りになりませんなあ」しげ〳〵と見る眼の中には懷しさが歴々浮ぶ

「こんな束髪にして居るからでせう」反りみて他を云ふ私のつらさ。

あなたの心はよく解つて居る、それほどまでに思つて下さる深い〱お志を感謝する、嬉しいと思ひまする、さうとは知らず私も、片戀のつらい思ひを致しました。

これ丈云つたら秀さんは嘸滿足に思ふでせう、更に進んで、

しかし儘にはなりませぬ、私も斯うして初戀を捨てて、優しい夫を持つて居まする、甲斐ない思をいつ迄思ふも果てしのないもの、好い奥樣をお迎なされ。

お互に過ぎた昔は水に流して、只永久のお友達、清く親しく、兄妹のやうにおつき合しようではありませんか。

斯う云つてしまつたらどんなに私も氣が晴れる事でせう、そして笑つて別れたら……。

三年このかた絶えず思つて考へぬいた最後の解答もし逢つたら云ひませう、咄して見ませう、かうとしつかりお腹の中に極めたのですのに、

餘の不意、あまり熱誠の強い様子に驚かされて、物を云へば涙の湧くのが恐ろしくつて、

日は今し雲の蔭にかくれて、さつと吹く風一陣、つと身に徹つて、

「寒くはありませんか」なんて優しい。

「いゝえ」唇を嚙んでからくも堪へる「もうソロ〱歸りませうよ」長引けばまた意をます、肩掛を取つてソツと後へ。

傷しい哉、氣ぬけのやうに惘として立つ肥大の偉丈夫、腕を組んで眼は遙かの沖合へ、

指の先に涙を拂つて「往きませうよ」

「ハ」餘義なさゝうな重い歩み。

「秀さん、これありがたう、始終つかつて居ますよ」

驚いて目を向ける胸の留針、忘れ勿草の簪も床しう「ヤ」と淋しくほゝ笑んだ、同じ時ハラ〱と足許に散る、二滴……三滴。

其時堪へに堪らへた涙が今止め度なく湧いて來る、

あゝ秀さんよ健在なれ。

下駄の響に驚かされて、殘る思ひは後にこそ、あの



砂の上、松の下、懐しい海のけ……し……き。

お姑様が這入つていらしやる。

「お寒う御座いましたらう」淋しく笑むのを心地よく笑ひ返して、

「ナーニね、たまには好いさ、柔らかくつてお前の好さうな胡麻よごしが出來ますよ」勿體ない、此親にして此子あり、雅懷の廣い立派な夫の妻と呼ばれて、苟にも秀さんの爲め泣いたのが恥かしい。

さらば私はとこしへに戀ならぬ戀を思つて思ひに泣く心の自由は得られないのでせうか。

人形のいろいろ

人形は古へ「タサヒトガタ」とて草を束ねて人の形となしたるなり、垂仁天皇の八年、野見宿禰始めて土にて人形を造り、殉死に代へたりしが後人これを學びて、細工を爲し人目を驚かすものありき、されどこれ多くは神佛の祭具に使用したるものなり、後世に至つて種類頗る多く、專ら玩具用又操り人形などに使用するに至れり、今其種類を擧ぐれば、

〔からくり人形〕 これは傀儡の事にて例の人形芝居、又はあやつりに使用し、中には淨瑠璃に合せて舞はすもあり、これに南京あやつり、のろま木偶のぼう、操人形、笠人形、與次郎人形等あり。

〔南京あやつり〕 多く糸をつけて上より操るなり、南京といふは必らずしも支那舶來にあらず小さき義なりといふ。

〔のろま人形〕 頭ひらき色青黑く其樣卑しげなるものにて曾し江戸芝居に野呂松勘兵衛といふもの使ひ始めしより其名あり。

〔でくのぼう〕 首ばかりにて手も足もなき人形になり着物を打着せ、裾より手をさし込みて使ふ、働きのなき木偶なればこの稱あり。

〔操人形〕 今の柄樣に衣裳を着せ、笠など被せ、人形に似せて踊らすものなり、多くは酒席の座興にて眞の人形にあらず。

〔笠人形〕 菅笠の上に人形をしかけ、顔つきにて使ふ。

〔與次郎人形〕 紙にて作りたるものにて、與次郎といふ非人の足の上にて舞はせしものなり。

〔京人形〕 美人の風俗を寫す極めて美麗なるもの、手と足とのみ人形にて着物は錦をまとへり。

〔市松人形〕 普通女兒の玩具にて徳川時代大に發達せしものなれども、遠く足利時代より行はれしものなりとて、張紙に胡粉を塗りたるものにて、衣服は好みのものを着用せしむ。

〔相撲人形〕 うすき板をきり拔きて作れるもの二つとも人形の體同じく、頭かむりを赤く彩りたる粗末のものあり。

〔奈良人形〕 檜の材を刻みたるものにて却々風韻あるものなり。

〔舶來人形〕 ゴムの人形、陶器の人形、又蠟細工の人形等いろ／＼あり。

右の外生人形はからくり人形と同じく皆人娛樂の爲めに觀覽せしむるものにて、大仕掛なるものなり、淺草公園にて絶えず興行し細工人に安本龜八とて名人あり。

女學校評判記（二）

虎の門評判記

河岡潮風

△浪さんの母校▽

現今の男女學生で、小說「不如歸」の名を知らぬものは殆んどあるまい。と同時に必ず其の女主人公、浪さんの名を記憶してゐるであらう。ソシテ又、浪さんとは作者が命けた假の名で、本當は滿洲軍の勇將、大山元帥の息女信子であるをも先刻御案內であらう。

信子の墓は青山にある（野津家累代の墳塋と脊中合せにて、子爵森有禮氏のおくつきに隣り墓標の表には明治十年一月五日生母吉井氏、明治二十九年十月二十一日歿。と二行に刻さる）が、紳士貴女は、その知ると知らざるとに論なく、香花を手向くるもの引きも切らず、軍神廣瀨中佐の紀念碑と相俟つて、人氣はスバラしいものだ。單に小說に書かれた許りでこの盛況は何故であらうか、他なし、浪さんが、當今の蓮葉娘の樣に、ハネツカヘリでなく、月見草の樣な淋しいしとやかな美人であつたからでせう。シカモその女らしい性格の大部は、高等女學校時代に養成せられたのであつた。何を隱さう、東京女學館は彼の女の母校なのだ！

△如何にして創立せられしか▽

女學校通に尋ねて御覽、東京で學習院女子部を除きハイカラ女學校の三幅對は、女子大學と、お茶の水と本校と答へるに相違ない。良家の子女多く、花よりも麗はしき生徒に富める點に於て、確かに異彩を放つてゐる。世人は本校が虎の門にある處から、「虎の門」と略稱してゐるが、實は「羊の門」とか「鳩の門」とか呼ぶ方が、ふさはしく思はれる位だ。男子の學校に比を求むれば、曉星中學に髣髴たる處がある。曉星は一名私立學習院とも名づくべく外交官志望中の、上流子弟を收容してゐる學校である。



美術造花材料
各種
勉強販賣致候
天野卯兵衛商店
東京市日本橋區横山町一丁目十六番地
電話浪花一六四三番
振替口座九四七〇番
營業案内は郵送料四錢
お封入御申込
あれ

女(その二)

東宮殿下及び妃殿下には漢詩に深き興味を有せらるゝことは諸姉の熟知せらるゝ所ならん教育ある日本夫人として漢詩の作法及び其趣味を解せざれば社交上必ず恥多からん

▼作詩作文に至便なる 獨修講義録

作詩法……岩溪裳川
德川時代の詩學……森槐南
詩の沿革……岩溪裳川
唐詩釋義……同
論詩絶句講義……森槐南
詩話……岩溪裳川
讀詩偶評……同
平仄原論……久米易堂
詩學初階……岩溪裳川
漢文評釋……池田蘆洲
離騷講義……五本雙嶼
續文章軌範講義……池田蘆洲
孟子講義……三島中洲
拙堂文話評……山木眉山
漢文作法及雜則……池田蘆洲
現今普通文の瑕疵……中島筑山
文話……三島中洲
文範、故事、異名、解題

作詩作文之友

既刊 全廿冊

特別割引 一圓廿錢 郵税不要 一冊七錢

發行所 東京牛込區神樂町一丁目六番地 益友社



は歐米各國にて造化の妙工を奪ふの奇効ありとの賞賛好評を博したる秘密藥を當館主が醫科大學醫院在職中深奥なる學理と老練なる技術とを以て專門的に多年苦心研究の後其有効成分を檢明し之に最近の發見に係る生毛に關する新說を參考し最新藥を配合したる世界無比の學理的最新藥なれば其効能の非凡確實なる事世間に有觸れたる技術と學理に暗き賣藥山師的に無責任の廣告を爲して販賣する瞞着品の比に非らず左れば普通に醫師の處方する光菁丁幾、レゾルチン、サリシール酸、昇汞等の在來の生毛劑や粗惡の賣藥にて効なきとて落膽せず是非本劑を試みよ頭髮、はへぎは、まゆげ、ひげ其他の薄きを濃くしあるべき所に毛なきを生じ禿頭病其他の病氣にて脱毛するを防止し拔毛の再生を早めヤケド、デキモノ、ハツポ!、キリキズ跡の禿に生毛せしむる事請合

價送料共一劑八十錢二劑一圓三十錢郵券代用二割增の事

●●●取次所ナキ地方ハ直接本舖へ注文アレ●●●

本舗 醫科大學卒業藥劑士 從七位勳六等 中島龜之丞鑑製

三河國碧海郡刈谷町益世館藥局主

●●大取次左ノ通り●●

東京市
本郷六丁目赤門前 瓜生藥局
麴町區紀尾井町三 齋藤藥局
日本橋檜物町十八 龜田藥局
京橋區八官町八 野田藥局
神田淡路町二の四 森田藥局
芝田町四の一二 加藤藥局
芝愛宕下町一ノ二 岩本支店
赤坂田町四の一 竹内藥局
同青山北町五 西井藥局
本所吉岡町廿五 小島藥局
四ッ谷大傳馬町二 永野藥局
高松市片原町 新明藥局
堺市大寺南門東入 一色藥局
京都市上京區寺町通り石藥師角 知藥局
京都市下京區五條通り富小路行當り 安江洋反物店
大阪市平野町二 丹平商會
丸龜市本町 櫻井藥局
名古屋京町三丁目 飯田藤七
同 同 荒川長太郎
同 鐵砲町三丁目 谷田藥局
神戸元町一丁目 西村關吏局
廣島市橋本町 萬代藥堂
神奈川青木七軒町 水崎藥店
仙臺市新傳馬町 櫻井藥局
岡山市橋本町 加藤藥店
弘前市下土手町角 菊地藥店
大津市菱屋町 磯崎藥局

●●大取次附近ノ各藥店ニアリ●●

女(るの二)

女(るの四)

（女るの五）

看護婦生徒

三十名

試驗の上採用す來三月十五日迄に出願すべし（年齢十七年以上廿五年未滿）規則書望の向は郵劵貳錢送付あれ試驗は三月廿二日より開始す

●在學中の費用は貸費なり

東京市芝區愛宕町二丁目

東京慈惠會醫院

●婦人科
●小兒科

專門

午前宅診　午後往診

▲入院を許す▼

東京市麴町區飯田町四丁目九番地

女醫　**鷲山彌生**

電話番町七八四番乙

生徒募集

一裁縫科
一造花科
一刺繡科

各科トモ
本科（普通二年・高等一年）
專科一年半
速成半年
高等專科一年
研究科一年

●寄宿舍の設けあり校長監督の責に任す（舍費一ヶ月七圓）

●評議員、本多庸一、松島剛、三輪田眞佐子、廣田文則

（規則書郵劵二錢）

東京市赤阪區裏町三ノ二三

私立 **赤阪女藝學校**

女（ろの六）

生徒募集

一募集の學年　第三學年以下各級
一願書差出期　三月三十一日限り
規則入用の方は郵券二錢を添へて申込まるべし
東京市小石川區表町八十八
私立 淑德高等女學校
私立 淑德家政女學校

第一學年に八十名、第二第三、第四學年に若干名入學を許す
私立 立教高等女學校　京橋區明石町
四月より專攻科を置く（英語國語敎育等）五ヶ年高等女學校卒業程度

●生徒募集（本科技藝科）

東京市神田橋際
神田共立女學校

◎入學願書は三月卅一日までに差出さるべし

●第十五回 女生徒募集

第一部は師範學校及高等女學校敎員の養成第二部は小學校敎員の養成を目的とし修業年限は各一ヶ年とす
第一部に入學し得る者は女子師範學校及高等女學校卒業生並に尋常小學校本科准敎員以上の免許狀を有する者
第二部に入學し得る者は小學校卒業の者
◎規則書入用の向は郵券二錢封入申込まるべし
東京市下谷區谷中三崎町三十九番地
私立 東京女子體操音樂學校

●音樂生徒募集

（規則入用の向はハガキにて申込むべし）
來四月新學期開始に付左の各科に入學を許可す
●普通科五十名、本科三十名、唱歌ピアノ、オルガン、ヴァイオリン、箏曲各專修科若干名
●學科目（倫理、唱歌、ピアノ、オルガン、ヴァイオリン、箏曲、樂理、和聲學、敎授法、國語、英語）
●講師（山田源一郎、楠美恩三郎、文學士 小林愛雄、宇田四郎、松井壯吉、本居長世、鹽濱ちか子、阪本その子、氣駕良次、其他數名）
東京市神田區錦町三丁目十一番地
私立 女子音樂學校
學校長 山田源一郎

女（ゐの七）


改良醤油
お臺所の改良
を念とせらるゝ奥樣
方は皆日本醤油
の愛用者なり
市内及び全國各酒醤
油店にて販賣致居候
日本醤油醸造
株式會社
東京深川
小名木川通
マツニホン
ウメニホン
フジニホン
ヒシニホン

女(るの八)

双方に類似の點を擧げむか、第一、私立なる事。第二、中等教育程度なる事。第三、彼は佛語を授くるを以て名あり。此は英語に秀づるを以て鳴れる事。第四外國人教師比較的多き事。第五、ハイカラにして秀麗の學生多き事。第六、どちらも金がかゝる事。第七、出身者に外交官や軍人關係多き事など。

以上だけ並べれば充分であらう。何は兎もあれ風變りな學校だ、評判に入るに先ち、その沿革を略述せねばなるまい。

本校について先づ云ふべきは、女子教育奬勵會で設立明治十九年の秋、當時の伯爵伊藤博文氏、大いに感ずる處あつて、首唱せしに初る。



趣旨は『人生は男女の結合よりなれるものなれば、女子とても教育の必要あり。然かせねば所謂「つり合はぬが不縁の基」となつて仕舞ふなり。此故に本會は女子教育振興を奬勵せむ』とあつて、第一着手として本校を設けたのだ。目的は『日本の貴婦人に、歐米諸國の貴夫人と同等なる佳良の教育及家事の訓練を受けしむるにあり』矣。

御規則は頗る立派に出來たれど、實行するとなつて

入用なのは金だ。梅が枝の手洗鉢、叩いてお金が出たのは淨瑠璃文句だけで、明治の今日は、終日大地を打つても鐚一文も出はせぬ。そこで、檄を八方の有志家へ飛ばして、供資證票と云ふものを發行し、十萬圓を募集する事となつた。證票の一口は二百五十圓。是を所有せる者は會員の資格があるので、自家の親族知己の子弟を本校へ、普通一般の子女に先だち、無試驗入學をせしむる權利を有するのである。何さま世間は廣し。金の不要な仁人も少なからぬと見え——一ッには妙齡の處女の學校と聞いては、肌のぬぎ甲斐があるので、富の程度の高からざりし當時でさへ、申込の集る事、今の私立大學の奉加帳を持ちあるくより有効で卽ち、所要の金額に達した——と外目に見えたが矢ッ張ウッ!! さていよ／＼金を出す段となると、卑怯にも背を見せて逃げる先生多く、案外の不作……爲めに最初は大校舍を建築し理想の寄宿もこしらへて、など考へてたのは空中の幻影と消えて、やつとの思ひで、赤坂見附内に、宮内省附屬の、舊雲州屋敷を借りて開校した。時に二十一年九月。

△外國の大學然たる校舍▽

廿三年三月に到り、舊校舍は返納し、現在の校舍を東京帝室博物館より借用に及んだのである。場所は麹町虎の門内。御料局との相住ひ。電話は新橋の三千六百三十六番。サム／＼と讀めば記憶しよいとの話なれど、何だかイヂけた氣味なきにあらじ。名にしあふ霞が關に近き事とて、御近所には名ある建物が多い。東西古今の名著大作の集れるは日比谷の圖書館。銅臭とやら怪しき氣の天を衝いて昇るは議會と覺ゆ。小春日にも長刀をとすくつて、喧嘩の仕度に餘念なき海軍省、更に近くば、露國大使館や、先日燒けた伊太利大使館なんど、いづれもコワイらしい鬼あざみの中に、咲きほゝゑむ一輪の菫すみれにも喩へつべき學校なり學習院女子部を除かば、市内に本校々舍と肩を比ぶるものなしと云ふ程迄に宏壯堅牢な校舍で、どこやらが外國の、何やらカレッヂに似てると半可通の申した位。

こんな學校の教員にしてくれるなら無給でもよい！とは、さる師範生が、電車で校門を過ぎがてに吐いた本音であつた。

△内容の一斑▽

本校は科を別つて普通科(五年)高等科(二年)とする入學期はともに四月で、前者は年齢十二年以上にして高等小學二年を卒へたるものに限り、普通科卒業者と規定してある。束脩が三圓、月謝三圓(高等科は三圓半)樂器を使用する者は別に一ヶ月一圓、寄宿に入る者は、舍費一圓、食費八圓を納めねばならぬ。

また成程女學校らしい！と思はれる生徒心得は、

一、常に言語動作を愼しみ、苟しくも女德を傷ふが如きことあるべからず。
一、生徒互に相親しみ、誹謗競爭の念を懷くべからず。
一、服飾は質素を旨とし、外觀の美を競ひ、浮華に流る可からず。

などの數項である。

學課は、普通女學校と大差ないが、英語だけは前記の樣に洋人を傭へるが故に、比較的進歩してゐる。時間も他では一週二時間位なのを、こゝでは六七時間もやる。參考のため、教科書目を掲ぐれば、

◎一年級二年級(テント、ス、ファースト、イングリシュ、ブック)
◎三年級(ロイアル、プリンス、リーダー、卷一)
◎四年級(同、卷二)
◎五年級(或組は、フエーマース、ストリース。或組は、ポピュラーフエーリー、テールス)
(而して四年以上には文法、會話あり)
◎高等科は小說を使用せり。クリスマス、キャロルの折もあるし、ラムの沙翁物語の折もある。今の一年はリッ、ル、ウヰーメンと云ふのをやつてゐるさうだ。

體操はスヰーデン式。隨意科には普通科は四年から茶(久しく廢れてる)挿花(遠州流は教師の死去のため池の坊に併せられたり)オルガン、ピアノの四つだ。

秋の入日の力なく、煉瓦の校舍に照る夕まぐれ、人の氣絶えし長廊下に、西の國人の油繪にある樣な彩雲を眺めつゝ、風がもてくるピアノの遠音を聽くのは、心ゆくばかり趣きの深いものである。

△辨當包の小なるを誇る▽

一週の平均授業時間數はまづ三十時間である。敎場へは課業の時の外は入れず、各級に一つづゝある扣所に、包み、辨當などを置く事にし、午になれば食堂に早變りをするやうになつてゐる。生徒の風俗は噂さの如くハイカラなのだ。尤も同校敎員は、服裝は普通の女學校と違ひはないが、たゞ、家庭がよいから、扮裝を飾る術に巧みなるため、同一材料を用ゐても、遙かに見ばえがするのです。それに氣品高く生れついてますから、錦上花を添へるといつた風に光彩を生ずるのです！などゝ辯明してる。成程夫れもあるだらうが、何にしても他より華美なるは爭はれぬ事實らしい。

よい着物をキルから、從つて上品ぶる。見えん坊になる。蔭では燒芋を横かぢりにしてゐても（まさか！）人前は美しい顏をして御座る。即ち日々の辨當包みも小さいのを誇りあひ、早めしを藝と心得、三分一は割愛して、座を立つと云ふ風で、如何に云つて聞かせても改めぬ。致し方なく、嚴命して、晝食のベルが鳴つてより二十分間は、食卓を離れてならないと定めた。何にしても普通の女學校には見られぬ珍令ちやテ●

多くの中には餡パンを五錢づゝ三河屋から取りよせて、代用さしてるもあるさうなが、卒業してお嫁入りしても、餡パンが止められず、餡パン奥さまと異名を取つた人もある。

先日、國民子は、「學習院と本校との勢力の衝突點」とも云ふべき、赤坂見附邊で、屢ゝかの女學部の生徒との間に一流の鞘あて（潮風生申す。寧ろ、廂がみの突き合せ！呵々）があるは振つてる。

「チョイト學習院よ。威張つてゐるわねエ」

と此調子だ云々と報じたが、此事、眞に然らんには上品ぶるより來るのである。『王侯將相何ぞ種あらんや』とは事かはれど、矢張學習院何者？と云ふ考へが潜んでるからなのは云ふ迄もない。

と云ふのも、カイナデの女學校と違つて、家庭の撰擇、頗る嚴重で、役者、藝者、待合、料理屋などの兒女は決して入れぬ内規も存する位なのだ。

近頃は銀座、京橋を中心とせる、豪商大家の娘たち

が多くなつたが、以前は顯官の娘も澤山であつた。かの山本權兵衛氏が海軍大臣たりし頃に、その二令孃は出仕の父上と黑塗馬車に同乘して、砥の如き大道を輕塵を揚げながら走らせて來たのは、今なほ同窓生の記憶に殘れる處である。

今でも午前八時半頃か、午後三時頃、このあたりを漫步して見られよ、金紋つきの手車を飛ばすハイカラ孃樣數あるを知るであらう。



△實權を握れる西田幹事▽

本校々長（即ち館長）は土方伯であるが、勿論名ばかりで姿は年に二三回より見せぬ。實權は幹事の西田敬止氏の掌中に握られてある。氏は福岡の縣人。

同地の師範學校を出で、進んで帝國大學の古典研究所に學を修めた、その後二その學校に敎鞭を執つたが本校興るに及び、幹事とな

り、勸獎、その度にかなひ今では元勳として重用され、同校の一隅に居住をかまへ大和撫子を培ふに努めてる、一見すれば、禪坊主の樣に瓢逸の趣のある人だ。これでなくば女學校は治まるまい。益軒崇拜家で博文館から益軒樂觀、益軒十訓などを著はしてゐる。夫人初瀨子(四十一歳)との間に二男五女あり。男は元亨利貞をつけるつもりなりとて元太郎亨次郎など命じた。まだ二人は困らぬが、女は夫人にちなみ、大和名所を取り、龍田子、廣瀨子、岩瀨子、菜摘子、御年子とつけた處、もう種ぎれになりさうだから、今度モシ女が生れたら、河内名所へでも侵略せねば收りがつかぬと笑つてゐた。多くの教育家は、所謂紺屋の白袴、醫者の不養生で、他人頭上の塵は見えても、自家の眼に梁あるを知らず。美事の親馬鹿ちやんりんとなつて、不肖の子を出すがつねの樣になつてるが、氏の家庭は和氣靄然、春風つねに吹きめぐつて凩の風、戸外に荒れ狂ふ夜も、さゞめきの聲は華やかな瓦斯の光りと共に戸外に洩れてゐる。

氏は修身の先生である。初年級の程は左程でもないが、三四年乃至五年級になると、此の倫理談が、實に有難く聞きなされるさうだ。いづれ本誌にも高說を掲げる約束もしておいたが、要するに滔々たる先生の千編——イヤ萬編一律のお談義は事ちがひ、實に切實に人生に觸れたる教訓談なのである。先日は田中宮内大臣の結婚問題につき新婚の不心得なるを一々指摘して說明し、卿等は決してかゝる不所存あるべからず—と勵聲して語り、はては聽く者が新婦其人であるかの如く叱りつけられたので、氏の眼を正視する者がない位であつたとやら。(氏はかゝる話をした覺なし、人違ひならむとは云つてゐられたが……)まことに、漢文の大枝美福氏とならんで、男教師の二幅對と仰がれる貫目は充分ある。

△美人の先生引張凧となる▽

齒に衣を着せずして、直言すれば、本校の教員諸君は概して學習院やお茶の水よりは劣つてゐる。否劣つ

ては居るまいが、名前は聞えた方とは云へぬ。されど　子女史も亦同じ學校、挿花の沼野俊子女史はフェリスに學んだ人。理科體操の田澤みな子女史は體操學校の豪の者、國語習字の國分みさ子女史は、落合直文氏の門弟で、檢定試驗に第一に及第した、後に落合氏の媒介で、詩人國分青崖氏に嫁いだのであるがなか〱いゝのやり手であるさうな。同じく國語を敎へてある平川かね子女史は小學

皆な主義あり主張ある良師たるは確かだ。

　地理歴史の池田いわ子女史と數學理科の玉野幸子女史及び、國語習字の藤崎つね子女史とは東京女子高等師範學校出の才媛である、繪畫の原國子女史は瀧和亭氏の息女の由、裁縫編物の西村はや子女史は共立女子職業學校出身で、唱歌オルガンの松村たま　校の　生から鍛へ上げた。禮法の有住つね子女史、こ



れは世にも聞えた人だ。割烹の赤堀道子女史は赤堀峯翁氏の孫女で、初代赤堀峯吉氏のお娘也。裁縫の辻順子女史は職業學校の卒業、英語の雄山百合子女史は、三十六年本校專攻部を出で、更に津田氏の英學塾に學んだとやら、同じ英語の近藤花子女史は大阪の某黌出身だ。

以上の外に、三人の英語教師あり、ミス、ヒユースは英國大學出身で、肩書つきの女學士、その昔は「角帽」と「寛袍」に身を固め、金ブチの書物を提げて、來往した時代もあるのだ、ミス、スクワイアはお阿母さんが本校教師（噂によればお父さんは、加奈太でキャプテンを勤めてたが、恐ろしい飲んだくれで、アルコール中毒の爲め命を縮め、若き妻と、幼な子を泣かした人なさうな）であつた處より、姉さんと共に、本校生徒となり、虎の門に人となつたのである。母死して姉其職を繼ぎ、姉嫁して、今度は女史その後を襲ふたのだ。三代の肝腦を注いで（と云へば頗る大袈裟だが）育英に從事する効やまた大なりと謂つべしだ。

ミス、ホールも本校出身だ。毎朝、何式か知らねど、輕快な自轉車に、小さからぬ尻を載せて、疾風の如くに飛ばせてくる。アングロ、サクソンの女性の活潑さ加減を代表した人である。

なほ少し前までファロットと呼ぶ教師がゐた。ロイド氏の娘で、夫れは〳〵眼もさめる樣な美人であつたさうな。ブロンドの髮、碧りなす眼ざし、南歐風の美人型で、アスチーの繪にありさうな人――。

處が奇怪にも女生徒が騷ぎ出した。まだ年歯もゆかぬくせに。現在の先生を引つぱり凧にして寵を專らにせんと犇めく。中でも少しお俠な生徒はファロット女史の住宅の門前を、用もないのに二度三度も通つて、あの水色のカーテン懸けた窓を押し開いて、美しきお顏出よかし。夫れが叶はねば、セメテお聲だけでも聞きたやと、狂熱のありだけを盡したのぢや。顛末西田幹事の耳に入り、女が女に騷ぐとは何事ぢや。こゝないゝうつけ者めと、徹底に叱られて、一同恐れ入つたとは、趣味ふかき物語りでないか。

△眼がさめる様な運動場▽

「ジャン〲ジャン」と表門に近き入口の櫻樹のあたり釣されたる古風のベルが鳴りわたる。鳴らす使丁は無心に、あらぬ方を向いて綱を引くのだが、餘韻は爛熳たる花間に消え込むなどは、神經質の人が嬉しがる處なるべし。

「ガタン、ゴトンー、」と各教室のドアが開く。マガレット、ひさしがみ、新いてふ、ちごわなんどが、薄ぐらい廊下に溢れ出る。



そして、靴音かろく、われを先にと運動場へと驅け出す。思ひ切つた幅廣のリボンが風にゆらぐ、紅き、水色、ひわ色、薄紫、オレンジ、ピンク、オリーブ、と一々書き立てた日には、潮風生の禿筆は棒の樣になつて仕舞ひませう。邪魔だから、五彩の色紙を春風に放てるが如しとでも申さうか。小さい生徒は、敏活、脱兎の如く、ジャンプロープ。フートボール、クロッケー、ホッケー、ローンテニスと、どこかの献立表にありさうな遊戯に、紅い頰を倘ほ染めて、遊ぶのである。やがて復たベルが鳴る。

「あゝ、私、疲れて仕舞つたワ」

などゝ、婆さまの樣に腰をたゝきながら敎室さして語りゆく、ヽヽヽヽヒヨウキンな小娘もなきにあらず。世の憂を知らず、惱みを知らず、順は小羊の如く、性は鳩の如く、敏は兎の如きかれら生徒は、人生の花　期に立てるものである。と、女學校を參觀すると、一人女の子が欲しくなるワイ。某蠻カラ三十男すら告白した――イヤ參觀で思ひ出した面白い事がある――

△音樂教室の嫁撰み▽

女學校とし云へば、どこでも大抵、メッタな人は參觀謝絶を原則とす。無理もない、さうでなければ、狼連が眼を光らして群がり來つて、小羊を狙つて困るからだ。シカシ、本校の樣に嚴重なのはまづ少ない。如何に申入れても「生徒が耻かみますから」とか「少くとも三十以上の有妻の方でなけりや」とか物言ひつけて、十中八九はボイヽヽ歸されて仕舞ふ――。

さりながら現代は、ソコにソコがある二重底流行の世だもの。正道には鐵條網が結んであつても、重寶な間道づたひの搦手には、守るべき兵もない。況んや時あつて內應者？さへあるに於てをや。

間道とは何。內應者とは何。曰く、奬勵會員に依る事を云ふ。曰く、敎師に知るべを求めて入り込むを云ふ。

奬勵會員は本校に對し無限の特權があるのだから、此の高壓力を利用して、坂下しに攻めれば、さしもの西田幹事も文句はない譯である。又た幸ひにして敎師の誰かに知るべがあればたのんで見たまへ『よござんすよ』と二ッ返事で相談一決すること受合であろ。

こゝに於てか新らしく娶らんとする、壯年兩三輩出かけてゆく事となる。潮風生の知人は唱歌の敎室で十二分に參觀したと云つてゐた。

唱歌の敎室は光線が充分で、見合ーには持つてこいださうな。其ときは一二の眼あてがあつて行つたのだが、序に皆な御覽になつては？と先生が勸誘したから、夫れはなは結構と答へたさうな。スルト、

何子さん來てお彈きなさい！と片つ端から呼び出して、ピアノの前へ坐らす。生徒は每度で慣れてるから、イヤに澄して彈く者もある。又、眞赤になつて、「一」が「四」と間違つたり「七」が「三」になつたりする初心もある。ひどい奴もあればあるもの。此男は二時間の參觀に、充分に眼と耳の正月をして、凱歌を揚げながら、歸つて來をつた。結局、白羽の征矢は、どのピアニストに立つた事やら、夫んな事は本題以外だが、マアこんな事もあるのだ。

尤も此事、濫行されぬ限りは生徒の父兄も喜ぶので、



己が子女を昇校さすは、要するによいお嫁の口にありつかせたいため、一資格を得ておかんと云てるのだもの、中途で三國一の聟樣があれば、厭つたり、かなつたり、大いに有難たかりける次第なりなのだ。宜なる哉、嫁の世話をして呉れる女學校には、海老茶の寄する事、潮の滿つるが如く、よい職を周旋して呉れる專門學校には中學卒業生の押しかくる事、蟻の甘きにつくにも似たり。かくて、キングスレーの所謂「男は働き、女は泣く」の序幕に迫りつゝあるのだ！

△會合のいろ／＼▽

本校生に英語會なるものがある。每火曜日集つて、唐人の寢言を話しあふを目的とす。月に一回小會があり、春秋二季には大會がある。大會には假裝して、詩をレシテートするやら、名作を演ずるやら、旺んなものである。

出身者には同級會（三十四五年以降のもの多し）同窓會の二つあり。前者は在京の同級生が相集つて小會を開くので、琴が響く、ピアノを鳴らす。下手な謡も初まると云ふ風に、各自の藝を持ちよつて、お茶菓子を戴きつゝ、たのしき一日を送る仕組、後者は春秋二季に大會を開き、出身者は大擧して出かけ、一別以來の挨拶や、嫁入當時の所感や何かを、辭令の妙を得たる、遊ばせ言葉で語りあふのだ。活人畵もやれば、音樂もやる。特に昨秋は開校二十週年の事とて、一しほ盛大であつた由。云ふ迄もなく、時めき給ふレデー連の會合なれば、ダイヤモンドの光に眼を射られ、ローズの香に薫殺されたりするは當り前の事、平和な内にも物騒な會であります。

△女性らしき女性が理想▽

本校が第一回卒業生を出したのは、去る二十四年の四月で、姓名左の如し

●篠原かつ子（今は高商の英語教授小谷野氏に嫁してゐる。一寸した風聞を耳にした事もあつたが、無論根もないウソで御座らう）

●富田しゆん子（今は英語の先生）

●津輕りき子（津輕夫人で澄ましてる）

●福住いそ子（箱根の大温泉宿、福住樓の娘。虎の門出身者の新婚旅行は、同樓へ向つて試むるもの多しときく）

●淺野まつ子（法學博士、穗積八束氏夫人）

●瀨川しげ子（舊姓は市原となん申侍る）

●大倉とき子（大倉喜八郎家の誰かのお嫁だ。知りたければ、婦人名鑑でも見ればスグわかる）

●メリースチーブンス（今はモウ立派なお阿母さんになつてゐる。十年後には姑になるだらう。人間一生過ぐる事電光の如し）

●丸茂こと子（消息不明）

翌二十五年には、舊岩倉侯の令孃今の東伏見宮妃殿

下を始め奉り、今の松波法學博士夫人なんかも出た。古い早稲田出身で、シャムの京城バンコックに同國法律顧問たる法學博士政尾藤吉氏夫人も此年位に出たと記憶してゐる。

ズット最初に云つた通り、本校出身者は決して跳つかへりのお轉婆を輩出さゝぬが目的であるから、學者たるには適せぬが、大家の奥様たるには持つてこいである。かの浪さん事、大山信子は中途で退學したのであつたが、在學中は、メッタに口もきかず、笑顔も見せず、ともすれば、物哀れに櫻ちる逝く春の庭にでも夢見顔に佇んでゐたさうだ。消息に通ずる人の談によれば、恐らくは此時分から肺病だつたのだらうと云ふ事である。いくら内氣でおとなしでも、肺病では閉口だが、理想の虎の門氣質を四角ばつて表はせば、

浪さんの内氣＋現代お轉婆式 / 2 ＝虎の門氣質

ナ、奇妙なる數學式？が立つだらうと思ふ。その見本として、大岡育造氏の息女をあげたい。同息女は、本校出身で、才貌ともに秀でたる令孃であつたが、不幸世を早うして、玉と砕けた才媛也。行いて見給へ、氏の居間には故人の花のおもかげかたみの油繪の額と殘つて、明眸つねに、父君の顔を見まもつてゐる！さしも議場の雄と自他ともに許す氏も、仰いでその影を視る毎に、くろ金の胸もせまりて、新たなる熱涙、双眼に湧くを禁じ得ぬといふ。

あゝこれ何故であらう？云ふ迄もなく、滔々たる當世式部と撰を異にしたる、つゝましき令孃であつたからである、つゝましき令孃は、再轉してつゝましき奥樣となり、三轉して、つゝましき姑となるであらう、要するに女らしい女なのだ。

男の樣な女、女の樣な男、これ不自然である。變性である。不具である。何人にも愛せられざる第三種の動物である。佛も濟度に手古ずり給ふべく、孔子も「朽木」と斥け給はんは必定なり。願くば、虎の門より出づる才媛は、いつの末までも「女らしき健全なる女」であつて欲しい！至囑々々。

BOILED BEETS.

Wash, and cook whole in boiling water until soft; time required being from one to four hours. Old beets will never be tender, no matter how long they may be cooked. Drain, and put in cold water that skins may be easily removed. Serve cut in quarters or slices.

湯煮菾子(ボイルド.ビーツ)

赤菾子を洗ひ、丸のまゝ柔かになるまで一時間乃至四時間湯煮で、(古き赤菾子は如何程長く湯煮ても柔くなりません)、柔くなりたる後ち湯を絞りて(冷水に入れゝば皮がよく剝げます)皮を剝ぎ、縦四ツ切にするか或は薄く切りて出す。

(注意)

三味酢をかけて出しても、又酢と砂糖少し入れて煮て用ゐてもよろし。之れは肉に添へて出します。

HARVARD BEETS.

Wash twelve small beets, cook in boiling water until soft, remove skins, and cut beets in thin slices, small cubes, or fancy shapes, using French vegetable cutter. Mix one-half cup sugar and one-half table-spoon corn-starch. Add one-half cup vinegar and let boil five minutes. Pour over beets, and let stand on back of range one-half hour. Just before serving add two tablespoons butter.

赤菾子の餡掛(ハーワードビーツ)

十二個の小さき赤菾を洗ひ、柔かになるまで湯煮で、皮を剝き、之を或は薄く、或は骰子(さいのめ)大に、或は其他適宜の形に切り、別に茶碗(一合入)半杯の砂糖と大匙半匙のコンスターチを混ぜ、酢半杯を加へ、五分間煮て、之を右の赤菾子の上にかけて半時間分火にのせ、食す時にバタ大匙二杯を入れます。但しバタは好みによつては用ゐぬともよし。

(注意)

上等の人参を極く柔かに湯煮で、赤菾子の代りに用ゐても、よいものです。

STEWED POTATOES FOR BREAKFAST.

Pare, quarter and soak in cold water half an hour. Stew in enough cold salted water to cover them. Before taking up, and when they are breaking to pieces, drain off half the water, and pour in a cupful of milk. Boil three minutes, stirring well; put in a lump of butter the size of an egg, a little salt and a pinch of pepper; thicken slightly with flour, boild up well and turn into a covered dish.

馬鈴薯の煮込(朝飯用)

馬鈴薯を四つに切り、三十分間水に浸し置き、後ち其れを被ふ程の水を注ぎ、鹽少しを入れてよく煮て、いもが潰れる様になりたる頃其水を半分こぼして牛乳一合を注ぎ込み、よく攪き廻しながら又三分間煮立てゝ、それへ玉子位のバタの塊と鹽少しと胡椒一つまみを入れ、後ち尚ほ粉少しを加へて濃くなし、其の煮立たる後蓋附の皿に取るのです。

簡易家政術

櫻井ちか子

野菜料理六種

BOILED CABBAGE.

Take off outside leaves, cut in quarters, and remove tough stalk. Soak in cold water and cook in an uncovered vessel in boiling salted water, to which is added onefourth teaspoon soda; this prevents disagreeable odor during cooking.

Cook from thirty minutes to one hour, drain, and serve; or chop, and season with butter, salt, and pepper.

湯煮玉菜(ボイルド.キャベジ)

玉菜の外部の葉を取り、四ツに切り、心を取り去り、其れを冷水に浸けて置き、別に鍋に水を入れ、其の中へ曹達茶匙に四分の一と鹽少量を加へて火に掛け、其の沸騰したる時前の玉菜を入れて蓋をせずに煮る。曹達を入れる理由は湯煮る間に不快な香のせぬ爲です。さて半時間乃至一時間の間之を湯煮て後ち水を絞り、適宜に切りて、バタ、鹽、胡椒を以て味を付けて出す。

BAKED CABBAGE.

Cut one-half boiled cabbage in pieces; put in buttered baking-dish, psrinkle with salt and pepper, and add one cup. White Sanse. Lift cabbage with fork, that it may be well mixed with sance, cover with buttered crumbs, and bake until crumbs are brown,

焼玉菜(ベークドキャベジ)

湯煮たる玉菜を細かに刻み、バタを引きたる焼鍋に入れ、鹽、胡椒をふりかけ、白ソース(ホワイトソース)一合を加へ、ソースが全體に混じつたら肉叉を以て玉菜を引き上げ、バタを混ぜたるパン粉を全面にふりかけ、更に其パン粉が藁色になるまで焼く。

GERMAN CABBAGE.

Slice one small cabbage and soak in cold water. Put it with water in stewpan, add two table spoons butter, one-half teaspoon salt one tablespoon finely chopped onion, cover, and cook until cabbage is tender. Add two tablespoons vinegar and one-half tablespoon sugar and cook five minutes.

玉菜の酢煮(ゼルマンキャベージ)

小玉菜一ツを細く切り、水に浸し、後ちシチウ鍋に入れ、其中にバタ大匙二杯、鹽茶匙半杯と極く細かにきざみたる玉葱大匙一杯を加へ、其菜が柔になる迄煮たる後に、酢大匙二杯と砂糖半杯を加へ、更に五分間程煮る。



二十年ふたむかし 同窓の面影

宮澤すみ子

上なる男の子は、明けて十三の春を迎へぬ、嗚呼この十三歳！よろづに思ひ出多き齡にもあるかな、數うれば、既に遠き昔の如く、朦朧として、霧深き野路ゆく、旅客がゆくてにも似て、今時の姫御前がきゝ給はゞ、二十年餘り前の我等が女學校時代の、何のつやもなく、さながら牢屋の如くにてありしをおどろき給ふらむ、十年を一昔ときくからに、これはふたむかしの、題字ふさはしけれど、餘りにふけゆく身のはづかしく、かく名づけたるを、人々僞とのゝしり給ふべくや。

さても我十三の秋なりけり、父なる人はとほき國へ轉任し給ふて、一家かなたへ移れるを、京は今出川のさる學校に通學の身なりけるを、其儘寄宿さすべく恩愛の袖を絶ちて、行末よかれとひとりのこされしが、朝夕の心細さ、大比叡おろしに夢も結びかね、相國寺の竹むらに、烏の鳴く音もの悲しく、暫が程は寂しき寄宿生活を辛しとこそ佗びたれ、其中に皆々優しき友の情にほだされて、ひとへに學びの道をいそしみぬ、其折よお部屋の長なりしは今の原六郎氏の夫人とみ子にて、わけても我を愛くしみ給ひ、毎朝ねば〳〵といふ油に似たるものつけて、美くしく三つ組に結はれたり、今時の價高き香水、又は洗粉などは夢にも知らずして、時の京都府知事君の令孃しづ子なども寄宿にはいり居られしが、極めて質素にて、絹布など用ゐ給はず、唐ちりめんの丸帶、可愛らしうお太鼓に結び居られしが今も眼に見ゆるやうなり、この君、今は田邊博

士の夫人にてお子達數々おはしますらん。頃は西洋の文明盛に稱へらるゝ折とて、我等が學校はもと米國特志家の建てしもの故、一も西洋二にも外國ともてはやさるゝ時代に遭遇し、明くる年の夏休みはてし時は、新入學生二百名餘もありて、實に盛大を極めたり。たしか其年の春の頃、時の總理大臣伊藤伯爵、幷に夫人梅子の方、其外貴顯數多おはしまして、授業のさまなど見給ひ、又一堂



に集りて、オルガンに合はせ唱歌うたひし事をおもひおこしぬ、其頃は他の女學校にては、完全なるオルガンなく、唯我校のみとほこりしが、西洋人の主幹のものなるが故さもありぬべし。梅子夫人は洋裝にて、たけ稍ひくき方、これはと物靜かに立ち並びおはしゝが伯は唱歌のふしを興あるものと思し召しけむ、指にてテーブル輕くうち給ひたり、其折の伯は今や位人臣を極め、公爵授かり給ひて、世に重き〳〵人となり、韓

國の政をも補佐し給ふ、げに不世出の偉人と、猶百代の齢をいのり參らするなり。

我が入學の少し前に、レビット夫人といふが京都にて禁酒の大演說をなしたりしときゝしが、我十六の頃なりけむ、若き英國婦人の來りて、同じく禁酒の演說そこゝにありて、其婦人の辯舌は、いとも爽やかにして、テンペレンスソサイチーと度々いひしぞ、今も耳に殘れる如し。通辯は學校の教員青木氏といへるがなしたり、凡て英國婦人は、學識高く、意志堅固にして、而かも優しきところあり、さすがに古き國柄とおもひぬ、常に見し、米國女教師達とはいたく異れりと思ひたり、まことや、かの女史は、米國婦人を評してゼーアルプルタスと、さるところにていひし由なり、米婦人のきゝしなら、いかに口惜しうおもひつらん、秘密は其まゝ秘密となりしぞ、天下泰平なりけるよ。この女史と前後して、米國知名の士は來校せられたり其時皆々公堂に集りて、大演說をきかんと數千の聽者上も下も立錐の地もなかりしが、後方にしつらへたる二階、さしも堅固なりしものも、つめきりたる人の重みに耐へずやありけん、めり〳〵と音して、なだれの如く人々墜ちぬ、あはやといふ間に、其下にこしかけ居られたる、金森通倫氏夫人、富永冬樹氏が令嬢、不幸にも上なる柱の爲、人事不省におちいりて、ながく病床に橫たはれしぞ、痛ましきかぎりなりけり。

而かもこの珍事に、演說中止するは不本意とて、屋外に出でゝ皆々きけり、滔々數萬言、堂々たる丈夫の胸よりいづる、言々皆金玉の如し、最後に女生徒に向ひて「婦人は國民の母なり」といはれしが、これは通辯をまたずして、よくわかり、嬉しとおもひぬ、この知名の士は、米國の陸軍卿なりしや否や、先きの禁酒をすゝめし女史が名と二つながら忘れたり。

而かも、いつ迄も〳〵忘るゝ事能はざるは、かの有名なる、亞細亞の光の著者、アーイド詩伯が來りし時の事共なり、たけ高き詩伯が傍に、通譯せられしは、浮田和民氏なり、氏は、たけ低きかた故、形に於いていと不調和なりしが、其通譯は實に遺憾なきものにし

て、一言一句をもおろそかにせず、其優美なる文章たる事を得ると上級生はさゝやきぬ。詩伯が指には黄金のリング二つはめられたり。

すべて、外國より來りし人々は、嵐山の景をいたく愛で、桂川に舟遊をするが例なりき、而かも誰ありて、歌の京、血の京、涙の京を說くものなく、西洋文物に心醉せし結果は、日本固有の歴史を度外視し身京にありながら、まことの京を知らざりしぞ無念なり、されば花の洛陽は、外國人をよろこばしめ、紅葉の洛外は、西洋人をおどろかしたりしが、それはあまりと淺かりき、淡かりき、詩仙アーイド氏、はたして、歴史の京に接せしや否や、これ、わが永久の疑問なり。

今時の女學生は星よ菫よのさゝやきをかしく、いとも自由に、いとも華やかに學ぶらん を物堅き宗教のもとなる我等は、實にピユーリタンの如き朝夕をおくりたり、もとより幼き身の、文學など



理想と現實

はかけても知らず、唯普通科に、漢文の素讀を知りしが關の山なれば、男女間の事など口に敢てなすものなく、戀などゝいふ大膽なる語は、すこしも、すこしもいはれずして、唯ラブを愛と解釋なしたるこそやさしけれ。

讀賣新聞に誰の作にや「みどり源氏」といへるが小說として掲載されしを我も人もよろこびて、其日々々をまちたり、時に獨逸の婦人にてマイヤ女史といへる新任女教師ありたり。小說！　小說！　日本の小說！。淸きものなるかと再三の問に、淸き由をこたふれば、こたびはまた其大略を話せよといふ、それはたゞ夢の如き少男少女の戀をゑがけるものにして、主人公は「みどり源氏」即ち、俗にいふ「あいの子」なり、女主人公は顯官の令孃、互におもふともなしに思ひ思はるゝ節なれ共現に答へなば、不德のとがめをも受けんと、つくりごとまうけて、其場をにごしたり、やがて半年ほどたちて、テニソンのエノクアーデン、其マイヤ女史よりならひ、二人の若者が、一人の乙女を愛する、即ち、ラブする段になりて、先きの「みどり源氏」をおもひおこし、此の如きは淸き作物なるやと、問へば、然り、實に淸き叙情詩なりと、答へられぬ。すべて我等が思想はしかく單純なるものなりしなり、この折よ、稍文學、愛と戀の別、淸いといふ意味など解するに到れり、今の女學生諸氏が大びらに、戀をふりまはし給ふと、大なる差ならずや、しかり、隔世のおもひあり、むべ、それはひとむかしの前の事、淡き〳〵夢路たどれるが如し、序ながらにいふ、あの筆づかひは、鏡花氏が作とおもへど、いかに、作者の名も忘れしが、其題のみぞ怪しう心に殘り居れり。

文學にておもひおこしゝが、初めて寄宿に入りし時隣の室に某名家の息女ありて、文章いと巧みに、英語の達者なる事、全校に類なく、この人髪はレデーヘイヤといへるにゆひて、まはりにリボンをかけて、横に結べるが、當時のハイカラとやいはん、他は皆根の低き束髪に、あみうちかけたるさへありて、今より思へば、色も艶もなかりしぞうたてかりける次第なり、か

の息女は、德富氏がゆかりの人なりしまゝ、其折、男校に學べる、健兒郎氏の話をよくきけり、後、名の天下にあまねきに及び、かの息女の事、聯想されつ、花の如き唇より、流暢なる英語、今も耳にのこれる如しこの人、既に永久のねむりにつきしが、病篤うして、天主教に入れりと、人づてにきゝぬ。「不如歸」の浪さ、んと性格は反對の賑やかなる、派手好きの婦人なりしが、若うして死せる、佳人薄命の理りは一つなり。

先きにいへる、獨逸婦人マイヤ女史は、思想高く、宗教心強く、かりそめの物語も皆心の奥より、ひゞき來れる如くして、かの米國女教師の、何となく上すべりするに對し、これを花にたとふれば、彼は松の如く氣高かりしなり、されば名望女史が一身に集まりて、さながら女神の如く尊はれたり、殊にセツキスピヤの作中の、女主人公達の性格を會得なして、いろ〳〵いひきかされしものゝ、愛と戀との差を漸く解するに到れる、淡き心に、何とて、深刻、悲痛、憂愁、はたまた愛の曲、戀の調のさとり得んや、而かも二十年はながし、皆々己のおもひで澤なれども、あまりにながながしきものとなれば、稿を改めて、筆とらん。日本に近松ありしを知り、紫女納言の作に接したるも、實にこの二年間にして、而かもこの折よ、全日本を通して、純日本文學の復活をきたし、各書肆の盛に、註譯やうのものを出版して、そこ、こゝ、ながき〳〵迷夢より醒めたるものゝ如く、文の林のそゞろに賑はしう、又一部の人々によりて、泰西名作の紹介さるゝなど、おもへばいと〳〵大なる背景の、いみじき畫師が筆になりしを見る心地せらるゝなり。

嗚呼、我等が西の京の、學生時代は、あまりに名強き宗教主義のもとに養はれしものから、日本固有の文學を捨てゝ、日本固有の藝術を顧みず、徒らに泰西皮相の學にふれ、徒らに神の御名を稱へたるよ、否好んで、自らそれにふれたるに非ずして、時代の罪なり、禍なる哉、我にいみじき天の網島あるを知らずして、エルテルが不遇に泣き、すれ果てぬるも、また已むなき乎。

十八歳にして、一まづ普通科終りぬれば、父母おはしましたる駿河の國へ赴きて、二年許り家事、縫針の途をたどりぬ、それよりこたびは東の京へと志して、麹町は某女學校の門をくゞりぬ、そは我が先輩諸姉、漸く、ミッションスクールの時代教育に、ふさはしからぬをさとりて、折しも名聲いと高かりし女子教育者某氏を理想の師と崇拜して、我も我もとそこへ赴きけるが多く、この君、たとへば宗教改革を叫びし、ルーテルにも似て、固執なる外國主義――宗教主義より、我等を最も自由なるかたに導きて、校名都門に高く、官立以外、たしかに旗色をひるがへしたるが、皆々渇仰の信念この師に、いよゝ深かりき。こゝにては我も廿歳の聲をきゝつる折とて、僅々二年間の修業は、先きの五年の長日月にもまして、いと／＼効果あるものありき。其間種々の記憶ありて、これは近き過去なれば、春の朝の霞よりも、稍あらはに、胸露のでぬ間の朝貌とうたひて、宇治の夕の戀人をたづぬる佳人があはれを、唯例の淸からぬものと獨斷して、イバンジユーリンが心情に泣きたる愚かさよ、それもまだよし、京にありて、まことの京を得知らず、紫野を屢々よぎりて、詩趣更らになく、桂川に棹して、何のおもふところなかりしぞうらみなる、されば、我が乙女の時代は寂しき冬枯の野にひとしく、何等の情熱、何等の希望もなければ、憂愁煩悶のおもひでもなし、さなりすべての情は堅き敎のこれを禁じ、すべての愛は、神に向ひてのねぎことなりき。

かくて、かくして、人の世と、あまりにへだゝりたる我等は、春風駘蕩の、溫き手にふれず、百花爛熳の園に胡蝶となりて、舞ひ遊ぶの期を失したり、自由なる今の世の乙女子達よ、御身等幸に、女子敎育過渡時代の愚をくりかへさずして、恣に學び、恣に思うを得、至幸といふべし、勵み給へよや。北信の山家にて、二十年の昔をくりかへしつ記す。

家庭のしつけ

女子が地方から出て參りますに何處の學校が宜しいでせうか、學校は遠方にも近處にも澤山ありますが偖て入れるとなりますと一長あれば一短あり、却々思ふやうに參りません。其して今日の女子教育が實際に合はないと申す事は今日初つた事でありません、最う十年前からの聲であります。學校の方は理想が高いやうですが、家庭の方は低いのですから如何すれば宜しいでせう乎、昨今は未だ未だ此間の調和が缺けて居ります。私共は只着實に進んで參りたいと思ふ丈けで御座いまして、總て子供には、應用の力を附ける事に專ら努めて居ります、私は之が家庭の義務と考へて居ります。先づ昔の人と今の人とを比べて御覧なさい、今の人は學校はあり、書物はあり、道具立が揃つて居りますから、昔の人よりも嶄然上手でなければなりません、所が却々然うでありませんのは之は實地を知らない故であると存じます。之を如何しますれば善いので御座いませう乎、私は子女に先づ針を運ぶ力を授けて行くやうに、仕度いと思ひます。之れは少しの經驗で出來ようと存じます。例へば小さい子女にでもお手玉や人形を縫はせるやうに致しますので御座います。料理も學校のは飯事で御座いまして其儘では家庭には適ひません、之も家庭で實地に稽古させますれば自と出來ますから、私は一週間に一度位は子女に爲せようと存じます。すれば彌ゝ本式の料理に取懸ります時其れが生きて參るかと存じます。

斯ういふ風に家庭から進んで學校の短所を補ふ事に致しますのが第一で、第二には勞働を厭はぬやうになる事、此二個の利益が御座います。どうも夫人方は兎角勞働をお嫌ひなさる、裁縫も何も斯も他人にお懸けになる、之ですと非常に不經濟で御座いますから吾家でも被服丈は一切外へ出しませんが、如上不經濟の遣方では强健な子女を養ふ事は出來まいと存じます。斯樣に遣りますれば子女が緻密にもなります。實行を重ねました上で江湖にお勸め申さうと想ひます。

又音樂でも左樣で御座います。西洋音樂には譜が御座いますが、日本には御座いません、私共も、幼少の時琴やなんぞを習ひましたが、今は譜も知らず忘却て居りますが、曲は忘れましても技は殘ります。之と同じで御座いまして、十歲前後に仕込ましたものは、年老つた後になると今度は何かの助長で出來ます。

私は又學校の方針は高きを望むので御座いまして、之れに連れて家庭を益ゝ十分に發達させ度い者と存じます。母親は見識でも學問でも、總も子女の役に立樣で無くては本當の敎育が出來ません、母親に此修養が必要で御座いますが、子女の爲めにも敎育の程度も出來る丈け高くし度いと存じます。左樣で無ければ、世の中の進歩に伴れて行く事が出來ず、婦人の方は何時も遲れて仕舞ひます。（海老名夫人談）

噂さに高きゴム輪の令孃

桃割式部

今日は從姉の須磨子と丸木に寫眞とりにゆく約束があるので大奮發で七時に起きた。髪は相も變らぬローマに束ねて此の間巴里の伯母樣から送つて下すつたオレンヂ色巾廣のリボン御化粧はいつもより念入りに、それでもおしろいは極く淡く眉だの生際だのを丁寧につくる。小間使の多榮に手傳はせて着替するうち母樣もいらしつていろ〳〵世話をやいて下さる。桔梗色勅題模樣のお振袖に孔雀の羽のぬひとりの丸帶をピタリとたて矢の字に結び眞珠つなぎの時計鎖を首から掛けて、ヘリオトロープの香水まで母樣が吹いて下すつたので改めて姿見の前に立つ。母樣が「此の下着の褪紅色はいかにも好いねえ、上着の色とよく調和つて」とおつしやると多榮までが「お孃樣は實際何でもよくお似合ひ遊ばしますこと……斯う細そりとスーッと遊ばした御方はお德でゐらつしやいますね」なんていふ。前髪ふくよかに一分のスキなく着こなした姿は我ながら美しいと思はれる位だからおだてられるとは知りつゝも滿更いやな氣もしないもの。須磨さんが誘ひに寄るまで暫く待つ、自烈たくなつたので電話で問合はさうとしたら、折よく玄關の敷石にわだちの音、まち兼て居た私は直に新しいゴム輪の腕車に乘つて出かける、幌を下してる時多榮が奥から大いそぎで緋房附の扇子を持つて來てくれた。丸木でも込合つて居るので三十分許り待たされる。須磨さんは御年始に着て被來たのとは又別の藤納戸紋羽二重に寫生の蝶の江戸褄模樣、帶は此の間のまゝの高浪織、品の好い丸まげの首を少しかしげて『百合さんあなたの帶はほんとに氣取つてるのね、さすが御見立上手の……』と云ひかけるので

『まあいやだわこんなものなんか……あなたこそまたお重ねができたのね、全く蝶がいまにも飛びさうよ、矢張り三越で？』『イーエ今度はためしに松屋にさしてみたのよ』といさゝかお得意らしい。そりやどうしても須磨さんの方が私よりいくら幸福か知れやしない、私なんぞは一々母様のお見立で自分は唯ホンの御相談にあづかる位なもの、須磨さんの方は姑も無ければ兄弟もなし次雄さん（須磨子の夫）さへうまく承知させれば、新しいのが何枚でもドシ〳〵殖える一方そして色でも柄でも自分の氣まゝに定められる、私みたいに『こちらになさいな』なんて母様に云はれる事も無いからと少し羨ましくなる。それもさうだが私だつて男の中の一人娘だといふので大抵のことは望み通り、絽縮緬の單羽織ばかりは母様が娘のうちから見苦しいつてどうしても許して下さらなかつたけれど……まづ私ぐらゐ秘藏にされて自由が叶へば決して不幸な方ではあるまいと思ひかへす、寫眞は兩人とも美しいクッションを置いた長椅



子にもたれて樂譜をひろげて居るところ、あとでめいめい扇子を持つてまじめに立姿を寫した。須磨さんは今日は本郷座に行くのでうちには寄つて居られないといふから途中でわかれてかへる。午後から母樣は高輪の南部（母樣の生家）へおでかけ、淋しくてたまらないから昨日吉岡から届いた「心の秘密」をよむ。夕方三越から半コートの仕立ができたとて持つて來た、此の前のお納戸色のがいやになつて新しくあつらへた品、藍がちの藤色紋織で地紋は麻の葉、褪紅色地繻子入羽二重に表地よりも更にあらい麻の葉を畫かした裏が此の上もなく粹氣に見える、一寸着て見てすぐ土藏の簞笥に納はせた、夜フレンチ少し復習ふ。（一月十六日）

朝早くまだ皆御飯前に學習院の寄宿寮から小兄樣の御歸宅すぐ私達と一緒にテーブルに向ふ。

兄樣いま頃お歸りになるのを見ると、まあ少しは寢坊もおなほり遊ばしたらしいことね、私ほんとに感心してしまひましてよあんまりお珍しいので……

「馬鹿にしてるナア憚りながら目白臺の健兒だせ、院長閤下のお仕込だもの今頃やつと起きたばかりのお姫樣とは比べものにならないよ」「お生憎樣ですけれど私だつて乃木院長のお仕付でございますわ」なんてまけずに、しやべつてると母樣が「まあ百合子、何ですねえ、兩人寄るとすぐそんな……早く御飯をおあがりなさい、芳麿さんもすんだら和服に替へてお休息なさいよ」とおつしやたので、ビックリして二人とも思ひだした樣にお箸をもつ、終ると兄樣は片寄せてある着物包とマントとを多榮に持たせてお居間に行つておしまひ遊ばす。

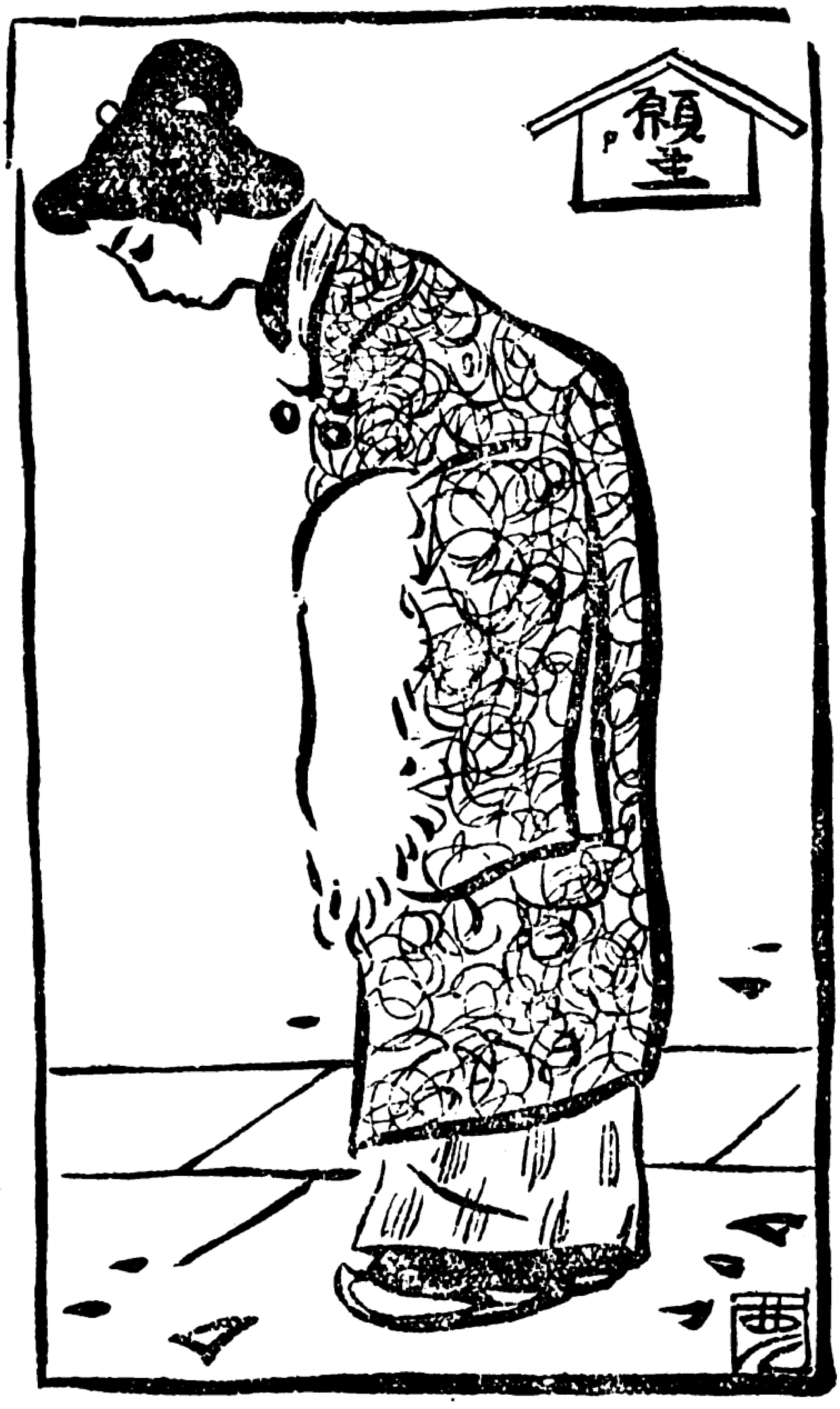
十時頃赤坂の五郎さんと美耶さん（從兄姉）とが伯母樣に連れられて遊びに來た、五郎さんはいつも私が電車の車掌の樣だとからかふ一高の制帽・美耶さんはヴヰクトリヤ御召の羽織いつもより一層美しくお化粧して居る樣だ、伯母樣は母樣と客間でお話なさるし五郎さんは兄樣が西洋室へ引張つていらしつたので美耶さんと私とは飛石づたひに離室にゆく。

昨日大原の從姉と丸木に行つたことだの婦人畫報に

澤口夫人が出てゐらしつたとか云ふ事から話に花が咲いて二人とも隔ての無い仲なのでお互にいろ〳〵なことを能くしやべつた。

「もうそろそろ南部のお祖父様だちの、金婚式が近よるわね華族會館でなさるのですつてね、その時のに何かお揃ひにねだりませうか」と美耶さんがいふ。

「あらほんとにね、でも私紋付は暮れにできた許りだから何ぼ何でも母様には云へやしないわ」「おや帶だけなら可いでせう？三越にゴブラン織のいゝのが有つてよ」



「そりやア目がさめる様なの……」「さうね……どうしようか知ら……私の紋付は雪中の松だから四月にはちつとをかしいわねえ」

といふと「では去年の櫻草ので間に合はして置いたらいゝわ」と笑ひながらいふ。

そんならあれでとは私にやどうしてもあきらめられ

ない。

美耶さんは乾度お振袖でもできるにちがひないのに私だけがあんな流行おくれになりかけた去年の春のお納戸色なんかまつ平だ、美耶さんにできるなら私も伯母様から母様に願つて頂かうと思ふ。どんなことが有つたつて他人よりひけを取るのは私は大きらい、いくら從妹だつて美耶さんより劣つた服裝ではすまされない美耶さんもずゐぶん見得つ張りだからその上をゆくにはなか／＼大抵のことではいけないわと私は獨りで一生けん命にこんなことを考へて居たら「まあとれたのね」つて、肩あげのあたりをピシヤリたゝかれてしまつた。大方アラをさがして居たものらしい。それから美耶さんが「面白いことができたのよ、私に二級上だつた小林孝子さんて方がね今度宮内大臣の田中さんへお嫁にいらつしやるのよ、まだこれは、秘密なのをね小林さんの御親友のかたから聞いたのよ」といふ。田中さんと云へば父様とお心やすくて時々うちにも御見えになるあのお老人のこと、何だか美耶さんのいふことは、ほかのことの聞ちがひらしいからいゝかげんに聞き流しておく。

今度はまた各々自分の出た學校の味方やら自慢やらになつてしまふ。おしまひにとう／＼美耶さんは私の口に叶はなくなつたので「そりや何と云つても學習院はお上品だから私の方なんぞとはちがひますことよ」といふ。私も餘り調子に乘つてしやべりすぎたので氣の毒になつて「そんなことは無いわ。お茶の水の方こそ皆さんハイカラのパリ／＼ばかり、私どもは意氣地なしばかりよ」と兩方から折れて出て、まづ喧嘩にもならず、丁度多榮が御飯を知らせに來たので食室にゆく。

伯母様も五郎さんも母様兄様みんな一緒に久し振りの賑やかな會食「きやうだいが三組揃つたね」なんて兄様がおつしやつた、御茶時分には五郎さん達のお好きな甘いものをねと多榮に云ひ付けて置いて私達二人も兄様のお居間に押しかけてゆく。ピンポン歌留多にもあきて今度は兄様が「五郎さん、君十八番の靜のお

だまきを歌ひ給へ。僕がバイオリン彈くから」とおつしやる。「たまらないわね兄樣の伴奏ぢや……五郎さん全くだいなしになりますよ、此間もきかされたらあとで歯が浮いて三日ばかり實に困りましたつけ」
「ナーンだ、百合さんのピアノこそまるで祭禮の太鼓みたいぢやないか、かまふもんかサア始めるせ」つてあんまり感心もできない五郎さんの獨唱に兄樣の伴奏でとう〳〵一曲きかされてしまつた。この歌が上野の森のあの樂堂で藤井たまき夫人のお聲できかれたらほんとにとび付きもしたい程好きなのだが今日は早くやめてもらひたい樣だつた。その報酬に今度は私達で甘い物責めにする。やせがまんかは知らないがお二人とも「こんなものに弱る樣な人間ぢやないよいくらでも持つて來い」なんて云ひながらお汁粉と時雨とをずゐぶんよくめし上つた。
　御夕飯も一緒にと止めたけれど寒くなるからつて四時がうつと皆歸つてしまふ。留學中の大兄樣のことなど話しつゝ御飯をしまふと兄樣も安吉の車に送られて寄宿寮へおかへり、大水の引いた跡の樣に淋しくなつた。
　葉山の別莊に行つてゐらつしやる父樣からお端書でそろ〳〵貴族院の始まる前で忙しくなるから明日の午後御歸京との事、無暗にうれしくておそくまで母樣とお話して起きて居た、ほんとに今日は樂しい日だつたと思ふ。

◎成功を急ぐ勿れ、如何となれば成功は忍耐刻苦の後にのみ來るものなればなり。
◎貯金する事を忘るゝ勿れ、如何となれば爾は後日必ず資金を要する事あればなり。
◎不幸に遭遇したりとて失望する勿れ、如何となれば他人も亦困難辛苦に遭遇し之に打勝ちたるものなればなり。
◎業務を屢々變ゆる勿れ、如何となれば結局爾は一物をも取るを得ざればなり。
◎妻子を養ふ道なくして結婚する勿れ、如何となれば離婚の不幸を見る事あればなり。
◎自己の過失を他人に負はしむる勿れ、如何となれば大方の過失は自己の不明より生ずるものなればなり。

商賣人となるべき女子の性格と素養

黑柳吉子

昨年本誌第十三號に「外國商館員の實歷談」と題して聊さか私の實驗談を記載しました所が思ひがけなく各地の姉妹より色々御尋ねがありましたが、何を申すも寸暇のない身の上、一々御滿足なお答ひも出來ませんでしたが中には御自身の境遇及將來の抱負などまこまと御認になつて、是非世話をして吳れ、ウント手腕を揮つて見たいからなど頗る御熱心な方がございましたから今こゝに御尋問の最も多數であつた事柄に就て聊か御參考にまで申上ます。

▲人に使はるゝ人となれ▼

第一私が「實歷談」の終りに『なか〳〵並大抵の女では』と申した言葉に就て、或る御方は英米國の女子が現に從事しつゝある職業の實例を揭げ、日本の女子も近き將來には斯くなるべし云々と堂々議論めいた筆鋒で始まり、末段に自分も實業務に外國貿易の方面に從事したいから、世話を賴むと云ふやうな御希望で御座いましたが、私思ひますのに、斯ういふ御方は迚ても人に使役さるゝ人でなく、人を使役する人で、謂はば七重の膝を八重に折る小僧より仕上げて、番頭になる迄辛棒の出來ない人であらうとおもひます。全體我國の女子職業範圍が發展いたしましたのは、ホンの近年で謂はゞまだ試驗時代です果して切れるや否やは未知の問題で、議論一偏で推し兼ぬるのであります。官公の御勤め向は兎に角私共のやうに職務の方面はあまり例がないので、只今の所では、私が古參でありますから、其試驗物體となつてゐるのでありますから、私も其心算で一身を犧牲に供して居るやうな次第で御座います。其上歐米諸國の女子が社會に於ける位置と、日本の女子のそれとは殆るで比較になりませんから從つて信用も薄く、巨額の金額に昇る輸出入重要品などの契約事は、什麼しても男子でなければ締結することが出來ないのであります。若し我國女子の位置が世界に認められて、男子と同等に並馳することが出來るやうになつたら、今更歐米各國の例を引くまでもなく、

女子の職業範圍が大發展することとでせう。

▲雜誌を讀む必要▼

語學が必要であることは勿論ですが、せめて英語だけでも十分書きも話しも差支のないやうになつてゐれば、獨逸語、佛蘭西語は勉學次第で一通りの通信文位は理解する丈けの智識は得られます。何廢しても三ヶ國語に通じてゐないと困るですと申すのは外國より參る書信文がどれもこれも英文であつて與れゝばいゝですが世界の大舞臺を相手に手廣く輸出入業を爲さうと云ふには勢ひ各國語を心得べき必要が起ります。斯く申す私も英語だけは母校で外國教師につき、一通り修めましたので



差支はありませんが、獨佛語の研究は不充分です。それから語學の程度です、これは成るべく實用主義に傾けて無暗に高尚振つたものに馳せないやうに致したいものです。詩集や藝術書などを何位澤山讀んだつて、更に利益はありません、寧ろ其脳力を經濟、地理、商品誌などに傾注して十分の素養を作つて、更に書簡文を研究し、傍ら英字新聞などで各國の人情、風俗乃至重要出來事を知るのが常識を發達せしむると同時に、語學研究上の良法と存じます。

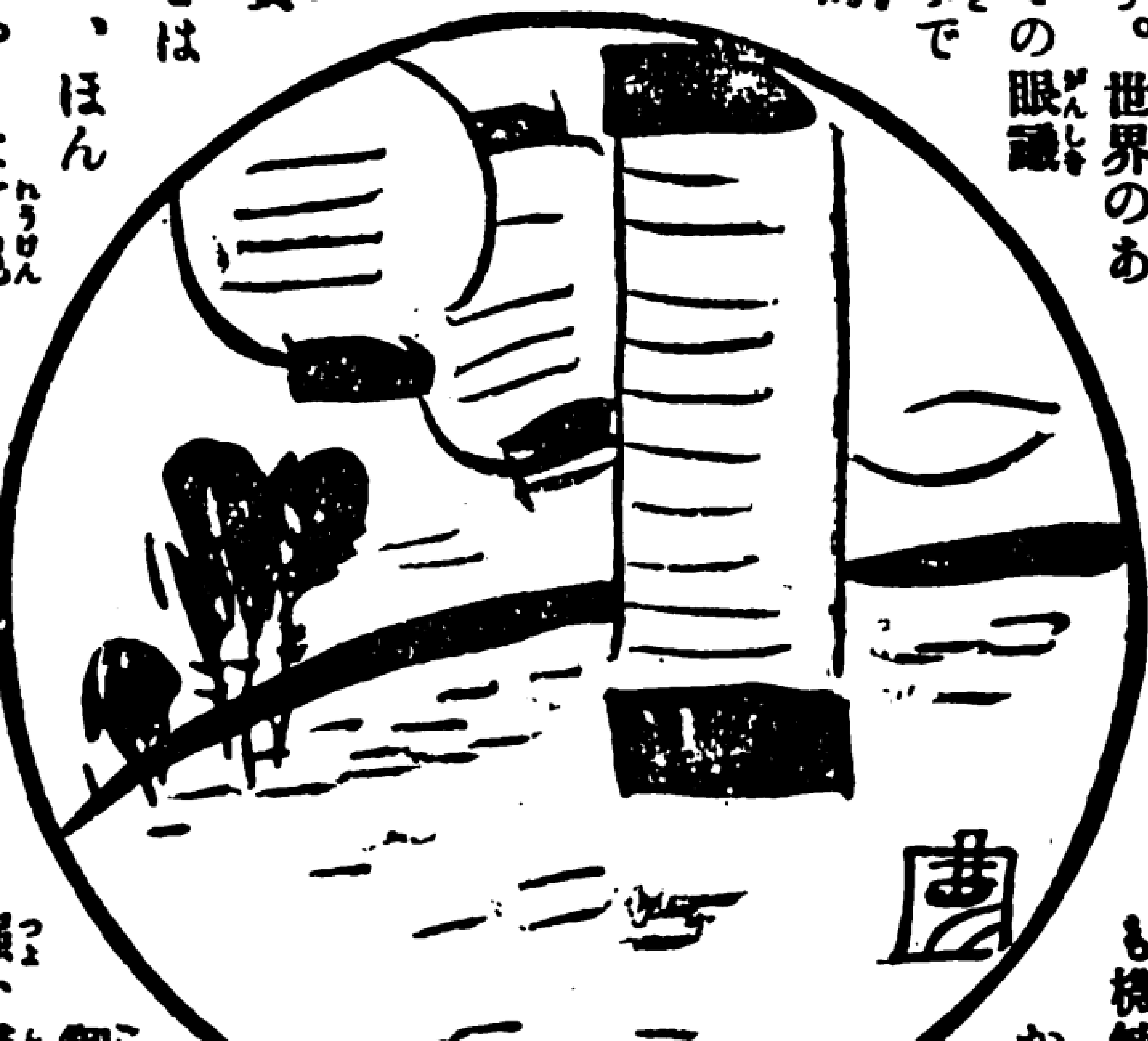
私などは在學中から外字新聞の閲讀は一日も缺かしたことはありません、無論政治上の記事には眼を觸れませんが、實業及廣告文欄には非常な趣味を以て熱心に讀みました、殊に何

時か參考になるとか模範になるとか云ふやうな記事繪畫は叮寧に切拔まして「スクラップ、ブック」に貼付けて保存いたしました。其當時調製したものが丁度十八帖程積つて重寶いたしてゐます。近來は日本の女流雜誌に多大の趣味を傾注して居ますのは日本上中下三流社會には什麼な趣好が流行するか什麼な風な品物の需用が起るか現在の趣好は何麼な風に變化するかなどの事柄は婦人向の雜誌は明かに其曙光を示してゐます。其一道の光明を捕へて商機上に先鞭をつけて行くのが私共の非常に愉快とする處ろであります。故に本誌などは中流以上に多數の讀者を有するだけ、それだけ中流社會に需用される物品（主に舶來品）の傾向を本誌から得ますることが尠なくないので御座います。そんなら什麼いふ所に着目するのかとお尋になりますと、之れのみは簡單にお答が出來兼ますけれど丁度小說家が何んでもないことを面白い方から觀察して面白い小說を書きますと同樣に、その途へ這入つて見ますと又それ相應のことが自然と眼に映つるやうになるので御座います。

▲物品の鑑定眼▼

次に必要なことは物品鑑定の眼識を養ふことです凡そ物品の鑑定には肉眼でするのと。器械的にするのと兩方御座います。器械的の方は多くは化學的の作用によりますから、一通り定量及定性分拆學を心得て置けばあとは試驗管と藥品とで判明いたしますが、肉眼ですることは一朝一夕の修業で出來るものでは御座いません、何麼しても多年其方面に趣味を以て熱心に事物の比較研究をして自然と眼識を肥さなければとても優ぐれた鑑定眼は得られません、だから鳥渡手近い話が、同一種類の物品を姉妹二人の客が別々の店で買つて來たと假定しますと、その塲合に其物品を比較して見て優劣を區分し後、價格の判定を下します。こんな事は隨分世間にありがちて何も珍らしい事ではありませんが、そこに研究的眼識と趣味とを持たせて行きますと、不知不識の間に優劣を鑑定して行くやうになります。

これが多年の經歷から何時となしに單獨のものを見ても（他と比較せずとも）其品性、價値、需要、用途及生産地などが自然に判つて參ります。それが即ち鑑定眼の上達した時期で御座います。世界のあらゆる物品に對してこれ程までの眼識を得んことは迚ても並大抵の事では行きませんから從つて專門的に分科で進むの必要が起ります。兎に角く其社會に身を投じて見ると自然と會得するやうになります。乍併、生來慾ういふ風なことに全然に趣味を持たぬ人が、漫然と女子の實業は面白からう、外國貿易などは目新らしく　且つ有望だなど丶、ほんの一時の流行に惚込んでなさるやうな了見ではとても駄目です。

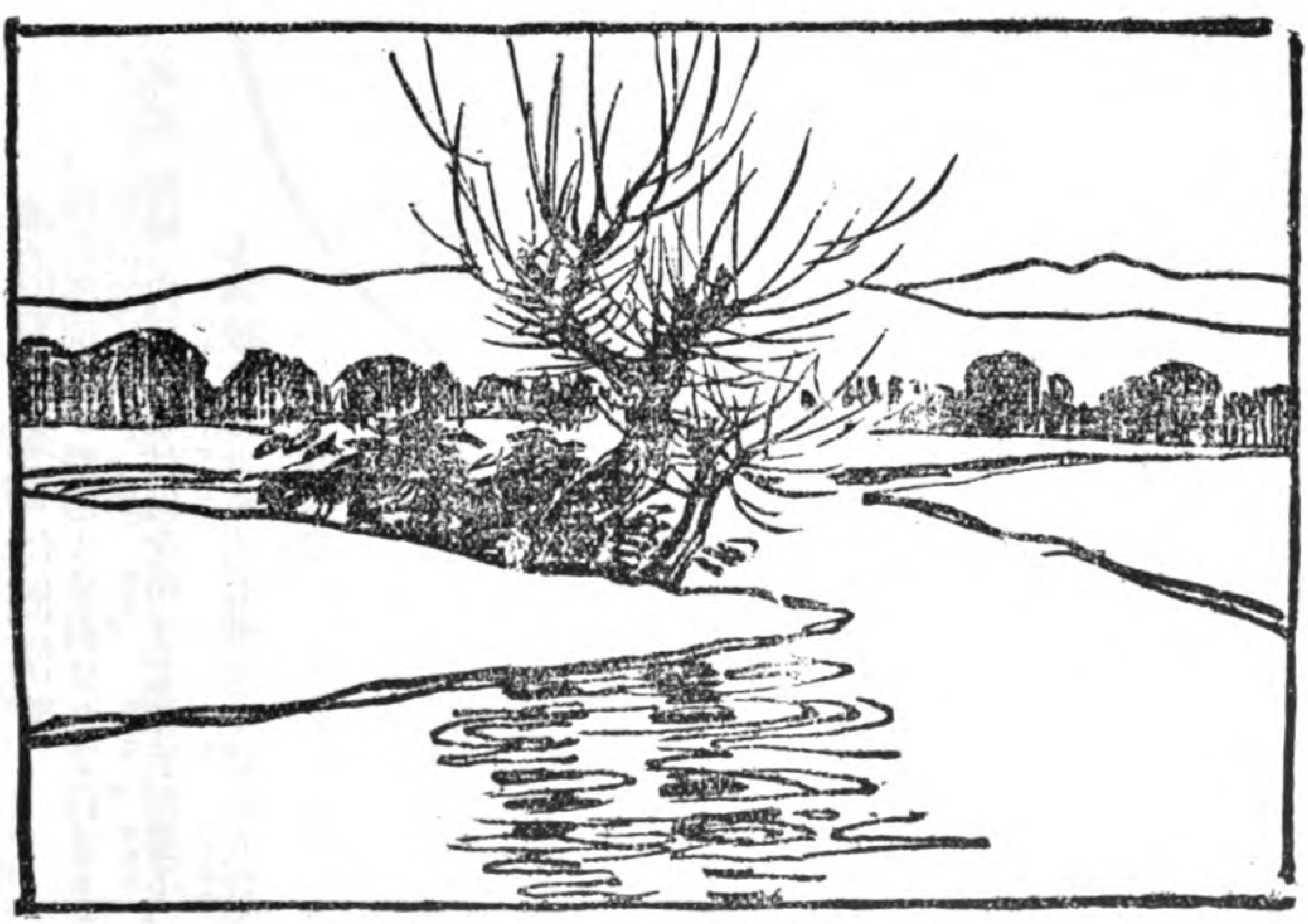


▲商賣に禁物は同情▼

外國商館内の仕事は何を申すも相手が男子、しかも機敏な當世風のお世辭の好い人許りですから、餘程自分の腹を締めてかゝらないと、うまく擒がれて飛んだ失敗を釀すことが出來ます。譬へば鳥渡の商談上にも相手がさも哀つぽい樣な言振りでひたすら依賴する樣に持懸けられますると、そこは矢張女の弱味で、みす〳〵不利益な事を纒める樣なことがあつて、つひ大失敗の因となり損耗を見ることが御座いますから、心が弱くて同情心の强い婦人には先づやりきれない仕事です。

何でも人間を三文とも思はず、頭から呑んでかゝらなければ駄目です、彼方も商業なら此方も商業です、惰

實に心を束縛される樣では現今の實業界には迚ても生存して行く事は不可能です。去りとてあまりに傲慢に壓しかけてもいけません、時には頭痛のする程頭を下げる場合もありませうが、之れは金錢の爲にする事で決してその人の爲にする事でないと觀念しなければならぬ。それから又嘘八百を列べることの敏才がなくてはいけません、併しそれも時と場合に依りますよ、何んでもかでも嘘で堅めるのではなく、商機上の範圍內に於ては頗る狡猾に、さも誠らしく嘘を吐く事に馴れなくてはなりません。私が今日迄の經歷に依り考へますと斯樣な方面に從事せんとする女子の性格は事務を執るに沈着で、對談には相手の誰れたるに關せず、怯めず臆せず極めて敏活に振舞つて行くのが第一ですから、深窓に人となつたお姬樣風の女子にはとても出來た事でなく、少しく活潑過ぎる樣な人の方が却つて好からうかと思ひます。當今は女子の販賣員が各方面に採用になりますが、斯樣な人の中から將來有望な人物が出るだらうとおもひます。



海軍士官が妻に對して望む箇條

一海軍士官

△此の辛抱が出來るか

海軍士官は職務柄戰時平時を問はず艦船に乘組んで居て、一ケ月はおろか、一ケ年も「ホーム」を訪はぬ事は有勝ちな事である。此間その妻たる者は淋しい面白くない月日を送らねばならぬ。此辛抱が出來る婦人でなければ始めから海軍士官の妻たる資格はないと言つていゝ。世の中には往々此辛抱が出來ないで人に後指さゝれ、父母の名を始め良人の名まで汚す人があるのは嘆かはしき限りである。

△良人が折角の土產話

夫の職務に對して趣味をもつ事の必要な事は敢て海軍士官のみには限らぬが、我々の職務に於ては特に之れが大切である。夫が萬里の鯨域から、蠻風を凌ぎ波濤を越えて遙々歸朝し、第一に「ホーム」を訪ふても、其妻にして何等の海事思想もなく、又地理的頭腦もなかつたならば、良人が折角の土產話も馬耳東風と聞き流すにきまつてゐる。どんなに海上が困難であつたにしても、少しも同情を持つ事が出來ぬに違ひ無い。そして徒に長き留守役を恩にきせて、うらみ言でも聞かされた日には良人はどんなに不愉快であらう。故に良人の職業に同化すると云ふ事は我々が妻に對して特に要求する所で、斯く無くては迚も家庭は圓滿にいかぬと思ふ。小說不如歸の浪子が、良人の遠洋航海を思ひやり天氣豫報を見ては「彼地は風ではないか」と遙に心配したのは、同情ある海軍士官の妻として良きお手本である。此の感を持つ者が本艦のみでも現に幾人あるか知れない。

△妻は何も返事を出さぬ

殊に我々仲間に於てよく聞く不平は、良人は寄港する度毎に矢の如く連續して消息を爲すにも關らず、妻よりは何等の返信を出さぬ事である。何故出さぬかと問へば、宛所が知れぬからとか、當地に新聞がないからとか答へる人がある。然し、宛所に就ては、軍艦は宛所も何も要らぬ。場所が分らねば、唯「軍艦某」でよいと度々云ひ聞かせてある。又新聞がないにしても、良人の手紙に依て略樣子も分る事だから、困難な事があれば同情を表し、手紙に美しき風景を述べた文句があれば、其の景を聯想して何か文句を並べて與れたとてよさゝうなものである。夫々相當の敎育のある人達だから、返信位書けぬと云ふ事は無い筈だ。遠く「ホーム」を離れては、樂しみと云ふものは更に無く、唯一片の書信に因つて一縷の光明を見るのだから、こゝは十分察して戴きたいと思ふ。

△女學生の簞笥の抽出し

軍艦を御覽になつた方は御存知でせう。軍艦では毎朝總員掛りで內壁を掃除し、或は石鹼拭ひをなして、塵一つ殘つて居らぬ。又諸道具も皆ぴか／＼する程磨き立てられてある。ナイフやフオークの樣なものでも、夫れは／＼手の屆いた磨き方で、之れが鬼の樣な兵隊さんが磨いたものとはどうしても思へない。だから其妻たる者は餘程掃除や手入に注意しないと、之れ亦良人の滿足を買ふ事は出來ぬ事になる。

家具の整頓などに就いても、夫は總て軍艦的に觀察するから、妻は隨分堪らぬかも知れぬが、こは夫の職務に對して十分隱忍しなければならぬのであらう。實に今頃の女學生の簞笥の抽出しを海軍々人に見せたら、嘸々吃驚する事と思はれる。先づ江田島の海軍兵學校へいつて生徒の毛布の整頓してあるのを御覽なさい。寢床の上に積まれてある毛布の線は五十なり六十なりがチヤント一線に墨繩をかけた如うに揃つて居る。又其チエスト（衣服箱）の中は日用品が一糸亂れず整頓されて居る。箇樣に訓育され、斯かる所に起居する良人の滿足を買ふと云ふのは非常の注意を要する

に違ひない。

△士官は軍艦の奥様

其他海軍士官は、艦内に於て兵隊さんが使用する箒や雜巾の使用法の巧拙や保存法を、よく辨へて居つて、其取締りをしてゐる人だから、此の方にかけては普通の人よりも、ズット經驗がある丁寧に使用すれば箒は幾ケ月位保存出來るものであるとか、雜巾も亂雜に使用すれば幾日しか保たぬとか、云ふ事をチャント承知してゐるから、妻たる人が女學校の寄宿舍流に物を亂暴に取扱ふては、忽ち夫の機嫌を損せなければならぬ事になる。之れはホンの一例に過ぎない。要するに軍艦は大なる家庭である。其萬事を監督する士官は、恰度奥様と云ふ格で、何事も知つて居るから、少さな家庭の奥様の腕で之を遇して行くのは、却々骨が折れるかも知れぬ。



△膝に手を置いた地藏様

海軍士官は、サッパリして居るとは世間を通じての評判である。之れは方々を流浪して所謂世間慣れがして居るからと思はれる。其話柄も却々豐富で又氣轉の利く事は驚く程です。だから其妻も亦相當の氣轉が必要で



ある。良人の友達から初めて訪問せられても百年の知己の如うに面白く話す樣であつてほしい。膝の上に行儀よく手を載せて石地藏樣見た樣にして居る樣では、迚も海軍士官の妻君たるの資格はない。又新聞などを見て「軍艦某今朝馬關を東に向け通過す」と云ふ樣な電報があつたならば、先づ地圖を出して見て、馬關から當港まで幾百浬ある、普通の速力は幾浬だから、茲處へ着くのは幾日の幾時頃だから、と勘定して、チヤント其時刻までには、波止場に人力車、家には湯を沸かして、準備して待つて居る位にしなければならぬ要するに、海軍士官の妻は、華族樣の姫樣然として全く所帶知らずでも困るし、又良人の職業に同化し得ない樣な常識の無い女でも困る。



今樣女房氣質

賤の女



絶えず田舍まはりのみして居る身の此度こそはと思つて來て見れば、前よりも一層不便な所、全體さわがしいよりは靜な方がよけれども、これはまた餘りな、新聞屋と牛乳屋の外には柴負ひて行く翁計り、雨でも降ると情ないやうな氣がする、只夫のお歸りのみ待たれる、今日は宴會とやらで一里許り有る町にいらした留守中子供寢かして夫のシャツの七つ下りをもて子供の股引作る、いつかも夫のヅボン下を縫つて見たが、

遂にはかれず、あたらフラチル代なしにした事がある、時計は十一時を打つた、宴會といふとなせかうお歸りがおそいのだらう、ほんに此間某の老夫人のお笑ひ話だが、まだ新婚早々御主人の宴會のお留守のつれ／＼、木地のお盆をみがいて居らしたが、十二時過ぎてもお歸りなきに氣をいらち、ゴシ／＼とこすり、一晩にてつや



美しくしたと仰有つた、霰がまた一しきりふつて風がヒユウ／＼と寒さうだ。雜誌を見ても氣がのらず、ボンヤリと火鉢の火をいぢつて居る、一時過てガラ／＼

車のひゞき衣紋つくろつてお迎へする、例によつて足下あやうく袖口は綻び、金時計はブラリと落ちさうになつて居る。都だつたらいつの昔誰れのものと成つて居る事やら、ほんに御酒はもうコリ〳〵、子供はクリスチアンにしてしまふ。

次の日、朝夫はいつもよりおそうお目ざめ、お好きなお汁も上らず、お茶漬二三膳むがりて。

昨晩は何時に歸つた覺えがない。

と仰有る、二日醉ひの氣分重さうにして御出勤昨日の股引子供にはかして見る、今度はどうやら成功したらしい、矢張り昔からのが一番よい、一寸ハイカツてこしらへて見ても、丁度昔風の姑にハイカラの嫁といつたやうで調和しない、それにしても東海道五十三次も十時間餘りで行ける世の中に、裁縫臺所の事すべて女のする事といふと、行燈時代と同じことを瓦斯電氣の下でして居る女の智識の割合に發達しない事がわかる、矢張り女は男にはかなはない、もう六ケ月許りたつと二人の母とならねばならぬと思ふと氣が氣でない、子供のない頃ウジヤ〳〵と澤山な子供のある家を見ると、噪うるさからうと思つたが、今私は又可愛いのがふゑるかと却つてうれしい、ほんとうに子供程可愛いものはない、次が出來るやうに成つてから急に大人らしくなり、乳も赤チヤンのといへば承知してサッパリと止め、夜分も手を懐に入れたまゝでおとなしく寢てしまふ、尤も乳をなめて見ると味がかはつてまづく成つて居るからでもあらう、一日お庭で犬と遊ぶか本を見るか、おしまひなさいといふと父様お歸りねといひながらしまふ、次がないとまだ〳〵膝子だがと思ふと可愛相で、わざ〳〵呼んで抱いて見る、夕方子供が見えぬと名をよびながら山の方を探して居る親の心持ちはどんなであらう、私も急に思ひつき夫の名刺に住所生年月日を記してお守袋に入れてやる。

百姓男が來て此處の奥様は美しい十八か九かといふて居たと下女がいふ鳥なき里の蝙蝠とをかしく、ソト鏡に向ひ、流行遅れの山繭織の黄ばつたのに之れも嫁入り當時の紫縮子と友染の腹合せ、まだ捨てたくない

緋の帶上げが一寸見えて居る、羽織は八丈の格子である、リボンは勝色の巾廣指には東京あたりでは田紳の目標として居る。井戸側ぶちが輝いて居る、凡てを通じて十日も櫛の齒を入れないつかね髪の紺の筒袖計り見た目には美しとも見えやう一體私はほんとうに着物の配合には苦心する、藝者のやうに拔衣紋のだらしないのもいやだが、さりとて又衿のつッかゝつたやうなのも嫌ひ、要するに高尚で一寸粋なところも有るといつたやうなのをと思つて居る、女は少々目鼻だちわるくとも色白で髪がよく背がスラリとして配合よきものさへ附けて居れは大抵は美人に見えるものだ。

今日は夫の誕生日だが肴屋も八百屋も來ない、例によつて鰻の鑵詰、尾頭の滿足なもの三尾計りに梅花玉子あしらひ、燒き物として置く、親子三人長壽のつもりと解釋して置く。口取は殘りの鰻を入れて玉子燒、栗のきんとん淡雪かん刺身は鹽鮭の山かけ刺身、それから二三日前からの殘物を集めて茶碗蒸しを造る。新婚當時は三度々々のおかづが心配で、勿論夫のすききらひも分らず一々召し上りますかと伺ふと、マア何でもこしらへて見ろと仰る、少しも殘さず食べて下さると嬉しいが、殘されると、ほんとうに氣持がわるかつた、毎日々々料理本とノートと首引計りして居たも



のだが、此頃は前日からお献立も考へて置かぬ事もあるけれども、肴屋の顔みてからでも思ひつく、とにかく姑のない花嫁時代の苦心だと思ふ、殊にお漬物などは澤庵も糠味噌もさわつて見たこともなく、夫のお友達からお國の大阪漬といふのはどんなですと訊かれて赤面した事もある。一體田舍の方は漬物はやかましくいろ〳〵の物をこしらへるが、都人は珍らしいものを買つてたべるから下手である、私もオムレツだのカツレツだのと、一通りの西洋料理は眞似すれども、夫からナタ漬をこしらへてくれの淺漬がよいのといはれてほんとうに困つた、近所から蓬のお團子を頂いたり五目酢司をもらつて御返禮にお萩をと思つても作り方をしらず、先づ本でよく讀で婆やにさしづをしてさせて傍で見て覺えたものだ、ほんにあの頃の事を思ふと冷汗がでるやうな事計りだ、夫はいつも二本の御酒三本上りて上機嫌、コロりと横になりて。

火のし片手に羽織のしわへそれといはずにあてこする。

オヤ〳〵羽織計りがよい迷わくだ。

「新世帶なれぬ、かまどに生薪たいて手鍋下げるも好と好」

「朝八時にマント着せかけ時計を持せ忘れしやんすな檢印宅にも用事のある程に午後の三時に歸らんせ」

どれも皆うがち得て居る、哀なる哉虫の音だの新派の星、菫、血だのと私共には意味の不明瞭なのよりは、數等よいといつて、晶子女史の、

春の宵を小くつきて鐘を下りぬ二十七段堂のきざはし

などは私の最愛誦するもの、里の父は御酒上ると目の中まで赤くして薩摩の守忠度うたはれるのが癖であつたので、夫の端歌などうたはれるのが何だが下品なやうでイヤだつたが、此頃は感化されたのか何とも思はなくなつた。

今日は魚屋珍らしく海老持つて來る、かういふ雪のふる日は淋しくて誰でも來てさへくれるとうれしい。何だか前の山を見ると北海道にでも住んで居るやう

で、熊でも出て來はせぬかと氣味がわるい、此あたりでは海老を刺身にすると聞いたが、どんなにするのだらう下女は漁師の娘だといふから。

お前これを刺身に出來るかと訊くと、ハイといふ、させて見ると尾、頭、皮を去り美しく二列に並べ青い子を妻のつもりで一寸傍に置く、却々見事だ、跡はフライと、豆腐とお汁にしてヤレ〳〵これでまづ安心とお歸りをまつ、例によつてお風呂がすんで、さて一日中の最も愉快な時、子供は夫の隣に坐り、何か口に入れてもらつて居ながら、まはらぬ口にわけのわからぬ事を話して居る夫は目を細くしてさも可愛さうに、『さうだ〳〵』といつて居らつしやる、私が風琴でマーチを彈くと、子供が足拍子をとつて歩く、ほんとうに子供一人の事で賑なこと、折柄お客樣二人入らしやる、直に御酒の支度と仰る、いつもながら不意でほんとに困る又火を起させ刺身にした海老をフライにして漸く三人前に盛る、他は海苔、鑵詰、鹽からなど有合で間に合せる、ほんとうに考へのない人達だ、食時々分訪問するなど日本人の惡い習慣といはねばならぬ、そして九時頃までワットさわいでお歸、それでも碁のお客よりはよい、碁が始まるといつも十二時までには決しておしまひにならない、併しこれが夫の唯一の道樂とすれば誠に易い事である。

もう御飯も冷たく、お汁も味はない、下女の洗つた膳碗、つやぶきは私がして寢る、十時半下女もかういふ時は氣の毒だ。

次の日、朝夫が今日歸つたら大に呑むよと仰有る、なせですと訊くと『六年前の今夜よ』、成程思ひ起す某亭の金屛風引きまはしたる部屋、待女郎に手を引かれ正に入らんとする刹那、一寸盗み見たる夫の、餘り寫眞と相違の甚だしかつたこと、夫と並んで坐らせられた時の心持ち、家に歸る途中夫の後姿の太つたいかり肩の目についた事など、今更のやうに思ひ出される、夫は『六年の事でひどく年をとつたな』と仰有る私もまけぬ氣になり、

『あなたの白髮もメツキリ増えましたよ』といふほんに六年の早さ銀婚式もわけのない話である。



見合ひに就ての私の實驗

小百合子

六月の初旬、抑々此縁談がもち上つてから恰度二た月のけふ八月廿八日、いよ〳〵見合といふ處迄運んだ、見合の場所は大橋といふ先方では無二の親友なる工學士でもし此縁談が整ふとすれば當然仲人たるべき人の家でする事になつて居る、此間に立つて橋渡しをした大橋家とは親戚なる小諸家の夫人といふのが自分を連れて大橋家に行く筈なので。

自分は此度の事につき二三日前から川越の郷里を出て本郷なる叔母の家に身をよせて居る今大學法科に在學中の兄上も恰度歸省せられずに矢張り叔母の家に居られる、けふは夕刻六時、暑い日影も漸う消えて青葉に月の涼しい頃牛込の天神町の大橋家でいよ〳〵未來の人と逢ふのである、見合とはいひ條此度の事は大橋小諸の二家でも熱心に整めようとして居られるし此方も兩親はじめ叔母兄とも先づ欠點のないよい縁談と見とめて居る、今迄の進行によつて此時すでに八九分通り迄は成立して居る、殘る一二分、けふの見合とは唯これだけの價値のものだとは大橋家で頻りにいふ處である。

午過ぎ一寸買物にと本郷通りへ出かけて兼康で束髮の花束など見立てゝ歸つてきたのは恰度三時、少しひま取つたので家では大待兼、只今と額の汗もふきあへぬにもう叔母樣は女中どもを指圖してソレ御湯の御加減が、鏡臺を直してなどゝ大さわぎ、急に自分もせき立てられる樣で直に其まゝ風呂に飛び込む、顔と襟と手足を洗つて其他はそこ〳〵、上るともう縁側にはチ

ヤンと鏡臺がすゑられ癖直しのお湯が白い湯氣を立てて居る、いくら磨いたとて椋子は椋子、急にどうなるものではなしよしまた一時ごま化す事が出來たにもせよ、この先一緒になるとすれば生涯の永い間いつ迄假面のかぶりきれるものではない、どうせ醜く生れた愚痴を今更いつた處で仕方のない事、有の儘を見てもらつてそれで落第すればこれも運命とあきらめるばかりと思つて見たり又すぐそばからあの叔母樣の肩の入れ方や其他國に殘つて今日を案じて居らるゝ御兩親の事を思へば・且は自分とても心の底を推して見たらそれは例令南瓜の花でも少しでもよく見られ樣とは本音の話、つまりは弱い女心からなどこんな事考へながら髮をとかす、常のＳ卷にと叔母樣仰せらるゝまゝに結び上げると叔母樣は今月本郷で買つてきた白いシチラリアの花をさして下さる、髮が黑いのでよくうつると襃められた、御園白粉を濃き加減に襟に、あとは薄すり顏に刷いておくと叔母樣はパリー製の何とかいふ打粉白粉を輕くはたいて下さる、粧りばえなき此身をと叔母樣には御氣の毒の樣さあ首から上は出來た、此度は御召し更へとい、ござの上に擴げられた着物は薄小豆縮織の單衣に白茶の厚板丸帶、着物はよいが帶がじみ過ぎる、といつて叔母樣は御自分の華美な絽繻珍の單衣帶を出してきゆつと御太鼓にしめて下すつた、兄樣



が緣の柱によりかゝりながら叔母樣が汗をふき〳〵支度して下さるのを見て居られる、女中どもは遠くから立つて眺めて居る、粧れば或程度迄はかうなるものを嗜の惡い奴などゝ今更兄樣がこんな事仰しやるこれでもう支度はすつかり出來た、さあ大役出仕、度胸鎭めのお茶一ぱいと手ずから叔母樣の酌んで下すつた溢茶に咽濕はしていよ〳〵金紋うつた車にのる。

扨も粧ひ全くなつて金紋の車上の人となつた自分は夕靄空に電燈輝き初る頃、ひた走りに街を通りて牛込へと急ぐ、心はけふ逢ふべき我未來の人の上、扨はありしけふの事どもくり返し〳〵て思ひの中に車は小諸家の門につく、御主人と暫し語る中に叔母樣の御支度も整ふ、全體見合とはいかばかり耻しきものか我未來を契るべき人との初見參、而もこれによつて成立と否との分るゝ處、その心配はどれ程であらう、徒に胸に高浪うつてもしも其塲で言葉もつまる樣ならば扨どうしよう、ならう事なら成丈け時間も早くきり上げ、あまり口もきかないですむ樣になどゝ心に祈つて居る矢先、御主人は「貴女も教育をうけられた方だし澤山御交際もおありでせうから其樣な事もありますまいが餘り嬌羞のはよくありません、いろ〳〵御話も出ませうが其時には相當の御話もなさる樣」との事、御尤もながらなほ〳〵心配、頼みの綱も切れてしまつた。

程なく出でゝ叔母樣に連れられて大橋家につく、大橋と小諸とは親戚の間、勝手知つたる小諸の叔母樣は一寸聲をかけたまゝ中の口から自分を連れて直に玄關わきの小さい部屋に入る、氣を利かして鏡臺などもつてきて下さる、御茶をもつてきた小間使に「お客樣は」と訊けば「お二階に」といふ、先方はもう來て居られると見える、道理で玄關に靴が一足脱ぎすてゝあつた、折々話聲も聞える、臺所では何やら忙しさう、大橋家の主人や奧樣はまだ出て來られぬ、其内叔母樣は無雜作に「直に二階へ參りませう」と立ちかける、だつてまだ奧樣にも逢はぬ先にと思つたけれどさりとて別に用事のある譯ではなし、何となく妙だと思つても別に抗議もなりかねて叔母樣のいはるゝまゝに跡に從つて

二階へ上る。

左を窓の二階立、二間の閾の傍らに自分は坐す、流石に胸轟いてさしうつむいたが此刹那目に入つた影は二つ向側に白ガスリの人、八鬚美はしく悠然と坐さる多分これが大橋氏であると思つた（一寸斷つておくが自分は此時まだ大橋主人とは一面識もないのである奥さんとは學校友達の昵懇の間）斜に坐した洋服の人、これぞ即ち當の敵であらうか。

叔母樣の側らに少さくなつて引添つてをると大橋氏まづ自分に挨拶をされる、次で洋服の人を紹介されて『此方が高橋さんで』と、元より左樣ですかといつて顏を見る事なぞは到底出來ぬ只無言に禮を返したばかり、小諸の叔母樣は自



分の傍ら大橋氏とはさしむかひ、肝腎の當の敵は斜、座の配置は極めてよい、一言二言大橋氏と言葉をかはす『御見合とはいひながら自分が先方を見樣なんていふ氣を出しては大間違ですよ、女が一歩損なもの、只先方が見てくれて無事に通ればそれでよいのですよ』とは家を出る前叔母樣の呉々いはれたこと、こんな場合には只神妙に顏も擧げず扣へて居るものとは耳にたこ

が入るほど聞かせられた事ではあるが、けふは單騎陣入、賴みに思ふ小諸の叔母樣は餘り無頓着で自分の心中は少しも察しては下さらない樣だし、大橋の奥さんも奥さん、せめて一緒に座に居て自分の爲に取り繕つて下さる位の事はして下すつてもよささうなもの、まだ御姿さへも御見せにならぬと少し自分も中ッ腹……といふ譯でもないが自然一種の對抗心が起つてきた、つまり味方は自分一人、殘る三人の六つの目はみんな批評的に自分を見るのだらうなどゝいふ氣で自然しつかりしなくてはといふ氣になる、實際一座の話の的はみんな自分に向つてばかり、一言でも逃れたいと思ふ矢先を却て一人で受けねばならぬ、意地ッ張りの性質は此時むら／＼と起つて自然一つの反抗心をなした、今は却て度胸もすわり交る／＼來る言の矢を一々相應の挨拶もした、今思へば自分ながらよくもと思ふ程平氣なもの、恰度軍使が一人敵陣へ乘込んだ時も定めしかうであつたらうなどゝ飛でもない處へ想像が涌く。

こんな工合でかねての心配も全く無益でいやに落ついてしまつた自分は自ら先方をもよく見る事が出來た、廿九といへど少しは更けて見ゆる色の黑い凜々しい面立ち、自ら快活の風、其内に馳走の膳が運ばれて此時初めて大橋の奥樣は出てこられた、かねて本鄕の叔母樣から敎へられた通り御吸物を一口と御飯を一せん、といふ工合に漸く食べる、其間に先方の方と大橋氏とは親友の間柄何隔てなき座談に移つて自ら座も打ち解けてくる、が然しまだ二人の間に直接に言葉の交された事はない、よき程に小諸の叔母樣と辭して門を出たのは、夜風頰に冷たき八時過ぎ。

思へばけふの御見合は誠に味のないものであつた、まだ戀しらぬ處女の胸にはじめて優しき影を宿したといふ譯でもない、双眸一閃、瞬間にあるインスピレーションをうけて若き血潮の湧き返つたといふ譯にもあらぬ至極無趣味な其代りにはまた鮮に描いた意中の人に對し別段失望したといふでもないまづ無事といふのが當を得て居るであらうか、しらず先方の意中は、……

……見合の記といつてもこんなもの。只一言斷つておくがこんな見合で成立した自分たちの時過ぎての今日これ又至極無事に平和に暮して居ることである。

はなごよみ

摘草

早春若草の萌え出づる時、野山に逍遙して嫁菜、よもぎな、蕨などあさりつゝ、うらゝかなる一日を樂しく暮らす優美なる遊びなり、殊に殿上人、都會の婦女子には郊外物めづらしき一入の興を與ふべく、古來貴人の間に盛んに行はれ詩歌、俳諧に其風情を叙したるもの擧げて數ふべからず。

さて草の種類は數多く或は蓮花草、薺、たんぽゝの如き花ものを摘むこともあれど、多くは若菜とて食用とすべきものゝ嫩葉を摘む、土筆は野原、芝山、田の畔などに筆を立てたる如く生え出でたるを摘み、浸物、和え物にしてよし、嫁菜は多く田の畔、堤小川の土手などに生ず、小刀にて根元より切り取る、亦浸物、和え物によし、蘩は濕氣多き野原に自生す、飼鳥の餌とし又嫩芽を煮て食す、蓬は山野に自生す、草餅の材料となる、はゝこぐさは黄色の花をつくる、愛らしき草なり蓬と同じく草餅にす、其外山野に自生するわらび、ぜんまい、款冬、若しくは水田、澤などに生ずる芹など其種類いと多かり。

けふはたゞ思ひもよらで歸らなん
　雪の降つむ野べの若菜を　　西行法師



白妙の袖にそまかふ都人
　わかな摘野の春の淡雪　　後鳥羽院御製

袖ぬらす野澤の水に影みれば
　ひとりはつまぬ若な也けり　　辨内侍

誰となく忍ぶ昔のかたみにも
　ふる野の澤に若菜をぞつむ　　俊成女

朝日山のどけき春の氣色より
　八十氏人もわかなつむらし　　前大納言爲家

春くれて千世の古道踏分けて
　誰芹河に若菜つむらん　　從二位家隆

朝露にしとゝに袖をぬらしつゝ
　君が爲とぞわかな摘つる　　左兵衛督師頼

旅人の道さまたげに摘ものは
　いくたの野べの若な也けり　　同

梅

東都花暦によれば早きは立春より二十六七日(三月二日)の頃、遲きは一週間を過ぐべし、向島百花園、受地梅林、龜井戸天神、小村井、木下川の梅數いづれも相去ること遠からず、一日の遠足にはよき道なるべし。

梅は薔薇科に屬する落葉の喬木にして花は二三月の頃嫩葉の出

づるに先ちて開き、其色紅若しくは白なり、其種類極めて多く、庭園に植ゑ、又は盆栽として花を賞す、盆栽の梅に花を多く咲かさんと欲するには盛夏の頃梅樹を日々炎天に出して日光に曬らし、夕方に至りてこれに十分水を與ふるなり、斯くすること十餘日にして後ち温暖の室を設け、そこに移し、寒氣を防ぎ、そろ〳〵増發すれば、早春に至りて多くの蕾を持つ。

梅實の効用はいろ〳〵あれど、就中烏梅といふは、梅實を干したるものにて染物屋にて染色の媒料に用ゐ、又金銀細工をなすに洗淨料として使用することあり、有名なる大和月ヶ瀬の梅はもとこの烏梅を作りて西京の染屋に賣らんが爲めに植ゑたるものなりといふ。

庭園和名本草によれば、梅の葉を水にて揉み、芭蕉衣を洗へばよく夏を經、又すべて夏衣の黴びたるものは梅の葉を煎じて洗ひてよしとあり。

梅の名所多きが中に大和月ヶ瀬、武藏蒲田、杉田、水戸公園の梅は共に人の知るところ、又、本所の臥龍梅は古樹蟠屈して恰も龍の臥したる如く、其花八重にして白く、香氣殊に馥しと稱せらる

かいて見よ何の香もなし梅の花　貞室
三味線も小唄ものらず梅の花　來山
寺の名は忘れて梅の花ざかり　李由
梅咲いて湯殿の崩れ直しけり　利牛



さしてゆく方もなけれど香にめでゝ
　梅咲く野邊は遠くきにけり　蘆庵
日のめぐる南の枝の霜どけに
　ぬれてほゝゑむうめの初花　同
夕月の影はすくなき窓の中に
　みちても梅の香こそにほへれ　景樹
梅の花咲ける垣根のしらゆきは
　まがはむとてや消殘るらむ　同

雛祭

いにしへ、ひな遊び、又ひなまつりとも云ひき、其起源は詳かならねど、今より凡そ一千年前既にこの風ありと傳へらる、其始めは、ひなあはせとて、宮中又は公卿殿上人等の家庭の遊戯らしく季節も定らざりしが、今の三月と定まりて家毎にまつるは後土御門天皇の前の頃なりしならんといふ、三月三日に行ふ樣になりしは、上巳の祓の人形と雛遊びとを混ぜしにて始めより上巳に雛祭せしにはあらず。

室町時代に至りては三月三日女兒小さき夫婦人形をつくり、これを雛の一對と名づけ、其外大小の人形を座上に並べたること今日の內裏雛と五人囃子とに異ならず、されど桃の酒蓬餅は雛よりも早く、上巳の食物にして、天文の頃には既に此の慣習ありしが

ごとし、後世上巳に雛遊びを行ふやうになりて、偶々桃の酒、蓬の餅を供へしなるべしといふ。

雛の種類は時代によりて種々變遷あることなれど一樣ならず、其形も又大小甚だ異れり、絲雛、芥子雛、狩衣雛、室町雛、深草雛、琉球雛など其製作の土地によりて名づけ大小形式の差異あれど、いづれも男女雛の對なるものなるは同じ人形の外雛に附屬する器具は、元と内裏にて使用せらるゝ品を小さく作り模へたるものにて蒔繪など施し一見眼もさむるばかりにせるもの多く、まづ膳部一式、簞笥、屛風、樂器、茶道具、貝桶、唐櫃、雛合せ、文車、乘物、其他食器一式にて數百金を費やして調ふものあり、要するに、上流の生活に必要なる器具一式を其まゝ飾るなり、今も猶古代式にて開化したる新式は流行せず。

雛の供物は、蓬の餅 即ち草餅、飴、などは古代より行はれたるなり、白酒を供する事も古くより聞えたれど、古書には甘酒とあり、又菓子は雛菓子とてそれ〴〵の物を菓子店にて調進す、徳川の中世頃より雛を女子の必携品として、まづ女兒生れてより最初の三月上巳の節句を初雛と稱へ、親戚知人より祝ひ、爾後年々飾りけり、婚するに及びて更に婚家にて初雛及び年々の雛祭を行ひしとなり。

鶯



立春より十五六日(二月下旬)を過ぐれば新音を發すべし、古來京都根岸の里を以て名所とす、今猶此邊より道灌山、谷中三崎の邊をよしとす小石川鶯谷、茗荷谷、王子目黒の近傍又よろし。

鶯は體小にして目白よりは少し肥えたり、背は綠褐色にして腹は灰白なり、眼細く、眉に三毛ありて又灰白なり、嘴は角質より成りて細く尖れり、翼及び尾は著るしく發達して飛ぶさま輕妙なり、巧みに巣を灌木などに作りて子を育つるのみならず、往々時鳥などの古巣をねらひて産卵することあるを、己の子として養育するの特性ありといふ、彼れは山林となく園中となく、居所を定めず、餌を追ふて常に漂泊す、故に漂鳥の稱あり、其餌は昆蟲類にして枝に移り、絶なくとりて、啄れ啄ばむ、冬季には其聲人の耳を傾くるに至らざれども、氷解けて春季に至れば、忽ち清高なる聲を發して枝上に囀り、大いに人の賞愛を受くるなり、されば斯く清音を發するを以て人に飼養せられ、良鳥に至つては、其價の貴き數百金に上るものあり、飼鳥には概ね子飼よりするを常とし、これを得んとするには豫め巣の所在を知り日を計りて巣と共に採り來り、籠中に入れ、餌を與へて養ふ、月日を經て自から巣を離れて餌を食ひ得るに至れば、一羽づゝ籠に別ち入る、其後は他の良鳥の側に置いて、其清音を弄するを學び習はしむ、俗にこの雛を附子といひ、親鳥を押親といふ、但し足の太きは雄鳥にして細きは雌なれば、雛の内にこれに依りて判別するを要す、早く

これを鳴かしむるには、冬至前後頃より夜飼と名づけ、毎晩時を定めて籠の傍に燈火を置き始めのほどは其時間を短かくし、次第に長くするなり、かくて次第に鳴く樣になれば、其調子に注意して聲音よき時は鳴かせ、惡しき時は鳴かせぬ樣にするなり、其の近邊はなるべく靜かにして、鳥の眞似すべきものあらしむべからず。其餌には黒米の粗よく煎りたるを一合と糠の煎たるを三合とを交ぜ、細粉として篩にてふるひ、これに燒干したる鯊などを等分に加へ菜の葉を少し入れて擂鉢にて擂りて與ふべし。

うくひすや今日一と聲のふみつかひ　智月

うくひすやはつ音くばりに里わたり　梅室

うくひすの鳴くや小さき口明て　蕪村

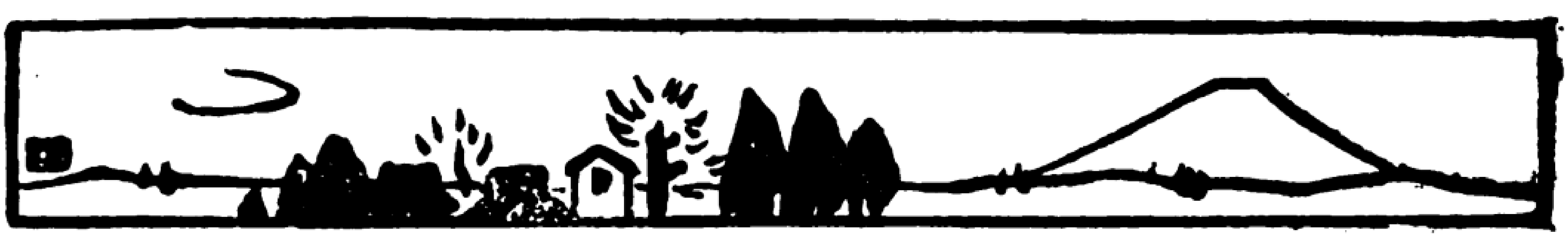
のどかなる日影とゝもに軒ちかき
　梢にうつるうくひすの聲　新古今

呉竹の夜ふかき聲にやどりつる
　ねぐら知らるゝ春の鶯　蓮村

やがてこの垣根や古巣けさよりの
　春つげそむる宿のうくひす　蘆庵

朝ごとにきなく鶯なけ猶
　はるしらぬ身もはると知るべく　同

鶯のなきて木傳ふえだ見れば
　はや青やぎになりにけるかな　景樹



くれ竹のよにかくれたる宿なれば
　鶯ならでとふひともなし　景樹

雲雀

ヒバリは鳴禽類に屬すれども、其羽毛、形貌、及び習性に於て自から一類を成せり、主として平原に棲息し、春季、叢中又は畑圃に巣を營みて卵を産み、これを孵育す、この鳥は晴天に高く飛揚し、囀づり歌ふて休むことなし、その鳴聲亦可憐にして三春郊遊の人をして耳を傾けしむ、故に又籠鳥として愛翫せらる、其性甚だ伶悧にして其巣の所在を人に知られん事を虞り、直ちに巣には下りずして二三十間も隔りたるところに下り、地上を滑行して其巣中に入る、穀類を食すれども大害をなすに至らず、多く小蟲草實等を食餌とするが故に保護鳥規則により毎年四月十五日より八月十四日まで保護せらる、又籠中に飼ふには上に絲の網を張り下には砂を敷き、擂餌と水とを與ふ種類多し。

通常雲雀は上面すべて茶色にして數多の黒斑點あり、夏季は茶色多く磨耗して黒色の部多く顯はるゝを常とす、下面は淡茶色にして喉及び胸に小形の黒點あり、腹に至つて稍ゝ白色となる、濱雲雀はやゝ小形なり羽色概ね通常雲雀に似たれど額、頬上、胸部黒色なるによりて識別せらる。

子やまたんあまり雲雀の高上り　松風

風呂敷に落ちて包まん鳴雲雀　　惟然

落る日は落して上る雲雀かな　　一光

田螺や仰むく口へ舞ふひばり　　許六

霞わけ今かおつらし夕ひばり
　はるかに聞しこゑのちかづく　　小澤蘆庵

野邊近き垣根の床やしめつらん
　霞める軒にひばりおつけり　　同

わらび

わらびは隠花植物の一種にして羊齒門中、水龍骨科に屬する宿根草なり、地中に長き根莖を有して所々に葉を出す、高さ四五寸に達す、葉は太き葉柄を有し強靱にして茶褐色を帯び光澤あり、早春地上に出づる時は其端柔かにして捲曲し、恰も小兒の拳の如し、秋季に至れば葉の縁裏面に折返りて夥き嚢をなし、その内部に微細なる褐色の芽胞を生ず、芽胞は後ち地に落ちて蕨を生ずるなり、わらびの種類は陰地蕨と水蕨の二種あり、水蕨は水中又は濕地に自生す、水生のものは大にして陸生は小なり、蕨は各地至る所の山野に自生すれど、奥州津輕、南部、羽後秋田及び庄内の産は殊に肥大にして柔かく、最も眞品とす、これを食用とするには若き時採りて烹食し、或は乾かして備へ置き又鹽蕨となす、又根よりは澱粉を製す、これを蕨粉と稱し蕨餅を製し若くはこれを



湯にときてわらび湯となして飲用し、また糊にも製す、莖は箒となし又根莖を砕きて繩に綯ふ、これをわらび繩といふ、その色黑くしてよく水に堪ふる故に種々の用に供せらる。

料理法はまづ其あくを抜かざるべからず、其法わらびの末を少しく切りすて桶に入れて灰をかけ、熱湯をそゝぎ、暫時にして引あげ水にてさらすなり（わらび汁）はあくを抜たるわらびを五分切にして味噌汁に入るれば佳良なり、（青煮）はあくを抜たるをさつとゆで、水氣を取り適宜に切り味醂に酢を少しと蕃椒とを加へて煮かへしたるに浸すなり。

賤の男がやくと焼きつる片岡の
　初わらびこそ萌いでにけれ　　香川景樹

世は捨てゝこれのみとりし古の
　人なつかしき春のさわらび　　同

都人とはずば春もつれ／＼と
　ひとりやをらん峯の早蕨　　小澤蘆庵

足引の山の櫻はさきぬやと
　垣根のわらひをり／＼ぞ見る　　同

小松野の蕨葉勝になりにけり　　几董

拳行で一山もらふ蕨かな　　茶静

つい／＼と焼野に早きわらびかな　　由之

独活

独活は山野に自生するものなり、又移植して栽培するものありいづれも一種の芳香ありて、厨下の佳品たり。栽培するものは寒独活と称し繁殖すること容易にして生ずること早く、且つ肥大にして味も亦佳なり。この植物は我國の特産物にして古代より食用に供せられたること物の本に見えたり。

独活は早春、茎の地上に出でんとする時は嫩芽は柔かにして白色を呈し、芳香を有するを以て嫩葉と共に煮て食す。これを栽培するには分植と播種と二法ありて、嫩茎を肥大ならしむるには藁、麦殻等を堆積て置くをよしとす。

独活の料理はいろ〳〵あれど其重なるものを挙ぐれば（酢独活）うどを一寸ばかりに切り、ざつとゆで、笊にあげ、水気をきり、酢に砂糖及び塩少しを加へて漬けるなり、酢を以て紅をとき、うどを浸し紅白取りまぜて口取などに積み合はすれば、最も美はし（味噌和）一寸ばかりに切り、ゆでゝ味噌に山椒をすりまぜ、裏漉して砂糖、味醂を加へたるに入て煮るなり（卵子煮）はうどの皮をむき、乱切になし水の中に入れ、よく洗ひ、鍋に煮出し汁と塩少しを入れて煮立て、右のうどを入れざつと煮て醤油をさし、ときたる卵をかきまはしながら其中へながしこみ、鍋より皿にうつし取り、粉山椒をかけて出す。



（皮うど）はうどの皮をむき、二寸ほどの長さに切り、短冊形に庖丁をなし暫時水につけ置くべし之は刺身の添物とす（甘煮）はうどを熱湯の中に入れすぐひきあげ、水の中に放ちて両端より皮をむき一寸ほどの長さに切りて鍋に入れ砂糖と醤油とを加へ、ひと煮立せば、うどを取あげ其煮汁にかつぶしを加へて程よく煮つめ、再び右のうどを入れて他の器にうつすべし。

うどの香や夜があけてから一寐入　十丈

うどの香にこゝろ動きぬ山二つ　魚眠

彼岸

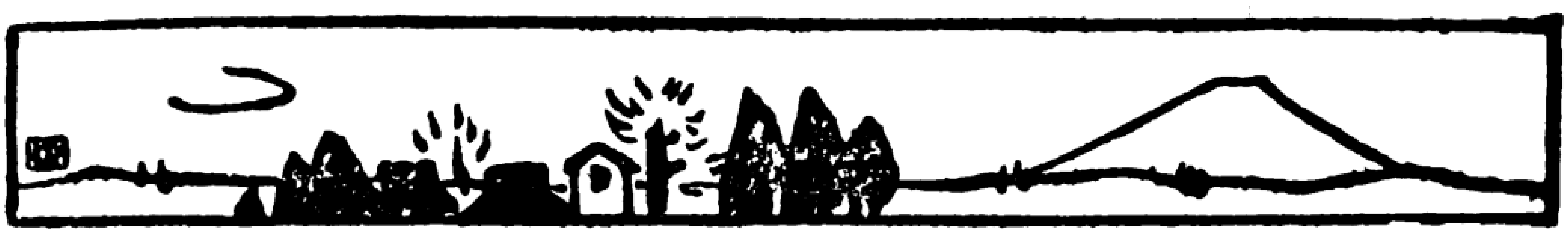
春分秋分の日を中日とて前後三日づゝ七日の間をいふ、其初日を彼岸の入りといひ終りの日を彼岸明けといふ、太陽暦にていへば春は三月、秋は九月にありて春は冬至と夏至との中央秋は夏至と冬至との中央に當れり、而両彼岸の中日に春秋二季の皇霊祭あり、此間宮中にては歴代の皇霊を祀りたまひ、且つ此の日は刑の執行を止めらる、家々にては墓まゐりをなし、彼岸の供養とゝなへて團子、蓮の餅、精進飯をこしらへて佛に供へ、親戚知己に饋る、東京の門徒にては彼岸詣とて浅草築地の両本願寺に詣づまた七墓詣と稱へて名家では墓七所を尋ねて詣づることあり、中日には諸社の石鳥居を七所くゞり七度に及はゞ長病する事なく安楽なる往生を遂ぐべしとて年老いたる人は眞面目に行ふ、またこの

日の夕陽は沒する折に陸りならが沈むといひ、後生の善き人、中罪多き人などはこれを見得べしとて高所に登りて拜む風あり、東京にては六阿彌陀詣とて、行基菩薩の一木六體の彌陀像を安置せる寺々へ參詣する風あり、一番は豐島村の西福寺、二番は沼田の延命寺、三番は西ヶ原の無量寺、四番は田端の與樂寺、五番は下谷廣小路の常樂院、六番は龜井戸の常光寺なり。

櫻咲く一重を彌陀の彼岸かな　文考
何を見て彼岸の入日人だかり　晁貫
戸障子を明放したる彼岸かな　水札

すみれ

スミレは一夜草、こま引草などの異名あり、山野に自生する草なり、花は濃紫色にして、花冠は五個の瓣あり、この草種類甚だ多く、その重なるものをすもとり花、えぞすみれ、香すみれ、つぼすみれとす、香すみれは西洋産にして香氣高し、この花愛すべき色と形とを具へたれば、春時山野を逍遙してこれを摘みとりて愛翫す、近來種々の變種を生じ、園圃に栽培して其色彩香氣を賞翫す、小兒は花を摘みとり、相交へて引合ひ戯れ遊ぶところよりすもとりばなの名は起れるなり、又此の植物は吐劑又は下劑性の成分を有せり、これを栽培せんには肥沃にして少し濕り氣ある砂地を擇み、中夏の頃種を播き或は分植す、寒地にては藁



又は苔の類を覆ひ常に水分を保たしめなば能く生育して親株より一種の嫩芽を生じ、地に這ふて發根し、漸次繁茂す火山質より成れる地質ならば時々水を灌がば又よく繁茂せしむるを得、冬季にありては溫暖にして且つ日當よき場所を選擇して栽培せば十二月より一二月の頃の如き寒冷の候にても能く開花せしむることを得るなり、種類によりては夏季に日光の直射するを忌むものあれば、かゝる種類のものは樹下等陰濕の地を選びて栽培すべし、肥料は油粕又は人糞の稀薄なる水肥を施すべし。

鼻紙の間にしほるゝ菫かな　園女
傾城の畑見たがるすみれ哉　凉菟
振袖のすみれにしめる野影かな　宇吟
なか〳〵によき衣恥よ野は菫　白雄
菫野や今見しむかしなつかしき　几董

あれはてゝ淋しきやどの庭なれば
　ひとりすみれの花と咲ける　樂篠院

あらすして暮るゝ春野の露ながら
　つめる菫に月ぞうつろふ。　小澤蘆庵

進歩しつゝある北京の貴婦人

服部博士夫人談

▲親類間の往き通ひが社交の第一

北京上流社會に於ける夫人方の交際の第一は、親類間の往きかひといふことで御座います。と申すのは、今の北京廷は、宗室（日本の皇族にあたる。親王は即ち宗室である）と、旗人（之れは皇室直屬の臣で、大臣などは皆それである）とから成つて居るのでありますが、結婚はすべてこの宗室と旗人との間でばかり行はれますので、親類の關係と申すものが非常に多くなつて居ります。處で支那は禮節を重んずる國でありますから、慶賀哀悼の事ある塲合の挨拶は、遠緣に至るまで一々叮嚀に行はれるので御座います。それで親類間の往きかひといふものが非常に多くなる譯で御座いますが、これは支那の夫人方にとつては大切なつとめの一でもあり、また社交の第一でもあるのです。

▲誕生の祝ひに芝居見物

一番重んぜられる儀式は矢張り御慶事で、すべて嚴重な家習のもとに、儀式が華やかにとり行はれるので御座いますが、この時は親類は敢へて夫人とは限らず家内中皆參られて、それ／＼役目を受持つて盡されるので御座います。之れに次いで盛んに行はれますのは誕生祝ひで、多く芝居が催されます。かの那桐さんのお祖母樣のお誕生祝ひの時などは、五日間も續いて芝居が御座いました。このやうな時にはいやでも參らなければ禮に欠るので、近い御親類では毎日參られるといふ風ですが、さもなくても二日位は必ず往つて御祝ひを述べ御馳走になつて、芝居を見てかへられるので御座います。しかもこの芝居は午前の八時頃から始まつて、翌日の午前三時頃に終るといふやうな長いもので御座いますが、大抵の夫人方は午前十一時頃から出

かけて、夜の一二時頃までは觀て居られるやうです。

▲贈りものゝ手廻し

斯ういふ風で、出産とか死亡とかのあつた場合にもそれ〳〵面倒な儀式がありまして、それ相當の禮を取り交はさなければならないのですから、それに就いての夫人方の心遣ひはなか〳〵大抵の事ではありません何しろそれをなさる親類の範圍といふものが、また非常に廣いので御座いますから、大概の邸ではそれを忘れないために何月は何處にお慶び事があつて、どの月には何處に御法事があるといふやうな事を月割に書き並べて、壁のやうな處に貼つて置かれます。そして手廻しのよい奥さん方になりますと、月の初めにまづ其月中に要る丈けの贈ものをすつかり作らへてお了ひなさるので御座います。

▲貴夫人達の私有財産

一體支那の婦人は一般に經濟思想に長けて居りまして、家政ををさめることが上手で御座います。極大きな邸になりますと會計があつて出納の事をつかさどつて居りますけれど、大抵は夫人自ら經濟をとりて家政を整理して居られます。それに大概の夫人は質屋とか小さな銀行とかいふやうなものを夫人私有の財産として有つて居られるのです。親王家なぞの財産は公共の財産と申しまして、三人御兄弟があれば三人の共有のもので、一人の自由にはならないのですから、夫人には斯ういふ私有の財産がなければ、迚も立ちゆかないと申して居られます。この夫人の私有財産は申すまでもなく夫人の勝手になるので御座いますが、主にまづ御孃樣方のお嫁入りの支度につかはれるので御座います。支那は日本のやうに流行がはげしく御座いませんから、時々衣服を作へるといふやうな事は餘りありませんけれど、其代りお嫁入りの時の支度がなか〳〵大層なもので御座います。ことに支那では寶石が澤山に入りますから、何うして容易の事ではないのです。其上矢張り質屋とか銀行とかいふものを私有の財産とし

てつけてお遣しになります。

▲多忙なる上流の婦人

日本では支那の婦人は家居して外出を厭ふもの、ことに貴婦人などに至つては、家の奥深くたれこめて、滅多に人に會はれぬものといふ風にばかり考へて居りますけれど、事實はこれと反對で、北京の夫人方などは、なか〳〵よく出懸けて居られるのです。ことに前に申しました芝居の折などは、夜歩きまでもなさるといふやうな風、支那本來の思想から考へますならば、寧ろ不思議に思はれるので御座いますが、何うして實際お出懸けが忙しいので、二日も三日も御主人に逢はれない事さへあると申して居られます。それに近頃は外國人との交際にも勤められまして、その訪問を喜んでおうけになりますと共に、此方からも亦出かけて往つて會はれるといふ風になつて居りますから、北京上流の夫人方はなか〳〵多忙に日を送つて居られます。それ故訪問いたしますにも、前以て申込んで置かなければ、面會が出來ない有樣で御座います。訪問時間は大抵午後の二時三時頃と決定つて居りまして、特別な用事でもなければ、決して其外の時間にはいたしません。殊に支那の婦人は取り亂した風で人に接することを最も失禮といたして居りますから、午前十一時頃までお支度の出來上らない前は、決して人に面會を許しません。

▲巧みなる應對振

支那の婦人は辭令に巧みで、能辯の方ですから、從つて人との應接はなか〳〵巧みなもので御座います。お客にでも招待されて參りますと、第一其の御馳走が非常に多く、御念の入つたお料理が數々とりならべられますが、其のお取り持ちがまた御馳走と相俟つて、實によいので御座います。話を始終絶さぬやうにと氣を配り、如才のないもの言ひをして、決して人をそらさない接待ぶりなどは、何うして日本婦人などの遙かに及ばない處で御座います。これで今後支那婦人の外

出がます／＼自由になり、交際といふ事が一層開けて參りますならば、その社交的手腕はなか／＼侮るべからざるものとならうと思はれます。

▲婦人は歐化しつゝあり

支那の婦人は一般に米國婦人を歡迎する傾きで、日本化するといふよりも寧ろ西洋化しつゝあると思ひます。五六年前一時日本熱の盛んであつた時分は、支那の婦人間に日本語のお稽古なども大分流行したやうで御座いましたが、今日では殆どそれを捨てゝ了つて、いづれも英語を學んで居ります。彼方の夫人達は、何うも日本語は日本の方にしか通用いたしませんが、英語ですと諸國の方にわかりますからといはれますが、それは實際尤もな事に違ひ御座いません。家庭敎師なども日本婦人は近頃至つて受がわるく、今日の北京上流の家庭では寧ろ西洋人を用ゐるといふ風で、唐紹儀さんの如きは、二人の亞米利加人を雇つて居られます。

▲兄弟を凌ぐ娘の權力

北京上流社會の女子敎育はと申せば、矢張り女學校などに入れるは稀な方で、家庭に敎師を招んで勉强させるといふ風で御座います。女の子でも十四五歳までは男の子と一緒になつて、主に讀書、數學、(珠算)習字といふやうなものを學びますが、十四五歳からは學問の時間をだん／＼減らしまして、お裁縫をすることになります。そして十四五歳までは男の子と同様辮髮で黒い服を着け、少しも飾りといふものをつけないのですが、それからは少し飾り出して十七八歳の頃になりますと、男の先生につくをやめ、辮髮を止して眞の髮に結び、愈〻女となるので御座います。そこでだんだん社交をはじめます。社交と申しても特別な交際をいたす譯ではありません、まづ御母さまの代りをして親類へ挨拶に行かれる位の事です。支那では一般に娘を尊ぶといふ風がありまして、お客を招待いたします時なども娘さんは一番正座に据ゑるものとなつて居ります。そんな譯からでも御座いますまいが家庭に於ける娘の權力といふものは非常に強く、男の兄弟などは

迚も足もとにもよりつかれない有樣で御座います。

▲女學生のストライキ

權力の强いのは單に娘時代ばかりではありません、支那の婦人が一般に氣づよい事は實に驚くばかりで御座います。氣强いを通り越して、突飛な人も、尠くありません。南方の支那婦人に至つては、更にひどい傾きがあります。かの革命黨に入つて斬首されました秋瑾女史の如き婦人はなか〳〵少からぬやう見受けるので御座います。恁ういふ風ですから女學校などのやり難いことは一通りでありません。支那の女學生は動もすればストライキを起して、敎師を追ひ出すといふやうな事をよくいたします。尤も外國人の敎師に對してはさすがに餘り亂暴な事も致さないやうで御座いますが、それでも日外は奉天の女學校で獨逸人の先生を追ひ出したといふやうな事をきゝました。何時でしたか北京の師範學堂でもこんな事が御座いました。歷史か何かの先生の出席が後れたので、日本の學校ならばまあ理事とでもいふやうな人が一寸代りに敎場へ出られたので御座います。處が其頃は女學校は皆女敎師で敎へて居つた時分の事ですから、生徒はそれを楯に取つて、女の敎場へ男が入つて來る法はないといひ出し、一同起つて了つて怒り出すといふ騷で御座いました。先生が說諭をなさると生徒は靜まる處かます〳〵怒つて『では明日から學校へ來ない』と申すのです。恁ういはれると學校でも困るもんですから、この『學校へ來ない』と云ふのが、生徒の十八番なので御座います。恁う云ふ所は支那の女學生は却々上手で御座います。

▲購買組合共榮社

米、味噌、薪の日用品を始めとし衣類、化粧品等の品が消費者の手に入る迄には、製造者より仲買人、問屋、小賣商など幾段の手を經、値段も從て高まるより、近來諸方に購買組合なるもの起りて、成るべく安價に日用品を得んとしつゝある事なるが、此の共榮社は昨年一月の創立にかゝり、事務所を京橋區新富町一丁目八番地に置き、既に千幾百名の組合員を有して、着々効果を擧げつゝあり、其の組織の大要を聞くに、組合員となるには東京市及び附近郡部の在住者にして一口貳拾圓の組合資本を醵出するを要し、組合員となりたる時は、以後日々所用の品物を安價にて配達せしめ、組合の事業より生じたる利益は自分の持つ口數に應じて配當を受くるを得るなり、尤も右醵出の組合の資本金は最初に拾圓を出せば、餘は二ケ年以内に納むれば可なりと云ふ、世間知名の士にして會員たる者頗る多し。

上流家庭より學ぶべき美點

梅香女塾　木村貞子

△幼時より浸み込んだ習慣

上流社會の家庭には中流以下の家庭に見られない美點が澤山御座います。殊に舊大名方の家庭になりますと、如何かして下々へも學ばせ度い、後代へも殘し度いと思ふやうな美風が澤山あるので御座います。是はお家の組織上からも自然さうなるので御座いませうが先づ、何よりも鷹揚で從順で被居います。それから非常に義理を重んじ、遠慮をなさいます。決して下方で思ふやうな我儘な振舞をなさるものではありません。たとひ如何な新教育を受けた奥方でも、お家の氣風が然うである以上、永年奥向きを預つて居る老女などの前に唯々云つて被居るのです。それからお子供方でも非常に素直で、變に拗けて居るといふやうなことがありません。そんなことを爲すつちや可けません、お止しなさいと言へば直ぐに止し、勉強なさいと言へば、たとひ出來ないながらも溫和く勉強なさる。下樣の者のやうに磨れて居るとか、コセ〳〵して居るとか、又は他の目顏を讀むとかいふやうなことが御座いません。萬事に鷹揚で從順で實に日常の擧動が床しい程で御座います。是も皆幼い時分から浸み込んだ習慣の所爲で御座いませう。

△麗しき長幼の序

それからお子供方からして禮儀作法が正しく、義理といふことを善く知つて居られます。たとへば座列のことにしても、下方なら何人が上座であらうと介意ふことではありませんが、大名方の家庭になると、是が非常に喧しい。決して弟が兄の上位に坐るなどゝいふことが御座いません。又稀には口論等が起ることもありますが、然ういふ時でも、打つの擲るのといふことは假にもありません。御子供方には銘々附添の婦人がありまして、假令自分のお預りして居るお子樣に理屈

がありましても對手が兄上なら自方の方を叱るといふ風、又兄君の方でもそれだけ戒められるといふ風で、長幼の序が誠に麗しく立つて居ります。

△奥床しき兄弟間の言葉

善い言葉を使ふといふことは何でもないことのやうに思はれますけれど、却々六かしいもので御座います。兎角下々では何程敎へましても不覺亂暴な言葉を使ひ勝で御座いますけれど、上流の家庭にまゐりますと、誠に言葉使ひが上品で、聞いて居るばかりでも善い氣持が致します。兄上でも御舍弟でも皆、樣付けで、兄の權威を笠に着るやうな言葉などは微塵も混つて居りません。私共の塾に只今前田家の御息女をお二方お預りして居りますが、此間も兄上に當る御子息――と申しましても未だ漸と十四五歳のお子さんで――がお出でになりまして、お妹さんと御話しなさるのを、側に居て聽いて居りますと、何方がお兄さんで何方がお妹さんやらわからぬ位、それはそれは美しい御言葉で、ほんとに床しく思ひました。

△治者と被治者との氣風の相違

奥方でも令孃方でも單獨で外出なさることがありませんから、從つて金錢を自らお拂ひなさることもありません。ですから金錢上の觀念も自ら薄い譯。と申しても昔の所謂「お大名樣」みたやうに全然金錢の價値を知らないやうでも困りますけれど、此頃のやうに世を擧げて拜金宗になるやうな時代では、却て金錢上の觀念の薄い方が結構では御座いますまいか。要は金錢の費ひ途、活かして使ふ方法さへ會得して居たら澤山で御座いませう。

斯樣に下々の及び難い美點が多いのも、思ふに小さいながらも一國の君主であり、治者であつた家柄が自然と斯樣な鷹揚な品格を作り、氣風を傳へたもので御座いませう。畢竟は治むる者と治めらるゝ者との品格の相違。日本も世界の大國となつた今日、その國民たるものも大國民の襟度として、一般に斯樣な上流社會

の美風を學ぶべきでは御座いませんか。

△腹は日本流、頭腦は西洋流

かと申したからとて、只鷹揚なばかり、只素直なばかりでは可けません。益々知能を啓發するやうにせねばなりません。時代に後れるやうでは折角善良な家庭に育ち、善良な品格を有して居ても何にもなりますまい。何と言つても新しい敎育を受けた婦人は判斷に富んで居り、物事をテキパキ行つて退けます。新しい時代の敎育は益々發達せしめなくてはなりますまい。然しながら餘り突飛な婦人や輕薄な婦人が出ないやうにし度いもので御座います。此頃の婦人は一體に氣が浮々して居る少しも取止めが御座いません、丁度此頃のニヤケた男子と好一對、あれでも困つたものでは御座いませんか。何卒腹は何處までも日本的に、頭腦は何處までも西洋の文明的に、言ひ換ふれば士魂洋才といふ心掛けで進んで貰ひ度いもので御座います。私の考へでは形而上の方面——精神修養の上では如何しても日本在來の敎に從ひ、形而下の方面——知識啓發の上では矢張り西洋の新しい文明を學ばねばなるまいと存じます。

何にしても今少し確固した腹を造らねば可けません。此の修養には古來日本人の性格によく合つた孔子の敎から入つた方が宜くはありますまいか。それから私は儀式格式を重んずる武藝を是非女子へも習はせ度いものと平生思つて居ります。小さい時から武藝を仕込まれた昔の婦人方が老年になつても壯健で、身仕舞がよく確固して居のも畢竟は規則正しい武藝の感化でせう。

△日本女子商業學校

同校は、由來、園遊會や夜會に幅を利かせる奥樣よりも、能く家を治めて二人使ふ下女は一人ですまし家事費用の儉約、進んでは一家の收入の手助けにもならんとする妻君を養成する方針なる事は人も知る所なるが、學級は本科高等科の二つに分けあり、本科は四ヶ年、科目は普通の高等女學校と大差なきも唯筆算、珠算が進歩し居る事と、簿記、商業經濟、タイプライター等を加へられたる事が聊か異なれり、されば生徒は商家の娘が多きも、嘉悦學監は常に士魂商才と云ふ事を説き、萬事實用的の思想を鼓吹せらるゝより、生徒も其の氣風になり「官吏や軍人の奥さんなんて面白くない、共稼ぎの方が餘程趣味がある」などゝいへり、高等科は二ヶ年にして普通卒業、或は一般高等女學校修了者の入るもの、又其の外に一ヶ年にて濟む速成科と云ふものもあり。

社會百生活（二）

女寫眞技手の一日

覆面女史

今日は日曜ではあるし、好天氣と來てるから、嘸來客が多い事だらうと、朝飯を濟まして、一寸受付を覗いて、二階へ上つた。

來客の多いのは可い事なのだが、雇はれてる身にしたら、忙しいのはあまり嬉しいものぢやない。原板が澤山溜まると、修整するのがつひ粗略になつて了ふ。これも技術だから、粗略にして下手だと、後々まで殘る事だから、私の不名譽になるのは知れきつてる、だが客がなくて暇だと、奥様の不機嫌な顔を見なければ成らない。其ればかりか食物にまで影響してくるからかなはない。

今日も朝から修整かと思ふと、うんざりして了ふ。修整もよいが、邊りを薄暗くしなければ成らないので、何も見えないから、氣を紛らす事が出來ない、其れに原板ばかり見詰めてるので、自然精神が統一して了つて、過去や未來の事が、判明と心に浮んで來て、詰まらぬ空想をする樣になつてしまふ。今日も又何時の通り、種々の事を考へ出した。

開業する時には何う云ふ風にしたら、人の眼を引く事が出來るだらう、何でも他の館にしてない樣な、嶄新奇拔な趣向をして、まあ那の寫眞館は、若い婦人が開業してるのださうな、位置の取り樣なんかハイカラね、どうして其處等の寫眞館なんかと、趣きが違つてるは。私も撮すから、貴方も行らつしやいよなんて、評判になつて、千客萬來、四五年も經つ内には、丸木や江木あたりと並び稱せられる樣になる……。

おや、仕難い。まあ此のでこぼこと皺の多い顔は！此れだから年寄の顔は厭だ、肉付きの可い若い女の顔か子供の顔が一番しよい……。

だが這麼陰氣な事ばかりしてるのはほんとに厭にな

本品は

全國有數の同種類中其の質最も佳良にして又實用に適せるが故に世人の賛辭と需用益々多大なり

本品を以て

赤毛を染むる時は優に半ヶ年以上を保つと云ふ奏効禮狀日日到着せり

使用法

手輕にして實用と安全とを兼備す



(その一)

女(その二)

學年末試業に際し各學校教官諸氏に告ぐ

學年末試驗の賞與品には飲食物其他一時的の物品よりは教育に裨益ある書册を以て賞與相成方御便益とは既に御案内の事と存候從て當館には此目的に恰好致し候讀方、修身、綴方、歷史、理科、算術、遊戯等の教科上兒童の參考となり興味と實益とを兼ねたる少年書類澤山取揃え有之且つ直段も賞與品として至極適應の者に御座候間右御採用の榮を蒙り度詳細は當館の出版圖書目錄に就て御一覽の上御撰擇下され候樣希望仕候

尙各學校より取纏め御注文被下候はゞ精々勉强可仕候間當館販賣係へ御申込被下度候

東京市日本橋本町

博文館

販賣用電話本局二一六二〇番
振替貯金口座東京二〇四十番

●注意 圖書目錄は御申込次第即時送呈可仕候

●小兒五かん驚風
●蟲おさへ

登録商標 八

小兒蟲一切妙藥
本方 **奇應丸**

定價 金五錢 金拾錢 金廿錢 (遠國送料金貳錢)

東京市京橋區銀座三丁目

發賣本舖 八 **松澤商店**

賣捌は全國諸々藥舖賣藥店に特約あり (電新五三四)

簡易複寫インキ

器械不要

蒟蒻版寒天版及び其他の印類又は器械いらず此インキ一品にて簡便迅速座上立どころに文書畵版數十百枚を印刷し得べし本品はすでに諸官衙及び郡區町村役場等の採用品たり

●定價 二オンス壜入送料共 金參拾錢 郵券代用壹割増

下谷坂本町二の廿四

中村屋商店

女(その三)

嶄新奇抜なる大々的文字に十萬の愛讀者諸君は必ずや拍案快哉を叫ばん

冒險世界

三月五日發行 第二卷第三號 定價十五錢郵稅二錢

壯快の文字は由來本誌の特有なり
讀者諸君是れを愛して本誌愈々盛大なり
本誌愈々盛大にして壯快更に壯快を加ふ

愛讀者諸君の熱望により
本誌は本月二十日壯絕快
絕なる臨時增刊を發行す

（その四）

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 振替貯金東京二百四十番 博文館


幼年畫報第四卷第四號増刊
さゝなみ作　古洞畫　三月十五日發行
ウントコぢいさん
菊判美麗畫本…●石版極彩色刷十六頁●活版二色刷十六頁●光澤寫眞版四頁
正價一册金拾錢▲郵稅一册五厘宛
おもしろいのはウントコぢいさん!!朝から晩まで町中を、ウントコウントコ云いながら、腰を曲めて歩いてる、これを子供が見付けたら、ソレ又好きなぢいさんが、今日も來たかと懷しがる、ウントコぢいさん罪わない、子供對手にニコ〳〵と笑顏で話すおもしろさ、太郎はきいてアツハハハ、お花も同じオツホホホ、皆さんこれがきゝたくば、ウントコぢいさんお呼なさい、ウントコ〳〵やつて來る
東京本町
博文館
振替口座番號
東京二四〇

(その五)

女(などの六)

實業に志す明治少年の大好評繪入雜誌

◎毎月一回一日發行
◎四六二倍大判紙數七十二頁上等紙刷

實業少年



第三卷第三號 三月一日發行

正價一册金拾錢
郵稅一册金壹錢

各商店會社銀行及び諸製造工場内の少年諸君

▲新歸朝の諸氏について歐米文明の眞事情をきけ

▲本多靜六ドイツの子供にへこまさる本多博士▲ドイツの下宿生活の眞狀川合教授▲一頭二萬圓の犬を愛す須藤博士▲はぎ合せばかりで家具を作る深見教授▲我國に見られぬ海陸の連絡門野支配人▲紙屑一つ無いベルリンの大道栗本博士▲英人の紳士的態度と米國婦人のおきやん山田支配人等、さしゑ澤山

工業

石鹼製造工場パノラマ寫眞十數葉……石井研堂

獨習世界

英語獨習、習字獨習、簿記獨習、算盤獨習

胡瓜栽培法……何れも本誌大特色

奮鬪世界

大道飴屋より雜貨大商となつた野村氏の奮鬪實談

大會社危難を救た少年給仕の商略

口繪

▲伯林市の大盛觀▲龍動市の車影馬響

▲石鹼工場活況▲野村氏とサムライ商會

千紫萬紅

讀者身の上の相談に應ず▲海外奇報河岡潮風……

据置貯金進呈壹百圓▲……川柳俳句考物電報……文募集何れも懸賞

本誌は立身出世を教ゆる最良の指導者なり!!!

女（その七）

（郵便振替口座東京貳四〇番）＝東京本町博文館＝賣捌全國各地書店にあり

世界第一の高館

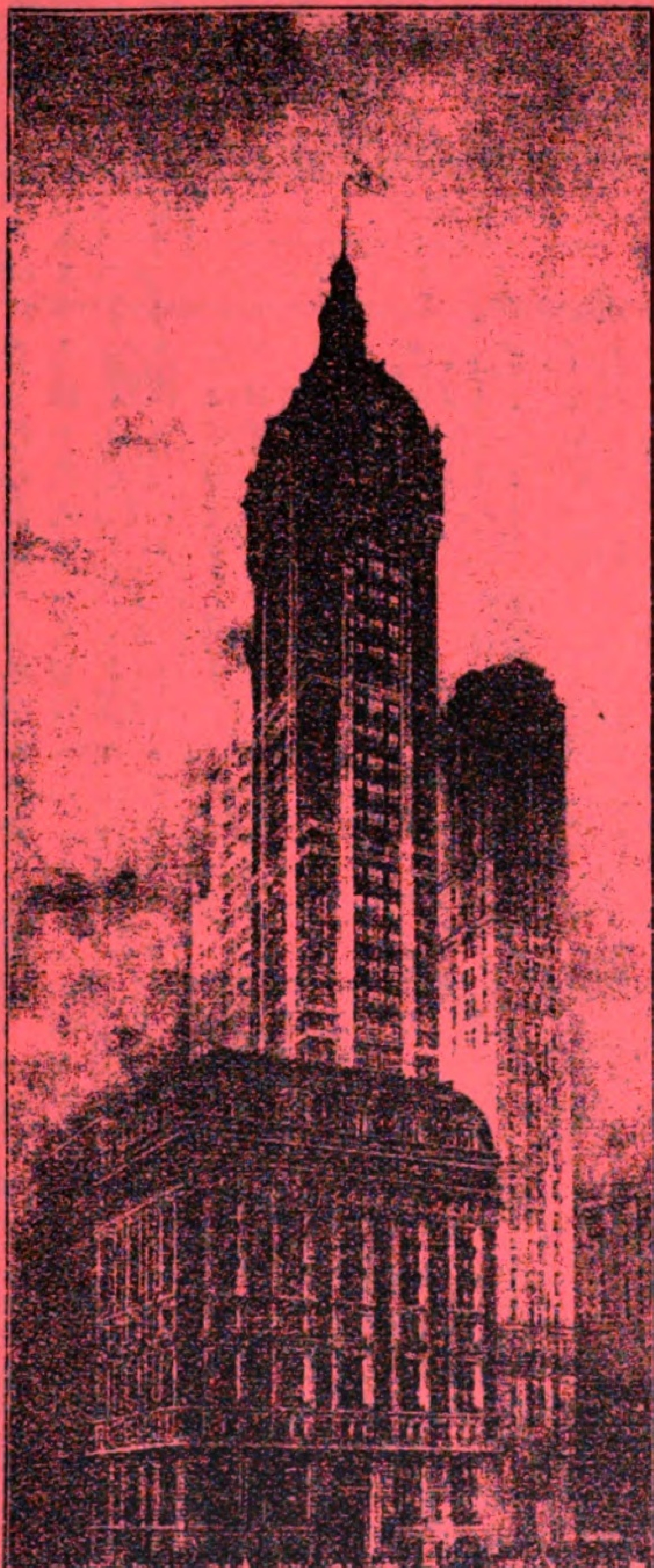
四十七階高サ六百十二呎

（百間即チ一町半餘）

明治四十年落成

米國紐育シンガーミシン會社本店

ミシンを御求め下された時には
其ミシンが立派に使へるまでに
下の方法を以て遺憾なく御便宜
を計ります



東京、大阪、横濱、京都市内
ミシン裁縫無料出教授

全國各地方 **巡回裁縫講習**

内地一般 **運賃無料**

ミシン使用法書
ミシン裁縫書 **進呈**

家庭用婦人向 **シンガーミシン**

月賦販賣

○明細書御申越次第無代進呈○

横濱市山下町六十一
東京市銀座通尾張町
大阪市南區心齋橋筋

シンガーミシン會社

つて了ふ、早く自分で開業する樣に成りたい。私等貧本がないばかりに、僅かの月給で、他家に使はれなければならない、眞實に馬鹿々々しいと不平が起る。

待合室の方に誰か來た樣だ、書生の小林さんは如何したのだらう、居ないのか知らん、屹度使ひに行つたのだらう。村山さんは燒付をしてるから、彼方には居ないな、すると私が出なければ、ならない……。

鉛筆の尖を折らない樣に、要心して置いて、急いで待合室に行つて見ると、新婚とも思はれる若夫婦が、ニコヤカニ見本を見て居る。



彼來つしやいまし……。お二人御一緒でムいますか……それぢや餘り小さいのは不可ませんですね。

此れは如何ですと。私は中判の矢張、夫婦寫しの寫眞を、奥樣の方に出して見せた。

然うですねえ。……所天、此の位で可いぢやありませんかと、婦人は私に首背いて、夫に相談しかけた。

今日は先生がお留守だから、私が撮影しなければならない。然う思ふと、二人の顏の格好から、着物の色合などに氣がつく。光線の事を考へる。

暗室に運入つて、乾板を取枠に入れて、撮影の準備をして。お仕度がお出來で厶いましたら、何卒此方へと、寫場に案內した。

寫す間も氣が氣ぢやない、よく撮れて吳れば可いが出來がよかつたら、私の名譽。まあ大きく云へばだ。……あれ、又裾に皺が寄つた、一寸凝坐として吳れゝばいゝのだが、私は焦點板を覗いて居て、獨で氣がもめる。餘り云ふのは、客に不快を覺えさせるから、云ふまい、どうせ不自然な表情しか出ないのだから、詮方がないわ。一體日本の寫眞は型にはまつたやうに、木像の人間が映つてる、客も不慣なのだが、技術者も下手なのだ。いや未其處迄進んで居ないのかも知れない。私なんか、可成客の人物にはまつた樣に撮らうと思ふのだが、らしい表情を少しも現してくれない。此方が、あゝかうと云へば、其通り、殆で自分の身邊に可怖いものでも居る樣に、力を入れて堅くなつて、虛心平氣なんていふ態度は迚もできない。其れでもそのまゝ凝坐して居て吳れればいゝのだが、こちらが機械の側に來て。

焦點をあはせ樣とすると、さあ强情者の居ない內にと云ふ樣に、狼狽て髮を弄つたり、襟を搔合せたり、袖を直したりして、ちつとも不動の姿勢を取つて吳ない。御自分の方ぢや見えないと思つたつて、此方ぢやちやんと被布を被つて、焦點板から見て居るのだから、隨分可笑いことがある。今だつてさうだ、眞實に癇癪にさはる。

一寸お動きになりません樣に、只今直きに寫しますからと、注意したら、二人共可笑い程、反身になつて、口をきゆうと結んだ、未此の人達は左程でないが、老人か田舍の初心者なんかとなると、此方が何か云ふたびに「ハイ、ハイ」と、返事をする。其れから何程注意しても、齒を出す人がある。ハイ、宜う厶いますと、撮影後此方がおじぎをすると「ヘイーもう寫つたのですか」なんて、さも不安相に、容易に腰を浮せないのもある。

此客が歸ると、引違ひに、女學生が二人連で這入つ

て來た。一人は鳥渡瘠形の、人目を惹く方で、自信もあると見えて、大分裝飾もしてるが、もう一人の方は、面もまづいが、風采もあがらない、それだけ遠慮して、鏡の前にも多く立たない。實を云ふと寫眞屋だつて美人を歡迎する。美人だと撮る張合があるもの。依賴外に餘計映す樣になる。素人などのは出來ないが、藝妓、又は然う云ふ種類のものは、看板に出す事が出來る。



正午迄に七組の客があつた。午後には先生も歸られたので、修整室で、又無言の業をやつて居たが、眼も思想も疲れて來て、知らず〳〵居眠りが出てしまつた。斯う云ふ時誰か話相手があるといいなあと思つてると、小林さんが突然這入つて來て。

三木さん三木さん、其れいつかの、素敵なのが、又來ましたよ。

……先生、ニコ〳〵ものだ。

此人はまだ年は行かないが、なか／＼口達者で、人づれがしてるが、又可愛らしい處もある、私によく馴付いてる。

然う、藝妓？と、私は笑顔で、心持よく應對してやつた。

え丶然う。先生先刻から夢中になつて、撮つてますよ。乾度、又半打位寫すのでせう。時でもないのに汗を流して、御苦勞樣に、先方ぢや迷惑でこそあれ、有難いとも思つてないのに、おせじだら／＼で、獨よがりの笑壺に入つてるから、可笑いや。彼の樣を奥樣に見せたら、ハヽヽヽ

那樣大きな聲で云ふと聞えてよ。

主人にも氣に入らぬ事があるだらうが、使はれてる者にだつて、不平はある。私等三人寄つたら、乾度種種不平の云ひ合ひだ、餘計不平のあるもの丶方が、怜悧の樣に思はれてる。

いくらか仕事にもあきたので、窃と寫場を覗きに行つた。

此前來た時は、高島田で、黒紋付の上品の風采だつたが、今日は又恐ろしい粋だ。

しなりしてるから、縞御召か何かだらう？遠くて柄はよく判明らないが、色は栗梅の樣だ、裾裏は、柿色が丶つた、表と非常に對照のい丶色で、下着も總體同二枚重の袷衣だ、光琳模樣の、白茶が丶つた帶を、きちんと締めて、お端折の處から、襟の邊が、實に震付きたい樣だ。襟は濃紫紺の西洋花の模樣で、第一にそれが目に入つた。

あれが眞の美人と云ふのだらう？大きな派手な顔で少し青白いが、これは彼等特有の顔色だから詮方がない。濃い地藏眉の、鼻の肉付きよく、口の思切り締まつた、威厳のある容貌だ。これが賤業婦とはどうしても思はれない、あのまあ可愛らしい口から、男を手玉にとる怨言がほとばしるかと思ふと、不思議なくらゐだ。根下りの銀杏返しで、スラリとした身體を、外景背景の前に、横向きに立つて、黄金頭の長柄の洋傘を、さしかけ樣としてる處だ。素敵の尤物實になんとも云

ひ樣のない程艶麗だ。男子が迷ふのも無理はない。雜誌の口畫に書いてある美人が拔出た樣だ。先生此れぢや、魂を宇宙に飛ばして了ふかも知れない。

私はどうしても、此藝妓が賤い身とは思はれない、我々より以上の人物の樣に思はれる。豪い、確に豪いに違ひない。形而下の婦女子の望みとしてる、物質的の虛榮を、身一つに集めてるのだもの、其れが皆自分の腕一つで拵へ上てるのだから豪いわ、幾多の健兒をして、名も財もなくして了ふまでに迷はせるのだもの、私等には迚も人間一人迷はす力はないのに。噫！今の世のクレオパトラ、あゝどう見ても、矢張美人だ。思ふと何んだか情ないやうな氣がする、もうこんなせゝこましとした仕事は厭になつてしまふわ。どうせ一生だわ、うんと派手に、面白く騷いで暮したい。這麼事を考へ出すと、もう修整する氣にもなれなくて、ぼつとしてゐる――ふと我れに歸つてア、これも又心の迷であるときつと戒んだ。

夕方、質朴さうな學生が、這入つて來て、先日の寫眞、もう出來ましたかと受取を出したので、寫眞と合せて見て、出してやると、ぢつと見て居たが、

こりや不可ないと、私の顏を見上げたので。

如何してゝす？大變よく映つてる筈ですが、どこがお氣に入らないのです？

いや餘りよく撮れ過ぎてるのだ、僕は這麼に好男子ぢやない、色だつてもつと黑い筈だ、ハヽヽヽ、國へ送るのだから、兩親が見たら、喫驚するからね、忰は東京へ行つてから、大變に好男子になつたが、學問の方はそつちのけにして、美顏術とか云ふものでも塗つてるのぢやあないかなんて、親父でも上京したら、大變だから。

オホヽヽ其れぢや、でこぼこの穢い顏にして上げませうか。

いや澤山、時によつちや、斯う云ふ寫眞の入用事もあるから、いゝよ、どうもお邪魔、左樣なら、と磊落さうに、さつ〳〵と行つて了つた。なんて面白い人だらうッハヽヽヽ、獨で可笑くなつてしまつた。（完）

女書生の不平錄

八面玲瓏女史

思ひ出すと可笑しい事務員から、がらりと變つて書師の女書生、運命と云ふものは面白い事をするものだ前の家から運んで先生の二階の押入につめこんである荷物を初めて片づけると胸がスツとした樣だ、けれど古釘で足の裏を、ついたので痛い、キク／＼と頭の中まで上る、奥樣の妹樣が來られて大變心配して下さつて、お藥つけたが、すぐ取て終つた、ます／＼痛い、青々と茂つた楓の枝が二階の手すりまで延た毛蟲がウヂウヂと澤山居る、來たその日から直ぐ筒袖のカビ臭い樣なのを引づり出した白の胸前掛しめる、東京に居る時分にこしらへたのでなつかしい氣がする、敷板の上にペタリと坐つて腐つた臭氣の鼻をつく繪の具筆をなめて、屏風を書くのだ、足の裏が痛いので氣になつて仕樣が無い。

屏風は本金に京名所の圖、東山を遠くに望んだ少さい三寸位の人物を一双に五六百も書のだから大變だ、朝からブル／＼汗、肌着がベタ／＼に成る、そつと手を脇の下にやつて見るとヒヤリと氣味が惡い、先生は下で鶯の餌をして居られる樣子、惡質緑青をドロ／＼に溶て山を塗る、ニカワの加減か乾き後から白くなつて行く、暑ので腹が立つて仕樣が無い、來た日から挨拶も、すむやすまずに仕事を云ひ付る人が何所の世界にあるものか、通つて居る時分には、ほんとうに好先生だつたのに……。

下からお手がなる、今大切の所を書て居るのに、ほんとに心の無い方だと不平たら／＼下りて行くと、まあよかつた、御飯が出來たのだ、赤や群青、胡粉のベタベタについた前かけの儘、御飯を頂く、今日は來た日に御馳走が無かつたからと、ブリの燒たのに溜醬油が掛てある、それを見て坊ちやんがむづかるので、えゝ不行儀な子よと心に思つたが、お召りなさいと上げて終ふ、そして私は嫌な臭のする澤庵で頂いて了つた、

人に物をつける時には少々の事でも子供には遣すものだと、しみ〴〵思つた、先に頂いた臺所に立つと、「これは私が洗ますから」と仰言ながら、拔目なく續々と汚れものを所せまきまでに並べなさる、仕方がないから皆一緒にバケツトに入れて水道のホースを入れ、栓を拔ても十二時過だから出ない、汲置の命水とも云ふのを使つて洗つて了ふ、もう目がくらんでも水は呑めぬのだ、洗物を爲ながらも氣に成るのは奥樣のお頭、陣笠をきた程擴げた横に出した前髮蝶々に御結なすつた髷のお粋な事、些いの



に仕事の間にも横に鏡を置て、前髮ばかりなでまはして居らつしやる、私なら坊主頭にでも成て了ひたいとさへ思つて居る程だのに、しかしこれは私の髮が惡いからつて岡燒半分では無のだ、早く一度に食てお終ひなされば好いのにいつまでも〳〵坐つて居らつしやるから嫌になる、「書かけてありますから」と、其まゝ洗ひ物を拭て上つて終ふ、私の樣な氣まゝ者がつとまるか知ら、二階へ上つて見るとムツと暑い暫くと「女學世界」を讀む、相變らず秀方先生はお上手なもの、年方先生その儘のお筆、

早く半分でも出來たら好いのにと思ふと、仕入の屏風書くのが嫌になり、足なげ出してウットリと見入て居ると、先生の足音、驚いた本を投出して屏風の上に飛あがる拍子に、足の爪先があたつてバリッと二間も破れた、またゴテ〳〵を聞かねばならぬのか見付るまで知らぬ顔をと衛街色の袴の裾を引て隱して了ふ、自分乍ら恐しい心と驚きながら。

顔を上げて見ると後に立つて見て居らつしやるのは先生、實に何時見ても奇麗な方、昨日まで居た隣の下女が東京の俳優の伊井と云ふ樣だと云つて居たが、眞實さう見える、私の弟子入も少しは其點もあつたか知れない、けれどそれはまア噓として置かう、これで最少し心がしつかりして居らつしやれば好いのに人の前でも何所でも弟子の惡口や人の惡口を云つたり、朝起るとから奥樣と爭の絕間なしだから困る、三本程の髯を大切さうにひねり上げて居る人、この樣な大きなもの[illegible]せ切り、御自分は私の後の方で[illegible]「女學世界」の名家の令孃の品さために餘念が無とはあんまりだ……這入る口が無にもせよ、私は調もせず何故此んな所に弟子入りをしたのであらう、泣きたく成る、また御手がなる、屏風の破れが見えるのだ立にくい、敷板を後ろに引て隱して終つた、下りて坐ると奥樣は、大肌ぬき、乳の下から赤い腰まきの端が見える、側にはいつも師匠が熱心だとほめて與たと仰言る義太夫の本と三味が置てある、御用はと伺ふと、赤い小さい巾着から大きい銅貨を摘み出して、「これで清元の三を買て來と與れ」と仰言る、私は又かと嫌になるのです、日盛の暑い最中に、ポテンポテンと情ない音さして、さらへないでも涼風の立夕暮にでも、なされば好いのだ、みん〳〵蟬が五月蠅鳴くのに、「そりや聞えませぬ傳兵衛」でもあるまいに、繪畫の書生もかう止まなく使はれては仕方が無い、口先ばかり畏まつて角の琴屋まで行くと、丁稚が顔見る、餘り度々だから變に思ふのだらう、歸りに途中で考へる、京都の松園さんも、東京の蕉園さんも蕉華さんも美人畵は大變よく御出來なさるのに私は女の顔さへろ

くに出來ないんだのに、屏風ばかり書て、私一人で書く屏風の畫料は皆先生が取てお終ひなさるし、そして私はお小遣も頂かないで、奥樣と一緒にお湯に行と風呂錢まで私が立て替るのだもの金が少々でもあるうちは好いが無くなつたらどうし樣、おゝさうさう此の間坊ちやんの浴衣の肩あての代十二錢も頂かねばならぬ、私が知らぬ顏して居ればいつまでも頂く事は出來やしない、奥樣は私を何所まで金持て居ると思つて居らつしやるんだらう、此の間の雨の時も奥樣が奈良の富豪に畫料を取りに居らしつた時の留守で、御菜の無い時も二日分私の金を三十七錢五厘出してあるのに知らぬ顏だし一度の芝居行に十二三圓も要たと、いつでも話なさるのを儉約して、溜つて居る家賃の四分の一でもお拂ひなされば好いのに、お漬物の鹽代からお米の足らずを一升買するのも私のお金で引受て居るんだもの、これで若し酒でも呑まれたらどう仕樣、こんな事を考へると全く嫌になる、思ひ切りぐづぐづして歸ると奥樣は、變なお聲で、玉藻前の三段目を唄つて居られる、叮嚀に前



に置いて直ぐ二階へ上がると、又先生に呼びかけられる、又かと思ひ乍ら返事すると、十五日から第二回の展覽會があるから出品の下書でもこしらへなさいと仰言る、まち設けて居た所だが夜業にもう下書してありますと出して見せる、先生は人物は少しも出來ない、否出來ても美術畫報や日本美術の中から廣業さんや半古さん果は古の名家の迄引づり出して自分の名前で出しなさるのだもの、私の畫を見て、直さなくとも好い、足の指だけ一筆書いて下さる、屏風をしまつて昨日張てドーサをかけて置いた絹をのべる、繪の具の好いのが無いので悪い屏風に使ふのを、少し頂いて當世美人の立姿を二尺に四尺五寸に書く。

東京に居る時分先生に敎へて頂いたので左程困難もせぬだらう、私は東京で先生にいつた事は今の先生には秘密にしてあるのだ、襟を塗て、白緑を着物にかけた、腰のあたりが少しムラになる、筆の腹を使つたから[illegible]で其儘にして置く、一人の人物の[illegible]時計を見ると丁度二時間半程かかつた、もう夕のこしらへをと思ひ乍ら代赭筆取ると下で唄ひ聲が止んで子供が泣のを、すかして居られる樣子、帶の下塗しかけたので知らぬ顔して居ると、奥樣の足音が大きく聞えて「津田さん御飯炊とくんなされや」そらと思ひ乍ら好いしほに立ち上がつて絹を立てかけて下りる、繪の具皿も片づけず、下りるは下りたが、二階の話が氣にかゝるので、そつと拔足に中程まで上つて聞耳立てゝ居ると、先生の聲「彩色の仕樣を知らぬ者はこんなものだ、こんな江戸ばんこの樣なものが出品れるものか」まあそんなに仰言るのなら私が御願して彩色の相談する時に「貴女が好いと思つたらそれでえゝんだ」なんて仰言らずに、何故かうせよと云つて下さらないんだらう、知らない事を敎へて下さるのが先生だのに、もう腹が立つて〳〵ムカ〳〵する、いつそ飛上つて墨塗て終ふかとも思つたが、短氣は損氣、いつも奥樣は師匠と弟子との間柄は、親子も同事だと仰言るのに、陰にまはつては弟子の悪くち云ふ人が何所の世界にあるものかエヘンと聞えよがしに

無理咳して米を仕かけた釜の下に火を入る、今日は生木ばかり入れて、二階を思ひ切り煙に仕様と惡らしい考へを出す、昨日漬ものしたので手がビリ〳〵する、焚きかけてお豆腐を買に行く、又私のお金を出さねばならぬ、申上げてもあるきづかいなしだ、ほんとに家の中と云ふものは何時金が要るかも知れないのに……

夜は家内中緣日に行く、先生と奧様と肩を並べて私は坊ちやんを負つて行く、先生と二人はベタ〳〵もつれ合つて居なさる、私は後から重石のやうな坊ちやんを負つて女中の様について行く、氣のきかない事夥しい、坊ちやんに脊中で動かれるから猶重い、奧様は脊が高いので、先生より髷だけ上だ、女はスラリとして居るのも好いが餘り高いと見ともないと思つ



た、天滿橋の上は東から來る川風に着物の裾を捲られまいとするので大變だ、凉しいので生き返つた樣、極樂のあまり風だと嬉んだのも私一人では無からう、擂ちがつた時バイオリン持つた學生が『イヨー眼鏡ッ』と叫んだ時の情なかつた事、奥様はお目が近いので近眼鏡をかけて居らつしやるが餘り自慢さうになるから

いけない、通る人が見て目ひき、そで引きするのを見るのも嫌な事、天滿神社の中で紅葉と霧島と買はれた中で知人に逢たので其人が直切役、一圓のを二十錢に直切つて、そして金を拂はされたので、歸りに、うどん屋に三人でお入りなさつたのだが私は坊ちやんが眠られたので『お先へ』と氣をきかすと『そんなら後から直ぐ歸りますで、寢どこ敷いてやつとくんなされ』口先ばかりでも『まあ一緒に』と云つて下されば滿足するものを……私は重い足を引きづり乍ら半里餘りも坊ちやんを負つて歸るのだ、後ろ手に霧嶋を下げて。

▲

昨日揮毫會の事で先生と奧樣との間に大變な爭ひが持上がつて、そのとば汁が罪もない、鶯にかゝつて、可愛い聲で鳴いて居るものを奧樣が絞殺してお了ひなさる、後で聞たら二百圓にお客がついて居るのだつたとやら、先生にはお氣の毒よと思つたが、暑いのに遠い所までスリ餌を買ひに行く世話もないので結局有がたいとも思つて見たり、後に居る三羽の子も、どうにかなれば……とも思ふ、昨日振上られた奧樣の、火熨斗で頭をたゝかれたので、グワン〳〵と痛い、爭ひの仲裁などするものぢやあないと思つた。

今日は朝から先生と奧樣はもの云はずだ、苦しいにちがひない、朝御飯頂くと出品の繪畫を博物場まで持て行く先生のは禮受に都新聞の新年附錄、岩船の能を寫して、繪の具の色まで其まゝに、私は、華村さんに申上げたい樣な氣がした、これで審査に合格すれば審査員の誤りだと思つて見て居ると、その結果、先生のは朱の毛色と、一の松、足のふみ方が、間違て居る爲思ひ通り不合格、矢張人の繪を寫したりすると駄目だ屛風屋さんにも御氣の毒だ、私のは中の部で合格、頭の髮が少しうすい樣だと思つて居たが、それは審査の上には關係なしとの事先よかつた、並べられた箱の位置まで覺えて嬉しまぎれに汗たら〳〵歸つて上申すると、先生は顏青くして怒られた。

先生の繪が出て弟子の繪が出るなら兎も角も師匠の繪が鑑別とはシャクにさわる今に見て居れ敵を取てや

るからと奥樣が仰言たと、後から隣の奥樣から、そつとさりとは恐ろしの姫御前や、このお心だから來る弟子も來る書生も歸つて終ふのだそれでも内心は好い氣味だと嬉こんだ、俄に上手に成つた樣な氣がして胸の中までワク／＼する、仕事も手につかず直に農人橋の小方華園先生の所へ御報知申上る、先生の出品は故園の春二人の唐美人が桃の下に居る所だ、京都の方はどこかちがふ所がある



數百點も出品のあるうちで此の繪程彩色の上手なのは見なかつた、お年は僅か私より七つ上で、二十五だとやら、賣價を見ると三十圓、私のは、たつた十圓、見て歩くうち先生の繪も目についたが情ない樣で見る事が出來なかつた、今日は夜まで皆もの云はずにらみ合て居た、私なんか云つても返事をして貰はれないから言ないのだ、夜は風が通す、向ふの家で女の子が琴で千鳥を彈き出した。

私はそつと屏風をしまつてその姿を寫生する、十五位だらう。

▲

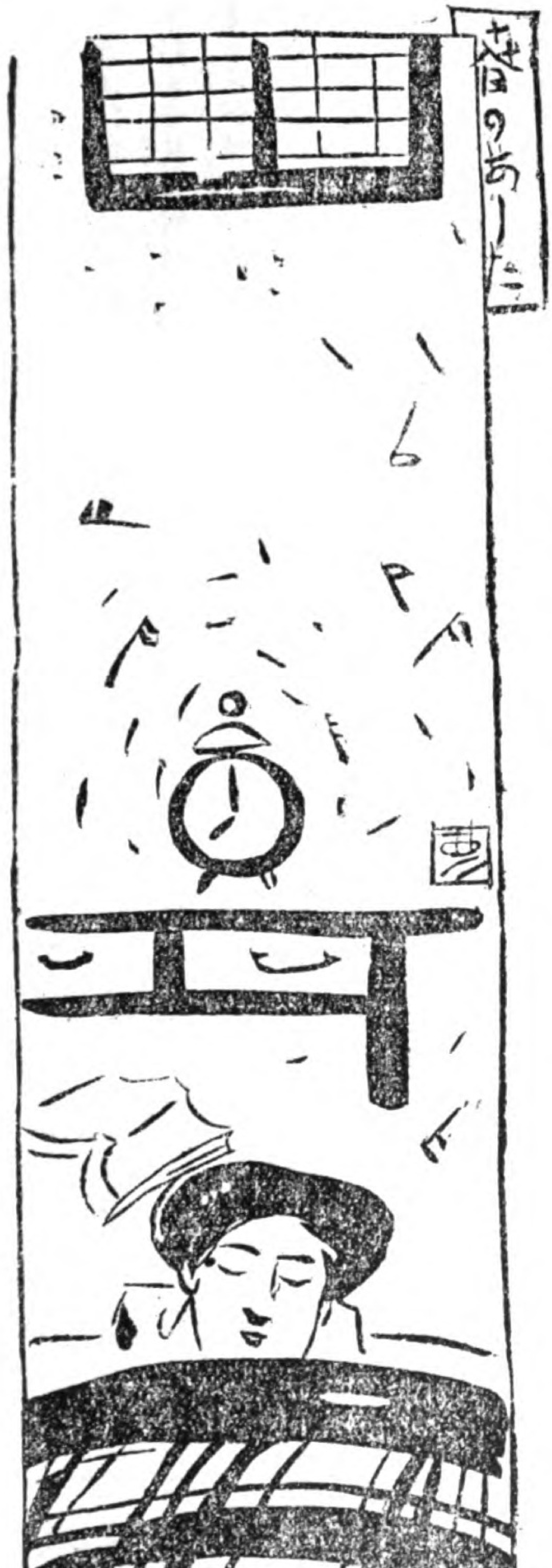
敎へて貰へもせず、仕事ばかりさせられて餘り金が澤山要るので昨日都合がありますからと、出て終つた、繪を習ひに行でも臺所の事や奥樣の湯もじの洗濯までするんだもの、これなら女中に行く方が給金でも好いと思ふ、身だが伸た樣だ、前の家に歸て頂いて又もとの事務員でも、志願仕樣か知らと考へる、生溫い風が吹ので大變な砂塵だ、オゝいそがしいので忘れて居た繪畫會に出品の繪が出品後、三日目に行て見ると、賣約濟と赤い札が友染の表裝に下つて居た、その金が最早今日あたり來る筈と待くたびれて天滿橋の自働電話かけたが、幾度でも話中、それに中がせまいのでムシムシと暑い、河内や京都通ひの小蒸汽がガタ〳〵とはげしい音を立るので聞えもしない、仕方なく歸つてはがき出して尋ねると、油尾さんに電話がかゝつて昨日使の方に渡てありますと思ひもかけぬ御挨拶なのでこれはと私に思ひ當る事があるので、早速先生の所へ行つて話しをすると、奥樣は奥から顔も見せず鋭い黃な聲で「うちに預つてありますが食料の殘りがありますで貰つて置ます」とのお言葉、まあ、あきれてものが言ぬ、食料の事は、先生とよく堅い約束がしてあるのに、五日位が待ないのか「承知しましたから」と一たん云つて置ながら、男の口でもそんなにやらかい事が云へるのか、弟子の名をかたつてしかも女弟子の名をかたつて、たとへ僅な金でも今の私には大金だ、それを取て了ふ人があるだらうか、それもよし、まだ奥樣の御用に立てある金は六圓程もあるのに！

私はカツと上せて挨拶もせずえゝもう頂かなくとも好う御座いますよ、もう頂かうとも思ひません、その代り桃水先生の所に參りまして僞筆なすつた事を申し上げますか、また詐欺の告訴するばかりですと、よくまあゴロツキの樣な言を云つたと驚き乍ら血眼に成て歸つて直ぐ帯引づり出して平野町の桃水さんの所へ行く積りして居たが口惜涙が、ハラ〳〵と頬を傳つて流

れる、空は曇つて頭から押つけられる樣、今日も雨に成りさうだが私は、もう先程から落して居るのだ、まづそれより先に會長の所に申上げて、名譽職とも申されます方が情ない事をなさるのを聞いて頂いてからと腹立ちまぎれに車の直も定めず、鹽町まで來たが、金の事は如何にしても云ひにくゝ云つて終つたら自分の品格が下つた樣な氣が仕はしないだらうか、それも自分の金なんだもの、人は一錢の事でさへ六ケ敷云つて時に寄れば血の雨降らす事もある、一厘足らずとも一圓に成らぬなぞと思ひ乍ら勝手口の方から茂つた高野槙の下をくゞつて書生部屋の方に行き、尺八の音が洩る窓の所から、そつと書生さんに話して、ホッと一息つくとバラ／＼／＼と豆の樣な夕立が降り出した傘をと仰言のを頭でうけて返事もせず髮の中から、ジリジリ流れる汗を袂で拭ひながらドシャ降の中を人通りのはげしいのに走つて歸つたのだから見る人は氣狂とでも思つたのであらう、本町の角から繪ハガキ屋の小僧がついて來たのでも知れる、歸ると直止む、雨まで馬鹿にして居るかと腹が立て仕樣がない、下の方に挨拶もせず二階へ上つて帶とくと金茶の羽二重が眞黑に濡て居る、どの帶よりも一等すきな帶だのに氣のきかぬ事をしたと泣きたくなる、乾いたら小皺が寄るにちがひない、休んで居る窓から小さい雨が吹き込で、秘密でぬいだ肌にポッ／＼あたる氣持のよさ、此の雨が上つたら桃水先生の所に行つて話を聞いて頂かずには置くものかと手にとり上たナイフの先で机の角を削つて削つて圓くなつて了つた、雨は小止に成つて庭の芭蕉にバサと風が立つて雨蛙が落ちた、池には金魚が浮て私は胸の苦しいのも忘れて見て居ると、お隣りの森田樣では、またいつもの五人組の書生さんが來て居る樣な氣はいがして、黃色い女の聲も聞える、氣樂さうに琴と尺八の合奏が初まつて居る、那須野の曲だ、上せ切つて居る私の耳まで其高い唄聲が聞えて來る。

淸涼殿の御遊の時、月まだ出ぬ宵の空、いさご吹きこし風もいれ燈火消えしその時に、身より光をはなちしにぞ……

演劇のドロ〴〵的の所が面白く聞えて來るのが猶シヤクにさわるのだ、負けずぎらひの私には、こらへ切れないので、少しは胸もスクだらうと、柱に掛てある琵琶下ろすと、床しい香がする袋取るより早く糸も切れよと破れる様な聲張り上げて經政を一曲彈たのだ、桃水先生の所へは後からにして、夜は小方先生の所に話しを聞いて頂きに行く、先生は女らしい好お方、前髪の白リボンが好きでそれを見てさへ胸がスッとするお菓子頂いて十一時頃歸る、机の上には、なつかしい東京の先生からの御手紙開いて見ると、いつも乍らありがたい御言葉ばかり、中程の一句が嬉しくて繰り返し〴〵讀む「御都合とは云へ、あたら惜しきものにこそれへ一日も早く御上京なさるべくこちらの都合はいつにてもよろしくくれ間――」私は無情な今の先生のなされ方を一言でも此の先生にお話申して慰藉の御言葉を掛けて頂きたいと嬉しさにヒシと御手紙を抱いたのである、東京の先生？東京の先生？　今は早故人と名をかへて草葉の影にその名も高い水野年方先生。





立派な婦人となるに就ての心の工夫

宮川壽美子

△彫刻品に現はるゝ氣品

曾て私が英國に居た時分ピーピーと云ふ希臘語に通じた美術家の方と一緒に博物館に參りました、倫敦の博物館と申すと名高い大きなもので、埃及、アッシリヤ、バビロン、希臘、羅馬其他各國の美術品が驚く程澤山集めてあつて、日本の美術品なぞは却て我國の博物館より多い位。それで或る外國人なぞは『英吉利の博物館ではない、世界の博物館だ』と申した程で、却々大したもので御座います。迚も一日や二日で見終ることは出來ませんので、先づ最初は希臘の方だけへ參りましたが、流石に世界の博物館と云はれるだけあつて、希臘の那の有名な波斯戰爭前の彫刻品や、又戰爭後の彫刻品やが澤山陳列してありました。それ等の陳列品を見て私が非常に感じたのは、戰爭前の作品と戰爭後の作品とを比べて見て、戰後のと、戰前のとに非常な相違が現はれて居るといふことでありました。何う違ふかと云ふと、戰爭前の物は何うもしやちこばつて居る。ピラミッドでもその通り。その他の彫刻品でも皆肩や膝が大變しやちこばつて居ます。それに引

代へて戰爭後の物になりますと誠に立派なもの、輪廓が如何にも氣持よくスーくとして居て、何處となく上品な所があります。殊にヴィーナスの神の像なぞになりますと、只立派である、氣持が善いといふこと以外に一種名狀すべからざる異樣の思想が現はれて居るやうに思はれます。

それから羅馬になると、既う品が違つて來ます。人間ならば只それを活き寫しにしたといふ以外に之れと云ふ立派な精神が現はれて居ません。それから時代が下るに從つて次第に物質的となり、高尙な思想が現れぬやうになつて參り、殊に近代になつては、益々物質的に下落して、寫實以外に一種の氣品を要するといふことを殆ど忘れたかのやうに見えます。

△昔の希臘と今日の日本

その時私が感じ入つてそれ等の陳列品を眺めて居ると、連れの美術家の方が恁んなことを申しました。

『貴女のお國は長い間鎖國の下に在つて物質的の文明に犯されなかつたから、丁度此の希臘の當時に似て居るではありませんか。日本の繪畫には繪畫その物より別に一種の高い氣品がある樣です。』

私は然う云はれて見て、成る程といふ氣が致しました。鳥渡松や櫻を描いた一筆畫を見まして も、日本の畫となると、墨の色や、筆の勢からして何とはなしに「敷島の大和心を」といふやうな氣が起ります。その方は尙も『繪畫ばかりでなく歷史までが日本と希臘とは能く似て居る。貴方もお歸りになつたら力めて西洋かぶれをせぬやうに、日本の長所美所を保存して戴き度い。』と呉々も注意して呉れました。

如何にも當時の希臘と現今の日本とは位置から言つても狀態から言つても似通つて居ります。彼も我も東洋と西洋との仲に立つて、西洋の文明を東洋に傳へ、東洋の文明を西洋に傳へて居ります。それが戰爭前は諸國の糟粕を嘗めて——希臘ではペルシャ戰爭前迄は埃及邊の文明を眞似るばかりで、何一つ創始するものとてはありませんでした。ところが一朝波斯と戰つて

勝を得るや、始めて自國の力を自覺し、又外國からも承認されて、それから有ゆる事物が發達し始めたのであります。哲學と云ひ、美術と云ひ、非常な進歩發達で、今から思うても羨しい位。ソクラテスと云ひ、プラトーンと云ひ、又美術の方面でも迚も後代の人が企及し得ないほどの傑作が出たのであります。

で「丁度日本と國勢が似て居るではありませんか。今日本は今迄自分の力といふものを知らなかつたが、今や日清日露の兩役にも勝つて、自らも力を覺り、又他からも承認されて來たから、是からが發達の爲時ではないでせうか。日本は二千何百年間連綿として續いた極めて目出度い國ではあるけれど、未だ立派な國としては世界に顯れて居りません。是からです。日本は是から西洋と東洋との文明を調和し移植する責任があるのです」とその方が懇々と話しました。外國人から斯ういふことを聞かされて私は今更の感が致しました。考へて見るまでもなく實際大事な時期です。お互に使命を自覺し責任を自覺して大に奮發しなければなりますまい。

△修養して達すべき境地

斯ういふ大事な時期に生れた私共ですから、一刻も油斷して居ることは出來ません。修養を積んで、境遇に支配さるゝやうなことがなく、反て境遇を支配するやうにならねばなりません。私は豫々修養を三階段に分けて居ります。第一の階段は未だ修養の足らぬ時で、如何しても境遇のまに〳〵動搖して、順境に逢へば直ぐ傲つて了ひ、逆境に落ちると泣きくづをれて少しも働きが出來ません。それでは誠に困ります。始終父母の傍に居らるゝなら介意ひませんけれども、今後の婦人は臺灣へでも朝鮮へでも出掛けて行かねばなりません。それにそのやうな見識の無い意志の弱いことでは、直ぐ土地の惡風にかぶれて了ひますから、此の時機は餘程注意を要しまする。

それから段々修養を積むと今度は境遇を利用するやうになります。逆境に立つても、斯ういふのも一の修

養であらう、泣きくづをれて耐るものか、と云ふ氣になりますし、又順境に立つても傲り昂るやうなことはなく、反て謙遜るやうになります。又風俗習慣の異つた地に參りましても、此の精神は何の位まで辛抱が出來るものか、一つ膽試しにやつてみたいといふやうな風に萬事に境遇を利用して行きます。是が第二の階段です。

更に一段修養を積むと今度は反て境遇を支配する樣になります。是は既う一番立派な人で、修養が悉皆出來上つて居るから、反て周圍が其人の爲に淸淨められます。此の第三の階段こそ私共が朝な夕なに到達せんことを願ふ境地であります。

△修養の三階段の實例

一個人に就いて例を取つて見ますと、第一の人は他人が惡めば自分も惡み返します。畢竟修養が足りないから境遇にかぶれて、然ういふ低い卑劣な考へになるのです。

第二の人となると、那んな人の云ふ事を氣にして慣るやうでは役に立たぬ、禽獸のやうな人の云ふことに耳を假して如何しよう、蹴つぶしだと齒牙にも掛けません。

更に第三の人になりますと、第一の人のやうに惡み返すことをしないは勿論、第二の人の樣に、禽獸のやうな人だと言つて對手にせぬやうなこともせず、反てそんな人を憐み愛します。「何故然うであるか」と考へて、「ヨシ〳〵良い方に導いてやらう、悔ひ改めさせてやらう」と憐みを加へて力を盡すことになります。決して惡み遠ざけるやうなことはしません。釋迦の如き、クリストの如き、皆此の第三段の人であります。又支那の昔の舜の如きも此の人で、自分が天に號泣するほどの苦痛を忍び、修養をして、終に那れほど難かしい父母をして次第に好い人と化らしめたのであります。此の第三の人こそ誠に立派な人で、男ならば外へ出て多くの人を感化させようし、又女でも子供や奴婢等を感化しますから、非常に大切な人であります。

△第三段の人となり得る法

で如何にせば、第三の境地に達し得るかと申しますと、矢張り手本にする人を定むる外はありますまい。そして其の手本にする人を出來るだけ高い所に求むるのです。普通の人では可けません。完全無缺な、井上博士かの申された「絶對善」とか、或は又神樣とか、釋迦とか、孔子とかいふやうな人を理想にしなければなりません。是れは私一個の考へですが、理想を先づ恁ういふ風に定めて、そして毎日自分の行ひがそれに合ふか合はぬかと照らし合はせて見たら大抵過る事はなからうと思ひます。恁ういふ心掛で次第に修養を積んでさへ行けば、如何な土地に居やうと、如何な上官の下に居やうと、決して境遇にかぶれ支配さるゝやうなことはあるまいと存じます。

私が外國に參ります折、上海や香港や新嘉坡の邊で日本服を着けて居る多數の本邦人を見ましたが、香港でのことでした、私共船中に居た四人程の女客が上陸しようとしますと、事務長が何卒洋服を着て呉れと申しました。何ういふ譯かといふと、那の邊で情ない商賣をして居る女共と間違へらるゝ虞があるからとのことで、眞正に情ない思ひを致しました。那の邊に行きますと、馬來人とも付かず日本人ともつかぬ女が、恥づかしげもなく華美な衣服を着て多勢停車場の邊に群つて居ります。何百人となく土地に住んで居るさうですけれど、皆大きな顔はせられぬ連中で、天長節などに領事館へ顔出しする人は僅かに二十人かそこらのものださうでございます。此邊ばかりでなく、朝鮮でも滿洲でも、日本の人は隨分恥を曝して居るさうです。これも畢竟は修養の足らなかつた所以でせうから、男も女も何卒よく修養して立派な人達ばかりにし度いもので御座います。

△家族制度の相違

特に女は餘程考へなくてはなりません。何事も日新の世の中だからとて決して西洋の文明に夢中になつて

は可けません。元來西洋と日本とは家族制度が根本的に相違して居ります。西洋は夫婦が本位で、日本は親子が本位といふことになつて居ります。此の根本の相違を能く承知して戴かねばなりません。此の根本の相違があつて、一國は一家の大なるものとしたら、日本と西洋とは國の文明の性質も違はねばなりません、女子の教育法も違はねばなりません。是を忘れては大變です。西洋では恁う／＼するから日本でも然うしなければならぬといふ譯には參りません。例へば舅姑です。西洋では嫁夫婦と一緒に居ないことになつて居るから日本も然うした方が宜いと云ふ人もありますが、然うは行きません。西洋では然ういふ風に文明が出來て居るのだから差支はないけれど、日本では迚も一朝一夕に變更することは出來ません。何處までも家族制度の相違が土臺になつて居るといふことを承知して居ないと悲しむべき弊害が生ずることは分明りきつて居ります。

△犧牲的精神

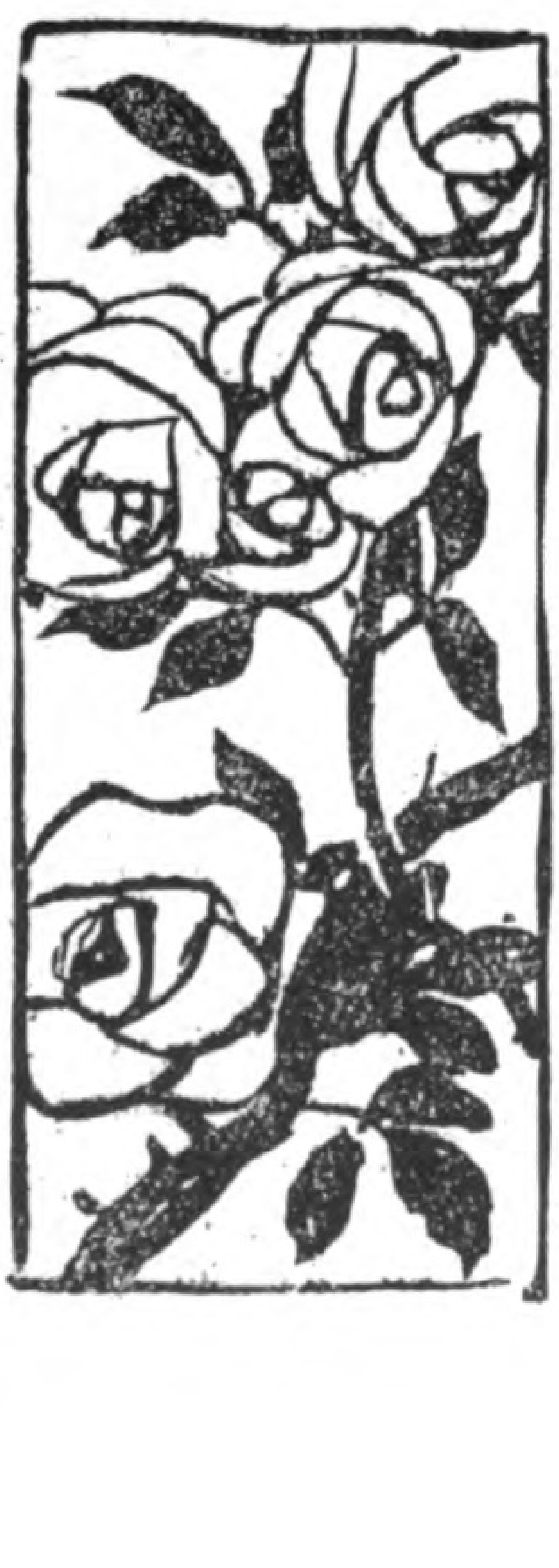
日本の家族制度は日本人の「犧牲的精神」を現して居るもので、私は世界に向つて誇るべきものであらうと思ひます。西洋人も日本の犧牲的精神、即ち義の爲めに命をも捨つるといふ精神を非常に稱嘆してゐるので御座います。それが教育を受けた人ばかりでなく田舍の百姓まで皆此の精神を持つて居るといふことに就きまして、或る英國人が恁ういふことを言ひました。『日本人の一般に義理堅い譯は家庭教育の結果でなければならぬ、西洋とは違うた婦人の教育法の所爲でなくてはならぬ』と。流石に見拔いた言葉で御座います。そして然ういふことは女に訊いた方が宜いと云ふので私は度々質問を受けました。確に然うであります。日本人の偉大なる犧牲的精神は畢竟幼時よりして家庭で涵養されて居るのであります。嫁は舅姑に一言一句考へてからものを言ひます。是を言つたら年老つた舅姑さんが腹を立てやう、それが爲め一家が擾亂かへる樣

な事があつては、と「えゝ言つて遣り度い」と思ふ事をも我慢して居る。又舅姑の方とても「イヤ〳〵若い間は何人しもある事、そのうち折を見て言ひませう」と蟲を殺して居ると。いふ風で、舅姑も嫁も皆一家の平和の爲めに自分の感情を犠牲に供して居るのであります。

△幸福なる日本の女子

如偲一家の平和の爲めに家族が各自感情を犠牲にして思慮へて物を言ふやうな風でありますから、此の一家の實物教授が非常な感化を與へて、子供までが「義理」といふ觀念を得ることゝなります。西洋の家庭が愛の塊りであるなら、日本の家庭は義理の塊りと言つても宜いでせう。

で、日本の女は何時頭が擧がるとも分明らず、一見甚だ不幸のやうでありますけれど、家族が「若きは親に從ひ嫁しては夫に從ひ、老いては子に從ふ。」といふ古い諺を不思議な程守つて行くので、西洋の婦人の持たぬ大なる權力を實は持つて居るのです。兎に角一家の主婦となれば、子供は元より、舅姑までも從ふやうな風になつて居るのですから、狹められて居るやうでも大變な實權がある譯で、西洋の女に比べて日本の女の方が遙に〳〵幸福であると私は信じて居ります。ですから、西洋風になり度いなどゝ卑怯な考へを出さずに、何處までも此の家族制度を續けて行つて、自ら境遇を支配するやうな立派な女になり度いものではありませんか。此の犠牲的精神は、日本の國民としても、家族の一員としても、却て誇るべき美點ですから、決して忘れてはならないと思ひます。



何の位の程度で生活するのが一番宜いか

佐治實然

▲尊徳翁の「分度」說

質素勤儉に就いて二宮翁は「分度」と云ふことを說いて居られる。翁の所謂分度の法とは、收入の全額を二分して、半額を生活費に當て、殘りの半額を更に二分して、一は不時の用の爲めに貯蓄し他の一は、公共の事業の爲めに費すと言ふのである。元來翁の敎は「人の分限は一方にあつては身を働らかせ一方にては又出來るだけ、質素に暮すにある。」といふので、人の宜しく行はねばならぬことを種々の方面から說き勸めたのであるから、此の「分度」の法は結構な敎であるに相違ないが、然し是が果して現時の社會に適用されるか何何かといふと、甚だ不安心でならぬ。成程昔のやうな生活の單純な時代、富豪も少ければ成金黨の如き者も滅多に出なかつた時代には、それが好い定木であつたかも知れないが、今日のやうな生活の錯雜した時代には、あれでは甚だ不充分である。二宮翁にして若し明治の今日に生れたら決して然ういふことは說かれなかつたであらう。

▲驕奢に赴くを默許するか

例へば茲に年額二千圓の收入ある一家があるとするそれを分度法に從つて、千圓を生活費に當て、五百圓を貯蓄し、五百圓を公共に投ずるとすると、誠に都合の宜い譯であるが、今の世に然う都合の宜い人ばかりは居らない。近頃流行の醫學大家の收入は一年に三萬圓も五萬圓もあるさうであるが、假に三萬六千五百圓として見ると一日は百圓になる。其の家族が毎日生活費に五十圓宛要るかといふに決してそれほど費す必要はない。それと同時に毎日二十五圓宛公共の爲めに費すかといふとそれも亦在り得べからざることである。

若しそれを必ず五十圓宛費ひ果したとすると、非常に驕奢な生活をして居るものと言はねばならぬ。僅か一人の醫師でさへその通り。況んやそれ以上の富豪輩に至つては三百や五百の割ではない。一日に千も二千も入る。それを半額だけ使ひ果しても宜いとしたら、世間の生活といふものが驚くべく驕奢になつても仕方があるまい。分度法でいへば夫でも差支はないと默許するやうなもの〻。尊徳翁は偉い人物であるけれど是だけは感心が出來ない次第である

▲迷信か謬見か



それ故私は質素勤儉の事を考へるに際し何時でも先づ胸に浮ぶのは「人たるものは何の位の程度で生活するのが一番宜いか」といふことである。私はこれに就て廣く人にも接し、又多くの雜誌や書籍を讀んで見たが、「如何にしたら貧乏人がなくなるか」といふことは提出もされ研究もされたやうであるけれど、未だ「何の位の生活が當前であるか」といふことに就て專心研究をした人はないやうである。箇程研究にも値し興味もあり、且つ又頗る必要な問題であるにも拘らず、世人が何故に等閑にして居るか奇怪に耐えぬ次第である。

私が思ふに是は一種習慣上の謬見に陷つてゐるのである。尊徳氏の所謂半額は

さて置きたとへ全部使はうとも自分の勝手だ。國家でも法律でも社會でも隙を入れることの出來ない自分の權利であると思ふ一種の謬見が・廣く人類を通じて先天的に浸み込んで居る爲ではないか。自分の權利に屬する以上は五萬でも十萬でも使つて介意はぬといふことを是認して居るものとしたら是れ正に道德破壞である。質素に身を持てとふい德教を根本より破壞せんとするものである。だから我々は恁かる謬見を捨てゝ收入は如何に多からうとも、衣食住の程度は何の位にして置かねばならぬかといふ問題を各人各個に辨へて置かねばならぬ事と思ふ。

▲天然に近き生活

此頃私は歐洲大家の意見として恁ういふ說が唱へられ、歐洲大陸の輿論を動かして居るといふことを聞いた。「近代の人間が餘り天然に遠ざかるから次第に健康をも害し壽命をも縮め從つて腦の力をも弱くする。」といふことである。又我々が實地に目擊する所では・田舍の農民等は、都會の上流社會が夢想だもし得ざる淡泊な天然物を食して居て然かも健全に長壽を保つて行くのである、して見ると天然に近い生活が最も健康に適するものと見なければならぬ。是は疑ふべからざる事實である。併し、平生の生活上の習慣に依て既に健康の度が減じた人にまで急に農民的の生活を眞似よと云はないが、外氣に觸るれば直ぐ凋んで了ふやうな室咲の蘭の花の如き弱い身體が文明人の誇りでもあるまいから、如何なる富豪、如何なる上流の人でも生活の程度を定めて、今少し天然に近い生活を爲し、身體を健康にするやうな考を持つて居て貰ひ度い。勿論人間の理想的生活は何の位な程度がよいかといふ事を科學的に定めて、それを上は貴族より下は農民まで守らせるといふことは不可能であるが、兎に角精神を本にして成るべく自然の生活に歸り度いといふ希望を持ちたいものである。

▲天地間の最大美德

そこで質素儉約といふ事は生活の材料に乏しい者が止むを得ずして行るといふやうな吝つたれた生活の方法ではない、是は實に天地を一貫した人間の美德であるといふ、大なる自信と抱負とを持たねばならぬ、是に於てか勇氣も生じ、見識も立つて愉快に實行の能るやうになる。然ういふ風に一般世人が儉約を行ふたならば大にしては國家の幸福、小にしては一身一家の幸福となるのである。

▲上流社會の通弊

それにつけても日本の上流社會の家庭ほど間違つたものはない。一體日本は歐米に比べて人の勞力に對する賃金が易い。であるから雇人が非常に多い。タトエバ女中の如きでも二十年前は一ヶ月の給料一圓位なものであつたが、今では三圓位に上つて居る。それでも他の職業に比べると未だ廉い。月に八九圓も出すと一寸した人を雇ふことが出來る。月八九圓の金は日に百圓も入る人から見ると誠に些細なものであるから必要もないのにお飾り同樣に七人も八人も置くのである、置けば自然使はねば損だといふ卑しい氣が起つて、主人でも奥樣でも自分で出來ることまでも女中にさせる五千とか一萬とか收入のある家に行くと女中が八人も十人も居て家族の生活の狀況は病院か何ぞの如く、人ばかり使つて自分は安逸を貪り、少しも活氣といふものがない。質素儉約の跡方もなく、家庭の有樣が病室然として居るといふのは殆ど上流社會の通弊と言つても宜い位。是といふのも畢竟勞働の德勤儉の德といふことを知らずして人を多數使ふのが權威であるかの如く心得て居るからである。又一般の人も多數の人を使ひ奢侈に耽るのが權勢の表示であるかの如くに考へて居る。誠に慨嘆の至りである。

▲五萬圓の收入の處分

それに今後の人々は先づ何よりも、「自分の所得を費消するのは自分の權利だ」といふやうな時代的謬見を去らねばならぬ。假令ば一年五萬圓の收入ある醫學博

士の家族に生活費を一年五千圓位に止めて置けと言つたからとて、別段無理な注文ではない。五千圓あれば家屋庭園の手入れまで充分に出來る、愉快に暮して行けぬといふ筈はない。それで殘りの四萬五千圓を直に尊徳翁の如く公共事業に投じよとは云はない。今日喧ましい問題になつて居る東鐵の株券を買つても宜い、寄附したのではない貯蓄した金だから利子は三朱でも二朱でも介意はない。此の資本金の爲めに車數は多くなり、停電は少くなり、客の取扱は叮嚀になるとしたら、市民も亦富豪の恩惠を受けるといふ譯になる。それでもその人の財產は四萬五千圓に對する僅かな利子でも矢張り殖えて居るのである。然ういふ風に秩序を立てゝ行つたならば日本全國の交通機關の設備、公園公會堂の建設まで、何も寄附金や租税ばかりでせずとも尋常普通の株式會社の營業として立派にやつて行けるのである。是こそ眞の富國策ではあるまいか。

▲理性と德義に訴へよ

要するに所得に應じて生活を華美にするといふのは恰も小兒が色々のものを欲しがり食ひたがりするやうなものである。親が是を與る時は大喜びに喜びはしようけれども反て健康に害がある。是と何の相違もない。法律上禁じてないからとて、所得を自由に費消し奢りを恣まゝにするやうでは、小にしては一身の健康、一家の幸福、大にしては國家の經濟人類の前途に非常な害毒を與へるのである。理性にも德義にも訴へて鑑る所があつて欲しい。

私は中流以下の人よりも中流以上の人に質素儉約が美德であるといふことを覺らしめ、教育や宗教や社會の制裁の力によつて此の氣風を盛にし度いと思ふ。金のあるものはいくら使つても宜いとして置きながら、一方では一日僅に五十錢や七十錢の收入しかない者に向つて郵便や銀行の貯蓄を勸めるのも惡いことではないが、力を入れたほどの功はない。五人も七人も家族が居て收入が二十圓か二十五圓しかない人に貯金を勸めるのは、食ふべきものを食ふな、着べきものを着る

なと言ふやうなもので氣の毒千萬な次第である、それよりも一年に五萬も十萬も收入のある人達に向つて今少し人間らしい生活をしろと勸めた方が宜くはないか。

▲五十圓の家庭

中流以下の家庭に關して、少しく述べやう中以下の家庭で田舍の生活は別として、今日都市の生活狀態に就いて私は恁ういふ區別を立てゝ居る。先づ五十圓以下の月收あるものは高等貧民の部に入る。二十圓以下が貧民、十圓以下になると既う窮民であらうと思ふ。尤も是は母親に夫婦、子供が二三人居る家族と見てのことである。



先づ五十圓の方から言ふと、是位では迚も一廉の收入ある氣では居られない。細別して見ると、家らしい家に入れば先づ家賃に十二圓は取られる。米が八圓、副食物が一日五十錢平均の十五圓、被服費が五圓とすると殘り僅に十圓となる。是で子供の學校の月謝、主人の小遣、病氣の折の藥代、交際費、町内の入費など皆支拂はねばならぬ。隨分不可能のことではあるまいか。若し同様の家族で二十圓の月收としたら

如何しよう、更に十圓以下となつたら迚も暮して行ける筈がない。

△品物は最後を見屆けよ

月收五十圓位の家庭で、日常儉約の要義として最も注意せねばならぬことは、「或る一の品物を殆ど大詰りまで使ひ果す」といふことである。是が何れだけ經濟になるか知れない。私は着物に油を掛けて汚したり、鍵裂きにしたり、火で焦したりするのを人の夭折したのと同じ樣に見て居る。然ういふ粗末な取扱をしては可けない、何處までも大切に取扱はねばならぬ。絹布なら終まで使ひ果すに二十年や二十五年は役に立つ。例へば十四五圓の料子を一反買つたとする。先づ五紋の羽織にして用ふることが何年、家内で着て居る平常着が何年、上に羽織ることが出來なくなつたら胴着にして又何年、と恁う定めて置くと、一反の料子を使ひへらすのは二十年はかゝる。何でも然ういふ主義にして、那れほど迄にして居るかと他から云はれる位大事に掛くるといふのが、月收五十圓位の人の第一の心得である。

△大掃除から燃料

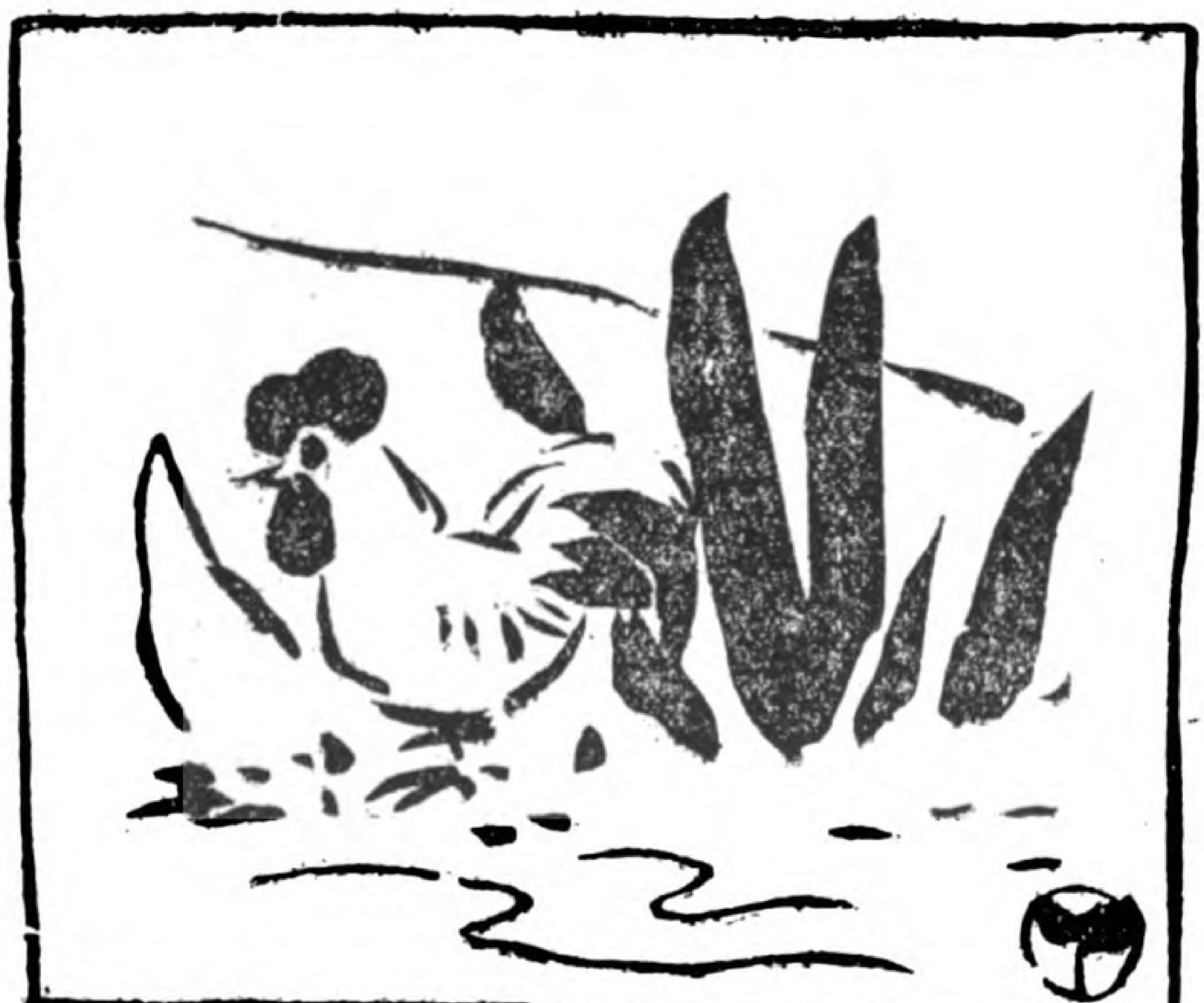
東京では年に一回か二回か市からの命令で大掃除をやらせる。那の日に市中を通つて見ると大抵な家では菓子箱の折や、玉子箱の折や、小包か何かの杉板の箱なぞを、惜氣もなく軒先に拋り出して掃除人の持つて行くに任せてある。それ等のものは皆燃料になるのに何故少しの手間を惜んで捨てゝ了ふのか、細く壞すには鋸と鉈が一挺あれば用が足りる。主人が役所から歸つた餘暇にても、子供が中學から歸つた後の運動にでもやらせればよい、竈や風呂の下に焚くのには間に合ふ。然ういふ風に物を終りまで使ふといふ心掛が第一である。

△必要な品と不必要な品

儉約の極意は不要なものを買はぬといふことである

所が要るか要らぬかの判斷が鳥渡六かしい。然し是は一年間位經驗すれば容易く分明る事である。その間に夫が無かつた爲めに六度も七度も手間へたことがあるならそれは既う確に必要な品である。單に入用といふ點から云つたら月收五十圓の家でも立派な絹の座布團の十枚位は欲しいに相違ない。が、試みに好い加減の座布團を五枚用意して一年間やつて見る、別段不自由がなかつたらそれで澤山。又客が八人も九人もあつて狼狽いたことが十度もあつたら矢張り十枚必要といふことになるのである。然し稀に六人か、七人あつたといふ位なら客座布團は五枚でも、居間や內所のが二三枚はあらうからそれで間に合はせて置けば宜い。何もくだらぬ虛榮心を起して不要物を用意して置く事はないそんなことでは五十圓七十圓の暮しは出來ない。過去の經驗に照らして必要と定まつたものだけ買ふて、決して餘分なものを買つてはならない。品物が少ければ從つて家も廣くなる、掃除も早く濟む引越も輕便だ。それより生ずる色々の利益が澤山ある。

如何なる事業、如何なる行爲に拘らず、皆後ろに負ふ所の人格といふものがなければならぬ。意志の堅い人、品性の高い人でなければ到底世の中のことに成功するものではない。質素儉約の實行に於ても其の通り堅固な意志と高潔な人格とがなければ迚も眞の質素儉約といふことを成し遂げることは出來ないものである。



我家の經濟

榮子

濟が最う大きく成つたもんですから、姉などは宅へ參ります每に、絹もの丶二三枚はこしらへて遣らぬと可哀想だと申しますが、絹もの丶不經濟と云ふことは別として、精神上に及ぼす弊害を恐れますから、妾は一切絹ものを用ゐぬことに仕て居ります。それでも親と云ふものは子の爲には馬鹿なもので、他所さんの子にひけを取らしたく無いと云ふ心が何處かに秘んで居て、何うかするとそれが頭を上げて來るので、隨分心苦しう思つたことも一度や二度ではなく、袖口だけなりとか、帶はしだけなりとか云ふ考が起つて、決心を崩さう〱と致します。

併し何としても妾は絹物を用ゐぬ事にして居ますがそれに代へて妾は縞柄に注意することに成りました。これは子供の爲めと云ふよりも、實は母自身の心を慰するためかも知れません。さてさうすると茲に一つの困難が起つて來ました。と申しますのは、近所の小さい呉服屋さんに有る品物が氣に入らない、と云つて木綿もの丶一反や二反を買ふのに、高島屋さんなどへ行つたら、それこそ萬引と疑はる丶かも知れないと云ふことです。

けれどある時元氣を出して、主人の笑ふにも頓着せず、三越呉服店へ行きました。

流石は大きな店だけ有つて、縞柄も亦格別なものが有りました。しかし出口で買物の品をしらべられた時は、きまり惡くて面がほてるやうでした。

けれど皮切が濟むと妙なもので、其の後は僅のものを買ひますにも、此方はお客さんだと云ふ氣に成り、十合さんでも、大丸さんでも品物を求めるに遠慮は要らないと云ふやうに成りました。

實際呉服ものなどは、大きな店で買ふに限ると思ひます。價が安い許りでなく、縞柄なども却々よく吟味して有つて、足代だけは充分あります。呉服ものはかりでは有りません。總て家の内の事は女がまめに立ち

廻ると、骨惜しみするとで、大きな違ひがあります。

それで木綿ものでも少しく縞柄に注意して遣りますと、子供は却々馬鹿に出來ませんもので、木綿ながらも自分のは吟味したものだと得心して、清なども絹の着物をこしらへて欲しいと云ふたことが有りません。此頃では主人までが木綿の紋附で何處へでも出掛けるやうに成つたので、何時かも主人と此の事を話し合つて大笑ひを仕たことが有ります。

着物の質素と云ふことは履物などにも自然及ぶことは無論ですが、其の他になか〳〵影響する所が多いものです。

それに附けても可笑しいのは、主人はお酒を飲むものですから、つひ皆樣のお供を仕て、料理店などへ參ることが有つても、此の着物なら氣が張らないで結構だと云つて居ます、妾なども木綿の着物ときめてからは、少々遠い道を歩いても裾が切れるなんど〻云ふ心配が有りませんから、俥に乘つたことなどは一度も有りません。

着物の話はこれ位に止めて置いて、一つ面白いことを申しませうか。

それは主人の財布は、いつも空と云ふことです。

何でも靜が生れる三月前だつたと思ひますが、いよいよ子供が出來ると成ると、儉約をせねば成らぬと云ふ話から、男は錢を持つて居ると、つひ要らぬ物を買つたり途中でふとお酒を飲やうなことが有つたり仕て、豫想外に小遣錢が多く要ることが有るもので、主人なども彼の時錢を持つて居なかつたら善かつたのにと後悔さるゝことが度々あつたもんですから、遠方へ出掛る時の外は錢を持たないことに仕ました。が、始めのうちは御自身で極めながら、不自由だ〳〵とこぼして居ましたが、それも半年ほどで、今は其の時の苦しかつたことを不思議に思つて居る程です。此の爲に主人の小遣錢は從前の半分も要らぬことに成つて、殊に嬉いのは巳を得ぬお附合ひの外は外でお酒を飲んで歸ることが無く成つたので、臺所向をつゝまやかにするにもはりが出ましたから可笑しいちや有りませんか。（一等）

萬事に屆く注意の眼

不　羨　子

あまり御無沙汰になつたので美代子を松やに詫して、課長様の御宅へ御年始に（女の年齢は十四日から二十日迄と申しますすネ、、勝手のいゝ方へ理屈をつけて……）伺ひました。

御門のくゞりて入らうとした時、奥の御庭の方でホーホケキョと優しい聲が聞えました。屹度飼つてあるのだらうと思ひました。

丁度御玄關に御掃除をして居た女中が御物樣の御召の御下りらしい絣の大前掛をはづし乍ら、愛想よく笑顔を作つて取なかゞめました。御主人が平常の御しこみも想はれてなつかしく存じました。「おやようこそ、サア、どうぞ此方へ。」と御座敷へ御導め下さるのを、強ひて次の間にして頂いて、まて御年始やら御無沙汰の御詫びやら申上ますと、どういたしまして、手前こそ勝手にかまけまして、お小さいのがおありでは、其落でございますよ。私等はいゝ年をして此頃り一日まごまご致して居ります。それでも今日はようこそ、どうぞ御ゆるりなすつて下さいまし。とそれはくへだてなき御言葉に、伯母様の家へ行つた様に思はれまして、いつになくいろくおしやべり致しました。奥様も。私にも丁度貴女位の孫がございますが、只今大阪に嫁つてをりますので、眼に似た方を見ますと、つひ孫の様な氣がして、お喋はかり申ます。これからも何卒度々遊びに御出下さい。」等と云つて下さいました。

「貴女、我々は別に稼いで収入を殖すの、内職するのといふ事がないのですから、家の中の事をつめて出來る丈け儉約致すより外に仕方はありませんからね。私は常に廢物を利用する事を心掛けて居ります。まあ龜の甲より年の功で、永年やつて來た此の端の端も御聞き遊ばせ。葉書はいつも、新教育を受けた者はそんな幼稚なものぢやない、いろく御く笑へて戴くやりますなどゝ申しますが、我々の目から見ますと、矢張りむだが多い樣でございます。御宅ではたきつけに何をお使ひなさいます？。私共では新聞をまるめてつかひます。えつきな臭くないかと被仰るのですか、いゝえちつとも臭くはありません。そしてよくもえて便利です。それから、炭俵の口の處に入つてゐる木、あれは枯れて居りますから、よく火がつきます。それと藤葉の時には止まなせます。朝ふじ夕顔と云つて、昔から藤は朝燃るもの、夕方は燃えかたがわるものときまつて居りますもの。わざくそれ程にするには及びませんからネー。ですから私どもではたきつけに杉の葉等買つた事はありませんよ。」

「まあ左様でございますか、早速明朝と云はず今晩から致しませう。」

「簡單はどうなさいますか存じませんが、尤も御宅では未だお小さいしそれに御妹御樣ですから、ようございますが、私は裁ちます時に、肩丈二枚分とつて置きます。袖のところ丈け早くいたみますから縫なほしの時に取りかへてやります。さう致しませんと、肩の方は未だ着られますのに、袖の爲めに非されはならぬ樣になりますから。新しいのと違い

のでお可笑しかないかつて？、ホヽ……初めは一寸さう見えますが、着て居る内に分らなくなります。女の子のリボンもためて置きますと随分多くなります。尤も夏のは仕方がありませんが、外のは洗つてとつて置いて、廣いのは裂いてはたきに致しますと、誠に丈夫でようございます。臺所のは子供が習字に使つた半紙を用ゐまして、直き汚なくなりますから度々とりかへさせます。

手拭の古いのと、單物の肩當ての色のさめたのは、洗ひ出して雑巾に致し、ホワイトシヤツに胴をとりまして用をする時の前掛に縫ひます。まあやり様で儉約も出來るものでございますネ、ありがたうございます。」

あらツ、坊様、又下駄を御割りなすつて、此前の日曜に下したばかりですよ。と水口の方から女中の聲が致しますと、一寸御免あそばせ、と御立ちになりましたが、おや〳〵又ですか、此前の片々があげ板の中にありますからそれと合せて御はきなさい。たきや出してやつておくれと被仰つて笑ひながら御出になつて、

ほんとうにあの通りでございますよ。高い所からとび下りたり何か致しますので、満足に下駄一代もつた事はありません、いつも割つたり溝に落したり致しますから。もう男の子の下駄は泰雲桐の白鼻緒と定めて置きます。左様一月に二足位は履ませうよ。

まあ左様でございますか。いろ〳〵爲めになります事を伺ひまして、ありがたう存じます。あの御宅では矢張りランプをお使ひになりますか？。あれは消します時に細く致して置いて消しますと、石油のへり方が違ふと何かの雑誌で見ましたから、やつて見ますけれど、よく分りませんが、別に時間の要る事でもございませんので、さう致して居ります。

おや左様ですか、私も試して見ませう。

若い者のある所では、つけて寝る方がいゝさうですけれど、夜中に一度づゝ私が必ず見廻りますから、ランプは消させてしまひます。

と。あゝ今日はいゝ事を澤山覺えました。遂御互達の方が行きよいものだから、其方へ遠くしましたが、これから時々は參上つて爲めになる御話でも伺ふ樣に心掛けませうと思ひました。（二等）

二十五圓の家計

宇都女

主人は某役所に勤めて居ます。五つの男に、三つの女。家族はこれきり。何等の係累なし。主人の月給は二十五圓ですが、積金を差引かれて私の手に渡るのが二十四圓四十五錢です。賞與は年二期に三十圓宛頂きます。薄給の事ですから、衣類の新調などは常に念頭に置きません。賞與の時に買ふ事が出來れば、必要の物を揃へる事に致しますが、何しろ次の子は女ですから、兄のもので間に合せるわけにも參りませんから、餘儀なく自分のものをいろ〳〵工夫して着せて居ます。成べく新

調は致さぬ方針で、例へば襦袢の袖や長襦袢の古いのを繼合せて、平常着やチャンチャンを拵へるとか、シャツのお古を子供の襦袢や股引に直すといふ風にして、役に立つものは徒らに行李の底に藏って置くことにせず、絶えず之を利用する樣に考へて居ます。

田舍から初めて上京してまだ月給も二十圓足らずの時分、間借りをして暮して行くうちにも、折々實家へ無心をいふものですが、度重なるにつけ田舍からはさう〳〵金のいる筈がないといふてよこす。又私達もどうか斯うか暮してゆけるだらうと來て見ますると、なか〳〵一寸出るにもお錢が先きですから、初めの月は電車賃と米代と同じ位かゝりました。

實家の無心も出來なくなつてから、どうしたら毎月無事に暮してゆけるかと、初めて騷ぎ出し世間の人はどうしてやつてゆくかと、いろ〳〵家庭雜誌や新聞で研究致しましたが、皆月收百圓とか五十圓とかいふ方ばかりで、直接參考になるものは殆んどありませんでした。

子供が出來て一戸を借りてからは、却々筆紙に盡されない苦勞を致しまして、幾度か質屋の暖簾を潜つた事もあり、或は近所隣へ知れぬ樣に道具屋をよんだ事もあり、自分達は粗食しても子供には滋養物を與へて、艱難辛苦を盡した結果、今では幾分か樂に暮せる樣になりました。

臺所の費用は小遣帳の記入よりは、豫算を嚴しくやります。試に昨年十一月の豫算を記しますと、

五圓五十錢	家賃
十五錢	水道
五圓	米代
六十錢	鹽、醤油
三十錢	石油
三十錢	砂糖、茶
三十錢	味噌
四十錢	薪
一圓	炭
二圓	魚、肉(豚)
一圓五十錢	豆腐、野菜
二十五錢	鰹節
計　十七圓三十錢	

朝は味噌汁、晝と晩は野菜、豆、豆腐、魚、肉(一回十錢)の内一つを、循環して行きます。無論主人の辨當のお菜も此内に含まれて居ります。

子供には經濟上牛乳を與へる事が出來ませんから、代りに副食物を別に消化しやすき樣心配して喰べさせます。折々別に滋養物を加へてやります。

又雜費としては、

八十錢　新聞、雜誌(女學世界、大阪)

子供入費	一圓五十銭
西洋せんたく	二十銭
衛生費	六銭
湯銭	一圓
床屋	十五銭
クラブ洗粉	四十銭
アイボリ石けん	
ライオンはみがき	
リスリン	
ローヤル水	
子供貯金	六十銭
計	四圓七十一銭

主人は幸にして酒と煙草は好みませんから非常に經濟がちがひます。其子供の貯金は、學校の準備として生れた月から毎月預けてあります。其外交際費、臺所用臨時費、履物等に支拂ふて殘る處はありませんが、もし主人が出張其他臨時に幾分か收入がありまして、殘る場合は郵便貯金に致しまして、次の給料には一文も加へません。

子供は可成間食させない習慣をつけたいので、おもちやの外 幼稚園のやうに、いろ〳〵遊ぶ材料を集めて、暇にまかせて造つて遊ばせますから、自然遠くへ出ませず、常に裏庭や表で遊びます。

三十圓の賞與はどうなるか、主人の靴代が半期に三圓、シャツと服代が六圓、書籍代五圓計十四圓は、どうしてもなくなる。殘りは夏ならば浴衣の一枚づゝでも拵へて、あとは不時の用意や主人の小遣として貯金に致します。

時間の經濟も却々一分も油斷出來ません、此頃は朝早く主人が起きて戸を開けると、妾は臺所に行く、二兒の着物を着せるは自分の役、主人は床を上げて塵掃ひだけしておいてすぐランプ掃除と靴磨きにかゝる。子供相手に妾は顏を洗ふてお膳を出す。子供は安全な爐の側で遊んで居る間に、主人は顏を洗ふて出勤の支度をして食事を濟す。十分ばかり休みながら新聞をザット見て座敷を掃いて出勤する。其あとは子供を守しながら臺所片付とオシメの洗濯一通りすむともはや十時。お座敷の日當りのよい處で、子供を遊ばせてお針にかゝる。

夕刻は朝以上に多忙であります。三時半頃からそろ〳〵片付にかゝつて、四時には翌朝の準備や晩餐の支度をする。主人は五時に歸つて水を汲んで下さる。食事を濟すと主人共々子供の眠るまで一緒になつて遊ぶ。子供が眠つて臺所の片付がすむと、新聞、雜誌日誌とか一日の慰藉です。却々芝居、寄席、緣日どころではありません。

借金をしたり、不義理をしてまでも、贅沢な暮しをするよりは、此境遇に滿足して常に自分は幸福者であると、心で主人に感謝して居ます。(二等)

我家の節儉法

横山はま子

能く世間で足るを知ると云ふ事を申しますが、之は誠に結構な言葉だと思ひます。つまり萬事に不足を忍ぶ意味かと思はれます。先年私方で法事を營むだ事がございましたが、其節臨時客人が増えましたので、存外多衆になりました。それで平素備へ付けの膳具に不足致しましたので其時似よりの品を作らうと思ひましたが、始終要る道具でもなし、年に一度か二度の事ではあり、旁々外の有り合せの物で、間に合はせました尤も時によりますと、ふつと「あゝ此品がもう一つあると善いが」と思ふ事がありますけれど、それが二度三度必要を感じた時に、買ふ事に致しまして、可成一時の不自由は、忍んで居るのでございます。それに平素入用の少ない物を調べ立てして買殖やした時、數が多くなりますれば、自然と仕舞場所にも困る樣になり、不經濟のみではないと思ひました。それで私は、家内の道具で、入用の度數の、割合に應じて、買入れる事に致して居ります。

次きに食事に就きましても、以前私方では、米食を主として居たのでございますが、其後召使の者が、脚氣を病みましたので一と月家内一同が、試驗に麥飯に致した事がありました。それで丁度米代豫算額から、二割許り尤も六人家内でした喰ひ出す事になりましたで其後は引續き麥飯に致しまして、米麥の差額を以て、諸費の補助と致しましたが、諸費も素とより豫算が定めてありますから、餘分に補助する必要も、ありませず旁々その後は、差額を以て、臨時祝事とかの費用に、充つる事として、豫備費の中へ組み入れました。これでつまり脚氣豫防と、差額との利益を得ました譯でございます。これは尊德先生の「心を常に貧に處せよ」の訓戒に叶つたつもりでございます。

もと私方は大の菜食黨でございますので、野菜を澤山に用ゐます。先年轉宅後少し家宅の廣い所ではあり、隨て空地も中分かありますので四季なり〳〵の種物をまきまして、食用に致します。それで從前おしるの實とか、一寸した煮しめなど、一々八百屋へ買ひに參つた、當時と、くらべますると、一々買ひに走る手間もいらず、又一ケ年經費も餘程違ふ事を發見致しましたので此頃は、空地と云ふ空地には、大抵いろいろのものを蒔きまして、一つは樂みにし、一つは經濟と便利とを兼れ愉快を感じて居ります。尤も地價の高い處では一槪に此主義も取れませぬが、地方では、少々屋敷の廣い方が、徳用かと思ひます。

さういふ考へから、だん〳〵不用の地を擴げまして、家内の人數に相當要る丈けの野菜畑の外は、草花など又は貰らつた植木など、植ゑまして、四季の花を眺める樣な望みで、それらの愚考に、耽ける事も、ある樣になり、自然家内がちよつとした、園藝趣味を喚ふ樣になり、衛生の上にも大變利益を得る樣になりました。

つぎに之れも一つの節儉主義から思ひ付いたのですが、茶の代はりに麥湯を用ゐます。私方では、來客にも、座敷に招じて、特別に接待する

向きよりは、反て店前きで應對の客人が多うございまするし、引き切りなしに、隨分面倒でございますので、食事用は素より客人に差上げる一碗の茶も一様に藥罐と一定にてし居ります。藥罐なれば普通の茶の様に一々湯沸と茶とを備へる世話もありませず、一度茶を入れて火に掛けて置きますれば、茶の様に味も左迄にかはりませず、むしろ芳ばしい香ひも致しまして、飽き嫌ふ人もなく、且つ又衛生上にも宜敷、年中之れを使用致して居れば、經濟衛生一擧兩得かと思ひます。隨分終日火に掛けて置きますのですから、炭火も澤山要る様に思はれませうが、客の出入が劇しいものですから、小賣店ではありませぬし、茶はどうせ出さずには居れませぬので、さうすれば湯を沸かして置く必要があるのですから……それで火の保存法としては、熱氣の失せぬ程度に火を埋めまして、土瓶なり鐵瓶なりの藥罐を掛けまして、火鉢の上へは、一つの箱の様なものを作りまして、上から、被ぶせる様に蓋をして置きますので、さすれば、火の消散をふせぎ、湯茶の熱度放散を止めて炭火の不經濟にもならず、凡べてに都合が善いので、永らく實行して居ります。

それから一度、澤庵漬が、餘り鹽あまの結果、澤山の漬け物を酸つぱくさせました。身振るひする程、すいので、とても食べるに堪へぬ程になりましたので、どうしたら宜からうと思ひましたが、主人が「赤味噌に漬けて見よ」と申しましたから、まあやつて見様と云ふので、少し許り漬けて見ました結果、實においしくなりまして、もうちつとも、鹽味はなく、それは〳〵いゝみそ漬が出來ました。實のところ、買ふと云つたつて、こんなのはなからうと申した位旨くなりました。それから、其赤味噌は……澤山はいらないのです……もう廢物にしようかと、すんでの處、捨てるのでしたが、又之れを味噌汁に致しました。左程味も變りませず、誠に喜びました様な譯で。此頃では、漬物の直段も、却々に高くなりまして、へたな野菜物よりも、高價ですから、一寸は、まあ惜しい勿體ない事だと思ひましたが、反て美味になりまして、客に出しても、恥しからぬ漬物を得たのでございます。

元來私は未だ家政を執りまして、日も淺く、且つ又處世上に經驗も少なうございますから、自分の勤儉であると信じて居る事でも、反て場合に依りましては、そうでないこともあらうかとは存じますが、一體に私方は、却々の節約主義でございまして、物が消散しない様に、心掛けては居りますが、所謂青砥藤綱の經濟法には、全然準據する事は致し兼ねます方で、つまり小を捨てゝ大を得ると云ふ遣り方なのでございます。假りに一圓の物を無くしたと云つて、家内が半日も一日も掛つて、之れをさがすのに假りに其時間と、其費やす時間に爲す仕事の價を、一圓五十錢と致しまして、若し品物が出ない時には二圓五十錢の損となりまするし、始めからさがさずに置けば、差引五十錢丈は損をせずとすむ勘定ですからむしろ夫れ丈の、手數を掛けない方が、よいかと思ひます。尤も其のなくした物がなければ、立つて行けぬと云ふ場合は、別でございますが、要するに失つた物の價値に依ては全體に此主義は行へんのでございますが、もと〳〵今申す様な個人規定を標準として居るのであり

ます。それでまあ差引勘定して、多分に我手に殘る樣……有形無形を問はず……に心掛けて居る譯でございます。それで細かい話しではございますが、私共髪は從前一年の中中分は毎朝自分で流行の束髪にして居ましたが、此頃では髪結ひに結ばして、毎日髪に費やす時間丈け早く仕事に取り掛る樣になりましたが、今から考へれば髪結賃丈けで外により以上の仕事が出來るのでございました。

以上の樣に食事なり、其外の事柄なり、成るべく簡便な方法を取つて居りますが、衣服や髪飾りの品や、身の廻はりのもの、凡べて流行と云ふ事には、餘り目を付けて居りませぬ。之はもとより家内で、ひま〳〵に機を織る事に致して居りますので、自然新規の反物など、買ふ氣にもなれないのですが、もと〳〵流行衣服も、一二年たてば、時代遲れとなり。あたら綺羅も廢物になつて、ろく〳〵身につけずに箪笥の底に葬らす樣の事になりましては、實に不經濟此上もない事と思ひますから、一さい流行は、追はぬ事ときめて居ります。又自ら織つたものは洗濯の度毎に、色合や縞がらなども、反て買物よりか、はつきりして、勝りまして、どちらかと云へば、地味ではありますが、見あきが致しませず木綿物がす入りなどの、手織の實用向を主と致して居ります。

先づ私が經驗の内で、一番に不經濟なと感じましたのは、家内起床が不揃ひなのでした。細かく書く迄もありません。（三等）

經濟は應用の巧にあり

淸子

そも〳〵實業勤儉といふのは、如何なる事をいふのでせう。私は其意味がわかつて居て、それを實行するのに、如何にしたらば、お姑樣も良人も、子供等もたのしく、生活する事が出來るであらうか、一家の平和を破らない樣、幾分かの餘裕を造る事が、出來るだらうかと、種々工風をして、四五年前から貯金箱を作りました。月收は五十圓の小官吏で家族はお姑樣と、良人、私、それに三人の子供（八つになる學校へ行く女の子と六つになる男の子と四つになる男の子）と六人暮し。五十圓の内十五圓は如何なる都合ありても、必ず貯金に入れ、殘り三十五圓にて一ケ月の經濟。衣服は平常、皆、木綿にて、さば〳〵と垢つかぬものなれば、それにて不足なく、決して流行に卷かれて、つまらぬ苦勞をする用もなく、奢侈を羨む心もおこらず、風呂は三日に一度と定め、良人の理髪は一ケ月二度、他は家にて髭そり、子供等も皆家にてそり、其度毎に五錢、十錢づゝ貯金箱に納め、お姑樣は切下げ、私は束髪なので、一週間に髪結錢として二十錢づゝ貯金箱に入れ、火のつく樣なあたまも見苦しければ、油は常につけて結ぶ。其他、裏下駄や子供の平常はく、下駄の鼻緒などは、フラジテルか更紗などの家にある小切にて作り、足袋、靴下の類も家にて作る。始めは無器用に出來ても、だん〳〵上手になり一圓位も布を買へば、大人も子供も三四ケ月は、不自由なく、靴下

も同じ毛糸を一度に買へば、いつもいたむ所はきまつて居りますから、それだけ編みなほせば、又上等の靴下になり、安くていゝ品を用ゐられます。紙屑や、あき樽などを賣りました金は、皆貯金箱に入れます。酒や煙草は飲まずとも、反つて衛生上身體のためになる事とて、これ又、四五年前より全く廢して、其代にて滋養物を食します、豆腐、野菜を主として、不時の來客用に魚肉の味噌漬、粕漬、鎌倉漬など造り、香のものも、味噌漬　粕漬、梅干などを貯へて置きます。一週間の内、日曜日は牛、又は豚肉をとり、水曜日には魚を用ゐます。他はなるべく安くて滋養分の多い身欠鰊、昆布、大根、人參、豆腐などを用ゐます。又慈善事業は、身分相應にする事で御座います。年末には幾分か賞與を戴くので其時貯金箱を開き、皆の着物から、無くてならない品物を求めましたり正月の費用にあてます。收入を殘らず使つて仕舞まして、いつ又那麼事がないとも限りません。いつかの「女學世界」に「暴風に遇はざれば船頭の腕を知る能はず」といふ事が御座いましたが、それではとても間に會ひません。世の暴風のいつ吹いて來る事か、わかりませんから、其覺悟をいたさなければなりません。收入に應じて夫々適當の生活を定め、身分相應にいたしてゆけば、自分の心もやすまります。及ばぬ事を行ふ事はとても出來ません。及ばぬ華奢にあこがれますのは、恰ど岩かどにある美しの花をとらんとして身をあやうくするのと同じ事で御座います「潮流に随つて航海を遂げよ」といふのは、その事だらうと考へます。又日曜日には子供等の手をとつて公園から博物館、物産陳列場などへ行きまして、たのしみつゝ相當の智識を得まして、ともによろこんで歸ります。お姑樣はお芝居や、定席がお好きで御座いましたが、お年を召しましたので、近頃は出るのが却々容易で御座いません。私は夜仕事のまに〳〵面白い本を讀んで、お聞かせ申して居りますが、其方が足を運ばず居ながらに面白いと、昨年あたりからは一寸も御出かけになりませんので、私も一生懸命に仕事をしては時々浄瑠璃集とか八犬傳などを讀んで、おあげして居ります。亡き人の命日には、近處のお祖母樣方をお招き申して菓子など作りてさしあげます。良人は讀書がなによりの、たのしみなので、書物は時々買ひ求めます。出來ぬ中で無理算段をして、交際いたしましたとて、何の利益もない許りか、自然家庭が不整頓になつて、遂には圓滿を缺く樣になります。私は只々那麼事のない樣にと注意して居ります。最もお親しい二三のお宅へは。時々伺ひますが、それも決して衣服を見せに行くのではなく、いろ〳〵の經驗話を伺ひましたり、御馳走になりました、お料理などの加減を覺えて、歸りまして、お姑樣や良人へこしらへて、おあげ申して、喜ばれるのが何よりのたのしみで、隨分儉約にとつとめて居ります。（三等）

●質素勤儉の實驗　（懸賞募集）

賞金　一等參圓（一名）二等貳圓（二名）三等壹圓（三名）

〆切三月十五日

味はふべき日記文

荻花女

文學の隆盛につれて、近時一般わかき婦人が、漸く文學の趣味を解し、又其の文章の、めき〳〵と上手になりし事は、誠に喜ばしき現象と申す可く候。

勿論、婦人も男子と同様に、思ふだけ書き現はし、思ふだけ吐露せんは必要の事にして、多くの女が手紙一つ、自信して書けざりし過去を回想しては、其のあはれなりし境遇の、轉た感慨に堪えざるものゝ之れあり候。

餘事は扨置き。頃日女學世界増刊として、表はれし「こゝろの日記」第一、第二、取り〳〵面白う拜見いたし候ひしが。第二の方に撰者の君が御批評の候はざりしを何とやら本意なく思ひて、又荻花が横合からおせつかい申して二三駄評を試み申し候。

固より只一讀、心に止まりしまゝの其れなれば、さぞないらぬ漫言も多からむを、ゆるしませ。

○一、敏腕を揮はるゝ若奥様の日記（節子）

なか〳〵に皮肉な御健筆、岩に砕けて谷間を走る激流の、澱みなきに似て、サラ〳〵サッと呼吸をもつかず、讀ませられ候。打てば響く鋼々の鐘音。さぞな御性格も斯くてお在しません。不時の來客を美事にやつて退け給ひし御手際に敏腕の此の奥様有つて、初めて君の゛が笑ます豐歳の五十年、御祝福申上候。

○二、お正月日記（千代子）

誠に優しき筆づかひ、而も天眞流露趣に入つて、望み多き乙女心の華かさも偲ばれ候、學ばずして多くの文學質を受けて生れし多幸の君に、崇高なる湘南の自然、又力を添えて多からんと、ぞんぜられ候。

鵠沼の漁村、荻花にはなつかしの海に候よ。もう今から丁度二年まへ、二月は末の淡雪が珍らしう松が枝にしぐるゝ日、少し病める身を學友に送られて、其の小松が原に移り住みて候ひし。成す事もなう幾日を、濱口氏の三階に只一人淋しう暮して、藤澤の波の晩の海、白帆の行衛に詩を想ひ、芙蓉の峰に落日の夕榮を、砂邊に風除けて、詩集よみし日の忘られず候。

多幸の君よ、自然の偉に馴れて、徒らに都を、花と、憧がれ給ふな。

其處には千丈の紅塵と、人食む鬼もありと云ふを。

「自分の心さへしつかりして居れば」と宣へど静ならぬ人間、我が心にさへ時には絶對の信頼さへ來がたき事も候を、願はくば靈か、其處らの俗人が手さへとゞかぬ高根の花を以て自任し給

へ。社會の制裁は殊に女に對しては嚴に候よ。父上なき可憐の君と承つてかくは。

○三、女學校を出て商家に嫁せし
私の日記（みどり）

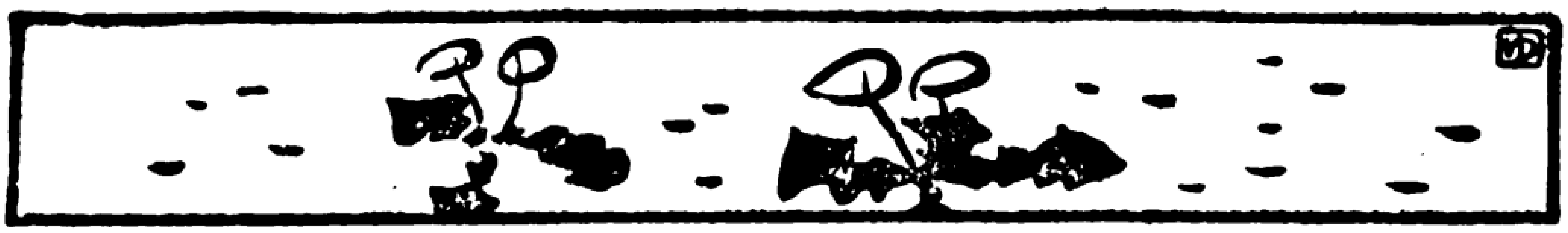
印象深き書き方、而も誇張の跡なくて、誠に才筆と可申候。教育ある下町風の御新造様、清方様の繪の様な面影が髣髴と浮ぶ心地いたし候。

○四、小學教師の妻の日記（のぎく女）

ダイヤ、ルビー、黄金のブローチを、風前の塵と悟りて、片田舎に教育者の妻として、感謝の日々を送りたまふ君。花ならば廣き野末に一本の、露にしみたる野菊のそれにも例へつべし。之れをや眞の清き生涯と可申きか。お筆も淡々と、眼中に一物なきがうれしう候ひし。

○五、小間使の書いた奥様小姑の日記（こふろぎ）

隙間なき才筆と心地よく一讀して、扨餘り印象を與へられざりしは何故？ 机の上の空想に筆を走らせ給ひしには候はざりしか、何處か上すべりてシツトリと重み無きが憾みに候。



兎に角に、所謂お吟様が、「色が白くつてハイカラで好い女」の上に此の輕妙の才筆あり、全く下女には惜しいお女中様だとこそ、申上げたく候。

○六、榮耀に輝く令嬢の日記（野の花）

上流家庭のよく偲ばれ候。然し自由に甘んぜず、はき／＼と進取の御氣象がうれしう候。お若いに似ず文章も能くしまつて、心地よきお筆のあと、務めたまへかし。

○七、悔しき事多き事務員日記（うたかた）

「淺はかな智識を以て、斯んな所に用立て様とは思はなかつた。」胸に響いて、身にしみ候かな。僞はらぬ文字、何やら斯う水仙の、清しき香をおぼえ候。いづれ浮世は怒濤と暴風、「平和の海に、良き水夫は出でず」の眞理をおぼして、願はくば悔しき事多き其の事務員の境遇が、長き生涯の歴史の中の、又一つの輝きあるページたらん事を、いのりて止まず候。

○八、結婚後初めての年末年始の日記（わか葉）

文學趣味ある奥様ならでは、かけぬ文字、「文學が生きて働く。」とは誠に此の奥様にふさはしい言葉だと存じて候ひし。

○九、趣味に追はれて無趣味に暮らす

妻の日記　（玉露女）

平凡の日々を兎に角に、趣味に追はれて暮らし給ふ君、まだお仕合せだと存じ候。

お性格を表はした活躍の文字、平凡婦人が群をぬいて、味ある覇氣か何とやら御なつかしう存ぜられ候。

然しありくと活躍の文字の裏面に伺はるゝ不滿と、寂寥、何の故ぞ?? 餘りにおせつかいの論なれど、若き萩花、また心にかかり候。

文學に對する御自重か?。御理想にとゞかざりし其の御家庭か?はた、平凡ぎらひの其の覇氣か? 何?

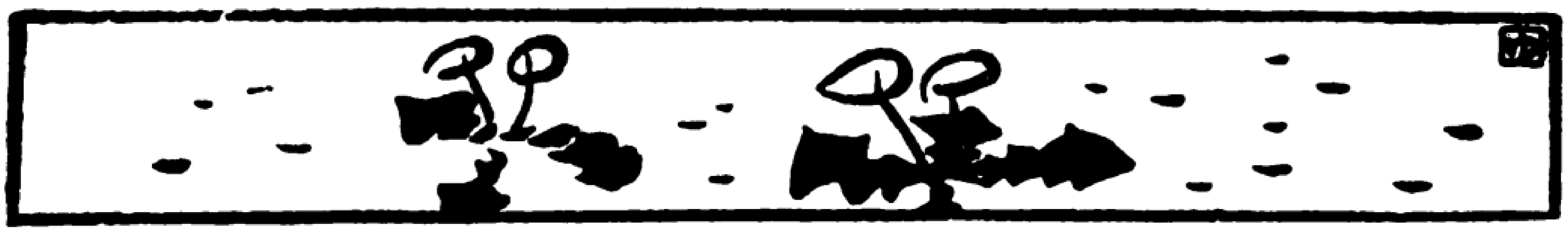
「女優になりたければ女優をかき、雨降る窓で月夜の海邊を作る。」といふ其の御鑑筆が、或は御不滿の源泉を作りしには有らざりしか?

兎も角も「自己を捨てゝ人に仕ふる犠牲心が私にない」と自ら悟り給ひし其の日。一度襲余の眼を閉ぢて、小さき己れの凡てを、人の御胸に捧げ給はずや。

捨つるにあらず。捧ぐるの時不滿と寂寥は影をかへして、より大なる自己は見出さる可くとぞんじ候、禮なき文字を何よ許しませよ。

十七日の御感想、萩花も全く御同感。次の世にこそ、徹頭徹尾意味ある女、非凡の女、覇氣ある女、になつて生れ出でんものと、考へ居り候。

尙、此の他のもの、禿筆をかまば限りなく候へども之れ位にしてよす事にいたし候。



帝都遊學 學校評判記

（河岡潮風著、四六判三百五十頁、定價四十錢、博文館發行）

本誌連載の女學校評判記と同じ筆つきにて都下二十餘の女學校を縱横に月旦したるもの、附錄として最近受驗法、東都有名學校一覽を添ゆ。入學手引草として、徒然のよみものとして、趣味實益兼ね備へたる良著といふべし。

▲立教高等女學校の新計畫

京橋區明石町の同校にては、本年四月より舊研究科の組織を改めて專攻科を置き、新に米國バサ女子大學文學士ヘーウッド孃を聘し、其の英語教授を一層完全になす由、尙ほ本年中には現在校地附近の地を得て校舍を新築し、規模を擴張する計畫ありと云ふ。

實用衛生問答

▲流産の原因を伺ひ度し

(答)流産は胎兒が死亡すれば起るものであるが、胎兒が生活して居ても種々の原因でこれを起すことがある。これは姙婦に取つて餘程注意をしなくてはならぬ、まづ大體左の數原因に基くものである。

(一)子宮の位置の變化、子宮の腫瘍、子宮の炎症、子宮の畸形などの様な生殖器の異常。

(二)不適當な方法で膣を洗ふたる時、或は何物かで子宮を刺戟した時、又は卵膜を傷けたりした時。

(三)黴毒、急性傳染病、腎臓病、結核、劇しき咳嗽の出る病氣。

(四)甚だしい精神の感動。

(五)姙婦の不攝生、たとへば舞蹈、惡い路を長い間乘車し或は、長途の汽車旅行、便秘時の强いきみ、房事の過度、十分眠らずして劇しき勞働に服した時。

(六)劇しき下痢の起つた時、墮胎藥を用ゐた時。

▲流産はどんな工合に起るものか其時の有様を伺ひたし

(答)流産は其時期によつて二種に區別する姙娠第四月まで即ち胎盤の完成するまでに起るのが第一期の流産で第四月後即ち胎盤が完成してから起る流産第二期の流産である、前者の時は前から出血あれど、後者の時は唯胎盤の出る時に出血するだけである。

第一期の流産の徴候は重に出血である、流産が突然始まるといふ事はなく必ず其前徴として先づ水のやうな液を漏らし次で粘液を漏らし段々色のついたものが下りて遂には全く血液のやうなものが下りる、或は始めから出血が强かつたり、血の塊りが出たりする者がある、流産が始まると姙婦は下腹の不快の感、全身の倦怠、腰の後ろの痛み、尿の頻繁に出たい様な感じ、子宮の張るやうな感じ、ひきつけられる様な痛みなどがする、姙娠してから四五週間の流産は別に陣痛なども起らぬから流産といふ氣がつかずに唯澤山に月經があつたとばかりおもふて居るものがある。既に姙娠第二三月になるとよほど著るしい徴候があつて陣痛のやうな疼みが起り、はげしく出血する、此時分には子宮の内膜から出來てゐる脱落膜が容易に剝がれないで唯其一部分剝がれた爲めに、其出血が甚だ强くて姙婦の生命を失ふやうなことがある、十二週までの流産ならば卵が破れないで、その儘出るものであるが往々卵が破れて出て後に卵膜などが殘つて子宮の中に止まつて居て其部分から反覆して出血したり又はそれが腐つて高い熱の出る事もある、中には流産の前一箇月ばかりも少量づゝつゞけて出血があつて其後が血の塊と共に卵が産れたりする事がある、斯樣な流産は姙婦が甚だしい貧血に陷るものである。

第二期の流產卽ち四月以後になると、だん〳〵分娩らしくなつて來て子宮の收縮、卽ち陣痛が强く起り胎兒は甚だ容易に生れ出づるものであるが後產の子宮から剝がれることが通常の分娩よりもやゝ困難である、此期の流產の前兆として下腹がつるやうな痛み腰のいたみ、などが起るが通常出血はない方である。

▲流產の時には如何に注意すべきものにや

答 流產後、殊に此時期に攝生を守らなかつた婦人は、くりかへして子宮の出血を起して貧血になつたり其他の子宮の病氣になつたりする、これが爲め其後姙娠しなくなつたり、姙娠しても流產の癖がつくものである流產の前兆のあつた時に用心すると往々これを防ぐ事が出來る。姙婦を靜かに臥させ、なるべく安靜にして消化し易い食物を與へて置き其上にて醫診を受けるがよい幸ひそれを防ぐことが出來ても尙一週間位は臥床を離れしめぬやうにし其後も安靜にして體の養生を怠らぬ樣にせねばならぬ。

▲流產時の應急手當は如何にすべきか

問 第一期の流產には危險な出血がある、又出血はさうなくとも卵膜の一部分が子宮內に殘つて種々害をなすから決して等閑にはされない、若し此際出血がはげしかつたら下腹に氷囊をあて又は冷水と酢とを等分に混ぜた液に布片を浸して絞つたものを下腹にあてゝそれから溫かになると取かへるがよい、餘り劇しい出血には消毒液を腟內にそゝぎ且つ殺菌した綿で固く腟に栓をして置くのであるがそれは素人ではむづかしい出血の爲めに甚だしく貧血したならば枕を低くして葡萄酒などを與へるがよろしい。

▲惡阻はどの位の程度まで堪へ得らるべきか幷びに其度合を伺ひたし

答 姙婦の過半は姙娠第一月の終頃から嘔氣を催ほし又時々吐くものである、殊に早朝空腹の時に最も起るやうであるが併しこれが爲め甚だしく苦しむといふまでに至らないで大抵三月の終位までに癒つてしまふものであるが、これは輕症のつはりである、中にはだん〳〵劇しくなつていつも嘔氣が止まず食慾が衰へ嘔吐劇しく遂に全く食物を取ることが出來なくなる、姙婦は頭痛を覺え眠れなくなり、口が渴き胃が痛み唇は乾き齒ぐき煤色になり舌は白く頰は赤くなり脈數が增し通じが惡くなり熱が出る、これが中等症の惡阻である、これが今一つ進むと腦症が加はつて來て劇しい頭痛眩暈が起り物音が遠くに聞え精神がぼんやりして呼でも答へをせぬ樣になる或は全く眠られなくつて終にうは言をいひ發狂したやうに見えることもある、此重症にかゝたものは譬へ手當をしても助ける事が出來ぬ事がある。

▲惡阻は如何なる時に起るものなるや

問 元來惡阻が起るのは姙娠した子宮の位置が當り前でないとき、子宮、卵巢、喇叭管などに病氣のあつた時、姙婦が平素から貧血「ヒステリ

ー」症消化器病又は腎臓、心臓等の病氣を持つてゐるものであつた雙胎妊娠の時又は羊水のあまり多過ぎる時等に起るものである。

▲惡阻の時には如何なる手當を施せばよきか

答　斯樣の原因を持つてゐる姙婦又は前回の姙娠の時に重い惡阻を發した姙婦はたとへ輕いつはりでもよほど注意して專門醫に診て貰ふのが安全である、輕症の時にはなるべく消化のよい食物を取り清潔の空氣に當つて適當の運動を取り大小便の通じをよくし便秘してゐる時は浣腸を施し又屢々溫浴をさせ血行を盛んにするがよい、既に中等症に進んだならば醫師の診察を受ければならぬが此際姙婦は靜かに臥させ、嘔吐の劇しい時には胃の部分を氷嚢で冷やし、渇の劇しいものは牛乳に氷を入れて冷やしたものを少しづゝ飲ませ唇を冷水に浸した「ガーゼ」で濕すがよい便通がなければ毎日浣腸をしなければならぬ、又入浴は必要であるが身體を動かすと嘔吐が增して來るから「タオル」を溫湯で絞り姙婦を臥させたまゝで一日に二回ほどづゝ其全身を拭ひてやるがよい、既に重症のつはりになれば醫師は止むことを得ずこれを救ふ手段として流産術を行ひなどするのであるが然しこれで必らず生命を取留めるといふ事は出來ないのである。





愛情を儉約する人の幸福なる境遇

某實業家の妻

▲良人の歸朝

倫敦からお端書が着いてから、もうかれこれ一月、今朝郵船會社からと宿からと知らせが來た、いよ〳〵明日の晩良人の乘つて居る佐渡丸が神戸へ入港するとの事、私の胸は今更の樣にどきつく家の中も急に湧たつて騷がしくなる、もう十日も二十日も前から支度に掛つて御迎にゆく許りになつて居る、一昨日疊がへもすつかり濟んで庭の掃除丈すればよいとの事、私はお待受の着物だの羽織だの鞄から出したり入れたり、いい加減皺になつてしまつた、もう何でも忘れものはないかしらと、簞笥のまへに坐る、ゴム袋も入れたし、石鹼も入れたし、あゝあの紋羽二重の羽織も一枚もつてゆかうかしらと考へてると母樣がいらしてまあ潑くり返へるやうな騷だねえ、とびつくりして居らつしやる、だつても仕方がありませんわ、あのね母樣此羽織もう一枚持て行きませうか、ときくと、たつた一日や二日の事になる丈少くおしよと仰やるのでやめた、晝過ぎは又髮を結ふやらお客樣やらお湯に入ると日が暮れた。

髮は母樣のお指圖で始めて丸髷にあげた、お湯から出て姿見の前に立つと湯氣が濛々と立つて鏡がくもる其中に夢の樣にうつッた丸髷のつやゝかさ、少し根を低く落付いた風なので何だか老けて見える、ふうわりと張つた鬢の櫛目もあざやかに、少しおしつぶして出

したまへ髪、赤いてがらが自分ながら美しとおもふ、あゝ明日、明日の今頃はと思ふと早や胸はどき〳〵くすぐつたいやうな心持、いつか眠る内にあつくなる、それにしても正也様はまあどんなになつて歸つてゐらつしやるだらう、嘸立派になつてあの濃い鬚はきつとカイゼル式にピンとあげて居らつしやるよ、どうせ見ちがへる位ハイカラにおなり遊ばした事だらう、それに私はこんな丸まげなんぞに結つて、どんなに良人はお笑ひなさるだらう、だから私はいやだつていつたのに母様がどうしても御諾きなさらないんだもの、仕方がありやしない、おゝ寒い、早く着物を着よう、おや誰か來たやうだ、あゝゆきが通る、だれ？つて訊いて見ようと思つたが、面倒臭いからよした、荒い銘仙のうす綿入を長目に着てついそこの衣桁に掛つて居る糸織の羽織を引かけて廊下へ出ると足が冷い、月影隈もなく庭をてらして枯々の木立が風にゆられて居るあゝ今夜正也様は何邊だらうね、もう長崎に近くな＊



＊つたらう漫漫たる海の上、月を砕いてすゝむ船の上に、刻一刻と近くなる故郷の事を▲

▲考へてあゝいか計り嬉しい事であらう、私がこんなに待つて〳〵待ちぬいて居る事を御

存知だらうか、あゝ逢い度い、早く歸つて居らつしやればよい、明日の晩でなくて一つそ今夜ならよいに、明日は神戸へいつて船の中迄もおむかへにゆくのだ、あゝ嬉しい、今の私の心は何ともかとも比へ樣のない胸がむづ〳〵してかきむしられる樣な、笑ひ度いやうな氣持、もうこゝが人の居ない山の奥の野原でゞもあつたなら私は大きな聲を出して笑つて〳〵見たいとさへ思ふのだものを、それも無理ではないと思ふ、指折れば早や三年の昔、時も同じ今頃新婚間もなきふたりの間を魔か何かゞさらふ樣に正也樣は行つてお仕まひなすつたもの。

式をあげて旅行をしてやつと二十日許り、夢のやうな新婚の樂しみを味ふひまもなき内に、早くも遠き別れの日は潮のごとく迫つた前から定まつた事ながら良人は豫定通りに獨逸へ留學する身となつたのである、家の譽れ、身のほまれ、御目出度い事ながら私は悲しくも思つた、御目出度いお立の日に泣いたりなぞする事はなりませんよと母樣も仰やる、良人も涙なんぞこぼすんなら送る事はならむと仰やる、私は辛いと思つた。今もよく覺えて居る、いよ〳〵船が明日出帆するといふ前の晩もういよ〳〵御別れだからといつて、寒い風にふるい乍ら、ふたりで町を散歩して、かんざしだの、手ぶくろだの、リボンなんか買つて貰つたりしていろ〳〵のお話したつけ、今云はなければと思つても、私はとかく云ひ度い事がいへぬ、あの、あのそいくつもくり返してやつとの事早く歸つて入らつしやいといつた、すると良人はあゝかへるさ、おみやげの注文は何だい、指輪だらうなんて仰やる、其時はおみやげどころか、獨逸へいらしても私の事思ひ出して下さるのと私はもう泣いて居た、そしたら、思ひだす共手紙書かうね、今度歸つたら又兩人で方々旅行して遊ばうねと、あゝ正也樣程やさしい男らしい快活な方が世の中にあらうか、私はどんな事でも辛棒する、命も惜しくはない、又歸つて入らつしやればどんなに嬉しいだらうと心は千々に亂れた、神戸へ父樣と送つて行つて、船が見えなくなつた時は手の内の寶を取られた樣

な心地で、ボンヤリして仕まつた、實家へ歸つて來ても物が手につかない、長崎から直に御手紙が來て、優しい事の數々、あゝ其時始めて良人に別れた淋しき身を思ひやりつくづくと悲しく味氣なく、止度なく泣かれたのであつた、三年の月日は如何に長いものであつたらう、お手紙は箱にあふれる位たまつた、其間辛い事悲しい事嬉しい事もあつたなれど良人を思はぬ日は一日もありやしない、けれども經つて仕まへば夢かと許り早い年月、今良人は錦を飾り譽を双肩に負て恙なく日本へ歸るのである、嬉しいため、待



遠しいだのと言ふは世のつねの言葉である、今の場合私は自分の心情を云ひ現す言葉を知らないのに苦しむのである、あゝ早く〳〵と思ひながら又何となく惜しいやうで、この溶ける樣な思にあくまでもふけり度いと思ふ、母樣のお部屋ではお客樣でにぎやかだ、おやつうちやんが姉樣姉樣と呼んで居る、早く行つてあげよう、もう妹等に姉樣々々とまつはられるのも暫くになつた、正也樣と樂しいホームを作る時はなつかしい父樣母樣やさしい妹等に別れるの時であるものを、あれ私はなぜ、今朝道ちやんを叱つたらう、兄樣が歸つて入らつしやると姉樣はよそへ

行つてしまふのと可愛想に、しを〳〵して居たのに、何かやりませうあのはこせこでもやりませう……●

▲出迎の一時間

夕方汽車が神戸へ着くと直に、母樣と私とは車を海岸西村へと走らせた、今夜入港する佐渡丸には某々伯やら某侯令息やらも歸朝するので迎への人で宿もたち込んで居る、入港時間はまだはつきりと分らぬといふのでまづ母樣とお湯に入る、今日は私の一生の內でも多くはない嬉しい樂しい日であるから一生懸命にお化粧しようと思つてももう御着に間がないとおもふと氣がせいて〳〵、昨日結つた丸髷も少しみだれてほつれた鬢が一つそよくふくらむ、あゝ正也樣が何と仰やるやら困るわ本當に束髮にすればよかつたのになんて思てるとパッと電氣がつく、吃驚してふりかへると母樣が早くなさいよ、もう直ぢやありませんかと仰やる、まあどうしよう大變だわ、早くよ母樣と引たくる樣にして襦袢を着る、衣物は今度染めていたゞいた小紋縮緬、紅絹裏がする〳〵と袖が重い、帶を結んで仕まふと母樣が夜だからといつてうづら縮緬を羽織て下さる袖口を揃へて、羽織の紐を結びつゝも私は唇をもるる微笑を禁じ得ないのである、あゝ三年まへの丁度今頃、やはりこの西村のこの部屋で、なつかしい戀しい正也樣を、雲山萬里の外に送るべく語り明した事もあつた、其時はまあ歸つて入らつしやるといつても三年なんて永い間、いつの事やらと、がつかりして淚も出なかつた、それがまあけふの今夜、二時間の後にはここに其良人がいらつしやらうといふ、あゝ早いものねえと母樣も仰やる、本當にねえと許り、私は恍惚と窓の外を見る、港では船の汽笛がいく度もポーとなる。海は見えぬが、暮れがたの空が果てもなく打かすんでいつか十四日ばかりの月が登つて居る、立ち並んだ家の屋根ごしに船の檣が見える、煙がいく條も細くなびいて丁度油繪のやうな景色、あゝあの中を、正也樣の船も五十餘日の航海を無事に終つて、なつかしい日本の港へ入るのであらう、とう〳〵歸つて入らつしやるわ、正也樣もきつと今頃私がおむかへに來て居るだら

うなんか考へて居らつしやるよと月恥しいおもひに頰を染むる時、番頭が入つて來て只今京都からと大阪からと御客樣がお着きになりましたといふ、急で御挨拶にゆく、いろ〳〵とお話をして居ると八時過ぎだと思ふ頃いよいよ船が入りました直にどうぞと番頭が來る一同は其言葉の終らぬ内に立ち上つた、あゝ私のむねはもうなり始めたのである、肩掛をかけたのを夢中で千代田草履を引かけてざつく〳〵ざつく月の海岸をいそいで稅關波止場からランチへのる。



月は皎々と照して居る水にきら〳〵と影が動く、シヤツシヤツと音たてゝ進むランチの上に胸躍らせて手をふるはせて、私は母樣と並んで居る、わざ〳〵來て下すつたお友達の島樣はあたゝかさうな狐のゑり卷に顏を埋めてにこ〳〵、博士は葉卷の烟紫にふいてこれも嬉しさう摩耶山が黑く月に浮いて神戶の町の灯が美しい、ランチは佐渡丸に着いた、梯子を上る一段一段に私は良人に近づくのである。甲板の上はもう引くりかへる樣な騷ぎ、ボーイが走る、荷を下す、いづれを見ても皆耐へ切れぬよろこびをたゝへて居る、口々に喜び叫ぶ聲を、私は川一つ彼方の事の樣に聞き乍ら、眼を見張つてゆくと……

あゝ其時……矢つ張り私の思つた通だつたわ……もみ合ふ人の中を押しわけて、夢にも忘れぬ良人が歩いていらしたのだもの、滿面にあふれん許りの笑みをたゝへた正也様は胸豐に左の肩から双眼鏡をかけて左の手に大きなブリキの鑵を持つて、なつかしい眼を輝せて……、やあお目出度うと博士はまづ手を握つて二三度振つてゐらつしやる、お友達の人々も耐へられぬ喜びの色、良人をとりまいて、私は其有様を一目見た丈で涙がとめどなく流るゝのである、母様が御挨拶なさるあとから、私もやつと御歸り遊ばせとそれは自分にも聞えぬ程の小さな聲、極りがわるい耻づかしい、私は火の影にかくれるやうにして良人をつく〴〵と眺めるお別れした時よりも却つて若い位、濃い眉、きつとして居てどこかやさしい影が動く其眼、美しいひげは私の思つた通りピンと上つて居る、あゝ愉快な流るゝ様なお話ぶり、大きな笑ひ聲、一句も聞きもらすまいとついて行く、本船からランチへ乘らうとする時、危いよと手を出して扶けて下すつた、何だか夢の様な氣がする、母様は何處にいらしたつけと見ると私の後にちやんと立つて御出なさるそこへ正也様がつか〳〵いらして先刻からもつてらしたブリキの鑵をあけてふわと軽いものを私の肩へ掛けて下さる、マアとびつくりして手に取ると、掛けた掛けたと仰有る、あゝこれぞ良人の眞心こもる、おみやげのボーアである、今迄かけて居たシヨールなんぞくしや〳〵にして袂へおしこんで仕まつた、空には月が美しい今宵許りはわが心も萬づ忘れて清く美しいものである、海岸を歩む影も數一つまして、心持のよい夜風がふわ〳〵とボーアをあほる。

宿へ着いたのはかれこれ十時近い、又談論湧くが如くといふ有様であつた、私は只まご〳〵する許り、靜！靜！　荷物はまだか下へ行つて訊いて御覽と仰やる、結婚してから名を呼ばれたのは今宵始めて、急に妻といふ感念が新らしくきざまれ、責任が重くなつた様な心地がした。

（完）



癡呆娘

菫女史

朝起きると、庭下駄穿いて井戸端に洗面に行くと、裏の藪椿が奥深き花の底に昨夜の雨を湛えて雫潘しもやらぬ態、恰ら朱塗の盃のやうなり、木の下に數多落ちたる白と紅の花を、絲にて繋ぎて首輪となして、我が白く細き頸に懸け度く思ふ。欅の大樹の高き枝に烏一羽、咽喉脹らして、カコ〳〵と嬉し氣なる啼聲兎角烏の聲は忌じきものなるに朝なれば斯く目出度きにやと思ふ折、井戸端に洗物せる兼やが、御孃様、喜び烏で御座いますよと云ふに、何となく嬉しく、よき便り聞くやうにと心に祈る。誠に可笑しきもの哉、常には、何の御幣擔ぎの馬鹿らしいと、新らしい頭に貶す可き私の、此頃の木の葉の一つにさへ吉か凶かを占ふ不安弱意、噫、私の夫は杉原様に決まるか、岡様に決まるか。何日かは出雲の神様が結果を下し給はんかそれ迄を待つ間の遲緩かしさは、鳥の聲にさへ、前兆かと心騷がるゝのである。

午後から活花の稽古に行く。今日は早咲きの牡丹を活けたから、母様に申上げようと思つて、歸宅早々お部屋へ行かうとすると、何だか兄様と母様のお聲がする。何かの御相談らしい、そして文江々々と私の名が度々聞えるので、私は密と立聞をする。

『ね、岡様は大家の若様だけあつて何處か違つてるね額から頰の邊に鷹揚なところがあるぢやないか』と母様は寫眞でも見て評して居るのだらう。

『なあに、矢張り金持の息子だけに、何處か間が拔けてる顔ぢやありませんか』と兄様の聲、一つ顔でも褒めると貶すとは、こんなに理屈の付け方が違ふのかと可笑しく思ふ。

「杉原の方にしてお置きなさい、文江も幸福でさあ、親切の男ではあるし、第一氣心が分つて居ますもの」とは兄さんである。

「それは私だつて杉原さんが嫌ぢやないが、岡樣の方も惜しいぢやないか」と母樣がいふ。あゝ如何なる事かと胸轟かせて居ると、誰やら廊下を傳ふて來る跫音がするので、私は逃げて終ふ惜しいことをした。

夕方御飯が濟むと、私は直ぐに自分の部屋に這入つて色々な冥想に耽ける。

廿歳の今日まで是れと云ふ苦勞はした事がないのに今日此頃の不安さは一通りではないのもその筈。何と云つても結婚は一生の大事で、殊に女は苦樂他人に寄ると云ふのであるのだから、實に夫次第である。あゝ私の夫は岡樣かしら杉原樣かしら、それは母樣もお云の通り岡樣も結構だが、杉原樣は兄樣の友人、今こそ大阪にお出なので疎遠にこそなつてるが、まだ大學に在學の頃はよく遊びにも被入つた。勿論其頃とて戀も誓もあつた譯ではないが、厭味のない薩張りとした方だと思つて居た。大阪へ就職なすつてからも、折々の兄への音信に、妹君にも宜しくなどゝの末筆のあるのを見る毎に忘られぬ事の乙女心にも嬉しかつたが、今度妻にとまで所望されたのには多少驚かざるを得ないと同時に、何だか恥かしいやうな忝じけないやうな氣がして今更ながら其方の御事が、目出度く記憶の幕から呼び起されて、星の御眼臥蠶の御眉、美しいお顏があり〳〵と見えて來る。

もし私が杉原樣の妻となるを得ば、今迄の二人の淡い交際も却々に溢れざる胸の清水の清き戀ともなつて結婚の曉は如何に思出多き戀の歷史が出來るであらうか、一樹の蔭に休ひし二人が、年經て赤繩の許に邂逅へばその昔の一樹の蔭が甚麽に貴い紀念ともなるであらうが、もし私が岡樣に嫁つて終へばもう杉原樣とは異舟の客で、昔行摺に見交したばかりの只徒の路傍の人ともなつて終ふのである。と思へば、惜しいではないか。

形式に過ぎぬ見合ひと云ふものをして、只一目見交

したばかりの假初の人に如何にしてこの光ある肌と淨き乙女心の愛とが許されようか。

　色賣る女ならばいざ知らず私は私は厭である。岡樣は履歷こそ美しいが胸に茨を持つ方かも知れぬを神から賜はつた我が二十姿を、權勢や黄金やの人爵などに嫁つがれようか。

　愛こそ神の司配す可き者である。（三月廿日）

　花の色鳥の聲春は將に酣ならんとするを、私の胸の蟠は解けもやらず、人を我を操らせ給ふ運命の神のその何れの糸と糸とを結ばせ給ふか、その手見度しと思ひて、



嘗は迷信よと嘲し事ながら、お呪禁を心願みにして自分の部屋で人知れずしても見る、まづ銀簪を疊の上に無意識に抛げるを銀はひらりと宙に閃めいて疊の面に落ちる、その簪の脚の止まりし疊の目を起點としてそれから右へ疊の目を一つ一つを岡樣か杉原樣かと、交る〲數へて、終の黒縁に至つて出た名が私の未來の夫との豫言である。して見るに最初の八卦は岡樣に當つた。

　是はしたり。然し一度では手の過失もあるものをもう一度と試みるに、こは如何にまた岡樣である。私のこ〻

ろは沮喪の氣味だが、何の三度目こそ正直よと、一縷の望をかけて簪をはらりと振れば、落ちて暗示は矢張り岡樣である。

私は悉皆絕望する。嗚それではとても杉原樣には添はれぬ緣かと、暫く太息をついたが、何の是が神託と云ふのではなしこんな戯事に豫言が出來てどうせうぞ、凶夢を見た時には夢は逆夢なりと云ふ理屈もあるし、神籤を引いて大吉が出ればよすぎて惡いと云ふ判斷もあるし、是とても三度とも岡樣になるとは餘りよすぎて不思議なれば逆夢の組かもしれぬ、と私はこの兒戯に等しきものを心に懸けるだけ、また勝手な心安めを案出したが、終に我意を通して逆夢々々と牽強けて終ふた。

午後三時頃玄關に俥の出る音がしたから私は淸に、誰方がお客樣だつたの、と訊くと、山本の奥樣が被入いましたと云ふ、乾度岡樣の緣談の事で被入つたのだらうと思つて。淸、甚麼話だか知らないこと〻訊くと否、ちつとも存じませんと云ふ、餘り使ない答へなので憎らしく思ふ。其内母樣のお呼しなので、それ愈よ宣告が下るのだと胸を躍らせながら、ゆくと、そこへお坐り、と被仰る、何だか常の母樣より嚴に見えた。慈悲あれと心に祈る。もう先達からお聞きだらうが、今も山本の奥樣が被入つて岡樣で是非お前を貰ひ度いと云ふのだが、お前はあの杉原樣と何方が宜いとお思ひかえ、どちらでも皆樣の宜しいやうに、と云ふ。聞いてさへ恥しい嫁入りの話なのに、彼が好きの是が嫌のなど〻のあつがましいことが如何して云はれよう。

オホ、、お前が嫁くんちやないかね、然ね實は父樣も兄樣も杉原樣の方が今まで知つた方だから宜いだらうとお云ひだがね、と母樣の豫想外のお言なのに私の溜飲は半下る、理屈の解つた母樣だと忝けなく思ふ。私は異存のない事を申上げて恥かしい席を立つと、玄關にお歸りの俥の音、父樣をお迎ひに出ると、文江お婿さんが氣に入つたかと父樣は大きな聲をなさる、皆が笑ふから、厭よ父樣はと云つて逃げて終ふ。妻となる身ながらも父樣の前へ出ると矢張り小兒の氣になつ

て甘へても見度くなる。跡に父樣と母樣の笑聲がする、屹度私の事に違ひない。

あゝ嬉しい！　私の思ひ通りになつた、私は何て幸福者だらう、父樣母樣兄樣皆私の恩人である。裏の藪で鶯が愛の勝利者々々と私を讃め唱ふて居る。あゝ見るもの聞くもの皆嬉しい、誰が憂世など云つたのであらう。

（二十一日）

朝髮結さんが來て私の束髮は破されて島田が頭に載る。油氣のないばさ／＼の束髮は、この一髮亂れぬ島田の纈々たる雲鬢に比べては茅屋のやうだ、枯草の樣だ、確に島田は金屏にふさは



しきもの陽春の花であると思ふ。合せ鏡をして見ると前髷の輪の中に挿し込んだ菱形彫りの銀の平打が、烏羽玉の黒髮にはえて星とも譬へらるゝ。根を卷いた丈長の白、上を結んだ奴元結の白、無垢なる色と黒髮とのみにて仇めきたる色を添へぬ私の頭は、私のものでないやうに上品の髮と出來あがる。

た、乙女心の仄見えて懐しいのは梅花の油が折々薫る艶めかしさである如何もよく出來たよく似合ふと一同が褒めて呉れる。

午後から白木が友禪反物を持つて來る、私の長襦袢を買ふのだと云ふ。柄の着

物に縞の羽織を着た白木屋の番頭さんが、いやに私の顔を見る重い頭を見る。母樣が何れかと見立に迷ふて被居ると、矢張り御祝儀用ならお目出度い柄がようございますな、なんて番頭が云ふのに、おや〳〵この番頭さんまでが私のお嫁になる事を知つてるのかと氣がついて今まで是がいゝの彼が厭だのと蓮葉に云つてた事を急に愧しく思つて默て終ふた。

夜は黒田さんに私の緣の決まつた事を報告しようと思て机の前に坐つたが、何だか氣が落付かないで想は横道に逸れる、床の間の琴、塗棚に置いた萬葉集、紅葉全集の間から絹糸の栞の房が長く棚を垂れて居る、籠洋燈を越して障子には私の島田が墨繪の如く映つて居る。

多年住み馴れたこの部屋にももう旬日にして別るのかと思へば名殘は惜しまれるが、一家の主婦となればもう室内の裝飾など私の思ふまゝに出來るのだ、かうしてあゝしてと先きの先きまで思つて居たが、いつか筆を執つて黒田さんに消息す可く延べた卷紙に落書をして終ふた。見ると、戀しき夫だの妻だの夫婦だの杉原文江だのと云ふ字が書いてあつて、何れも新生命の匂がするのは嬉しいが、今から杉原文江と書いたには我ながら驚く、まあ恥しいこと、灯の中に居ます夜の神に見られはせぬかと急に洋燈の光が目眩い氣持がする、後の襖がガラリと明く吃驚すると兄樣である。卷紙を隱す。(二十二日)

僕の部屋は暗くて不可ないから文江のと取り代へて吳れと兄樣がおつしやる、私はもう僅の間しか此室に居ないのだから、我慢して下さいと云へば、もう少しの間だから僕の室へ來て暗いのを辛抱せいとおつしやるので、また喧嘩が始まる、今日は母樣も別に仲裁もなさらず、あらもう兄妹喧嘩もお名殘だから澤山して置きなさいとおつしやる、兄樣は文公の泣蟲令夫人だのと憎まれ口を利かれる。いつになつたら兄樣は眞面目になるのかと思ふ、妹だから仕方がないと諦めて室を取り代へる事にする、序に自分の本箱や机の中を片付けて、持つて嫁くものと置いてくものとの分類する

第一に手をつけたのは蒔繪の箱で中の手紙をより分ける。私も是で女である、緣日の夜につけられて密と袂の中に入れられた懸想文もある。

横山男爵の園遊會で知合になつた奥平様の手紙が隨分ある、嫌はれてるのも知らずによくこんなに寄越したものだ男は己惚の強いものである。然し今度私が結婚したら甚麼に失望するだらうと思ふと、何だか氣の毒のやうな可哀想なやうな氣がする、この一掬の同情が今まで素氣なくして居たのに對して私の最後の謝辭である、許し給へ。後日の誤解を招く爲だから破り捨



てようと思つて出したのだが、讀で見ると何れも赤誠の文字、是でも戀に僞のない神聖なものであると客觀的に觀ると、この僞善の世に聊か價値あるものゝやうに思つたが、今はそんな道草を食ふべき時でなし

理想の人は我が頂上に待つよ、と思つてずたずたに破る、寸々に裂かれし卷紙の細長きは草の葉とも見る可く、片々に拗りし繪葉書細なるには、彩色の此處彼處に殘りて、花片のやうなるを皆嵐の手に圓めて火鉢の中に投げ入れば、きな臭き匂ひ紫の煙、續いては赤き火焔が燃え上がりて、若き子の

熱烈なる文字は眼前に焔と化して我が頰を火照りしがそれも暫時、夢は束の間、戀は儚し、雁の玉章は鼠色の灰とはなつて火宅の中に亡者の姿と殘る、色もなければ聲もない、一切生念罪皆除。あゝ玆に煩惱の犬色慾の餓飢悉く火葬に附して、未練を洗ひし我が胸は豁然と啓けて心に懸る雲もなし。唯君に捧ぐ可き淸淨の文江は生れ出でたのである。君に二心我あらめやも。

(二十三日)

餘り考てばかり居た故か今日一日頭痛がするので日記かくのも厭だが夕方納戸を覗いて見ると、私の晴衣が花蓙の上に散らばつて居るのや、衣桁に絹紐の下締が掛つてるのや、母樣が箪笥によりながら灯のもとに暦を見て居るのやが非常に春の宵に調和して居ると思ふ。母樣は吉日を選で御出のなら猶詩になると思つた。

(二十四日)

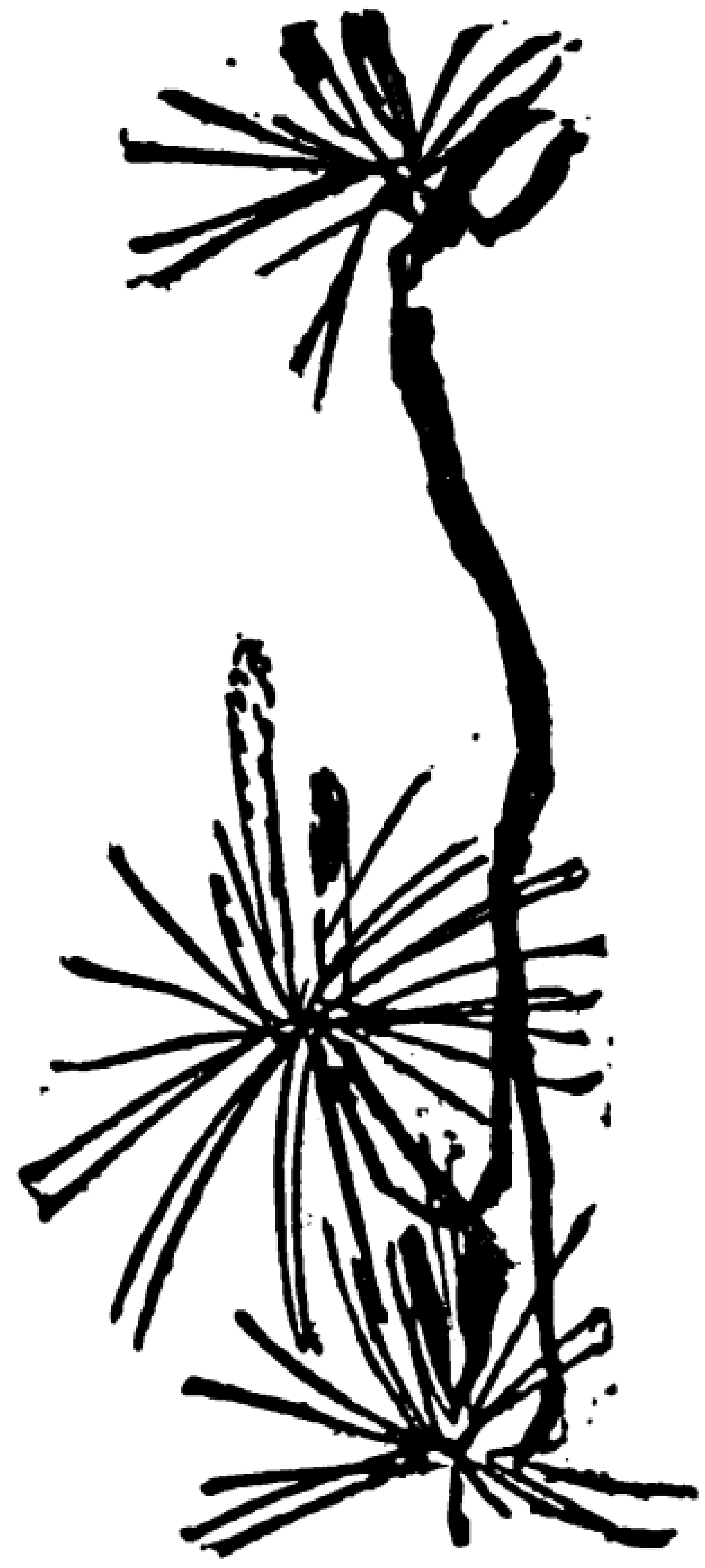
今日は特に紀念すべき日である。何故といへば杉原家から結納の品が贈られた。一つは綴織の丸帯で孔雀の羽が金絲で織り出したものである。一つは是こそ處女時代に憬れて已まないエンゲージリングである。燃ゆるやうな緋張りの小箱を明けると色のいゝ黄金の指環！　手に取つて見ると裏には西暦の年號とＳＴと未來の良人の姓名の頭字が彫つてある。帶の模樣よりも金の色よりもその二字が私の頭に痛い程の印象を與へた。不如歸の浪さんぢやないがこの指環は私の墓までも伴ふ可きものである。噫私は確に杉原勤の妻であると思ふと急に豪くなつたやうな、また等閑に出來ぬやうな氣がして、風引いてもならぬと、可笑しい程の自重心が起る。

あゝ杉原樣は毎日日記をおつけなさるかしら、乾度趣味の人だからつけてるだらう、して今日今頃を何とお書きなされたかしら、一緒になつたら二人が一生に最も紀念す可き今日の日記、君のと私のとを集めて巻物にしよう、そして。(二十五日)

四月廿五日結婚の日には二人が一緒に一つの日記帳に書きつけて、永久に飾らうではないか、行春の島田は希望多き初夏の頃、丸髷となつて、若葉の陰に我妻として榮えんとす。

苦言進呈

青柳有美



▽女とは、可笑きまで競爭心の激烈なるものなり。堂々たる一家の細君たる身を以て、尙ほ且つ下女と競爭するが女の持前なり。召使の誰彼を一段眼下に視て應揚に構へることなぞ、到底女に取りては出來ぬ相談なり。女とさへ見れば、下女たるとお多福たるとを問はず、總て我が競爭者なりと心得るが女の常にて、イヤに堅くなりて、僞善の胄に身を固め、遠廻しに意地惡く鐺き當るなり。井戸端會議の惡口雜言は、必ずしもお爨の不心得のみに非ず、原を糺せば、奧樣の邪見よりなり。

▽女の兒にのみ特有の遊戯あり。「お花さん！」との呼び聲に、花子何氣無く振り向けば、態々呼び懸けて置いたお梅さん、一聲銳く突き込んで曰く「ボカーン！」藤村操以下多くの華嚴ノ瀧執心者は、皆な此のボカーンを女に振舞はれたる連中にて、平塚明子など、ボカーン隊の隊長なるべきか。さても女とは、罪な遊びに興がるもの哉。

▽女は總て、智慮深くして容易に奧底の知れぬやうな與みし難き女を好まぬものなり。斯る女と見れば、力めて疎んじ力めて忌み力めて罵り力めて譏る。されど、淺薄にして忽ち底の見え透く如き白痴同樣の女とは、一見直に十年の舊知となるを辭せず。女同志の肝膽相照すとは、夫れ誠に斯くの如きものなり。誠に斯くの如きものなり。

▽團十郎の眞似を賣物にせる叉三郎世間之を稱して二錢團洲と言へり。女性作家と稱するもの、其女子たる天爵を持ちながら未だ男子と異る特殊の觀察を人生

の上に試むるに至らず、偏に男性作家の徑路を追ひ、唯僅に其觀察の法を模倣するに止まる。第一流の譽あるヂョールヂ、エリオットに於てさへ然り、兎角、女性作家は二錢の値打より無き似せ作家なりと知べし。

▽男若し女に戀して、その女若し其男に戀せずば、必ず心に其男を蔑りつゝあるものと覺悟せよ。女は總て我が心に嘲らざる男を戀せずといふこと無し。

▽英國グラスゴー大學が貴族院議員の選擧被選擧權を有するより、同大學の女子卒業生も亦選ばれて議席に着く權利ありとて、近頃喧しく騷ぎ立てたれば、貴族院は、法文のperson（者）なる語は、男子を指せるものにして女子を含むものに非ずとの決議案を通過せりこれまでにてさへ既に人間並に通用せざりし女は、今や者並にだも通用せられざることゝなれり。輓近、女子の下落、驚くに堪へたり。

▽新婚者の裾を捲りあげて、之を棒にて擊ち据ゑ、或は之に水を浴びせかけ、或は礫の雨を零らしむるなどの事は、古るく淸少が枕草紙の昔より、今なほ所によりては行はるゝ習慣なり。まだ世間には若い男も女もあれば少しは遠慮して然るべしとの意なるべし。然り、夫婦仲の餘りにお睦しきは、若い男女に對しても遠慮すべきことなり。

▽男の兒は父親に附くべきものなりとて、離緣騷ぎの時なぞ、兎角男子の負擔にせらるゝが、今の世の常なれども、これは科學と歷史とに反く事なり。カンガルーは、牝の腹にだけ袋ありて、如何なる危機に臨むもそのうちに我が子を收め、少時たりとも保護を怠らず牡は全く其子を知らざるもの〻如くにす。子供の保育は男女の別なく、總て母親の責任また負擔なり。神代の慣習も又然り、離緣執心の女房達、宜く總ての子供を皆なゾロ〱と引き伴れて引揚ぐべきなり。

▽苟も、貴婦人たる身を以て多くの下々の社會の婦人を見て卑下賤んずるなぞとは、以ての外の不所存なり。此る女達のあればこそ、貴婦人も初めて其貴婦人たる面目を保ち得るものなれ。古の豫言者は曰く、世の罪を負ふ神の羔を見よと。

▽女禮式とは、女が男の前に出づる時の禮式に非ずして、女が女の前に出でたる時にのみ行ふべき禮式の事なり。女同志の應對ほど、徹頭徹尾、禮式づくめなるは無けれど、男子の前には、却て不作法となるものなり。但し、女禮式、一名之を虚禮といふ。

▽女の犠牲献身ほど、世の中にイカサマなるものは稀なり。世に鰕で鯛釣るといふ諺あり。鰕だけは確に犠牲献身とせられたるには相違なけれど、實は鯛を釣るための犠牲献身と思へば、餘り難有くも無し。かくして少し許りなる衣食住の自由位を犠牲に供し、この好名目を餌として我が好む男子を釣り出し、其の男の身に持てる有らゆる有形無形の物を、終生我れに捧げて奉侍せしめ以て虚榮多き我が心の滿足を得んとするに外ならざるが是れ女の心懸けなり。それで見込通りの大鯛を釣る能はざれば、即ち憤りて曰く『あの男は不人情で紳士らしくありません』と。

▽男は、如何に竹馬の友との間柄なればとて、共に手を取り肩に倚りて談るが如きこと至りて稀なり。然るに女同志は左程ならざる間柄にても、忽ち手を握り肩を摺り寄せて談る。兎角、摺り寄りたがるが、女の常とはいへ、親しくも無きに親しさうにして見せたき僞善心が、女の持つて生れた病なるべし。

▽外國の後家さんが、紅白粉の身嗜をするとは、嘘のやうな話なれど、是れは世界の通り相場なり。夫に死なれたるは、永遠に夫に棄てられたるなり。寂しがりたりとて是非なき次第なれば、せめては、世間の男達にだけなりとも見放されたきものに非ずと、此に後家さんは身嗜みに骨折り召さるなり。

▽女には、事物の大小輕重を判別する力無く、一小些事にても、神經を刺戟すること大なるものなれば、忽ち之を天下の一大事の如く心得て、彼れ是れと躍起になり、騒ぎ廻り饒舌り廻るなり。隨て大義名分を過まる者は常に女なり。



苦樂交々

老婦人の懷舊談（二）

紅涙女史



お前達は一體何處から何處へ行く……、僞を申すな筑前の者はその樣な言葉はつかはぬ、小倉の者であらう、落人に相違はない、と云ひますから、決して僞りは申しませぬと色々辯解しましたが、いくら言つても聞き入れず、その儘高津尾に在る長州勢の本陣へつれて行かれ、子供と共々座敷牢の中へ入れられました。處が私の運のまだ盡きなかつたのか、丁度其の日に戰爭が御座いまして、長州勢が大勝利を得て、小倉の勢は企救郡と都の郡との境にある木邊峠と云ふ處を越えて逃げて仕舞ひました。すると長州勢の本陣へは勝ちほこつた兵隊共がドン／＼歸つて來て飲めよ歌への大騷ぎ、座敷牢の事も何も忘れて仕舞つてグダ／＼になる程酒によつて皆寢て仕舞ひました。で何處か明く處があるまいかと引つ張て見ると、座敷の床の横にある小窓が難なく明いたのでヤレ嬉しやと其處から脫け出してみると、彼方の處で番兵がかゞり火を焚いて居るでは御座いませんか。彼處を通らねば行く途はなし、彼方を通れば捕へられる。これはどうしても逃げる事が出來ぬのかともう落膽と致しましたが、よくすかして見ると皆居眠をして居る樣子。これ幸ひとやつとの思ひで逃げ出して合馬村と云ふ處迄一生懸命で走りました。

此の村へ參るには八ヶ瀨合馬川の兩川を越なければなりませんが、殊に八ヶ瀨川と云ふのは川も大きいし流も激しいのに、何時どうして渡つたものか、衣類がビツショリぬれて居りましたから、渡つたに違ひ御座いませんが、その時の事は全く記憶いたしません。殆

で夢中で渡つたものと見えます。やがて戰爭も濟みましたので、一先づ皆家に歸りましたが、ヤレ安心と氣がゆるみましたら、今までの病體は以前にまして惡くなつて、醫者も頭をかたむけ、私もとても此度は不可まいと覺悟して色々心配致しました。



幸ひ病氣はサッパリと全快致しましたから、悴が修業致すにはお金も多分に要る事だらうから、どうかして今有るものをへらさん樣にと、妹と二人で機を織つたり人仕事をしたりして暮して居りました中に、子供も次第に成長して或る先生の塾に參る樣になりました。すると二年程御世話になる中に、その先生が私に後妻に來てはくれまいか、息子は自分の娘と一緒にし樣と思ふからどうか嫁てくれぬかと仰有るのです。

先生は奥様が御死亡になつて御孃様お一人御有なさつたのですが、何でも私が男の樣な人間だと云ふので大層御のぞみになつたとかで御座います。それは名高い儒者で御座いますから、不足の何のと申すでは御座いませんが、今になつて再婚する位なら、これ迄色々な苦勞せず、もつと若い間に片付きましたでせう。ですからてんでお話にも致しませんでした。

　後ち間も無く悴を東京に出しましたが、私は大病後大の法華信者になりましたので、悴が出京後は他に樂しみもありませず、始終お寺參りを樂しみにして居りました。で或る時も少し遠方の寺で說敎があると云ふので私は近處の方に誘はれて出かけますし、妹も亦實家に用があると言つて家を閉めて出かけました。さて歸りには四方八方の話をしながらブラ／＼歸つて參りますと、向ふから實家の下男が走せて來て、家が火事だと言ふぢや御座いませんか、驚愕して一生懸命馳けつけて見ましたが、もう盛んに燃えてゐるので手の付け樣がありません。見す／＼長年住み馴れた亡き夫のかたみの家の燒けるのを只手を束ねて見て居る計り。あまり思ひがけない災難で、私もボンヤリして仕舞ひましたが、もう燒けたものは仕方がないからあきらめて實家の方へ一緒に居た方が好からうとすゝめられるまゝ遂に實家へ同居致しました。多難と云ふのは實に私の生涯などを指すのでせう。

　その後は只もう東京へ遊學させた悴を……かけがへの無い一人子の事ですから雨につけ風につけ思はぬ日とてはなく、朝に晩に神佛を計り念じて居りました。或る晩でした、やはり何時もの樣に佛檀に向つて經を讀んで居りますと、どう云ふ譯ですか、フト東京の悴が大層病つて居る樣に思はれて胸騷ぎがしてならないので、弟にどうも彼の子が病つて居る樣に思はれてならないがと申して、ひどく笑はれました。併しそれが眞實だつたから不思議です。

　明る朝の巳刻時分只今の十時頃でも御座いませうか電報！　と云ふ聲に、驚かされて取る手もおそしと開きますと、友達からの發信で「ヤマヒキトク」とあり

ました。もう夢中で其れを握つたまゝ山の上のお寺へ馳せて行きましたが、その日から斷食して三七日の祈願を籠め、一心に念じました。子供の爲には親はほんとに狂氣の樣で御座います。後で手紙に依つて、腸窒扶斯とやらに罹つて、一時は醫師からも見離されたが不思議にも快くなつたと知つて安心しましたが、私の一生の中に此時程辛い情ない思ひをした事はありませぬ。三つの年から女手で、千辛萬苦と申すも大層ですが、とにかく困難を凌いでやつと人らしく育て上げたたつた一人の子を、他國で失ふて仕舞ふのかと思ふては、實に堪へられたものでは御座いません。佛前で何となしに悴の病氣が分りましたのも、蟲が知らすと云ふのでせうか。或は眞の親子の情合ひで私に丈感じたのかも知れません。とにかく不思議な事で御座いました。

兎角する中に悴も業を卒へて或る縣下に勤める事になり、その中に嫁が出來ましたので、私も引き取られましたが、まだ私の業の盡きない故か、總領の嫁が孫を生みまして、男ではあり皆大喜びで居ましたのに、肝腎の親は產後が思はしくなくて、ブラ〳〵半年程も病つた末に、まだ生先きの長い花の樣な身體を生れた孫に心を殘して先立つて仕舞ひました。やさしい女でしたから、可愛想で〳〵、生先き短かい此の身體とかはれるものなら變つてもやり度いと思ひましたが、いくら思つたとて死亡つたものは致し方が御座いません反つて佛に障りになるとぞんじましたからせめて片身の孫を成人させるのを樂しみに致しました。

それも只今の樣にまだ牛乳などゝ云ふ調法なものも存じませず、乳母を雇はうと思つても、又あれが却々六つかしう御座いまして、乳母の參る迄は乳の粉やら何やらで育てまして、三つの暮只今の嫁の參ります迄は夜の目も眠らず育てました。でもまア何うやら斯うやら大した病氣もさせず、當年はもう二十三で、理科大學に這入つて居ります。私もこれで何時彼の世に參つて嫁に逢つても、まア顏が立たうと存じます。ほんに若い間は色々な目に逢ひました。(完)



春の庖厨

◎鶏肉の五目あげ

鶏肉をなるべく細小に叩き鍋に入れ、味りんと醤油を少し入れてざつと煮つけ、別にじやが薯の皮をむき軟かにゆで裏ごしにかけ、又別ににんじん、椎茸などを細かにきざみ、ざつと籃ゆでにして水氣をしぼり右の鶏肉とませ、じやが薯とこねまぜて饅頭の形につくりざつと小麥粉をふりかけ天ぷらの如く揚げ皿にとり柚子の絞汁をかけて出す。

◎鰈の味醂煮

かれひをおろし身になし、小骨を抜き鹽を强目にふりかけ十分間も經ちたらば、ざつと水にて洗ひ、よく水氣を切り、ほどよく切りて直ぐ味醂の中へ浸たし、暫時して取り出し、布巾にて拭ひ、蒸籠の中へ竹の皮を敷き其上にならべ、湯が沸騰したらば蒸籠をのせ、蒸しあがりたらばおろし際に少しばかり味醂をかけて皿にとりおろし大根を添へて出す。

◎自然薯の甘煮

じねん薯、つくね芋、山の芋いづれにてもよし、まづよく芋を洗ひ、皮に少しの鹽をふりて縄だわしにてそろ〳〵とこすり、皮がむけたらば、ざつと水洗ひして適宜に切り、鍋に入れ煮出汁と味醂を薯のかゞるほどにいれ、落蓋をして火にかけ、ゆる〳〵と煮込み、煮汁の煮減りたる頃少しの醤油を加へ、同時に薄く削りたるかつぶしをふりこみ鍋をふり動かして煮なり。

◎三ッ葉の玉子とぢ

煮出汁に適宜に醤油をさし味をつけ置き火にかけ煮

立ちたれば一人前玉子一つの割にてよく解き、三ツ葉は三分ほどの長さに切りざつと湯で、右の鍋の中に投じ再び沸騰したる時、解かしたる玉子を糸のごとくそろそろと流し込むなり、其火加減は却々呼吸ものにて弱き時は玉子は鍋底に固まり、強き時は玉子に鬆が立ちて風味を失ふものなれば注意すべし。

◎比目魚の酢味噌

ひらめを切身にし、ちよつと鹽を振りかけ、湯でゝ皿に盛り、わけきをざつと湯でゝ三四本づゝ揃へて結びて兩端を切り捨て盛合にし、木の芽を摺り交せたる酢味噌をかけて出すなり。

◎蓮と獨活の白あえ

蓮を薄く切り、獨活を亂ぎりにして共に湯でゝ醬油と砂糖にて薄味つけ、白胡麻を煎り摺鉢にてよく摺り豆腐を布巾にてしぼり胡麻と一緒にすりませ、砂糖と鹽にて味をつけ和えるなり。

◎白魚の鷄卵酢

白魚干を暫時湯にひたし、鹽出して、玉子を湯でゝ黄味を摺り、酢にてとろ〳〵にとかし、白砂糖に鹽少少加へ白魚を皿に盛り其上に懸けて出すなり。

◎蛤蜊とわけきの芥あえ

あさりをゆがき、分葱もざつと湯でゝ六七分位に切り芥子味噌とあえるなり、味噌の拵へ方ははじめ味噌をよく摺り、芥子を適宜にすりませ、砂糖に加へあさりとわけきを入れて交合すなり又芥の拵へ方は粉芥子を深き茶碗に入れ水にてねりませ、よくならし、其上に紙を二重にしておしかぶせ置其中へ水を少し入れ炭火の小さき方を幾度も入るれば、チユーと水は沸立ちて炭火に吸ひ込まるゝなり、湯のなくなりし頃を度とし茶碗をふせるなり、暫時にして紙を取りのけて芥子を用ふれば鼻をつく如くに氣の立つものなり。

◎寄慈姑の餡かけ

慈姑の皮をむき、生のまゝおろし、これに葛の粉と砂糖とを少し入れよく混和して適宜の形につくりてこれを蒸すなり、尤も椀に入れて餡をかけて山葵などをおろして載せるなり、蒸し方は釜の中に水を少し入れ其上に篩をふせて又其上に簀を敷き其中に入れて蒸すなり餡のこしらへ方は鰹のだし汁に醬油味りん砂糖を入れ常の清汁よりもあまからく加減し、葛粉を水にとかし汁の中へそろ〳〵流しこみぶつ〳〵の出來ぬ樣に攪き廻しながら煮るなり、あまり汁の沸立たる時一度に葛を入るれば、ぶつ〳〵の出來やすきものなれば、もし塊の出來し時は毛篩にて漉して用ふべし。

◎小鳥のカツレツ

鴫、鶫、其外何でもよし、毛燒して脊より庖丁を入れて、割り開き、臟物と骨とを取り去り、鹽と胡椒をふり、メリケン粉をつけ、更に鷄卵一個を割り、水少量を加へてよく攪きまはし、中にこれを入れて全體に卵をつけ更に又たパン粉の中に轉がし、フライ鍋にヘツトを半分ほど入れて火にかけ油の煙るほどに熱した時これを入れて兩面共狐色に焦げたる頃新聞紙の上に取り出し油氣を去り、皿に盛り馬鈴薯のマツシを添へて出す、マツシは馬鈴薯の皮をむき軟かく茹で、裏漉にて漉し更に鍋にバタを入れ火にかけて其漉したる薯を入れてミルクを適宜に入れ、鹽と胡椒とにて味をつけるなり。

◎當季の清汁

あさりの剝身、三つ葉、菜と揚豆腐、その外いろいろあり。

剝身はあさりにても蛤にても、ざつと水洗ひして、そのまゝ清汁の中に入れ、一つ吹き沸らして椀に盛り淺草海苔をあぶりて揉みこむ。

三つ葉はゆでゝ水氣をしぼり、一寸ほどに切りて椀に入れ、別に汁を煮立てゝこれを椀に盛るなり、淺草海苔をかくるもよし。

菜と揚豆腐は菜を細かに切り、又油揚を縱に二つに

切り、更らに幅狭く横切にして共に清汁に入るなり。

◎里芋の葛かけ

まづ里芋の皮をとり、大きい牛蒡を二分ほどに切り芋は丸のまゝ双方共湯煮したる後ち椎茸のだしにて煮込みて味醂、醤油を加へて味をつけ其れに葛少し水にて溶き、其中へ注ぎ入れて、葛のかへるまでゆる／＼煮るなり。

◎馬鈴薯のごつちや煮

玉葱、人参、馬鈴薯をいづれも七八分位の角切となし、少し位したちのある位にとろ火にてよく／＼煮込み、鶏若しくは牛肉などの煮出しを使ひて味をつけ、胡椒をふりかけて出す。

◎大根の丸煮

なるべく大きな大根を撰びて皮をむきこれを三四分位の厚さに切り、それを短冊に切りたる油揚と一緒に椎茸のだしにて文火にてゆる／＼と煮込み程よく味をつけるなり。

◎白菜の筒煮

なる丈け株の太き白菜を撰び、葉のところ一寸ばかり切り落し、丸ごと茹でゝ水に入れ置き、後ち別に糸のごとく細かく切りたる昆布を水洗ひして、右の白菜を二た所括り、根の方を切り取りて胡麻かけの浸し物につくり、昆布の括り目を中央にして長さ三寸位に切り揃へ、鰹節の煮出しにて煮る、揉み海苔をふりかけて出す。

◎天麩羅豆腐

常の豆腐を清き布巾に入れて絞り、擂鉢にてよく擂り葛を入れ又牛蒡を入れ、にんじん、木耳などをせんに打ち、栗、慈姑、麻の實を入れ豆腐につゝみ、うどん粉の衣をきせ、胡麻の油にてあげ、砂糖醤油にて甘く煮る、重詰などにもよし。

◎海老豆腐

生の海老の皮を剝き身ばかりにして庖丁にてたゝきて細かになし、別に豆腐の摺りたるに右の海老をよくまぜ合せ、油煎にして味をつくべし。

◎雉子やき田樂

煮かへしの醬油にすり柚をそへ、少しく燒たる豆腐にかけ出すなり。

◎飛龍頭

豆腐をくづし水をしぼり、酒と醬油にてよくいり揚げ、牛蒡のせん、木耳のせん等をまぜて豫め水に浸したる豆腐の湯葉二枚にて葛の粉ふりながら勝手よくこれを卷き、つゝみて暫らく押をおけば固くなる、さて胡麻の油をよく煮立てゝ揚げるなり、尤もさつと揚ぐるがよし、揚りすぐれば皮こはゞりて碎け易く切りがたし。

◎けんちん

豆腐をやうこに切り、ざつと揚げ、栗、皮牛蒡のせん、木耳、麩の細切、芹のみぢん刻み、もしくは青菜銀杏ふたつ割等合せて一升の分量を油一合の分量にて油を沸かし、まづ銀杏、牛蒡、芹を入れて炒り、次に木耳、麩、豆腐、栗を入れてうちかへし〳〵して醬油にて味をつけおき、湯葉を水に浸し板にひろげ、まづ味付けたる品を、厚さ四分位にまんべんなく敷ならべよく卷付、干瓢にてくゝり油にてよくあげ、小口切にして出す。

◎昆布煮

板昆布を鍋にしき、その上に豆腐を上せ、始めより味醂、醬油、砂糖にて味をつけ、こと〳〵と長く煮る時は昆布の味しみて、併も焦つかず味よく煮へるなり。

◎鯛七品料理

目の下一尺、目方にして凡そ五六百目位の鯛一尾を以て五人前七品の料理を作るには如何にすべきか。

一向附　刺身、青紫蘇、山葵醬油

一汁　合せ味噌仕立、蓴菜、落しからし
一燒物　煮切かけ、花かつを
一煮物　鹽煮、木の芽
一吸物　熨斗梅、針山葵
一八寸　鯛の子
一丼　膽と腸

まづ鯛を三枚におろし、脊と腹とを分け、脊筋の凡そ七分を向ふ附に使ふ、殘り三分と腹の裾とを燒物にする頭と腹とを煮物にする、卵を八寸に使ひ、膽と腸とを強肴にする。

△向附＝脊の七分（刺身にする處）裏表を用ゐ、皮を引き作り身につくる、一人前五切位の分量なり、一枚の脊紫蘇を凡そ八つ位に摘み切り、適宜にあしらふ。山葵と濃口の醬油とを混せ鉢の裾より流し込む、これにて向附が出來る。

△汁＝三州味噌三分に上等の白味噌七分をまぜ、擂鉢にてよく擂り別に水一升に鰹節五十目とだし昆布一本を入れてよく沸煮してだしをつくり、このだしにて右の合味噌を溶き、蓴菜を入れて椀の數だけ味噌を立てる、而してからしを固く溶きて一寸落す、これにて汁が出來る。

△燒物＝又向附を取りたる殘り三分の脊筋と腹の裾を取り、更に二枚に剝ぎ、鹽水に浸けておくこと一時間、串にさして日に乾かし、溫度の低き火にて燒きむしりて器に盛り、その上より、煮切（一升の味醂を六七合に煮つめたるもの）をかけ、その上に花かつを體よくかける、それにて燒物が出來る。

△煮物＝頭と腸とを細かく切り、これに鹽をふり、凡そ一時間の後沸湯にてあらひ、ぬめりを去り、だし昆布を半分ばかり入れ水にてたき、椀に盛り、木の芽を入れて出す、これにて煮物が出來る、すべて潮煮は潮味にするものなれば、醬油は入れぬ筈なり。

△吸物＝昆布だしを作りこれに、熨斗梅二切、針山葵（山葵を細かく刻みたるもの一本で五人前出來る）を入れて、これにて吸物が出來る、これは潮煮にてはなく、醬油をつかひたる吸物なり。

△八寸＝鯛の子を美濃紙につゝみ俵のやうにこよりにてくゝり、湯煮したる後煮切七分醤油三分にて煮つめ、紙を去りてよき程に切る、これへ柚子の飴煮をあしらふ、これにて八寸が出來る。

△丼＝又膽と膓とを細かく切り、湯煮し、笊にあげて水氣を切り、牛蒡の笹がきと酒にて煮、煮ながら、醤油と砂糖とを少しづゝ入れるこれにて佃煮となる。

以上五人前の料理と知るべし。

◎魚のコロツケ

材料は魚肉、鶏卵、牛乳、葱、芹、麺包、鹽、胡椒肉豆腐等なり、魚は何品でもよし、今節ならば比目魚鯛などは最もよし、まづ骨を取りよく叩きて擂身になし、擂鉢ですり、別に麺包を牛乳の中に浸して絞りあげ、鍋にバタをひき煎りつけ、又鶏卵の黄味ばかりを入れて掻きませバラ／＼と指につくほどになるを前の擂身と同じ分量に入れて野菜を細かに刻み交せ鹽と胡椒で味をつけ、拇指ほどの大さに圓めて茹でるなり。その茹でたるを苣又は芹など取合せて出す、肉豆腐は香料なり。

◎魚のボイル

材料は、魚一尾、玉葱、酢、食鹽、赤大根、酒等なり、これは魚類を湯煮したるものにて外觀を美はしく見する必要あれば鯛、鰡の如き尾頭つきの魚に限るなりさてその魚を丸のまゝ他の品々と共に鍋に入れて煠であげ皿にうつし、よく冷まし其の周圍には赤大根、芹などを置きて飾りとし、魚の上には一面にマヨネースソースをかけ又其上に煮拔玉子を裏漉にかけて散らすなり。

◎肉入オムレツ

材料は鶏卵三個、メリケン粉大匙三杯、鹽、胡椒、味つけ肉、バタ、ストック、牛乳等なり、まづ玉子の黄味と白味とを分け白味を泡立器にて雪白になし黄味と牛乳及びメリケン粉を合せたる後雪白になりたる白味を入れ並のオムレツの如くフライパンにて味附肉をかしは餅の如くにくるみて燒きストックを少しかけて出すなり。

桃の節句

△雛祭の起原

三月三日は重三又は上巳と言つて、正月七日、五月五日、七月七日、九月九日、と共に五節句と唱へます。又若菜の節句、菖蒲の節句などに對して此の節句を桃の節句と申します。此の日に女の子供のある家には、雛を飾つてお祭を致しますが、此の雛祭の起りは、遠く承平年間、今より九百七八十年前の昔にあると云ふ事です。初めはひゝなあはせとて、宮中又は公卿殿上人等の家庭の遊戯であつたらしく、季節も定まらなかつたのですが、後ち上巳の祓の人形と雛遊とが混じて、今日の様に三月三日に家毎に行ふ様になつたのだと申します。

△雛祭に就ての催し

今日雛人形には親王雛、隨身、官女、五人囃子の外、高砂の尉姥、潮汲女、裸兒など色々ありますが、最上の品には貴族殿の様を模して衛士、仕丁などを附したものもあります。さて五六日前より、家々の座敷に飾段を設け、赤毛氈を布き屛風を繞らし、其の幕を張るなどして嚴かに之を飾りつけ、供物として菱餅、葩煎・熬豆を始め、榮螺、文蛤などを供へ、親しき人々



を招いて、赤飯、白酒などを進めて振舞をいたします。女兒が生れて初節句に當る家へは雛人形などを贈つて祝ひますが、其時は當日に此方から特に招いて祝の宴を開くか、又は白酒などをおくつて謝意を表します。祭の後一二日にして雛人形を納めますが、東京などでは、之を納める前に蕎麥麵を供へる風習があります。

△初雛と年々の祭

徳川の中世後今日に至る迄、雛は女子のつきものとして、先づ女子出生してから、最初の三月上巳の節句を初雛と稱へ、親戚知人より祝ひ、爾後年々飾り附けをなし、他へ嫁して後は、更に婚家にて初雛及び年々の雛祭を行ひます。此の風は次第に衰へた樣なれども、古風を遵守する家庭にては、今も尚ほ更めず、日本橋十軒店は舊に依て繁昌を極めて居ります。

△畏しき邊りのお雛祭

畏き邊りの御樣子を承ると、今現に宮中にて取り行はせらるゝ上巳雛の祭は、明治三十一年頃から再興せられたもので、大奥内の御遊に止めさせられ、其の狀も其の昔の如く華美なものではなくて、如何にも質素な御行事なさうで御座います。昔は御所にも御雛は幾組もあらせられて、隨身、官女、

は貝桶、唐櫃、鶏合、文庫、乗物などの附屬の人形調度を眼醒むるばかりに取り飾らせられたものなさうですが、それらは何れもつぎ／＼に京都、鎌倉邊りの尼寺にお下げになり、僅に殘つたものも、安政炎上の砌に皆失くさせられたから、御所には古へからの御雛としては、只今唯皇后陛下の御雛が二組程あらせらるゝ丈けで、外には一つも無いさうで御座います。此の二組の御雛と申すのは、何れも足利時代の雛の如うに、男雛、女雛共に冠を戴かず、髪は後ろに撫で下しておすべらかしださうですが、別に之れに伴ふ隨身、調度なども無いから、御祭の日には常の御人形の間に日頃硝子箱に收めて御安置あらせられる一切の人形を併せて飾らせられると云ふ事です。

△下々と異る御例

御祭の模樣を申しますと、第一下々と異ふのは、高々と段を作らずして、宮御殿と稱ふる宮中皇太子殿下の御座所にしつらへさせられた別段の御小座敷の平疊の上に、赤毛氈を行き、こゝに上巳節句の前日に雛人形等一切の飾り付けをせさせられる事で御座います。さて當日となれば、朝まだきから、白木の三寶に美しく作られた御菓子凡そ七組ばかりも堆高く盛り上げ、午近き頃には、白木の三寶に、之れも七組ばかりの御料理の供物を供へられます。其他手提の御重箱にもなほ數々の



御供物があります。わけて文蛤、栄螺などは、固より生きてゐるものであるが、菓子で細さき貝の色々なのを作り上げて美しく並べられた所などは、實に愛らしいさうです。此の夕は皇后陛下には、例年宮中の奏判任の女官を召させられて、雛の前で桃の御酒を賜ふてやさしき御内宴を開かせらるゝさうで御座います。

△女官達の催し

宮中女官の雛祭も、大奥と同じ樣に、上巳の前日に、掌侍、権掌侍等其程々に依つて五段六段と高々と段を作つて、二組ばかりの雛に種々の人形を交へ、調度や供物、白木、黒塗の三寶を賑やかに並べて飾り、さて當日となれば、局々の女官達は一年一度の喜びを傾けて、上を下へと打ち騒ぐとか。三日目には早や御片附けとなるのですが、御料理、御菓子などは、夫々御召物を以つて御膳、御服、御道具等各掛り／＼の女官中へ賜はり局々の御供物も亦それ／＼に分たれて、こゝに亦女孺、以下の女官達が、歌ふも舞ふも心次第の打ちとけ差し許されての大宴會があるさうです。之れも明けく治る御代の御しるしといとも畏く拜します。

お節句の重詰料理

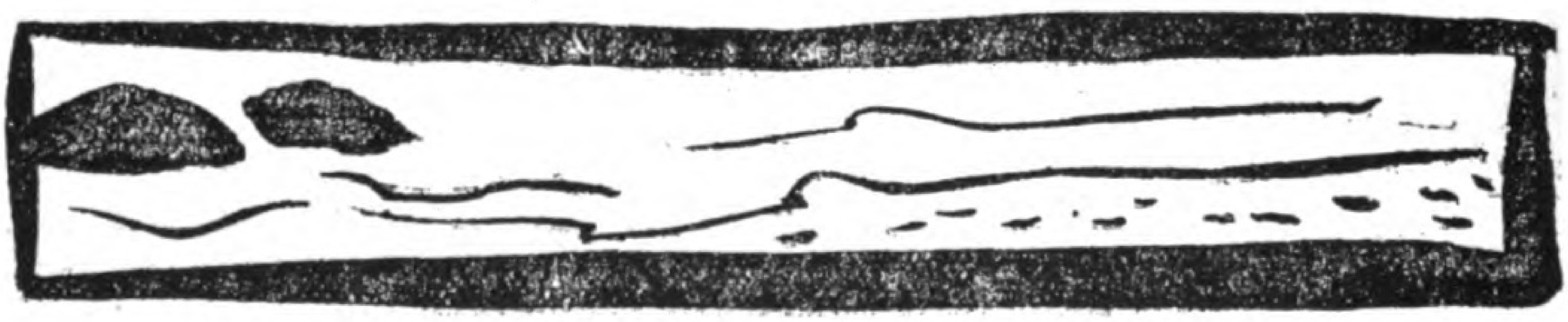
桃の節句の重詰料理としては、下の様なものが、一寸美味しくて宜しう御座います。

一の重

▲桃色―――先づ白寒天二本を十分間ばかり水に浸け、後ち俎板の上にて細く切り、之を鍋に入れ、水四合を混ぜて、火に掛けて煮溶します。又別の鍋に砂糖百二十匁、水五勺を加へて煮溶し、之を前の品と合せて漉籠にて漉し、更に別に長芋一本の皮を剥きて一寸程の小口切になし、湯煮て裏漉をし、之れに右の溶したる寒天を少量づゝ交ぜて掻き廻はし、火に掛けて二十分間位煮詰め、それに食料紅少量を加へて桃色になつた時に、適當の箱に入れて固くします。此の紅を交ぜる前に味醂五勺ばかりを煮返して入れると一層好くなります。

▲小櫻くわゐ―――慈姑五合を水にて能く洗ひ、小櫻形に切り十五分間程茹で笊に取り上げ、それを鍋に入れて、鰹魚煮出し三合、醤油五勺、鹽一匁、砂糖三十匁の割にて十五分間程煮ます。

▲磯邊白魚―――白魚をざつと洗ひ、水氣を去り、切板の上に



並べて細き金串に横に刺し、之れに火取味醂五勺に醤油を交ぜて煮詰めたる照汁を塗り、尚ほ青海苔を焙烙にて煎り擂鉢で能く擦つたものを振りかけます。

二の重

▲三色玉子―――茹玉子七個の黄味と白味を分け、白味の方へ砂糖十五匁と鹽一匁を加へ、黄味の方へ砂糖二十匁を加へ、別に裏漉をして、白味の半分に酮紹粉を交ぜ合せ、生玉子一個の中黄味と白味を雙方に分け、押わくの中に順々に重ねて平になし、十分餘り蒸籠でむします。

▲蒲鉾―――之れは出來合ひの品を使ふ事にし宜し。

▲姫百合―――姫百合根十個の惡しき所を切り去り、水に洗つて十五分間程煮し、後ち鍋に丁寧に並べ、鰹魚煮汁二合、味醂七勺、鹽二匁、砂糖四十匁の割にて又十五分間程煮ます。此の時鍋の蓋は美濃紙を用ゐます。

▲松風細魚―――細魚の鱗を引き去り、頭と骨を取り、うす鹽にして十分間置き、後ち水にて鹽を洗ひ、金串に刺して燒き、之れに前に述べたる照汁を塗り、其の上へ芥子の煎つたのを振りかけます。

▲色蒟蒻―――蒟蒻を適宜の形に切り、湯煮きて水氣を去り、鰹魚汁と醤油、味醂、食鹽、砂糖を少しく加へて煮ます。

三の重

▲ぬた和へ――分葱の葉を切り去り、水にて洗ひ、之を熱湯に鹽を一掴み入れて茹で、後ち笊に取り上げて一寸位の長さに切り、又別に細魚の鱗と頭骨を去り、薄鹽をふりて五分間程置き、後ち之を酢に浸し、爼板にて皮を剝ぎ、細かに切り置き、尙ほ別に味噌を裏漉しして鍋に取り、味醂と砂糖を加へ、火に掛けて能く煉り、之れに酢五勺を混ぜて火より下し、冷へたる時、其れにて右の分葱、細魚を和へ、芽紫蘇を交ぜます。

四の重

▲煎菓子――之れは普通の豆煎なれば略します。

五の重

▲櫻餅――道明寺一升を水にてばら〳〵に固く捏れ、之れを濡布巾を敷きたる蒸籠に入れて蒸し、柔かに蒸せたらば手にて捏れ、それに砂糖五十匁を少しづゝ入れて又捏れ、後ち濡板の上に揚げて濡手にて適宜の形を作り、其の中へ普通の餡を入れ、半月の格好にして櫻の葉に卷きます。

▲腰高饅頭――メリケン粉百目に砂糖五十匁を加へ、イスパタ(脹れ粉)少量を交ぜ、又水一合を入れて能く捏れ、之を適宜の大きさに丸め、更に押して皮を作り、別に普通の餡を皮と同樣の形に丸めて右の皮にて包み、饅頭の形にして蒸します。

▲外郎――白玉粉百六十匁に水一合を混ぜ、砂糖三百匁を入



れ、尙ほ新粉二合五勺を加へて捏れ、之を四角の鉢に布巾を敷きたる中に入れ、三十分間蒸籠にて蒸し、濡板に上げて切ります。

▲煉羊羹――寒天二本を水三合にて火に掛けて煮溶し、砂糖五百目、小豆漉粉三百八十匁を加へて能く煉り、箱に流し込んで作ります。

▲野邊の春――白玉粉百目を水にて固く捏れ、小さく千切りて湯煮き、水氣を去りて又火に掛け、杓子にて潰し交ぜ、水少量を加へ、尙砂糖二百匁を少しづゝ交ぜ、青粉を入れ、稍々堅くなりし時上水飴を三十匁投じて又能く交ぜ、後ち小麥粉の中へ掬ひ出して、冷して適宜に切り、上割餡を入れて包み丸めさて水にしめし、黃色のそぼろの中に轉がし、丸めて平たくします。

以上の重詰料理の外に尙ほ左の二種を作ります。

▲榮螺のつぼ燒――貝の蓋を去り、肉を短册に切り、さて貝殼を能く洗ひ、其の中へ椎茸、三葉、慈姑をきざみたるもの、銀杏の皮を去りて熱湯に浸し小口切りにしたるもの、及び先の短册等を詰め、之を醬油、味醂の汁にて焚き、煮上れば元の如く蓋をして胡椒を添へます。

▲吸物――先づかれひを三枚に卸し、薄鹽を振りて茹で、菱形に切つて置きます。次に三葉を一寸湯に鹽を加へて茹で、水氣を去つて一寸二分位の長さに切ります。さて五合の鰹魚汁に醬油二勺、味醂三勺、鹽一匁を加へ、鹽梅をして前の二品を入れ、柚と山椒を投じて椀の蓋をします。



和歌

金子薫園選

〔天〕 ○ 京橋 毛利まつ子

朧夜や巣立ちし小野の面影のうかびも來らむ小鳥を思ふ。

評 おぼろ〳〵と夢のやうな作中になつかしみも優しみも籠つて居る。

〔地〕 ○ 京都 磯谷はつ子

この朝を鶯なきぬ君とわが七くさ粥を祝ふとすれば

評 鶯と七くさ粥に聯關した配合美が認められる。さうして、ほのかな情趣もふくまれて居る。

〔人〕 ○ 河内 中島簾子

今朝見れば山のふもとの家二軒かすみぬ遠く鶯のなく

評 たゞ見たまゝの景色、畫のやうな趣が目に浮ぶ。

秀逸

○ 尾張 櫻井久美子

たかむらを斜に出づる一枝の梅花白しやたそがれ時を

○ 千葉 土屋喜美子

冷の月は出でたり我胸の戸にさすやうにほの青みつゝ

○ 巣鴨 小林しげ子

大原女の花賣る聲を口眞似て戸に隱れたる春もありしよ

○ 相模 中田靜江

籔に添ふ線路を汽車のすぎゆきしおと靜かなり鶯のなく

○ 高崎 池野たま

ふと假寐ものに覺むればかきさしの繪絹にうつるおぼろの月よ

○ 安房 木村しのぶ

戀か戀かいま吾がこゝろ和らぎを切におぼゆれ春の日の前

○ 伊勢 岩本淑子

あゝ冷たき涙の中に浮び來ぬ戀初めし日と戀ざめし日と

○　岩代　城田市子

冬の夜やわが身の影のそへるだにそゞろうれしく歩み寄るかな

○　巣鴨　片岡晶子

おもかげの人はうたてや暮れゆける夕べの雲にまぎれて去にぬ

○　大阪　梅村薫花

春の月こゝろなごむや狂ひ女の御堂の縁に腰かけて居ぬ

佳作

○　京都　木俣津夜子

春の月花にのぼりぬ何となくなつかしきまゝ御名よびてみぬ

○　和歌山　橋本てい子

紫の衣するすみれこゝかしこ野に天使見る春とはなりぬ

○　牛込　平塚白百合

下京や小雨のあとの月おぼろにゝゑみてのみ君はゆくかな

○　越中　勢能子

またしても文よむ窓に吹雪しぬ三月といふ越の山里

○　東京　松尾節子

おもひあまり閨窓おせば夕月は槐樹のかげになりにけるかな

○　越後　松永繁子

君が家まぢかくなりぬ菜の花の小道を白き蝶と今行く

○　長崎　天野春子

おぼろ月花かくれ行く美しき人の衣ずれのごと流るゝ水よ

○　横濱　山田清

ふとさめて隙もる風の疼けきに露おく野路をおもひけるかな

○　岩代　古川つれ

鐘しげう野より山より音づれて暮れ行く春の日のしづやかさ

○　周防　貞弘八千代

去年共に結びしまゝに春の來て柳萠えいでぬ君遠く行く

○　周防　小越龜代子

冬姫のみこゝろそこれふりおとすかざしの玉かあられみだるゝ

○　松山　河本虎子

蝶の羽のそのやは羽にもふれてちる櫻ははやもさかりすぎたり

○　大分　立川つや子

しら旗の籏のごと吹きちれる磯七村の沖の歸り帆

○　上毛　園部敏子

鐘さえて鳥とぶなり夕ぐれの野寺の丘のおくつきどころ

○　大阪　西戸政江子

逝く春の花散る窓にたゞひとり何を思ふや頬のやせし子よ

○　伊豫　渡邊梅子

夢まじり菜の花さきて山畑のひるのどかなり遠く鳥なく

○　美作　香木公子

少女てふこゝろに咲ける紅百合のしられぬ戀やかなしかるらむ

○　大阪　西戸政江子

矢のやうに燕一羽飛び行きぬ人なつかしき夕暮の窓

○　伊豫　渡邊梅子

海苔の香の粗朶より立ちて初霞む潮風ぬるし夕月のかげ

○　豊後　加納とよ子

何となく世に只二人殘されし思ひのみしぬ春の夕ぐれ

○　淺草　金子蝶子

うら／＼とのどけき春の桃の節句ひな祭る日は明日となりけり

○　京都　渠　子

紅ながす紅屋の背戸のさゝ川にうきてながるゝ白梅の花

○　大阪　淺田たつ

なき君の呼びてもおはす心地して窓のぞかるゝうす月の宵

○　新潟　小林明子

あたゝかき春の日和に雪とけてかげろふすなり五歩の小庭に

○　奈良　田村とし子

片岡の君が門べの梅の花咲くらむころよ月はかすめる

○　牛込　ひ　で　子

若やぎしみ聲もまじる朧夜や訪ふにたゆたふなつかしき家

○　三重　中澤あかし子

春風はのきばにかをる白梅の一枝手折ると立てる子に吹く

○　東京　莊　秀子

流じろくさける櫻にひろ霞をかしく立つを見つゝ野路ゆく

○　福岡　太田こと

嘉原のうすき夕日にてらされてさびしくうめの花かをるなり

○　臺北　雄見さわ

馬賣りてひとりさびしく歸りくる男にあひぬ秋の山道

○　陸奥　野坂靜波

舞ひ出でぬ笑きかむりせる巫女すがた綾の衣の袖かろげにて

○　千葉　梅澤ふじ女

近づける春をうれしとばかりにてこぞめしら梅花さきそめぬ

○　金澤　籔地他美子

冬枯の枝をしづるゝ白雪のかげさへみゆる月の寒けき

○　長崎　田家よしを子

梅が香に誘はれ出でゝ見つるかな野路はろ／＼にかすむ月かげ

○　大阪　高宮正子

きのふけふ寒さ覺えて夕暗の嵐の末に白きもの見ゆ

○　澁谷　今村せい子

よべの雪いかにと目ざめおもふ時小島の啼すいと晴れやかに

○　千葉　峰島星華子

今ぞ知る君がこゝろは石のごとたゞにひとへに冷たかりきと

○　越後　石井しな子

四十雀雀にまじりおとづれて雪の朝など竹おもしろき

○　茨城　齋藤保子

ふるさとの母こひしさに鶯のなく音にもなほ音をのみ泣かる

○　岩代　岸野常子

山かげの花の下ぶしめさむれば夢路のはてに鶯のなく

○　岩代　木口よし子

わが胸の惱みを知りていと熱き涙給はん人あらばとも

○　下野　高鑑かつ子

唄の聲やゝ近づけば花賣の少女ぞ出づる霧の中より

○　京城　原野みゆき

梅の扉に薄月さして笛の音に二月の宵の興多きかな

○　大森　仁科順子

わか草にあだ襟の京の子ぞ若き流に近き栞の花小路

○　大阪　大村儷子

大和路を逃る日傘に雨はれて薫りよきかな青麥の風

○　埼玉　富倉いれ子

君來んと朝清めしてまつ門に二ひら三ひらちるさくら哉

○　千葉　牧野峰子

枯れはてゝ落つる葉もなき老木にもなほ吹かゝる夜のあらしや

○　青森　三浦愛子

波の音はかすみて遠き春の夜をうぐひすに似る笛の音のする

○　岐阜　山下梛子

庭の雪消えせぬ色に梅さきて春おもほゆる日となりにけり

○　大阪　前澤初芽

今宵又月にうかれて花野とひおなじ心の君にあひけり

○　名古屋　松久秋女

梅の花いまだ開かずされど日は春の色にもかすみけるかな

○　茨城　門倉こう

亡きつまをこふる霜夜の袖の月もしばしくもりて渡る雁かな

○　栃木　諏山とも子

おぼろ夜はいつか小雨の夜となりて音しめやかにのきの花散る

○　臺北　黒田その子

朝明けやうす紫のもやこめてかをりみなぎる白蓮の池

○　伊豆　木村春枝

亡き人の魂かとばかりこの夕しきりに星のまたゝきてけり

○　下總　岩瀬不二野

船うけて君しきまるばいとはじな離れ小島にひとり住むとも

○　美作　性全知惠子

いもうとの小さき魂を葬りし奥津城ぬらし春雨の降る

○　山口　岡本ふさ子

鶯の初音をきくと日記にかきさてその歌をおもふ朝かな

○　越後　伊倉ます子

梅咲くや宵うす月の影めでゝそゞろありきく夜をふかしぬる

○　大阪　沖ふく子

青柳に舟をつなぎて人はあらず霞ながれて春雨ふる日

○　兵庫・内堀薫

谷川はながるゝ水の音ぞきよきさすがに遠く塵をへだてゝ

○　和歌山　西脇まさゑ

遠山の梅の林をぬけ出でゝ來しか我家にうぐひすのなく

○　福井　宇野とめを

車ひく小牛のあゆみ日は落ちて闇夜をたのむ星のかげかな

○　本郷　若子

かなしきは我さがなれやうるはしき花得しときも散るをおもひぬ

○　安房　横木房枝

君とつぐ夕べときゝて詩もならず琴かいとりて恨みの調べ

○　安房　白濱房子

囚人の一群通る裏町や朝げのけぶり綱うたな引く

○　和歌山　松島千枝

なき世のみ歌思ひぬ梅の花おぼろ月夜のそゞろありきに

○　豐後　菅原芳子

春の日や椅子によりつゝ詩集などひもどく窓に駒鳥のなく

○　高崎　小松竹乃

京に七日さてもうれしき春のゆめを夜ふれに流す鴨川の水
○ 伊豫 渡邊梅子
鶯は都の空にあくがれて梅たゞ白し春のみ山路
○ 須磨 有村榮芳
日あたりの南の縁にはしゐしてうつら〱きく鶯のこゑ
○ 美作 性全峰代
籠り居て物おもふころはほとゝぎすわがふる里の方になくらし
○ 長崎 天野春子
雪きえしあしたの野邊を訪ひ見ればはつ〱見ゆる若菜のみどり
○ 芝 榮崎龍子
我が宿の桃もさくらも咲きにけり昨日も今日も小鳥むれなく
○ 紀伊 直子
春霞たなびくあたり櫻花さかりなるましひとり野路ゆく
○ 岩代 城田和子
時ならぬ雪といはむもふりたりや白梅ちりぬ春風吹く日
○ 東京 原時子
紙窓にうつれるかげもかをるなり月のさしたる庭の梅が枝
○ 神奈川 林咲子
春らしき日のかげさして鶯の遠音になくがおもしろき朝
○ 米國 重津なほ子
野に山に春の光はみち〱て花の香ならぬ道なかりけり
○ 香川 三村早子
我が歌は今し沖行く船にのりて海を走ると打ち眺め居る
○ 栃木 鈴木いつ子
松陰は五月雨くらく草ぬれて昔夢みししとれ冷たき
○ 東京 吉岡龜子
あすふらん雨のきしきのきぬ笠をおほひてにほふ春の月かな
○ 靜岡 中村志賀子
ある星は山のはちかく光りさし明けぬとさわぐむらがらすかな
○ 名古屋 中島咲子
花さかぬ梅の小窓にもの縫めはまだ幼なげの鶯の聲
○ 長崎 西村春子
賤が家はかすみにきえてくだかけのこゑのみぞする里の夕暮
○ 下[illegible] 小澤まゆみ子
愛の花いましすがれて實となりぬ胸野は秋の末ならなくに
○ 東京 矢澤民子
うぐひすのほのかにうたふこゑすなりわが家にもはや春はたつらむ
○ 埼玉 あけぼの
只ひとり夕べの空をながめつゝ戀しき君を慕ひてぞ泣く
○ 越後 野本操子
天津國春は今しもすぎぬるかちり來る花の雪とふりつゝ
○ 越後 坪井わか子
花の中に家はれふりて川添の梅の一むら月ふけにけり
○ 豐後 菅原よし子
春の窓つらつらものゝ思はれてさへつる鳥の影なつかしき
○ 近江 いち子
見るまゝにいと美しく榮ゆる雲戀しき色にやがて暮るべし
○ 東京 西村直子
みだれ髪けづると見えてうちなびく柳にかゝる櫛がたの月
○ 下野 高山青霞子

かゞみなす水の面にかもめ又もうきて惜しや夕日は波にくだけぬ

○　愛媛　佐渡せい

村十月つくる藁屋の井戸ちかく白椿さき暮遲き日

○　滋賀　廣瀨ゆき

しろ／＼と殘れる雪にくれかれて冬の日ながし山田の里は

床に飾られし石膏細工の大原女を見て　京都　いく

きざまれし賤の女なかし怖氣なくつまからげして何をおもふや

○　美作　性全峰代

しめ／＼とふりつゞきたる春雨にわがふる里の花や散るらむ

○　大阪　桂枝

淋しくも冬は冬なる朝げしき雪かとまでにしもしろうして

○　飛騨　船坂道子

のどやかに舟唄もして川岸に紅うかぶ桃の花かな

○　下野　菊池きよ子

ともすればわが世ふけぬる心地してくるしき胸をおさへてぞ泣く

○　大森　しらふぢ

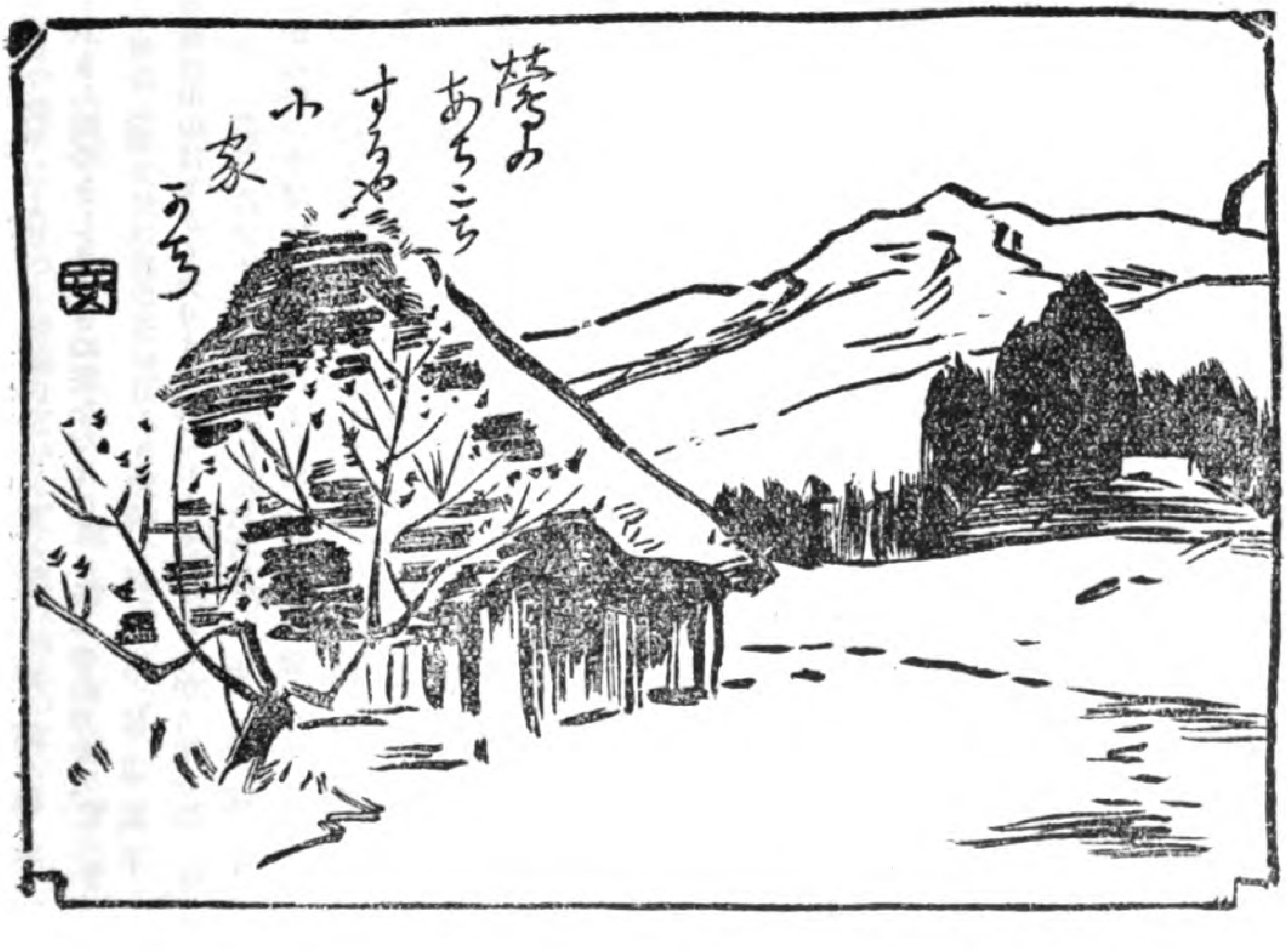
須磨の夜や藁屋つゞきに白梅のかをりほのめき淡き月しぬ

○　相模　中田雪子

水上は櫻さくらし春川に釣りする針にかゝる花ひら

○　日本橋　伊井紅蔦

君ましゝ座蒲團見ればおぼろげに猶も君見ぬなつかしきかな





〔甲〕 嫂樣の手術

日本橋　吉田さだ子

嫂樣が今日午後から手術なさるので、兄樣は朝から被居つた、三時頃看護婦が來て嫂樣をつれて行く、いよ〳〵手術するのだと思ふと心配に成る急に戸扉があいたからハツとしてふりむいたら、夫れは看護婦が湯還婆を持てきたのであつた、「もうじき參りますよ」と言葉を殘して出て行く、何んだか恐ろしいやうな氣がする、今か〳〵と待つて居る内の心細さ、兄樣は平氣で新聞を讀んで被居るが、心はさすがに手術室へ行て居るらしい、バタ〳〵と三四人の上草履の音、夫れと云ふ間もなく先生はまだ夢中の嫂樣を抱いて來て、靜に床の上へ寢かして下さつた、私は今更の樣に胸がどき〳〵して何とも言へなかつた．肩から頭へかけた網帶が目立て高く成て居る、嫂樣はまだ御氣が付かない、もしや此のまゝにと思つて、思はずゾツと身ぶるいした。

〔乙〕 嫁ぐ姉

四谷　銀波

では御機嫌ようと靜に起ち上がつた姉樣の後姿は、いつもより十倍も美しゝ見える百合の大きな模樣の振袖が廊下に引きづられて、一足毎に見える白の長襦袢が如何にも品がよい。

隱紅色に菊のかたの帶が、いゝ恰好に矢の字に結ばれて、吉野櫻の間からかゞやく夕日がそれにうつつてまぶしい樣。

最う今晩から大好きな姉樣が他家の人かと思ふと、何だかわけもなく目が曇つて來る。

〔丙〕 哀れな物語

栃木　五月女衣子

「そして笑ふ眼元なんかもそつくりだよ、ほんとに幸子ぢやないかと思つた事が幾度あるか知れない」又しても伯母さんはしみ〴〵恁んな事をおつしやる。

いつも御いでの度にくり返されるお言葉だけれど、其の都度何故か私は自分の前途を呪はれる樣な氣がしてならぬ。

幸子とは伯母さんの一人娘、しかも、二十年の花の美し盛りに、哀れな物語りを殘して果敢なくなつた薄命な從姉なので。

「そんなに育てますかしら」と何氣なく言ふても、どうかして其の悲慘な

運命丈けは似ないで欲しいとひそかに祈つた。

友

函館　大脇操

振向いて、今別れた友の後姿を見て思はず、「癒るのかしら」とつぶやいた、青白く痩せて肉のこけたあの頰、高んだ眼、脱けて薄くなつた髮、其所に死の影が宿つて居る樣に思はれる。

『若しや死なれるのであるまい？』と不安の眼眸で呪ッと見詰ると、白い襟に零れた後毛が細い頸筋を輕く弄つて居る。

「お末さん御大事に――」と吾れ知らず呼ぶと友は振返へつて「有うー」と寂しい微笑を殘して行つた。

私の眼は涙に掩はれて、もう見詰て居る事が出來なかつた。(入賞)

花婿

鳥取　むらさき

S樣が御出になつた、「何卒御上り遊ばして」「イヤ急ぎますから」「一寸位およろしいでせう」「イヤこゝで失禮致します」、いかにも遠慮げに、また、キマリわるさうに、うつむいてゐらつしやる、S樣は去年高等學校を優等で御卒業遊ばした秀才で、兄人とは極く親密なのに、今日に限り何んだか改まつてゐらつしやる、「奥さんあなたに申上げて置きますが」ますくキマリわるさうに「何れ改めて御案內も致しますが、明後日結婚致します、披露は來月の三日に」、「オヤ夫は御目出度ございますれ、どなた樣と」、「川上雪子(私の友人)と」、かすかに仰有つた唇がふるへてゐた面見られじとにや、逃ぐるやうにして御歸りになつた、随分初心な人だ。(入賞)

健ちやんの失望

横濱　蕉葉

今晩は珍らしく暖かいので、夕飯後兄さんは姉さんと今年九ツになつた弟の健ちやんを連れて地藏樣の緣日へ行かれた、私は一人で留守居をしながら讀み殘りの「こゝの秘密」を見て居たら、お勝手の方でガタリと大きな音がした、ランプを持てソート行て見たら、恐い樣な大きな溝鼠がチユーくいひ乍ら、噛て居る、氣味が悪かつたから碌々見もせず逃る樣に座敷へ戻て來た、早く兄さん等が御歸になればいゝと思つてゐると、やがて音はパツタリ止んだ、痛いさうにきつと首でも締められたのだらう。

八時半頃皆歸られたが、それを話したら健ちやんは大喜び、直ぐ眞暗な臺所へ走つて行かれた、後からランプを持つて案內中で見に行つたが、確に死んで居る筈の鼠は影も見えないで、鼠器の餌は取られたまゝ溝に引掛つて居た。(入賞)

夕星

千葉　齋藤滸子

日は山陰に落ちた、ほんのりとした西の空は、だんく夕榮して、紫や紅色の雲が麗しく棚引く、其間を洩れて只一つキラくと輝く星がある幼い時分母から、人は死ぬと魂は天に上るものと敎へられた事思ひ浮べて、妙に星がなつかしくなつた、私は暫時此の美しい靜かな自然の景に對して只恍惚として佇んで居た、青嵐のたぐひにや、錆びた鳴聲を曳いて辰巳の方へ過ぎた。(入賞)

奥様

筑前　高松カラ子

此頃漸くお近づきになつた辰野の奥様に、今日もお琴の先生のお宅でお目にかゝつたので、お遊びに被來るやうに申上て置いたら、本町までまゐりましたからと御仰つて寄つて下すつた、奥様はクリスチャンで被在るさうで何處やら氣高くておやさしい、初めてかうして御話しするのにかくしだてもなく、御身の上のことやら家持のはづかしいことなど御話しなさる、たつた二人きりで居てさへも思ふやうにはならず、「それや獨で居る時の心地ではゆかれないですよ」としみ／＼と御仰つてたが歸りがけには肉牛斤、大根二錢、玉葱一錢五厘などゝ小さうかゝれた通帳やアケマキの鑵詰などを、風呂敷包みから出して、「月給取りはこんなですもの」と笑つて被在つた、「あなたも是非被來して頂戴毎日ひとりポツンとしてますのよ、お汁粉でも作へますわ」と……、ほんに御やさしい奥様だ、話をするとぢきに「何さんの着てた着物を色合がどう」の「今時は英話を知つてなきや駄目よ」などゝ御仰るお嬢様方よりも、此んな奥様が私は好きだ。（入賞）

「ロッキー」山の月

麻布　光子

谿間の寂寞を破つて汽車は轟々と馳せて行く、窓外を眺むれば、巍峨たる「ロッキー」の嶺に、寒月高く懸つて、皎々と冴えて居る、あゝ「アメリカ」の月も見をさめだ……、明日は「シャートル」港に出て、伊豫丸に乗つて懐かしい日本に歸るのだ、太平洋へ乗り出して甲板の上で、この月明に對するの夜は、嘸や思ひ出多いことであらう、アゝ妾の將來に又「ロッキー」の月を眺むるをりがあるだらうか。（入賞）

歌會にと出立つ折の客人

神田　清香

おゝ、今打しは午後一時なるよ、みやびの友は、早くも歌のむしろにつき給ひけんな、さても心なの人かな、ゆる／＼ともの せらるゝ御酒の香けふは殊更いとはしう覺ゆるを、強てさりげなくもてなす身の、今更にかこつ、過にし處女時代の戀しさに、あたら空ごと想ひ浮べつ、銚子取る手もたゆたひ勝、さりとは己が儘なる振舞ひかな、よし言葉の花は摘み取るとも人の妻たる身のつとめ怠りて何かせん、暫したりとも客人を恨みし心の罪に恥しや。（入賞）

漁村の春

牛込　平塚いと子

磯馴松の間に見えかくれする白帆眞帆は、名ばかりの春風をはらんで、ゆつたりとしてゐる、緋桃の眞盛な藁家から春の日がやはらかい光をなげてゐる、貝がら路を、赤銅色の若者が新しい潮の雫をたらしながら鰹の入つた背かごを肩にして並木松の影へと消えた。砂路に杭から杭へと干された地曳網は、ホヤ／＼とかげろうがもえて、小魚の干からびたのがキラ／＼と光つてゐる。

友へのかへし

筑前　白遊

汽車のゆるぎいでし後も、なほ御姿のみゆる限は打ちまもり居り候ひしを、かへりみもせで急ぎたまひしはいと心つよき君かなとおうらみもいたし候、さて宿にかへりては、いま頃はいづこの里をすぎたまふらん、

今日はなにがしの州こしたまふらんなど、御みちすがらの驛々、地圖くりひろげて、せめての心やりに、みつゝ思ひわぶるまゝに早十日をすぎしけふのひる頃、嬉しうもおこさせたまひつる御文なつかしう存じ上候。旅も今は、よろづいや進みて足らはぬものもはべられば、道のほどつゝがなうおはしつるめりとは思ひ居り候ひしも、御文にて全く心落つき申候、御身御大切にとかげながら祈り上げ候、かしこ。

嫁ぐ姉

尾張　櫻井由美子

由美さん、からだを大切にして、わすらはない樣にね、と私の手をシカと握つて姉樣は云はれた、兩親の命に背き難くて、心ならずも今宵は某家に嫁がるゝ姉樣の心思へば、おかはいさうでならない、由美さんよわいものはやつぱり女だわネ、といつも口ぐせの樣に云はれた姉樣は、戀に破れた人なのだ、あゝ私も女、いつかはかゝる運命におちいる時も來るだらう。

ある朝

大分　きよ子

そよ〳〵とやはらかさうなあの風、殘れる蕾を咲かすのであらうか、はた盛りの花を散らすためであらうか、何にしても氣になるはあの風、起きたい〳〵と氣がせけばせく程醫師はなほ許さない、ほんとにいぢの惡い……とは思へど、自分からしひてとまでの勇氣も起らない、母樣がたえず水仙だとか梅だとか枕べにさして下さるから、春の薰りは室に滿ち滿ちてはゐるものゝ、何となう、只何となう…… と思ふとたん、障子越しにやさしい羽音、もうたまらず母樣の見ぬまにとそこぬけ出で、今宵のした方をあくれば、雲は見えれど、やさしい聲はやはり彼方に。たえず氣になつたあの風も、まだ散らすためではなかつたと、それもうれしかつた

別れ

山形　阿部英子

長年勤めた政が、今度嫁入するとて、今日いよ〳〵村へ歸るのである。今日の別れのどんなにつらからうと、私は數日前から一人胸を痛めて居た。

「奥樣長々――」と云ひかけて、後は云ひ得ず、ハラ〳〵と涙がほゝを傳ふと見た、私はもう胸が一ぱいになつて、「それでは達者に」も口には出ない、二人はしばし無言、賴んで置いた車が來た、政は未だシク〳〵と泣いて居る。

春信

駿河　天野ふじ子

積の雪が融けて里が賑んで來ました、表へ出ると先づ麥の青々とした芽が眼にいります、菜の花も咲きました、菫、蒲公英、蓮華草、土筆なども小さな頭をニヨキ〳〵と擡げました、裏の藪へは毎日鶯が來ては啼きますよ、いかゞですかこんどの日曜日あたりお妹さまをおつれなすつて、散歩がてらいらつしやいませんか、春風の堤三里、樂しく摘草でも致しませう。

まよひ

小石川　平塚やゑ子

今し夕べの讃歌は終つた、淡い夕日は三四日前に新らしく立てられた卒塔婆を照してゐる、今日もまたあの可愛らしい御嬢さんが來たのであらう、香りのよい白梅が澤山に活けてある、あゝあの御嬢様！十年の昔里子にあづけた私の娘では、なからうか、あのぱつちりした目付、きりつとした口元、あゝもしや自分の子供ではあるまいか、島瀬下しの風が身にしみて我にかへれば、あはれ楽しかつた昔ではなくつて、身は黒染の衣を着てゐるのであつた。

都の友へ

三重　螢子

星かげ一つだに見えず、そゞろ寂しき夕にてありし、昨夜は池水にうつる月影の清きを見て、一人君居ます方を偲びて候ひし、君よ！、夕露しげくとも下り立ちて御空の月を仰ぎ給へ、我れも亦等しくそを眺めんほどに、かくて互の胸を月一つに通はせて、積る思ひを語らなん。孤燈の下に坐して君が面影を偲べば、妾の胸は乱れて麻の如く、暗愁の身をめぐる事しきりに候、さあれやさしき君が御言葉を思へば、尚一脈の暖さの、春の潮の如くに湧くを覚え候、吹く風寒し、御身いとはせ給へや。

心の日記の一頁

京都　喜代子

今朝三番の室へ掃除に行くと、机の上に短文の書いた原紙が置いてある悪いとは知りつゝ讀んでみる、――今日文箱の底から計らずも藤様の書い手紙が出た、なつかしさのあまり思はず頰におし當てゝ泣いた、あゝ別れて茲に一年有半、彼女は未だ寸時も我が胸を離れない、同じ町に住みながら手紙の外は互に語る事の出來ないのを慎んだあの時分の方が、孤獨の淋しい今よりいくら幸福であつたか分らない、されど如何に惑ふても今は人妻である、彼女の告別の手紙にもあつた通り何事も運命である、今は只彼女の幸多き生涯を祈るのみ、――讀み終つて人事ならず思はれて何となく胸の塞がるのを覚えた。

内藤千代子様へ

長野　あやめ子

白粉紋付に、緋繻珍のおみ帶氣高う、初めてあげ給ひし高島田も御色白のお顔にふさひて、緋鼻緒の重草履おもげに、春の大路をそゞろあるきし給ひし花十八の御初裝、目の前にちらつき候。木枯も春風に變りて、鉢植の紅梅一二輪床しき香はなちて、鶯待ち顔なる今日此頃、いかにか過し給ふ、御わたりの消息きかまほしう候。

友の玉章

津　入江小せん

ガラガラ〳〵と入口の格子が開いた、「郵便」と大きな聲ぬれ手をふきながら受取つたのはなつかしい夏子様からの御玉章、すぐ封を切つた、ほゝえみ〳〵讀みもて行けば、色あせた菫の花をはさむである、「月日へたればかく色もあせ香も消へ候へどもありし昔をしのばせ給へや」厚き情を嬉しく思つた。

新春歸校

丹波　松柏女史

校友の諸姉に一と通り挨拶して、先づ氣も落着いた、是までいやにさび

れてゐた附近の景色も、何だか妙にあらたまつたやうに見える、窓際の文机によつて清新の氣を入れつゝ冷靜な頭で勉強すると、國分六ヶかしく思つて居つた問題も立ち所に解決がつく。

病床の夕

四谷　道子

豆腐屋のラッパの音で目がさめた、勝手元では、夕餉の支度と見えて、薪のパチ〳〵と燃える音、調子よく爼板へ、庖丁の當る音が聞える、重き頭をあげて破れた障子から庭面を見ると、雪どけのぬかるみの上に、子供でも捨てたのだらう、紙片が不作法に踏みつけられてある。玄關の方は寂として聲もない、人はみんな臺所へ集まるのだ、如何しても人間は食べる爲に生きてゐるのだと思はれてならぬ。

古日記

大阪　西戸政江子

文箱を掃除して三年前の日記を見付けた、中にこんな事が書いてある、「又してもお產の事が氣にかゝる、叔母さんはお產でおなくなつたし、姉さんは產で長らくお病みなすつたこと思ひ出すと、妾はもうどうなる事だらうと思ふ、でも小原さんの奧樣のやうな、可愛らしいふつくりした顏をして、星の樣な眼をして、いつも笑つてゐらつしやるあんなお子樣が出來たらどんなに嬉しからうと思ふたが、フトいつか病院で見たやせた婦人に抱かれて顏一面にブツ〳〵と吹出物の出來た、あんなのがと思ふと吾れ知らず身體が慄へた」あゝ三年前の心配は譯のない心配であつた、實家に戻つて既に一年思はずホロリと淚を零した。

新世話女房

靜岡　渡邊松子

もう自分は一角の世話女房になりすました積りで、十五日に下女を休ませて自分で勝手をして居ると、肴屋が來たので、フライにでもと平目を切身にさせて置いた、さて四時になつたので料理にかゝつた迄は好かつたが、こんろの火が未だ立ぬから火の立つ迄と賞品に頂いた女禮の養成の讀み續きを見て居る內、夢中になつて遂料理の方はお留守になつた、表戶のベルが鳴つておい〳〵と良人の聲、はつと氣付てお出迎し大急ぎで勝手に行つて見れば、折角起しかけて置た火は灰になつてる、夫れ計りでない、お肴を仕舞ひ忘れたので、何時の間にか一切れ猫に取られてる、あゝ是れでは私はまだ〳〵妾の及第点かと思ふと、顏はほてる、背中は汗びつしより。

我が嘆き

宮城　西尾利子

あゝ、私は何故男に生れなかつたらう、男であつたならば、我も一士官の子だもの、父上のあとをついで、今頃はもう軍服姿勇ましく、遇くとも一小隊の長となつて、數多の兵士を指揮し、天晴國の柱石父の片腕となつて居たらうものを、女に生れた悲しさには、着るは軍服にあらずして、白墨の塵にまみれた、筒袖の職服、提ぐるは軍刀にあらずして、竹の笞、千軍を叱咤すべき聲は、たゞいたずら子供の一組を御するに止まる、かくして憂き年月を送らねばならぬ女教師の身の上、父上も嘸心細く思はれるであらう。

友

長岡　櫻井とよ

學び舍の窓で、互に煙の樣な空想を描き、前途の夢を見て居つた頃がなつかしい、其時田舍から出て來て私の家の近くに泊つて毎日私を呼んでくれる友があつたが、その友は僅半年ばかりにして私にも話さずに鄕里へ歸つた、其時は其人の性質主義などは少しも分らなかつた、只無口で非常に神經質である樣に思はれた。後度々思ひ出す事もあつたが消息はきかなかつた、先日眼を病んで病院へ行つたら偶然にも其友にあつた、けれども友の目に私の顏が分らぬらしい、只大きい聲を出して琴歌を唄つたり笑つたり泣いたりして被居るのみだ、私はもう見るに忍びなかつた、どうかして今一度昔の友たらしむる樣神に祈つた。

朝の一時間

埼玉　船津千代子

今朝は少し早く家を出た、關東名物の空風に海老の樣になつた手を、フーフーふきながら急いだ、早いから人通りは極少ない、私の前へ中學生の二年生位のが外套に引くるまつて寒さうに行く、私の後から銀行員らしい人がこれも寒さうに縮まつて來たが、私を追ひ越してしまつた通りの二階からしはふきの聲が聞える、久保町の通運會社の旗が風に音を立てゝ居る、學校へいつて見たら未だ一人も居ない、火計り獨りメチ〳〵はれて居る。

二等室

千葉　山口あき子

流行の中コートを着て赤切符もちと氣がきかない樣だから、思ひ切つて二等に乘る、寒むい日なので流石に乘り手が少ない、こはれかゝつた丸髷を重帽にして向ふの方に小さく成つて居る、若い奥樣とデップリ肥えた四十ばかりの髯の無い洋服が矢張若い丸髷の女を連れて居るのが乘つて居るばかり、私も丸髷にグット根下に結つて居る、洋服は眼を細うして三人をシガーの煙越しに眺めて居る、自分の妻君が一等美人に見えるのだらう、さもあるべき事とは思ひ乍ら、急に可笑なつたのでガラス越しに向ふを眺めると、もう船橋に着いて居た。

思ひ出

越後　野本操子

越路の天地は雪に埋もれて、只殘れるは寒月一輪、あゝこの月よ、その昔友と寒さを忘れて語り明したのも今宵の樣な月夜であつた、又あすは他家の人となる妹と語り明したのも亦この樣な月であつた、あゝ空の月は一つなるを、我と語りし友は今いづこにか、我と語りし妹は今いかに。

初音

京橋　妙子

今日も又母の病氣の爲、朝まだきから起き出でた、まだ座敷の電燈の捻をひねると燈がつく、臺所へ行つて竈に火をたきつけて御飯の支度にかゝると本願寺の明の鐘が鳴つて、其れが止むと間もなく妙な美はしい聲が藪の邊に聞える、みとせ前から春毎に只七八本の藪をしたふて來る鶯である。

武ちやん

福岡　吉田こと

私の宅の隣に、今年四つになる武ちやんといふ可愛い男の子が居ります、この子の母さんは昨年の今頃この世を去つてしまひました、けれど幼い武ちやんには死と云ふ事が分りませんから、常に佛間の位牌を指して、

「木のお母ちやん」と云ふ、これを聞かれるお父様やお親母様のお胸の中はまあどんなでありませう。

他國の友へ

札幌　清　梅

互にうちあけ、花にも月にも隔へだてざりし御なつかしき道子の君よ、流るゝ月日のせきもり早く、別ち難き袖別ちしは早や二年の昔とはなりぬ、其れより姿に淋しき里に只一人語らふ友も無く、月を見ては千行の血涙を止め得ず、ちる花をながめては、風をうらみ、只々幸ち多き御身を羨みつゝありしものを、あゝ御身よ、もう東の空をのぞみて思ひ出でなば麗はしき水茎の跡を寄越したまへよな。

すごい一夜

兵庫　平井榮子

柱時計は最早十時を告げた、相變らず雪まじりの風は未だ止まない、ゴーゴーと物凄い音は、夜更けに從ひだん／＼凄くなる、机にもたれ「女學世界」をながめて居ると、コン／＼と狐の鳴き聲かすかに聞ゆる、床についたが未だ風は止まない、妹や弟は如何な夢を見て居るだらう。

愛らしさ

兵庫　松尾りつ子

昨夜お湯で泣いたのは誰でしたらうと言ふと、勝ちやんは小さき目を見張りて、さも氣まり悪るげに顔をそむけ、淋しきゑみを頰のあたりに漏らして、アレハよその子と微かに云ひしが、彼れが頭に宿どる眞の神は彼をしてホントハわたいと前言を打ち消さしめぬ、アゝ好い子だことゝ珠のやうなる頭を撫でれば、喜び勇みて益々唄ひ狂し。何時止むとも

見えざりき。

舊友

遠江　馬淵千代子

今は九年の昔となつたが、あの靜岡の女學校を共に卒業した藤村野子さんが、さる學士に嫁したときいて影ながら其幸福をよろこんで居つたのに、此頃聞けばどういふ事情のあつてか、可愛々々お子様まであつたのに逐ひおわかれ遊ばして、今は東京に御住居とか實に多かと、ばかりおどろかれたせめては不運になく此の昔の友と、共に泣きもし慰さめもしたいのであるが、さらに御住居がわからぬ。

小鳥

東京　園　子

南向の縁側に、私は晴やかなる青空を眺めてゐると、一羽の愛らしき小鳥がいましも垣根の上に餌を探して居る處である、私はおもはずおやと言ひ乍ら、庭に下りて其美しき羽根に手を掛け様とする一刹那あはれ美しき小鳥は、羽根をひろげつゝあなたの木影へと飛び去つてしまつた。

妹

牛込　まの子

妹は今うと／＼れむつて居る、あのふつくりした林檎の樣な頰はいたいたしいまでやせてしまつた、氷を頭へのせると、細く目をあけて、苦しさうにニツコリする、君ちやん苦しくてと訊くと、かすかにえゝと云つて又うと／＼する、柱時計が八時をうつ、あかりが妹の顔に反射してすごい程青い、室の中は只セコンドの動く音と妹のかすかな寢息がきこえるばかりである。

彙報

▲與謝野鐵幹氏の文學講談會

與謝野寬氏夫人晶子氏は今般文學講演會と云ふを設け、來る四月四日より短歌及び新體詩を研究せんとする特志家の爲に、毎週二回（日曜日午前九時より十一時迄、水曜日午後四時より六時迄）神田駿河臺東紅梅町二番地の自宅に於て左の講演を開く由、束脩一圓、月謝二圓、男女に拘らず入會を許す。尙ほ毎月一回若くは二回科外講演として外國文學、小說、戲曲、新體詩、繪畫、音樂等に關する專門諸氏の講話會をも催すと云ふ。歷代古歌講義與謝野寬、源氏物語大意講義與謝野晶子、大鏡抄講義同上、新派和歌講義寬、晶子兩氏、短歌及び新體詩製作談同上、會員の短歌添削同上。

▲精華高等女學校の計畫

府下淀橋町字角筈の同校にては、昨年四月認可學校となると共に、校舍を增築し、設備の擴張を計りしが、其の後本科、技藝科共入學者非常に多く、殊に幼稚園を新設して多數の兒童を收容したる爲め、再び校舍の狹隘を告ぐるに至りしより、近々再び擴張する計畫なりと云ふ。因に入學希望者は來る四月五日迄に願書を差出すべしと。

▲梅香女塾の新設備

前の華族女學校教授從七位木村貞子女史は、從來小石川區原町百十一番地に梅香女塾と云ふを設け、上流の子女を收容して、監督敎養に盡されつゝある事は豫ても記したるが、今度從來の分を第一部とし、更に第二部を設けて廣く監督者の便無き學生を入らしめ、親しく寢食を共にして塾生の薰陶に盡さるゝと云ふ、塾生は何れの學校へにても通學され、又餘暇には望みに依りて諸種の女藝を習ひ得るの便あり、費用は、第一部は食費其他塾費一切にて十七圓、第二部は十三圓。

▲大日本婦人敎育會館落成

大日本婦人敎育會にては、今回麴町區永田町に會館を新築し、先般其の落成式を擧行せしが、今後毎月一回此の會館に常集會を開き、諸名士の講演を乞ふの外、毎週一回乃至二回ピアノ、ヴァイオリン、和歌、挿花、割烹等の講習會を開きて、會員の令孃其他の希望者を就學せしめ、幹事の紹介ある向には、各種の婦人會合にも會館を貸與する方針の由にて、茶室に設備附にて、一室一日の料金一圓五十錢、階上の講堂は五圓なりとか。

▲櫻井女塾の料理講習會

本鄕區向ヶ岡彌生町三番地の同塾に於て目下毎週水曜日午前十時より料理講習會を開きつゝあり、講習料材料費共一ヶ月金二圓五十錢隨時入會を許すと云ふ。

▲日本女子美術學校

下谷區谷中初音町の同校は校主福島甲子三氏校長秋元興朝氏、監督小山正太郎氏等に依りて經營さるゝものにて、美術部、技藝部の二部に分れ居るが、裁縫に於ては仕立直し、補綴方等にも熟練せしめ、或は圖案科に重きを置きて色彩の配合に熟せしめ、其の他造花、刺繡、繪畫等に於ても專ら實際に適切なるものを敎授しつゝあれば、近來入學者は追々增加しつゝありと云ふ。

▲東京實用女學校

麴町區飯田町の同校にては從來朝野の名士を聘して時々女子敎育に關する講演會を開きしが去月廿七日にも同町國學院大學講堂に於て第三回講演會を開催し浮田博士、村上校長其他數氏の講演ありて、頗る盛會なりき、尙ほ今後も折々之を催して婦人界の思潮を健全に導く事に盡すべしと云ふ。

讀者文藝 懸賞募集（〆切三月十五日）

▲婦人盛裝の寫眞（結婚前後）
▲各地名所風俗寫眞
▲大家族の集合寫眞
▲婦人會婦人團體集合寫眞
▲才媛筆蹟
▲家庭重寶日用百事便
▲食卓日記（晩餐の時な材料として）
▲修養立志金言集（三語以內）
▲各地風俗記事
▲笑話▲短文▲和歌
▲令孃倶樂部（投稿隨意）

投稿規則◎笑話、和歌、短文、令孃倶樂部、金言集は端書に限る但し一枚の端書に二種以上は採用せず ◎筆蹟は口繪の寸法に依る
◎名宛は博文館內「女學世界」とし原稿に其種類を明記する事

▲賞品
△寫眞は甲參圓、乙貳圓、丙壹圓
△食卓日記、　俗記事、筆蹟は甲貳圓、乙壹圓、丙五拾錢
△和歌、短文、笑話、金言集、令孃倶樂部甲壹圓、乙七拾錢、丙五拾錢 秀逸參拾錢

每月一日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）……金二十錢
四册（三ヶ月分）……前金七十五錢
八册（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六册（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
內｛定刊數……十二册／增刊四回……一、五、九、十一月價格同一

郵税 一册 二錢

廣告料

	特等	一等	二等	三等
廿四字詰一行	……	……	……	五十錢
四半頁	……	……	十圓	七圓五十錢
半頁（卅二行）	……	廿三圓	十九圓	十四圓
一頁（六十四行）	五十五圓	四十五圓	三十八圓	二十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治四十二年三月一日發行 第九卷第四號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　山田英二
印刷所　博文館印刷所（東京市小石川區久堅町百八番地）

發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話 三百三番／千十八番
本局 二千六百二十番／三千二百二十九番

（後付の二）

(後付の三)

通俗作文全書

全部廿四册洋裝四六判
並製紙數三百頁
正價一册三十五錢
郵稅一册六錢宛

記事論說或は紀行叙事等の雄編大作より尺牘葉書の日用文に至るまで、齊しく是れ文なる以上は、文明社會の人は皆文を以て互に意思を通じつゝある者と謂ふべし。然るに今日の狀況を見るに、百般藝術の駸々進步するに反し作文の技のみ獨り退步の觀あるは洵に痛嘆の至りといふべし。是れ多數の人士が文章に重きを置かざるに由ると雖も、從來作文法を敎ふる完全なる書籍なきもの亦其一因なりといふべし。敝館之を遺憾とし、通俗作文全書を發行し聊か以て此缺點を裨補する所あらんとす。其の目次は下に列記す。

- 第一編 大和田建樹君著 ●文章組立法
- 第二編 大和田建樹君著 ●書簡文作法
- 第三編 田山花袋君著 ●美文作法
- 第四編 天城安政君著 ●商業作文法
- 第五編 青柳篤恒君著 ●評釋支那時文軌範
- 第六編 西村醉夢君著 ●紀行文作法
- 第七編 福田琴月君著 ●寫生文範
- 第八編 河村醉茗君編著 ●論說記事文範
- 第九編 西田敬止君著 ●女子消息文範
- 第十編 森田米松君著 ●書翰文範
- 第十一編 大和田建樹君著 ●日記文範
- 第十二編 石崎蓬園君著 ●祝賀弔祭文範
- 第十三編 山川酉五郎君編 ●中等學生文範
- 第十四編 生田葵郊君編 ●明治時代文範
- 第十五編 堀江秀雄君編 ●言文一致文範
- 第十六編 太田才次郎君編 ●古今名家尺牘文
- 第十七編 武田櫻桃君編 ●古今名家文選
- 第十八編 河井醉茗君著 ●新體詩作法
- 第十九編 久保天隨君編 ●新體漢文軌範
- 第二十編 近藤正一君著 ●古今才媛文集
- 第廿一編 久保天隨君著 ●美辭類語集

●春●夏●秋●冬●梅●櫻●花卉●紅葉●雨●雲●月●風●雲煙●露●聲●山岳●溪壑●江海●園池●家屋●都市●別離●羇旅●懷古●服裝●容貌●音樂●災異●鐘頭‼心讀書解題○萬葉集○古今和歌集○神樂歌○催馬樂○竹取物語○伊勢物語○源氏物語○枕草子○土佐日記○大鏡○榮華物語○保元物語○平治物語○平家物語○源平盛衰記○新古今和歌集○方丈記○曾我物語○水鏡○增鏡○神皇正統記○徒然草○太平記○義經記○御伽草子○新編御伽草子○舞曲○謠曲○狂言記○戰國の文化に於ける隣長土肥○戰國武人の詩

續刊

- (22) ●短歌作法 窪田空穗君著
- (23) ●俳句作法 內藤鳴雪君著
- (24) ●小說作法 田山花袋君著

販賣用電話 本局二六二〇番

東京 本町 博文館

振替口座番號 東京二百四十番

(後付の四)

坪谷水哉君　巖谷小波君　押川春浪君序文

河岡潮風君著

東都遊學 學校評判記

全一册洋裝四六判
紙數三百餘頁
各學校長寫眞版八頁挿入

▲近刊▼

世間には、規則書と入學試驗問題とを切りぬいた書物は澤山ある、入學志願者の參考にはなるか知らんが、在學生や、その父兄は讀んだとても少しも面白くない。又た、新聞雜誌には、何學校生活など、舞文曲筆した文章がある、成程一讀快哉を叫ぶが、サテ入學志願者の手引草となるのは稀だ。本書の著者は他人の模倣を蛇蝎よりも嫌ふ男、ことにわれ一新機軸を出さんと奇想溢るゝ頭を叩いて、筆を走らせたのはこの評判記である。內容には東京で有名な三十の男女學校の入學の時期から、學校生活、敎師の月旦、校風、寄宿の狀態 卒業者の賣れ口、及びその月給、今昔の變遷まで縱橫自在に論評してある。中學の新卒業生も讀むべく、去年受驗にシクヂッタ人も讀むべし。評判にのぼつた學校の敎師も學生も、父兄も保證人も、皆な爭ふて一書を藏せなければならぬ本だ。近時、本書の似せ物續々出づ。以て如何に良書なるか解るであらう。左に見本として、帝國大學と女子大學の小見出しを掲げておく。

東京帝國大學＝私立さらひの澤柳文部次官＝五分科の長所と缺點＝ハイカラ不養生のお醫者さま＝筆記萬能の法科大學＝法學士と商學士との競爭＝理科大學は金にならぬ＝工科大學の賣れ口と月給如何＝ヘコたれずに働け働け＝中學生は豫めこの覺悟を要す＝昔の大學生の無邪氣なりしを見よ＝糞包みと腥坊主＝痛快なるラブ物語＝今の大學生は角帽中毒なり。

駒場農科大學＝妙なるラッパぶし＝假すまひ的寄宿舍＝田舍武士にさも似たり＝肝涙ともに流るゝ實習の苦しみ＝同志爭ひはイカンぞ＝どし／＼世界に雄飛せよ

女子大學＝腕の凄い成瀨校長＝亭主の寄生蟲を造らず＝前代未聞の小さき椅子＝自然啓發主義＝涙さん武雄は居ますよ＝櫻楓舍の詩的事業＝體育運動が旺んぢや＝若い男は門前拂ひ＝女子兵役論愛讀者＝一ヶ月十圓の賄料＝年長者がお姉さん＝殘飯は豚が食ふ＝輕井澤の夏季寮＝コレでも家政卒業か＝何は兎もあれ目出度い／＼



發兌元　東京日本橋區本町　博文館
振替貯金口座東京二百四十番

女（後付の五）

家庭整理の指導

當代第一流の女子教育家編著



家庭百科全書

全部五十册　毎月一回發行

和裝頗美本 ◉紙數各三百頁 ◉石版彩色口繪一葉 挿畫十數箇

▲定價一册金四拾五錢――郵稅八錢

近時婦人教育の普及するや、女流の才學は一般に著しく進みたりと雖も、尚ほ之を日常家庭の上に施こすに臨み、輙もすれば實際に適せざるを憾むこと多し。是れ學校に在るの日には槪れ理想の學修に止まるが故に、實際の應用に臨み、或ひは學ぶ所高尚に過ぐるか、然らざれば未だ十分ならざるの憾ある所以なり。若しも家庭に教師ありて一々實際の問題に就て指導せんには、世の良妻賢母は言ふも更なり、未だ在學中の女流學生達の爲にも如何に裨益の多かるべきかは、敢て多言を須ゐざることながら、人ごとに家庭に教師を聘するが如きは、得て望むべからず。是に於て本書は最良なる家庭教師たる目的を以て編述發行し、敢て婦人教育の缺點を補はんと欲するなり。

第一編 **新家庭訓** 三輪田高等女學校長 三輪田眞佐子女史著

第二編 **四季料理** 宮中臣民兩流料理師範 大日本割烹學會々長 石井泰次郎君著

第三編 **裁縫指南** 女子高等師範學校教授 喜多見佐喜子女史著

第四編 **和洋菓子製法** 東京治庖會講師 龜井まき子女史著

第七編 **育兒の務** 醫學士 田村貞策君 朝夷孤舟君 共著

第八編 **簡易治療法** 新潟縣高田高等女學校教諭 藤井靜子女史著

第九編 **禮式と作法** 女子高等師範學校教授 佐方鎭子女史著

第十編 **惣菜料理** 赤堀吉松君 赤堀峰吉君 赤堀菊子女史 共著

▶販賣用電話本局二六二〇◀ ▶發兌元 東京日本橋區

女（後付の六）

婦女必讀の大全書

第五編　茶道と香道　水原翠香女史著

第六編　諸流生花指南　琴松斎文雅君　松幸斎理常君　共著

第十一編　編物指南　女子技藝實踐學校編物科主任　三木とみ子女史著

第十二編　婦人の生理と衛生　青山學院教授　牧野清子女史著

第十三編　教育お伽噺　少年世界記者　木村小舟君著

第十四編　女徳の養成　前田長太君著

【上】女徳編　徳性の涵養●知識の養成○學問○用心○自警●意志の鍛錬○正意○義勇○和順●心の修養○純徳○戒愼○心神●感性の矯正○感性が女子の氣質に及ぼす影響外三項【中】婦徳編　新婦の德操●良人に對する心得○夫婦相愛の心得外五項●出入に關する心得○新婦家居の心得○夫婦外出の心得●一生に亘る心得○平時の心得外三項●舅姑に對する心得【下】母德編●母親の責務●母親としての心得●子供の幼年期に於ける母親の心得●子供の少年期に於ける母親の心得(五製)●子供の丁年期に於ける母親の心得(三項)●主婦としての心得(六項)●寡婦としての心得(四項)

第十五編　家屋と庭園　内山正如君著

◎第一章　總論‖●家居の意義、●家屋の目的、家屋の種類、外六項◎第二章　各論‖●住宅、別莊、數寄屋(茶室)、外二項◎第三章　間取‖●玄關　居間、座敷(客間)、外六項◎第四章　門墻‖●門墻及塀、湯殿と便所、臺所◎第五章　庭園‖●庭園築造の目的、大なる庭園と小なる庭園、庭園の趣味、日本式の庭園と歐州式の庭園、外十四項◎附録‖●名園見聞記

第十六編　魚鳥家畜の飼養　農業世界記者　鹿野化骨君著

◎鵞の飼養●鵞の種類●鵞の繁殖●鵞の飼育◎鶩の飼養●鶩の種類●鶩の繁殖●鶩の飼育●鶩の産卵◎七面鳥の飼養●七面鳥の種類●七面鳥の繁殖●七面鳥の飼育◎珠鳥の飼養●珠鳥の産卵孵化●珠鳥の飼育◎鶏の飼養●卵を孵化する事●雛を育てる事●鶏の飼育●鶏舎●鶏の管理●鶏の種類●鶏の鑑識法●鶏の病害●鶏卵の貯蔵◎小鳥の飼養●かなりや●鶯●めじろ●文鳥●駒鳥●杜鵑●くいな●雲雀●雀●もず●十姉妹●四十雀●五十雀●燕●相思鳥●ひは●鴫●むくどり●木叩鳥●鳥●鷹●べに雀●錦鶏鳥●山鳥●九官鳥●いすか●天人鳥●ありすい●みゝづく●ふくろ●鷲●鷹●ひたき●三光鳥●みそさゞい●おほさゞい●鶺鴒●菊頂●かけす●つぐみ●雉●孔雀●鶉●千鳥●鸛●鴨●鴛鴦●かさゝぎ●綾鳥●いかる●ひがら●こがら●やまがら●頭鷹●頬赤●うそ●おなが●鳩●田鳥●けり●鷸●鷺鷥●白鳥●かすい●しき鳥●鷗●眉毛鳥●鵤●いんこ●こきん鳥●きんくわ鳥●よし鳥●せうびん●めぼそ●鵜●れんじやく●あなじ●あとり●頬白●雷鳥●大官鳥●河鳥●じつしん鳥●小鳥類の病氣と其療法●生殖と産卵作巣と抱卵◎鯉の飼養(七項)◎鰻の飼養◎鯰の飼養◎鮒の飼養◎鰡の飼養◎金魚の飼養(九項)◎家兎の飼養(三項)◎羊の飼養(四項)◎山羊の飼養(三項)◎豚の飼養(七項)◎牛の飼養(五項)◎馬の飼養(五項)

本町三丁目　博文館　▶ 振替貯金口座　東京二四〇番 ◀

(後付の七)

最新發明 **肺病。肋膜** 新薬に就きて

（醫事週報二七號報告再錄）獨逸ドクトル高平醫學博士

新薬肺活散主薬の諸結核による熱度下降は可驚著効あり四十度を示す熱は本薬應用後は常温下に減じ患者は薬餌が美味なるを喜び之が服用を嫌忌せず食慾を増起す ⦿又本薬の著効ある事は既に家の試験報告及實驗により明らかなれども今本院服薬患者に付其成績を左に報ぜん

●金森某（德義上住所姓名を秘す）女子三年前發病遂に、期重症の**兩肺結核**に陥り咳嗽たん盗汗動悸呼吸不利。不眠。身熱散しく度々喀血し非常に羸痩す服薬壹週頑固なる熱を去り咳嗽喀痰を輕快す服薬貳週喀血やみ臥蓐せしもの屋外に出で日光に暖をとるに至る連用三十日病全く治し食慾進み體重を増加せり

●兵頭某三十一歳男肋膜炎（喀血無し肺病初期の疑ひあり）胸部痛み食慾不振身體倦怠盗汗咳嗽頭痛あり身體羸痩を見る三十九度に至る發熱あり服薬五日奏効あり二週にして全治す僅々二週にて全治する如きは病輕症なるに因ると云へいかに**肺活散**が肺病、肋膜、肺炎、肺尖加答兒。氣管支加答兒。肋膜結核等の諸症に對し可驚効力ある全治薬なるを知らん以上病歴を細述する時は冗長に亘るを以て左の通略式とす

患者	性	病名	成績
三村	男	兩肺結核	全治
中川	男	肺尖加答兒	全治
松信	男	結核性肋膜及腹膜炎	微効
笠井	女	肋膜炎	全治
上野	男	右肺結核腸結核	全治
籠谷	男	兩肺結核未期	無効
宮本	女	結核性肋膜炎	全治
岡田	男	氣管支加答兒及肺炎	全治
阿崎	男	右肺結核及腹膜結核	全治
渡平	女	肺尖加答兒	全治
神村	男	肺結核第二期	全治

斯の如き好成績は從來の薬物に於て見る能はず我國薬劑界名譽の發明薬として報告する義務あるを信ず本劑は元薬一ポンド六十圓の高價薬なるに關らず一週二圓二週三圓九十錢三週五圓七十錢四週七圓二十錢に經濟の許す限りの薬價を以て分薬する者にて利益專一の賣薬に非ず又効力多大にして從來の諸薬賣薬の如き長き服薬無して全治す殊に**喀血**と其豫防に可驚効あり又他薬と混服害なき故醫薬の為ら服用妙ならん本薬入用患者は東京神田堅大工町療養薬所**村尾明治堂**振替口座東京壹四（参壹九番）へ右料金添へ申込あらば至急送薬す吾人は病者に向つて**肺活散**は現今に於て完全なる發明薬なるを紹介し安心服薬せん事を勸告す命服薬希望なき患者にても郵券二錢添へ申込本治療法説明書を無代貰ひ受け是非一讀あれ發賣する處多かん又本劑は便利上、山ヶ帝國堂、大木會社、玉置會社、大木本店にて發賣す。

内外遊戯二百番

白井規矩郎君輯

本書はエムグレー氏著『内外遊戯二百番』より目下米國に於て盛んに行はれつゝあるもの二百を撰出し本邦に適應せざるものは其方法を改めたる者にして以て米國兒童青年の遊戯が如何に改良進歩せられつゝあるかを窺ふに足らん、



目次概要

全一册

洋裝袖珍美本
紙數一九八頁
正價貳拾五錢
郵稅四錢

發兌元 **博文館** 東京本町


"KENNOGWAN"
島村博士證明
健腦丸
▲萬巻の書を積と雖ども、腦病の人之を讀むは難し、而も病症は時々刻々に進み行くなり
發賣本舗
大阪市心齋橋筋貳
東京日本橋箔屋町
丹平商會藥房
▲健腦丸の効能今多くは語らず、腦病、神經病を全治するに在り、加之中風卒中を未發に防ぐ
藥價 三日分二十錢、二週分八十五錢
七日分四十五錢、三週分壹円廿五錢

黄金は積んで山をなし

身には錦を纏ふとも、病持つ身の苦しさは、花見遊山や芝居見や人の喜び樂も樂みとては更になく況て兒女なき病婦の悲しさ限りなからん

●中将湯は是れ等不幸なる病婦を救済して子寶多き圓滿の家庭を作るべく發賣す

左の容體にて苦しむ婦人は

早く中将湯を服して無病の幸福を得給へ

定價	
四日分	廿五錢
一週間分	六十錢
二週間分	一圓十錢
三週間分	一圓六十錢
五週間分	二圓五十錢



中将湯

●子宮病子宮内膜炎にて白帯多く、たゞれ又下腹腰足の引つり痛人
●婦人神經（ヒステリー）血の道にて氣鬱ぎ癇高ぶり物を苦し夜眠ざる人
●月經不順月經滯り等にて吹出物多く又何となく身體惡き人
●逆上頭痛眩暈し肩こり腰足冷え●息切れ動氣強く手足痺れ水腫
●十七八歳になりて月經なく血ぶとり又月經の前後に下腹の痛む人
●白血赤血滯下多く顔色蒼白き人●冷症にて難產流產の癖ある人
●產前何となく常ならざる人、嘔吐、產後古血の滯り或は日立惡く
●此外子宮血の道月經不順に起因する諸症にてぶら〳〵と惡き人

（定價金貳拾錢●郵税貳錢）

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版⑥⑥
明治42年2月(第9巻第3号)、3月(第9巻第4号)

2009年12月10日　第1刷発行　　定価(本体20,000円+税)

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14(〒113-0021)
電話　03-3947-8251[営業] 03-3947-8254[編集]
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　株式会社友美社
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-3731-2 C3321